鳥取県教育文化財団調査報告書　88

一般国道９号（東伯中山道路）の改築に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ

鳥取県東伯郡東伯町

三林遺跡
井図地頭遺跡

２００４

財団法人　鳥取県教育文化財団
国土交通省　倉吉河川国道事務所

鳥取県教育文化財団調査報告書　88

一般国道９号（東伯中山道路）の改築に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ

鳥取県東伯郡東伯町

三　林　遺　跡
井図地頭遺跡

２００４

財団法人　鳥取県教育文化財団
国土交通省　倉吉河川国道事務所

一般国道9号（東伯中山道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ

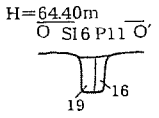
鳥取県教育文化財団調査報告書　88　三林遺跡　井図地頭遺跡正誤表

箇所	誤	正
例言　24行	出土銭研究会	出土銭貨研究会
目次P4　13行	三林遺跡出土石器・石製品観察表(7)	三林遺跡出土石器・石製品観察表(1)
目次P4　14行	三林遺跡出土石器・石製品観察表(8)	三林遺跡出土石器・石製品観察表(2)
目次P4　15行	三林遺跡出土鉄製品観察表(9)	三林遺跡出土鉄製品観察表
目次P5　41行	SI32土器138・144・145出土状況（北から）	SI32土器138・142・145出土状況（北から）
P13　17行	・・・、古墳時代前期が16軒、・・・	・・・、古墳時代前期が14軒、・・・
P40　9行	11層中から直口壺61・・・	10層中から直口壺61・・・
P40　9行	12層中からは・・・	11層中からは・・・
P44　26行	転地返しで破壊されている。	天地返しで破壊されている。
P52　29行	本来は全周していたが可能性が高い。	本来は全周していた可能性が高い。
P55　11行	SI43がSI46に先行する・・・	SI46がSI43に先行する・・・
P63　26行	床面直上にあたる・・・	底面直上にあたる・・・
P63　28行	床面南東部直上から・・・	底面南東部直上から・・・
P68　22行	SB1の2本の布掘り溝の・・・	SB1の2条の布掘り溝の・・・
P75　10行	土師皿123～126は・・・	土師器坏123～126は・・・
P80　9行	埋土は灰褐色土でSI24の埋土と・・・	埋土は灰褐色土でSI23の埋土と・・・
P85　10行	・・・、後出するSK14がともに・・・	・・・、後出するSK13がともに・・・
P89　14行	153が炭化材の直下で出土したことから、・・・	151が炭化材の直下で出土したことから、・・・
P89　31行	床面ではピットを6基検出した。	床面ではピットを5基検出した。
P114　第5表　No.6、9	PL53	削除
P130　第12表　No.60	下層	11層
P130　第12表　No.61～63、65	上層	10層
P130　第12表　No.64	床面	12層
P131　第13表　No.66、69	下層	11層
P131　第13表　No.67、68、70～72	上層	10層
図版PL23 1.	SI32土器138・144・145出土状況（北から）	SI32土器138・142・145出土状況（北から）

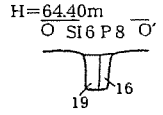
三林遺跡　井図地頭遺跡正誤表（挿図編）

P25　第16図　SI6・7（1）

誤

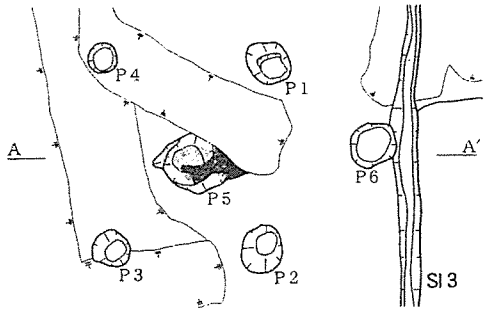


正

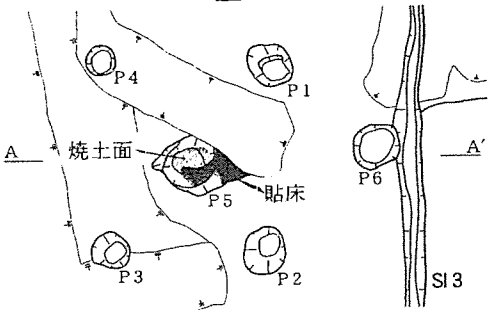


P32　第23図　SI9および出土遺物

誤



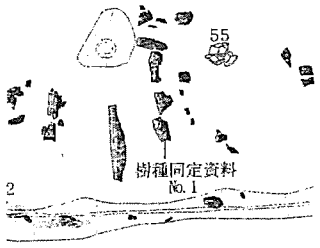
正



（この箇所のパターンのみ凡例４の指示と異なる）

P35　第25図　SI10遺物および炭化材出土状況

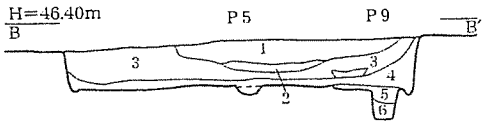
誤



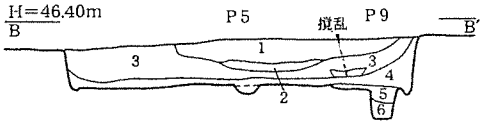
正

P48　第38図　SI22

誤

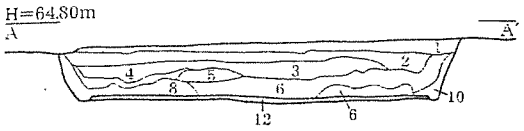


正

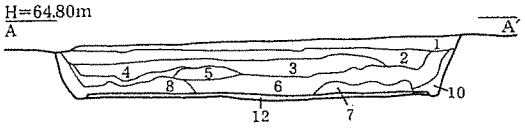


P87　第77図　SI33

誤

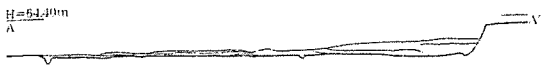


正

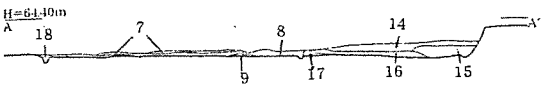


P91　第81図　SI35・47

誤



正



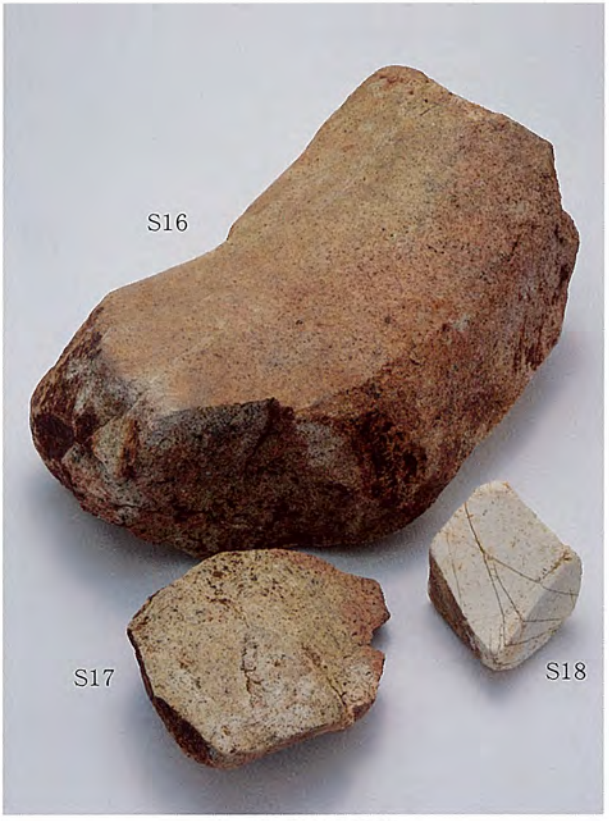
1．SI10炭化材出土状況（北から）

2．SI10土層断面（南から）

巻頭 PL.2　三林遺跡

1．SI10出土土器

2．SI10出土編物



3．SI10出土砥石

1．SX 1 蔵骨器

2．SX 1 火葬骨検出状況

巻頭 PL.4　三林遺跡

1．SX 2 土器出土状況

2．SX 2 出土土器

序

近年、鳥取県では妻木晩田遺跡、青谷上寺地遺跡をはじめとする古代の重要な遺跡の発見が相次いでおり、当時の集落の姿や暮らしの様子が具体的に語られるようになりつつあります。

先人が残した素晴らしい遺産を後世に伝承することは、現在に生きる私たちの重要な責務です。

ところで、県内においては、現在、山陰自動車道の整備が着々と進められているところでありますが、当財団は、国土交通省からの委託を受け、この事業に係わる一般国道９号（東伯中山道路）の改築に先立つ埋蔵文化財の発掘調査を実施してきました。

そのうち、東伯町にある三林遺跡では、弥生時代から古墳時代にかけての集落跡、平安時代の墓域など、井図地頭遺跡では古墳時代の竪穴住居跡など、この地域の歴史を解明するための重要な資料を確認することができ、このたび、調査結果を報告書としてまとめることができました。

この報告書が、今後、郷土の歴史を解き明かしていく一助となり、埋蔵文化財に対する理解がより深まることを期待しております。

本書をまとめるにあたり、国土交通省倉吉河川国道事務所、地元関係者の方々には、一方ならぬ御指導、御協力を頂きました。心から感謝し、厚く御礼申し上げます。

平成16年３月

財団法人　鳥取県教育文化財団

理事長　**有　田　博　充**

序　文

一般国道９号は、起点の京都府京都市から山口県下関市にいたる、総延長約691kmの幹線道路であり、西日本日本海沿岸地域の産業・経済活動の大動脈として、地域住民の生活と密着し大きな役割を果たしています。

このうち、国土交通省倉吉河川国道事務所は、東伯郡泊村から米子市（鳥取―島根県境）までの76.6kmを管轄しており、時代の要請に沿った各種の道路整備事業を実施しているところです。

東伯中山道路は、東伯郡東伯町から西伯郡中山町にかけての、国道９号の渋滞緩和、荒天時の交通障害の解消、また、災害時の緊急輸送の代替道路確保、などを目的として計画された高規格幹線道路（自動車専用道路）であり、鋭意事業に着手しているところです。

このルートには、多数の埋蔵文化財包蔵地がありますが、鳥取県教育委員会と協議を行い、文化財保護法第57条の３の規定に基づき、鳥取県教育委員会教育長に通知した結果、事前に発掘調査を実施し、記録保存を行うこととなりました。

平成15年度は、「中尾第１遺跡」、「井図地頭遺跡」、「三林遺跡」、「笠見第３遺跡」、「久蔵峰北遺跡」、「蝮谷遺跡」、「岩本遺跡」、「八橋第８・９遺跡」、「別所中峯遺跡」、「松谷中峰遺跡」、の10遺跡について財団法人鳥取県教育文化財団と発掘調査の委託契約を締結し、同埋蔵文化財センターによって発掘調査が行われました。

本書は、上記の「三林遺跡」と「井図地頭遺跡」の調査成果をまとめたものです。この貴重な記録が、文化財に対する認識と理解を深めるため、ならびに、教育及び学術研究のために広く活用されることを願うと同時に、国土交通省の道路事業が、文化財保護に深い関心を持ち、記録保存に努力していることをご理解いただければ幸いと存じます。

事前の協議をはじめ、現地での調査から報告書の編集にいたるまで御尽力いただいた財団法人鳥取県教育文化財団の関係者に対して、心から感謝申し上げます。

平成16年３月

国土交通省　倉吉河川国道事務所
所　長　**矢　田　光　夫**

例　言

1．本書は、平成15年度に行った国土交通省一般国道９号（東伯中山道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査事業として実施した、三林遺跡、井図地頭遺跡の調査報告書である。

2．本報告書に記載した遺跡の所在地は以下のとおりである。

三林遺跡：東伯郡東伯町大字田越字新三林143・145・146・147－１・147－３、字長田平182－1・183、字舛市184・184－１・185－１・185－２

井図地頭遺跡：東伯郡東伯町大字田越字井図地頭103－189・190・191、大字三保字下滝峯平ル673・674・678・679

3．本報告書で示す標高は、３級基準点H10－３－11（X：－56,843.42　Y：－59,214.738　H＝68.018m）を基点とする標高値を使用した。方位は公共座標北を示す。座標北に対し磁北は352度55分７秒、真北は０度22分33.18秒東偏する。X：、Y：の数値は世界測地系に準拠した公共座標第Ⅴ系の座標値である。

4．本報告書に掲載の地形図は、国土地理院発行の１/50,000地形図「赤碕」「伯耆浦安」、東伯町地形図１/5,000「新農業構造改善事業（東伯地区）№.１」を使用した。

5．本報告にあたり、三林遺跡出土石製品の石材鑑定を鳥取大学名誉教授の赤木三郎氏に、三林遺跡の現地指導を鳥取環境大学環境デザイン学科教授の浅川滋男氏に依頼した。

6．三林遺跡の調査前・調査後航空写真撮影、調査前・調査後地形測量、自然科学分析、出土炭化材の保存処理を業者に委託した。

7．本報告書の執筆は、家塚英詞、君嶋俊行、田村昭夫、小谷郁夫、鈴木恵介、水村直人が分担した。編集は家塚・君嶋が行った。

8．出土遺物、図面、写真等は鳥取県埋蔵文化財センターに保管されている。

9．現地調査及び報告書作成にあたり、下記の方々にご指導、ご協力いただいた。記して謝意を表する次第である。

小林義孝、海邉博史、西尾克己、八峠　興、杉谷愛象、出土銭研究会

凡　例

1．遺構の略号は以下のとおりである。

SI：竪穴住居跡　SB：掘立柱建物跡　SA：柵　SD：溝　P：柱穴　SX：埋葬施設

2．三林遺跡の以下の遺構については、発掘調査時における遺構名、番号を報告書作成時に変更している。

新：SK29（旧：SI42）　新：SI42（旧：SI47）　新：SI47（旧：SI35B）

発掘調査時の旧：SK29は遺構ではないものと判断し、抹消した。

3．遺物の略号は以下のとおりである。

S：石器　F：鉄製品　J：玉類　　数字のみのものは土器を示す。

4．遺構、遺物実測図に用いたパターンは特に説明のない限り、以下のものを示す。

地山　貼床　焼土面・焼土混土　炭化材・炭化材混土

土器赤彩、石器磨面・砥面　石器付着顔料

5．遺物実測図において、須恵器は断面黒塗り、それ以外は白抜きで表現した。

6．本文中の遺構掘方に関する括弧書き数値は、（長さ×幅－深さ）cmまたは（長軸×短軸－深さ）cmを示している。

7．遺物観察表の法量記載における数値は最大値を表し、※は推定復元値、△は現存値を示す。

8．出土遺物の注記に用いた遺跡の略号は以下のとおりである。

三林遺跡：三林　　井図地頭遺跡：カシラ

9．本報告書における土器類の編年・年代観は基本的に以下の文献に拠る。

清水真一　1992「因幡・伯耆地域」『弥生土器の様式と編年―山陽・山陰編』
正岡睦夫・松本岩雄編、木耳社

牧本哲雄　1999「古墳時代の土器について」『長瀬高浜遺跡Ⅷ・園第６遺跡』
鳥取県教育文化財団

田辺昭三　1981『須恵器大成』角川書店

足立克己・丹羽野裕　1984「第6章まとめ（３）遺物」『高広遺跡発掘調査報告書』
島根県教育委員会

巽　淳一郎　1983「古代窯業生産の展開―西日本を中心にして―」『文化財論叢』
奈良国立文化財研究所

八峠　興　2000「山陰における平安時代の土器・陶磁器について」『中世土器の基礎研究ＸＶ』
日本中世土器研究会

目　次

巻頭図版
序・序文
例言・凡例
目次

第１章　調査の経緯……（家塚・君嶋）1
　第１節　発掘調査に至る経緯……1
　第２節　調査の経過と方法……2
　第３節　調査体制……4
第２章　位置と環境……5
　第１節　地理的環境……（小谷）5
　第２節　歴史的環境……（淺田・岩井・福井・前島）6
第３章　三林遺跡の調査……9
　第１節　遺跡の立地と層序……（家塚）9
　第２節　東区の調査……13
　　（１）概要……（家塚）13
　　（２）竪穴住居跡……（家塚・小谷）14
　　（３）掘立柱建物跡……（家塚）59
　　（４）柵……（家塚・小谷）63
　　（５）土坑……（家塚・小谷）63
　　（６）ピット……（小谷）71
　　（７）埋葬施設……（家塚）72
　第３節　北区の調査……（家塚）75
　　（１）概要……75
　　（２）竪穴住居跡……76
　　（３）ピット……80
　第４節　南区の調査……81
　　（１）概要……（君嶋）81
　　（２）竪穴住居跡……（君嶋・鈴木）81
　　（３）柵……（君嶋）99
　　（４）土坑……（君嶋・田村）100
　　（５）ピット……（君嶋）104
　第５節　遺構に伴わない遺物……105
　　（１）弥生時代・古墳時代の土器・石器……（君嶋）105
　　（２）鉄製品……（家塚）105
　　（３）縄文時代以前の遺物……（水村）105
第４章　井図地頭遺跡の調査……（君嶋）109
　第１節　調査の概要……109
　第２節　第１遺構面の調査……111
　　（１）溝……111

（2）土坑 …… 111
（3）ピット群 …… 113
第３節　第2遺構面の調査 …… 113
（1）竪穴住居跡 …… 113
（2）溝 …… 115
第４節　包含層出土の遺物…… 115
第５章　自然科学分析の成果 …… 116
第１節　三林遺跡焼失住居跡出土炭化材の放射性炭素年代測定
…… パリノ・サーヴェイ株式会社 116
第２節　三林遺跡焼失住居跡出土炭化材の樹種同定…… 株式会社古環境研究所 118
第６章　まとめ
第１節　三林遺跡の集落について……（家塚）123
第２節　井図地頭遺跡の評価……（君嶋）127
三林遺跡遺物観察表…… 129
土器…… 129
石器・石製品…… 135
鉄製品…… 136
図版

挿図目次

第１図　調査地点　1
第２図　遺跡の位置　5
第３図　周辺の遺跡　7
三林遺跡
第４図　層序模式図　9
第５図　調査前地形および調査範囲　10
第６図　調査後地形および遺構の配置　11
第７図　SI１・14　14
第８図　SI１・14出土遺物　15
第９図　SI２・42　16
第10図　SI２出土遺物　17
第11図　SI３および出土遺物　18
第12図　SI４　20
第13図　SI４出土遺物　21
第14図　SI５・13・19　22
第15図　SI５・13・19出土遺物　24
第16図　SI６・７（1）　25
第17図　SI６・７（2）　26
第18図　SI６出土遺物　27
第19図　SI７出土遺物（1）　28
第20図　SI７出土遺物（2）　29
第21図　SI８　30
第22図　SI８出土遺物　31
第23図　SI９および出土遺物　32
第24図　SI10　34
第25図　SI10遺物および炭化材出土状況　35
第26図　SI10編物出土状況　35
第27図　SI10出土遺物（1）　36
第28図　SI10出土遺物（2）　37
第29図　SI11・20および出土遺物　39
第30図　SI12・21　41
第31図　SI12・21出土遺物　42
第32図　SI12出土遺物　43
第33図　SI15　44
第34図　SI15出土遺物　44
第35図　SI16および出土遺物　45
第36図　SI17および出土遺物　46
第37図　SI18および出土遺物　47
第38図　SI22　48
第39図　SI22出土遺物　48
第40図　SI27　49
第41図　SI27出土遺物　49

第42図　SI28　50
第43図　SI28出土遺物　51
第44図　SI29　52
第45図　SI29出土遺物　53
第46図　SI30および出土遺物　53
第47図　SI41　54
第48図　SI41出土遺物　55
第49図　SI43・46および出土遺物　56
第50図　SI44および出土遺物　57
第51図　SI45および出土遺物　58
第52図　SB１　59
第53図　SB２・３　60
第54図　SB４・５および出土遺物　61
第55図　SA２・４および出土遺物　62
第56図　SK１・２・３および出土遺物　64
第57図　SK４・９・11　65
第58図　SK15・17・18　65
第59図　SK16・19・20・21・23・30　67
第60図　SK24・26　69
第61図　SK29および出土遺物　69
第62図　SK32・33・34　70
第63図　SK31および出土遺物　70
第64図　P67　71
第65図　P67・109出土遺物　71
第66図　SX１・２　73
第67図　SX１・２出土遺物　74
第68図　SI23出土遺物　77
第69図　SI23　77
第70図　SI24　78
第71図　SI24出土遺物　79
第72図　SI26および出土遺物　80
第73図　SI31　82
第74図　SI31出土遺物　83
第75図　SI32　84
第76図　SI32出土遺物　85
第77図　SI33　87
第78図　SI33出土遺物　88
第79図　SI34　90
第80図　SI34出土遺物　90
第81図　SI35・47　91
第82図　SI35・47出土遺物　92
第83図　SI36　93
第84図　SI37　94
第85図　SI38および出土遺物　95
第86図　SI25・39　96
第87図　SI25・39出土遺物　96
第88図　SI40　98
第89図　SI40出土遺物　98
第90図　SA１　99
第91図　SA３および出土遺物　99
第92図　SK５・６・７　100
第93図　SK５・６・７出土遺物　100
第94図　SK８および出土遺物　101
第95図　SK10および出土遺物　101
第96図　SK12・13および出土遺物　102
第97図　SK14および出土遺物　102
第98図　SK22および出土遺物　103
第99図　SK25・27・28　104
第100図　P１出土遺物　105
第101図　遺構外出土遺物（１）　106
第102図　遺構外出土遺物（２）　106
第103図　縄文時代以前の遺物（１）　107
第104図　縄文時代以前の遺物（２）　108

井図地頭遺跡

第105図　調査範囲図　109
第106図　調査区全体　110
第107図　層序模式図　110
第108図　SD４　110
第109図　SD４出土遺物　110
第110図　SK36　111
第111図　SK36出土遺物　111
第112図　SK37・39　112
第113図　SK37出土遺物　112
第114図　SK38　112
第115図　SK40　112
第116図　SI２　113
第117図　SI２出土遺物　114
第118図　SD14　115
第119図　SD14出土遺物　115
第120図　包含層出土遺物　115

まとめ

第121図　三林遺跡集落変遷図（弥生時代）　124
第122図　三林遺跡集落変遷図（古墳時代）　125

文中写真目次

写真１　SI12遺物出土状況　40
写真２　Ｐ１遺物出土状況　105
写真３　SK36土器（２）出土状況　111
写真４　Ｐ８土器出土状況　114
写真５　三林遺跡の炭化材（１）　121
写真６　三林遺跡の炭化材（２）　122

挿表目次

第１表　三林遺跡時代別遺構一覧表　12
第２表　SD４・SK36出土遺物観察表　111
第３表　SK37出土遺物観察表　112
第４表　ピット計測表　113
第５表　SI２出土遺物観察表　114
第６表　SI２ピット計測表　114
第７表　SD14・包含層出土遺物観察表　115
第８表　放射性炭素年代測定および樹種同定結果　117
第９表　暦年較正結果　117
第10表　三林遺跡における樹種同定結果　120
第11表　三林遺跡出土土器観察表（１）　127
第12表　三林遺跡出土土器観察表（２）　128
第13表　三林遺跡出土土器観察表（３）　129
第14表　三林遺跡出土土器観察表（４）　130
第15表　三林遺跡出土土器観察表（５）　131
第16表　三林遺跡出土土器観察表（６）　132
第17表　三林遺跡出土石器・石製品観察表（７）133
第18表　三林遺跡出土石器・石製品観察表（８）134
第19表　三林遺跡出土鉄製品観察表（９）134

図版目次

三林遺跡

巻頭 PL.1　１．SI10炭化材出土状況（北から）
　　２．SI10土層断面（南から）
巻頭 PL.2　１．SI10出土土器
　　２．SI10出土編物
　　３．SI10出土砥石
巻頭 PL.3　１．SX１蔵骨器
　　２．SX１火葬骨検出状況
巻頭 PL.4　１．SX２土器出土状況
　　２．SX２出土土器
PL.1　１．三林遺跡全景（写真中央・南東から）
　　２．調査前状況（北から）
PL.2　１．SI１・14完掘状況（南東から）
　　２．SI２（新）完掘状況（北西から）
　　３．SI２（新）遺物出土状況（東から）
PL.3　１．SI２（旧）完掘状況（北から）
　　２．SI３完掘状況（北東から）
　　３．SI９完掘状況（北から）
PL.4　１．SI４完掘状況（北東から）
　　２．SI５完掘状況（北西から）
　　３．SI13・19完掘状況（北西から）
PL.5　１．SI６完掘状況（北東から）
　　２．SI７完掘状況（北東から）
　　３．SI７遺物出土状況（南西から）
PL.6　１．SI８完掘状況（北西から）
　　２．SI15完掘状況（北から）
　　３．SI16完掘状況（北東から）
PL.7　１．SI17完掘状況（北から）
　　２．SI18完掘状況（北から）
　　３．SI27完掘状況（北から）
PL.8　１．SI10完掘状況（北から）
　　２．SI10炭化編物出土状況（北から）
　　３．SI10土器44・46出土状況（南東から）
PL.9　１．SI22完掘状況（北から）
　　２．SI22土器84出土状況（南西から）
　　３．SI12・21完掘状況（北西から）
PL.10　１．SI11・20完掘状況（北から）
　　２．SI41完掘状況（北西から）
　　３．SI41土器98・99・100出土状況（北から）
PL.11　１．SI28完掘状況（北西から）
　　２．SI29完掘状況（北から）
　　３．SI30完掘状況（北から）
PL.12　１．SI44完掘状況（北から）
　　２．SI43・46完掘状況（北から）

3．SI45完掘状況（北から）
PL.13　1．SB１完掘状況（北東から）
2．SB４完掘状況（北から）
3．SB２完掘状況（北東から）
PL.14　1．SK１完掘状況（南東から）
2．SK２完掘状況（北西から）
3．SK３完掘状況（東から）
4．SK４完掘状況（北西から）
5．SK９完掘状況（東から）
6．SK15完掘状況（東から）
PL.15　1．SK16完掘状況（北東から）
2．SK19完掘状況（北から）
3．SK17完掘状況（北東から）
4．SK18完掘状況（北東から）
5．SK11完掘状況（北から）
PL.16　1．SK20完掘状況（北西から）
2．SK21完掘状況（北西から）
3．SK23完掘状況（北東から）
4．SK24完掘状況（西から）
5．SK26完掘状況（東から）
6．SK32完掘状況（北東から）
PL.17　1．SK30完掘状況（北から）
2．SK31完掘状況（北から）
3．SK33完掘状況（北から）
4．SK34完掘状況（北西から）
5．SK29遺物出土状況（東から）
PL.18　1．SX１・２検出状況（西から）
2．SX１土層断面（北西から）
PL.19　1．SX１石槨（北から）
2．SX２埋土半裁状況（北東から）
3．SX２掘方（東から）
PL.20　1．SI24完掘状況（北から）
2．SI24炉検出状況（南西から）
3．SI24炉内の炭除去後（南東から）
PL.21　1．SI23完掘状況（北から）
2．SI26完掘状況（北から）
3．北区東半完掘状況（南東から）
PL.22　1．SI31完掘状況（南東から）
2．SI31炭化材出土状況（南東から）
3．SI31炭化材と土層断面（南西から）
PL.23　1．SI32土器138・144・145出土状況（北から）
2．SI32完掘状況（北から）
3．SI34完掘状況（東から）
4．SI35・47完掘状況（北から）
PL.24　1．SI33完掘状況（北から）
2．SI33炭化材出土状況（1）（北から）
3．SI33炭化材出土状況（2）（東から）
PL.25　1．SI36完掘状況（北から）
2．SI37完掘状況（北から）
3．SI38完掘状況（北から）
PL.26　1．SI25完掘状況（北から）
2．SI39完掘状況（東から）
3．SI40完掘状況（北から）
PL.27　1．SA１完掘状況（南西から）
2．SA３完掘状況（西から）
3．SK５完掘状況（北から）
PL.28　1．SK６完掘状況（南から）
2．SK７完掘状況（北から）
3．SK８完掘状況（南から）
4．SK10完掘状況（北西から）
5．SK22完掘状況（東から）
6．SK22遺物出土状況（東から）
PL.29　1．SK14完掘状況（南西から）
2．SK25完掘状況（南から）
3．SK28完掘状況（北から）
4．SK12・13完掘状況（西から）
5．SK27完掘状況（北から）
PL.30　1．SI１・２・３・８出土土器
2．SI７出土土器（1）
PL.31　SI７出土土器（2）
PL.32　SI4・5・6・9・13・14・15・18・19・25出土土器
PL.33　1．SI11・12・20・21・22出土土器
2．SI12出土土器（1）
PL.34　SI12出土土器（2）
PL.35　SI10出土土器（1）
PL.36　SI10出土土器（2）
PL.37　SI24出土土器
PL.38　SI23・26・27・28・29出土土器
PL.39　SI32出土土器（1）
PL.40　SI32出土土器（2）
PL.41　1．SI32・43出土土器
2．SI33出土土器
PL.42　SI41出土土器

PL.43　1．SI16出土土器
　　2．SI22出土土器
　　3．SI31出土土器
　　4．SI45出土土器
　　5．SI35・47出土土器
　　6．SI40出土土器
　　7．SK29出土土器
PL.44　SI30・34・35・39・44出土土器
PL.45　SK1・5・6・7・8・10・13・14・22・31出土土器
PL.46　1．P1出土土器
　　2．東区遺構外出土土器
　　3．南区包含層出土土器
PL.47　SX1・2出土土器
PL.48　1．SI1・4・5・7・8・12・17出土礫石器
　　2．SI22・24・28・32・33・41・SK31出土礫石器
　　3．砥石
　　4．南区包含層出土石斧
　　5．SI12出土石錘
PL.49　1．石匙・石鏃・スクレイパー
　　2．鉄製品

井図地頭遺跡

PL.50　1．SI2と方形区画（北西から）
　　2．SD4他第1遺構面完掘状況（北東から）
PL.51　1．SK36完掘状況（北から）
　　2．SK36遺物出土状況（南から）
　　3．SK38完掘状況（北から）
　　4．SK37・39完掘状況（南西から）
　　5．SK40完掘状況（西から）
　　6．SD14完掘状況（北東から）
PL.52　1．SI2完掘状況（北から）
　　2．SI2貼床除去後完掘状況（北から）
PL.53　1．SI2・SK37・SD14出土遺物
　　2．SD4出土遺物
　　3．SK36出土遺物
　　4．包含層出土遺物
　　5．SK36出土遺物
　　6．SI2出土遺物
PL.54　SI2出土鉄滓

第１章　調査の経緯

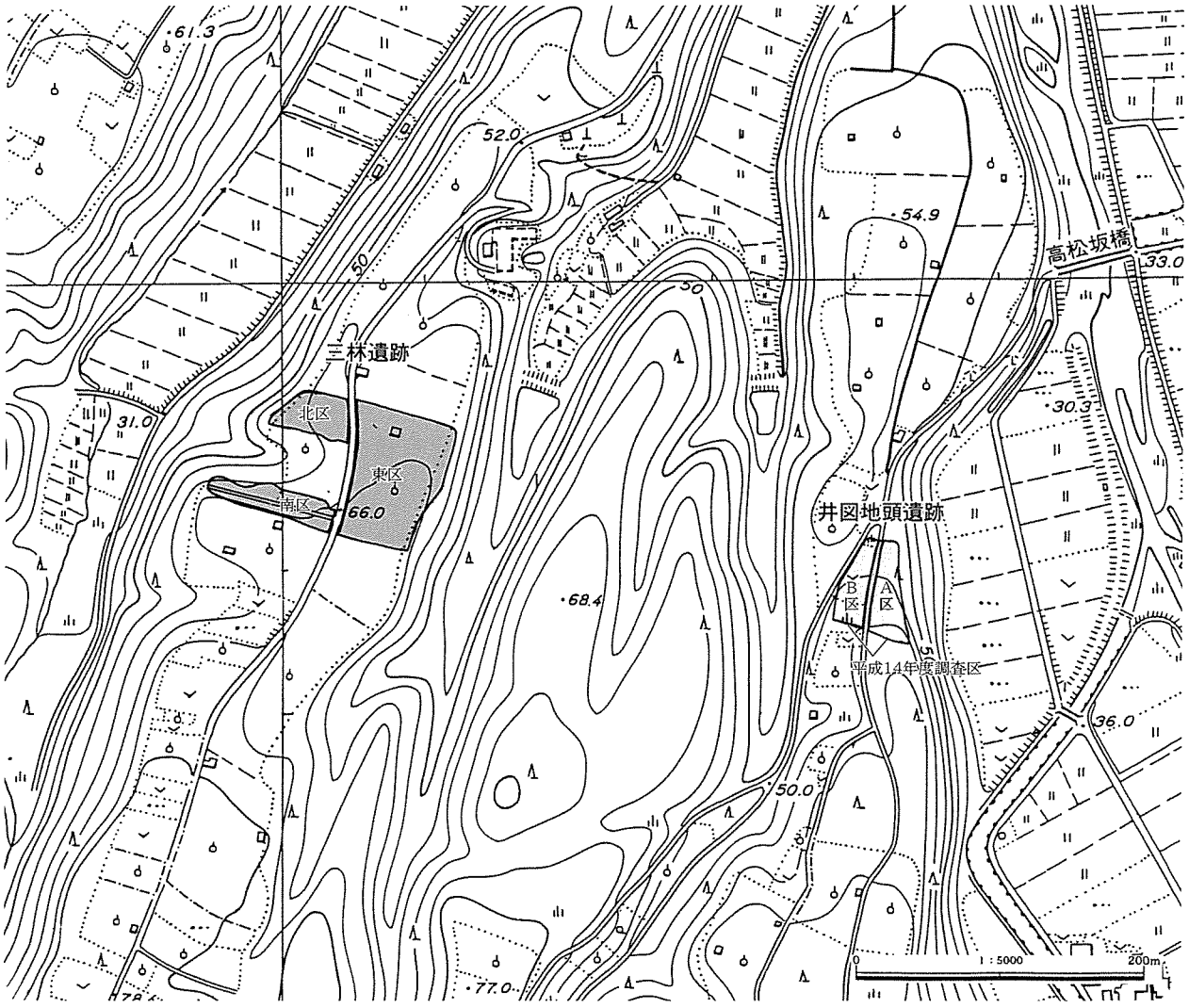
第１節　発掘調査に至る経緯

本発掘調査は一般国道９号（東伯中山道路）の改築工事に伴い、東伯郡東伯町田越地内の工事予定地内に存在する埋蔵文化財の記録を目的としたものである。

山陰地方では、国道９号線の交通混雑緩和及び将来の国土幹線道路整備として、山陰自動車道の整備事業が進められ、鳥取県中部地域では、東伯中山道路、北条道路、青谷羽合道路が自動車専用の高規格道路として計画・施工されている。

東伯中山道路の計画されている田越地内と八橋地内の丘陵上では過去に銅剣・銅鐸・銅矛が出土している。周辺には古墳をはじめとして多くの遺跡が存在し、平野部には国指定の特別史跡の斎尾廃寺跡を擁するなど、東伯町管内の道路計画予定地上には周知の遺跡を含めて、さらに多くの埋蔵文化財包蔵地が広がることが予測された。

周知の遺跡である三林遺跡は、平成14年度に東伯町教育委員会による試掘調査が行われ、弥生時代から古墳時代にかけての遺構と遺物が確認された。この結果を受けて国土交通省倉吉河川国道事務



第１図　調査地点

所は、鳥取県教育委員会事務局文化課と協議し、文化財保護法第57条の３に基づく発掘通知を行ったうえで、鳥取県教育委員会教育長の指示により、財団法人鳥取県教育文化財団に記録保存のための事前調査を委託した。これにより当財団が文化財保護法第57条に基づく発掘調査届を提出し、埋蔵文化財センターが平成15年度から発掘調査を担当することになった。調査面積は8,408㎡である。

井図地頭遺跡は、一般国道９号（東伯中山道路）の改築工事に先立つ発掘調査として、平成14年度に鳥取県教育文化財団によって調査が行われた[註]。ただし、調査区の中央を南北に通る農道部分については、平成15年度に迂回路を敷設したうえで農道下の調査を行うこととなった。調査面積は288.8㎡である。

註）君嶋俊行・大野哲二編　2003 『井図地頭遺跡　井図地中ソネ遺跡』鳥取県教育文化財団

第２節　調査の経過と方法

（１）調査区の名称と調査方法

三林遺跡は、果樹園の広がる丘陵の尾根上に立地し、農道によって東西に分断されている。農道の東側を「東区」と呼称する。農道の西側には小さな谷が食い込んでおり、この谷の北側を「北区」、南側を「南区」と呼称する。谷のくびれ部分は埋め立て造成がなされている。造成土の下は耕作に伴う撹乱が著しく、遺構が存在しないと判断されたため、調査範囲から外された。この谷は廃土処分地として使用した。農道の範囲については、道路の建設時に大規模な削平が施されていることが予測されたため、調査対象外となった。

三林遺跡の調査に先立ち、調査区の地形測量と航空写真撮影を行った。表土は重機を使用して除去した。遺構の検出は人力で行った。調査期間中に、調査の終了した北区は駐車場に造成された。

調査区内には公共座標第Ｖ系（世界測地系）の軸にあわせた10m 間隔の方眼杭を設置した。東西軸（X）にアルファベットを北から、南北軸（Y）にアラビア数字を東から、それぞれ順に振っている。杭の名称は、交差する軸線のアルファベットと数字を組み合わせたものである（例:Ａ１、Ｂ２）。10m 方眼のマスをグリッドと呼称し、その名称は北東側の杭名を使用した（例：Ａ１グリッド）。

検出した遺構の記録には、平板および光波トランシットを用いた。遺物は遺構の時期決定に関わるものについては出土状況、出土地点を記録し、それ以外のものは遺構あるいはグリッドで一括して取り上げた。

井図地頭遺跡の調査地は、昨年度の調査においてはＡ・Ｂ両区の境界となっていた。今回の調査では、SI２やSD４など、Ａ区から連続する遺構の検出が予想されたため、今回の調査区はＡ区に含めて扱うこととした。グリッドは昨年度調査時のものを使用し、遺構番号、遺物の取り上げ番号についても、昨年度から継続する番号を付した。

現場の写真撮影では35㎜判と６×７判のフィルムを使用した。遺物の撮影は４×５判を使用した。

（２）調査の経過

三林遺跡では５月１日に重機を使った表土剥ぎを開始した。果樹園の耕作に伴う撹乱が著しいものの、全体で30棟を超える数の竪穴住居跡が存在することが確認できた。調査面積の広い東区から着手し、進捗状況にあわせて北区、南区の調査に着手する計画を立てた。

５月12日から作業員を稼動して、東区の遺構検出作業を開始した。調査区の全域には縦横無尽に廻らされた果樹園の排水溝と無数の肥料穴があり、これらの埋土を全て除去しなければ遺構の調査に

入ることができなかった。とくに東区の面積の半分近くは、天地返し（果樹園の耕土改善のために地面を深く掘り返すこと）によって地山土と耕作土と遺構埋土が混ざり合い、遺構検出は困難を極めた。結果として東区の遺構検出作業は、遺構の掘り下げ作業以上の時間と労力を必要とした。

６月４日から北区の遺構検出作業を開始した。東区と同様に撹乱は著しいが、遺構の密度は希薄であった。そのため北区の調査は早期終了が見込まれた。３軒の竪穴住居跡を検出し、８月23日に調査が終了した。

東区での遺構検出数が増加し、未着手の南区も含めた期間内での調査終了は、現体制では困難な状態となった。打開策として、他所での調査が終了した調査員３名と作業員が合流し、７月４日から南区の遺構検出作業に着手した。南区は東区と同様に遺構密度が高く、竪穴住居跡のほかに多くの貯蔵穴を検出した。幅狭く奥行きの長い調査区で、片側が谷になっていたことが、作業の効率化を阻んだ。

東区と南区で３棟の焼失住居を検出した。その調査指導を鳥取環境大学の浅川滋男教授に依頼し、９月25日に現地で指導を受けた。10月19日に現地説明会を開催し、80名を超える見学者を迎えた。

10月末の調査終了を目標として作業を進めていたが、10月中旬に平安時代の古墓を新たに２基検出した。緻密な作業を要することから、継続中の他の遺構と並行して調査することを断念し、11月以降に先延ばしした。作業員の稼動は10月30日で終了し、リース物品を返却した。調査員は遺構の測量作業を継続し、古墓の調査にかかった。

調査後地形測量は業者に依頼し、10月21日～31日の間で現地作業を完了した。調査後空撮は業者に依頼し、10月31日の午前中に撮影を行った。

東区の焼失住居から出土した炭化編物に保存処理を施すために、発泡ウレタンで固定して地面から切り離した。保存処理は業者に委託し、高級アルコール法が処置されることになった。

11月11日に全ての現地作業が終了した。

井図地頭遺跡では、10月10・11日に重機による表土除去を行い、同14日から調査を開始した。調査区北端では黒褐色土の上面である第１遺構面の存在を確認し、SD４などの遺構を検出した。調査区南側では黒褐色土の堆積はみられず、第２遺構面上でSI２、SD14を検出した。したがって、これら第１、第２両遺構面を同時並行で調査することとなった。10月20日から28日までは、調査担当者が三林遺跡の支援にまわったため調査を中断した。第１遺構面の調査は10月31日に終了した。その後黒褐色土を掘り下げたが、第２遺構面では新たな遺構は確認されなかった。11月13日、第２遺構面の地形測量を行い、現地での調査を終了した。

発掘調査の作成に伴う遺物の整理作業は、東伯調査事務所と埋蔵文化財センターで行った。整理作業および報告書の作成は現地調査と並行して進め、平成15年度末をもって終了した。

第３節　調査体制

調査主体　財団法人鳥取県教育文化財団

理　事　長　有田　博充
常務理事　川口　一彦（兼・鳥取県教育委員会事務局次長）
事務局長　下田　弘人

埋蔵文化財センター

所　長　田中　弘道（兼・鳥取県埋蔵文化財センター所長）
次　長　竹内　茂
次　長　加藤　隆昭
調査課長(兼)　加藤　隆昭
企画調整班長　山枡　雅美
文化財主事　下江　健太
庶務課長(兼)　竹内　茂
主任事務職員　矢部　美恵
事務職員　田中　陽子　大川　秋子　植田　恵子（９月退職）
谷垣　真寿美　小谷　有里
事務補助員　山根　美代（11月採用）

○調査担当　埋蔵文化財センター東伯調査事務所

所　長　佐治　孝弐
班　長　牧本　哲雄
文化財主事　家塚　英詞（三林遺跡担当）
君嶋　俊行（三林遺跡、井図地頭遺跡担当）
調査員　小谷　郁夫　田村　昭夫（三林遺跡担当）
鈴木　恵介（三林遺跡、井図地頭遺跡担当、１月退職）
調査補助員　水村　直人（10月採用）
事務補助員　大田　直子

○調査指導　鳥取県教育委員会事務局文化課、鳥取県埋蔵文化財センター

○調査協力　東伯町教育委員会

第２章　位置と環境

第１節　地理的環境

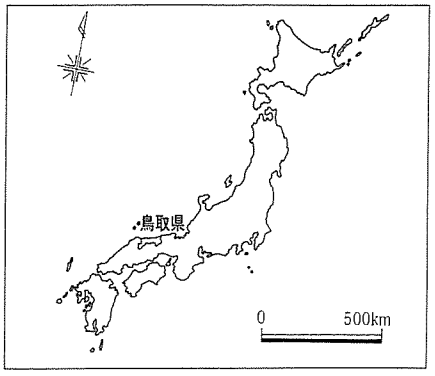
今回調査が行われた東伯町は、鳥取県中部の西側に位置する。大山連峰の烏ヶ山（1,381m）と野田ヶ山を結ぶ線を南西端とし、北東に細長い三角状に広がって北端は日本海に至る。東西15.2km、南北16.8km、総面積は約82.2㎢で県面積の約2.3％を占めている。人口は約12,400人（平成15年末）で少子高齢化の進展で昭和期に比して漸減傾向にある。昭和29年（1954）の５町村合併により、混乱を避け中立的な名称、東伯耆を意味する現町名となった。全国的な市町村合併の潮流の中で、平成16年（2004）９月１日には赤碕町との合併が予定されている。

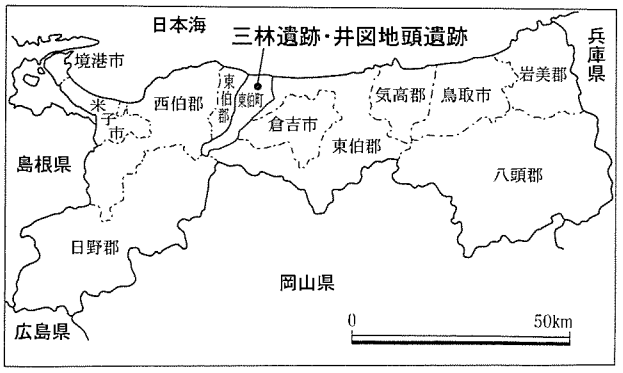
本町の南西部には大山（1,729m）が存在する。最後の噴火が約１万数千年前に認められ、加勢蛇川は洗川とともにその下流域で沖積平野を形成している。平野部は黒ボク地帯であり、西側丘陵地は火山灰土の堆積した溶岩台地状地形を呈している。

町内には大山山麓に源流を発する大小合計５本の川が日本海に注いでいる。加勢蛇川、洗川に挟まれた扇状地に律令時代の条里制が旧地名や地割りに残る地域もあるが、加勢蛇川は近世まで氾濫を繰り返した県内屈指の荒れ川であり、概ね残りがよいとは言い難い。一方、洗川の西側には３本の小河川があり、水田可能な低湿地は広くはないが安定的で、初期の稲作に適していたといえる。最も東を流れる加勢蛇川の東岸地域は火山扇状地性台地が広がり、ここには大小の農業用ため池がみられる。荘園が発達した平安中期ごろよりそれらから導水し、現大栄町域へも広がる稲作・畑作地帯を形成したものと考えられる。

最大の河川である加勢蛇川の最上流域には大山滝があり、そこから地獄谷～大休峠付近～大山町の川床を経て大山博労座に通じる急峻な古道がある。この川床道は江戸時代から昭和初期にかけて、大山参拝の往還道であるとともに、東伯耆地方から市の立つ大山へ牛馬を運ぶ重要な短絡ルートであった。また、海岸沿いの八橋地区には古代から伯耆の東と西をつなぐ交通の要衝として古代山陰道の清水駅が置かれ、中世以降は丘陵北端部に八橋城が築かれるなど、交流及び戦略的な活動が繰り広げられたことを物語る。

昭和20年代より盛んになり、北米や香港・シンガポールなどにも輸出される二十世紀梨生産は本県東郷町に次ぐ生産量を誇る。しかし現在では農家の高齢化、後継者不足による果樹園の廃園が目立っている。また、水稲とともに芝生産、酪農、ブロイラー・和牛などの畜産も主要な農業分野である。





第２図　遺跡の位置

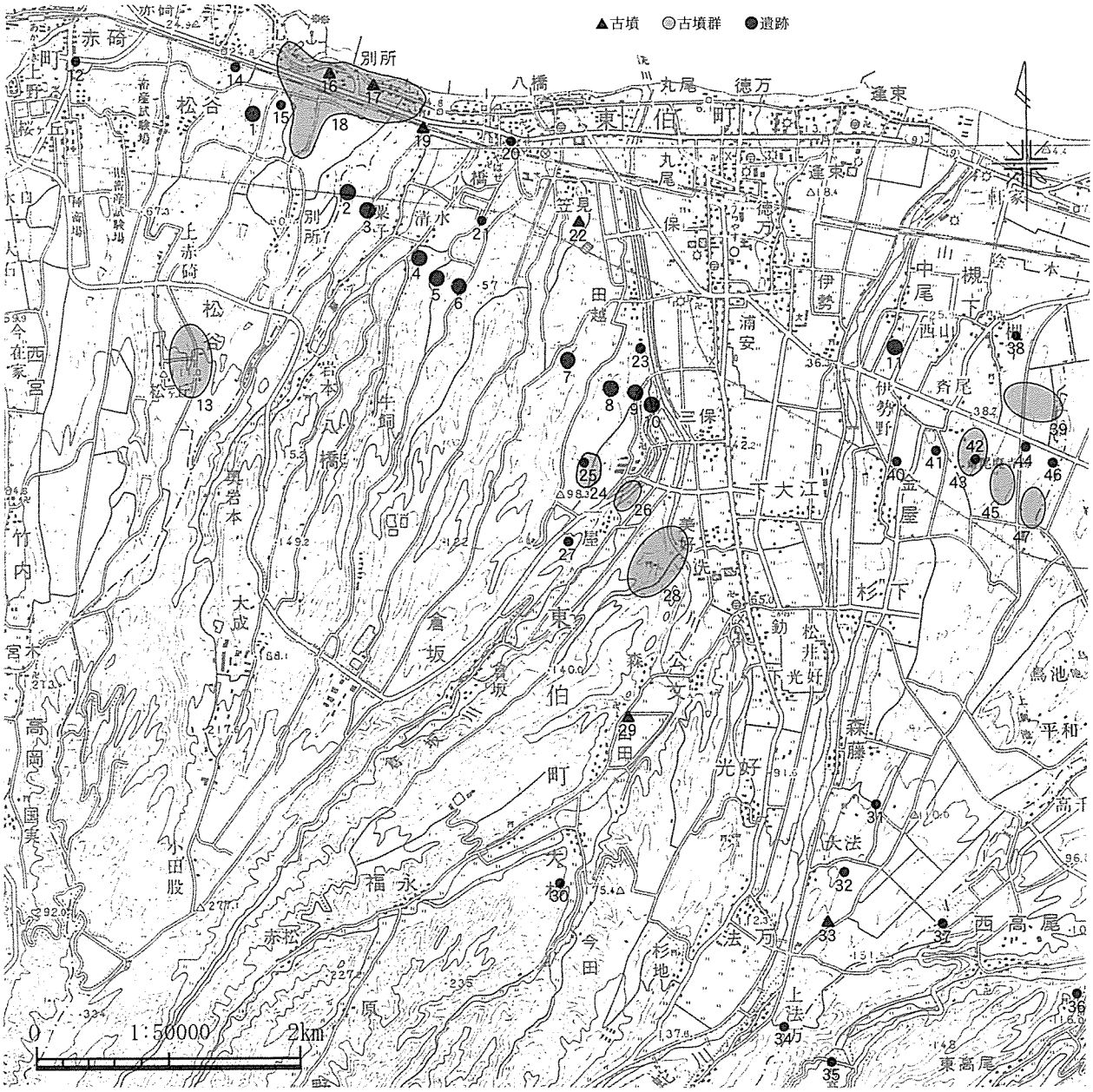
海岸部近くを東西に走る国道９号線沿線には、近年商業及び公共施設が急速に立地し、酒造、弱電、食品製造などの工場群とともに都市機能を形成している。（小谷）

第２節　歴史的環境

先土器・縄文時代　鳥取県内では遺構を伴う先土器時代の遺跡は発見されておらず、いくつかの遺物が各地域で出土するにとどまっている。この地域では赤碕町松ヶ丘、東伯町槻下で尖頭器が数点見つかっている。縄文時代の遺構は、後期に入るまで明確なものは少ない。早～前期では西高尾谷奥遺跡（35）で、押型文土器とともに住居跡の可能性がある竪穴状遺構、松ヶ丘遺跡（13）、大栄町築山遺跡、森藤第２遺跡（31）などで土器片が出土している。中期では、井図地中ソネ遺跡（９）、井図地頭遺跡（10）など丘陵上の遺跡で、土器が出土している。後期になると丘陵部に定住的な集落が見られるようになる。特に森藤第２遺跡では中央に石囲い炉をもつ竪穴住居が精製・粗製土器、土器片錘、土偶とともに検出されている。その他、この時代と考えられる落し穴が福留遺跡（12）、中尾第１遺跡（11）、笠見第３遺跡（7）など多くの遺跡で検出されており、狩猟場として丘陵・微高地が利用された様子が窺われる。

弥生時代　米子市目久美遺跡では前期の水田が確認されているが、県中部では、稲作に関る遺構は現時点では発見されていない。集落遺跡は、中期以降加勢蛇川右岸の平野部と丘陵上で確認されている。特に中期後葉から古墳時代初頭にかけて遺跡数が大幅に増加する。東伯町森藤第１・２遺跡（31）、水溜り・駕籠据場遺跡（46）、大峰遺跡（37）、田越遺跡群（23・24・25）、井図地中ソネ遺跡（9）、笠見第３遺跡（７）、三林遺跡（8）、久蔵峰北遺跡（6）などで集落が営まれている。赤碕町では福留遺跡で後期の竪穴住居が見つかっている。これらの遺跡の中には、集落内に玉作り工房を持つ遺跡がある。大栄町西高江遺跡では中期の工房跡が検出され、水晶の剥片とともに、製作に使用したと考えられる鉄製工具等が出土している。笠見第３遺跡では後期の工房跡が検出されており、緑色凝灰岩製の管玉未製品や剥片が出土している。現段階で当地域での数少ない生産遺跡である。墓域については、前期に大栄町青木第１遺跡･後ろ谷遺跡で土壙墓が見つかっており、中期以降赤碕町墓ノ上遺跡（14）・別所女夫岩峯遺跡で木棺墓が検出されている。井図地中ソネ遺跡では弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての溝で区画された土壙墓群が供献土器とともに見つかっている。また弥生時代の祭祀を特徴づける銅鐸が、県中部では６遺跡で計７口見つかっている。東伯町八橋の南方丘陵上（21）で銅鐸（扁平鈕Ⅰ式）が１口見つかっている。また、東伯町田越の丘陵上（25）では、正確な出土状況は明らかではないが、中細形銅剣が４口、東伯町久蔵峰で銅矛が１口出土している。銅剣・銅矛・銅鐸という、島根県神庭荒神谷遺跡と同様の組成の青銅器が出土していることから、祭祀の形態に関連性が窺える点で興味深い。

古墳時代　当該地域では明らかに前期に属する大型古墳は確認されていないが、前方後方墳である別所１号墳（笠取塚古墳）（16）は、墳形等の特徴から、前期に遡る可能性がある。中期から後期になって、前方後円墳の築造が見られる。別所２号墳（17）・八橋狐塚古墳（19）・笠見１号墳（22）・竜ヶ崎３号墳（28）などがある。これらは大山山麓の丘陵北縁に築造されており、日本海を見下ろす要所に位置している。中期・後期になると中・小規模の円墳が群集して築かれるようになる。中期以降の群集墳としては、大栄町妻波古墳群・瀬戸古墳群・西穂波古墳群、赤碕町出上岩屋古墳・別所古墳群（18）・箆津古墳群・帆立貝式古墳の光１号墳などがある。また、後期以降従来の竪穴系の埋葬施設



１松谷中峰遺跡　２別所中峯遺跡　３八橋８・９遺跡　４岩本遺跡　５蝮谷遺跡　６久蔵峰北遺跡　７笠見第３遺跡　**８三林遺跡**　９井図地中ソネ遺跡　**10井図地頭遺跡**　11中尾第１遺跡　12福留遺跡　13松ヶ丘遺跡　14墓ノ上遺跡　15松谷遺跡　16笠取塚古墳　17別所２号墳　18別所古墳群　19八橋狐塚古墳　20八橋城跡　21八橋銅鐸出土地　22笠見１号墳　23田越第１遺跡　24田越第２遺跡　25田越第３遺跡（銅剣出土地）　26三保古墳群　27三保遺跡群　28竜ヶ崎古墳群　29山田１・２号墳　30妙見山城跡　31森藤遺跡群　32古瓦出土地（大法廃寺跡）　33大法古墳群　34法万経塚　35西高尾谷奥遺跡　36西高尾経塚　37大峰遺跡　38槻下豪族居館　39槻下古墳群　40金屋経塚　41伊勢野遺跡群　42斎尾廃寺跡　43斎尾古墳群　44大高野遺跡　45塚本古墳群　46水溜り・駕籠据場遺跡　47大高野古墳群

第３図　周辺の遺跡

に代わって横穴式石室が採用される。このうち、大法３号墳（33）や三保６号墳（26）、大栄町上種東３、上種西14号墳は竪穴系横口式石室と呼ばれる特異な構造で、八橋狐塚古墳のくびれ部西側の石室もその可能性がある。槻下古墳群（39）・塚本古墳群（45）・大高野古墳群（47）・斎尾古墳群（43）などで後続する石室形態も同じ系譜上のものであることから加勢蛇川流域が石室形態を共通とするまとまった地域であったことを示している。東伯町大高野3号墳には横穴式石室の中に金銅製耳環・青銅製鈴・鉄刀・刀子などが、槻下５号墳（代々１号墳）には金環・鉄刀などが副葬されていた。山田

１号墳（29）や出上岩屋古墳は切石積石室で、終末期の様相を示す。この時代の集落は、東伯町三保遺跡（27）、井図地中ソネ遺跡、笠見第３遺跡、八橋第８・９遺跡、赤碕町太一垣遺跡・松谷遺跡（15）・別所第３遺跡などが丘陵上に営まれている。

古代　現在県内では22ヵ所の古代寺院が見つかっているが、初期の仏教文化の姿を最もよく残しているといわれる斎尾廃寺（42）は、県内の古代寺院の多くが法起寺式伽藍配置を採用するのに対し、法隆寺式を採っていることから、山陰では唯一の国特別史跡に指定されている。塑像片・仏頭・鴟尾・鬼瓦などが出土している他、創建期の軒丸瓦には紀寺式、軒平瓦に法隆寺式系統をもつものを採用しており、山陰・山陽では数少ない瓦当文様で、畿内と結びつきの深い有力豪族が斎尾廃寺周辺で勢力を持っていたと推察される。斎尾廃寺の東方にある大高野遺跡（44）では、総柱礎石建物群が検出されており、正倉（郷倉）と考えられる。さらに郡衙所在地もその周辺に比定されている。伊勢野遺跡群（41）・水溜り・駕籠据場遺跡・森藤遺跡群においては、掘立柱建物を中心とする集落が見つかっている。その他、伊勢野遺跡群の南方に古瓦出土地（32）がある。当地域は伯耆国八橋郡に属し、加勢蛇川右岸が当郡の中心地であったと推察される。平安時代末期の遺構として、金屋（40）と法万（34）に経塚があり、金屋と西高尾（36）では銅経筒が出土している。また、井図地頭遺跡において「コ」の字状の溝に囲まれた方形区画遺構が見つかっている。建物跡は認められていないが、丘陵上の方形居館の可能性が指摘されている。

中世・近世　鎌倉時代に入ると、名田を多く集めた有力名主の中には荘園内に孤立した荘宅を構えるなど、武士的な性格を持つ豪士が出現する。東伯町槻下（38）には、台地に堀を巡らせた方形の一段高い敷地が並んで残り、一つには周囲に高さ２ｍの土塁が築かれた館跡がある。『伯耆民談記』には岩野弾正坊の居城であったと記述されている。

また、赤碕町海岸部から船上山にかけて、鎌倉末期の作と推定される宝塔と宝篋印塔の二様式を合わせ持つ独特の形態の赤碕塔がある。現在町赤碕町内で６基確認されている。

ＪＲ山陰線八橋駅のすぐ北側の丘陵上には、八橋城跡（20）がある。八橋城は、南北朝時代に行松氏によって築造されたが、のちに尼子・毛利氏の支配下となり、西伯耆から東伯耆方面の経営拠点となった。また東伯町大杉には南条氏の出城である妙見山城跡（30）がある。赤碕町では、土塁と堀を持った箆津城（槇城）がある。1584～1585年頃の築城と推定され、海上防備の城と考えられている。他に、太一垣城・大仏山城・山川城跡が知られている。築城年代は不明であるが、『伯耆民談記』によると、吉川元春の羽衣石城（東郷町）攻撃に関与した城と考えられている。

江戸時代には東伯町逢束に伯耆街道の宿駅が置かれた。江戸時代前期寛永14年（1637年）の『因幡伯耆駄賃銀宿賃書付』に「大塚」がみられることから、この時期には宿駅として機能していたことが分かる。またこの地には鳥取藩の藩倉「大塚御蔵」がおかれていた。現在でも北側の土手の一部と火除地が残っている。

（淺田康行・岩井美枝・福井流星・前島ちか）

【参考文献】
『弥生時代からのメッセージ』　2003　鳥取県教育委員会
『歴史時代の鳥取県』　1989　鳥取県埋蔵文化財センター
『井図地頭遺跡・井図地中ソネ遺跡』　2003　（財）鳥取県教育文化財団
『笠見第３遺跡』　2003　（財）鳥取県教育文化財団
『福留遺跡発掘調査報告書』　2001　赤碕町教育委員会
内藤正中・真田廣幸・日置粂左ヱ門著　『県史31　鳥取県の歴史』　1997　（株）山川出版社
坂詰秀一編　『仏教考古学辞典』　2003　（株）雄山閣

第３章　三林遺跡の調査

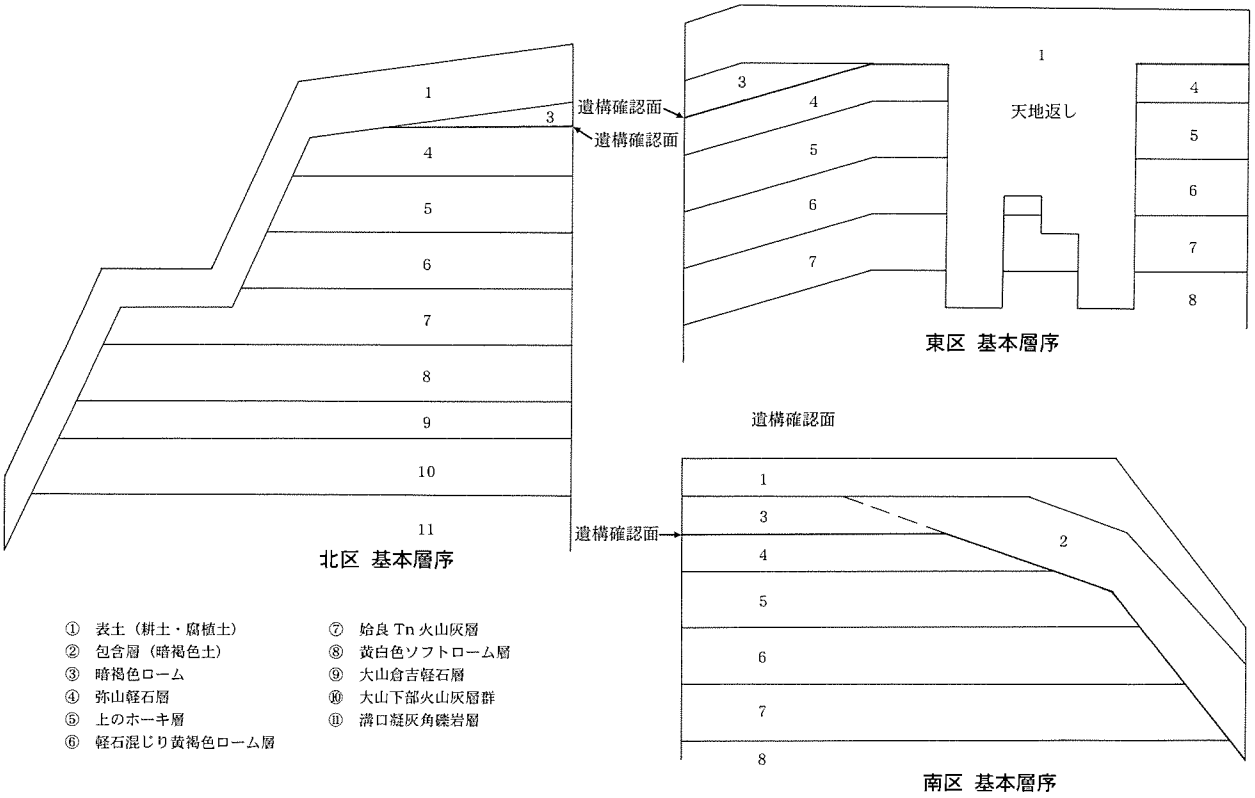
第１節　遺跡の立地と層序

三林遺跡は標高約64mの丘陵上に立地する。谷部の水田面からの比高差は約40m、海岸からの距離は約２㎞で、晴天時には背後の大山と日本海の水平線を一望することができる。

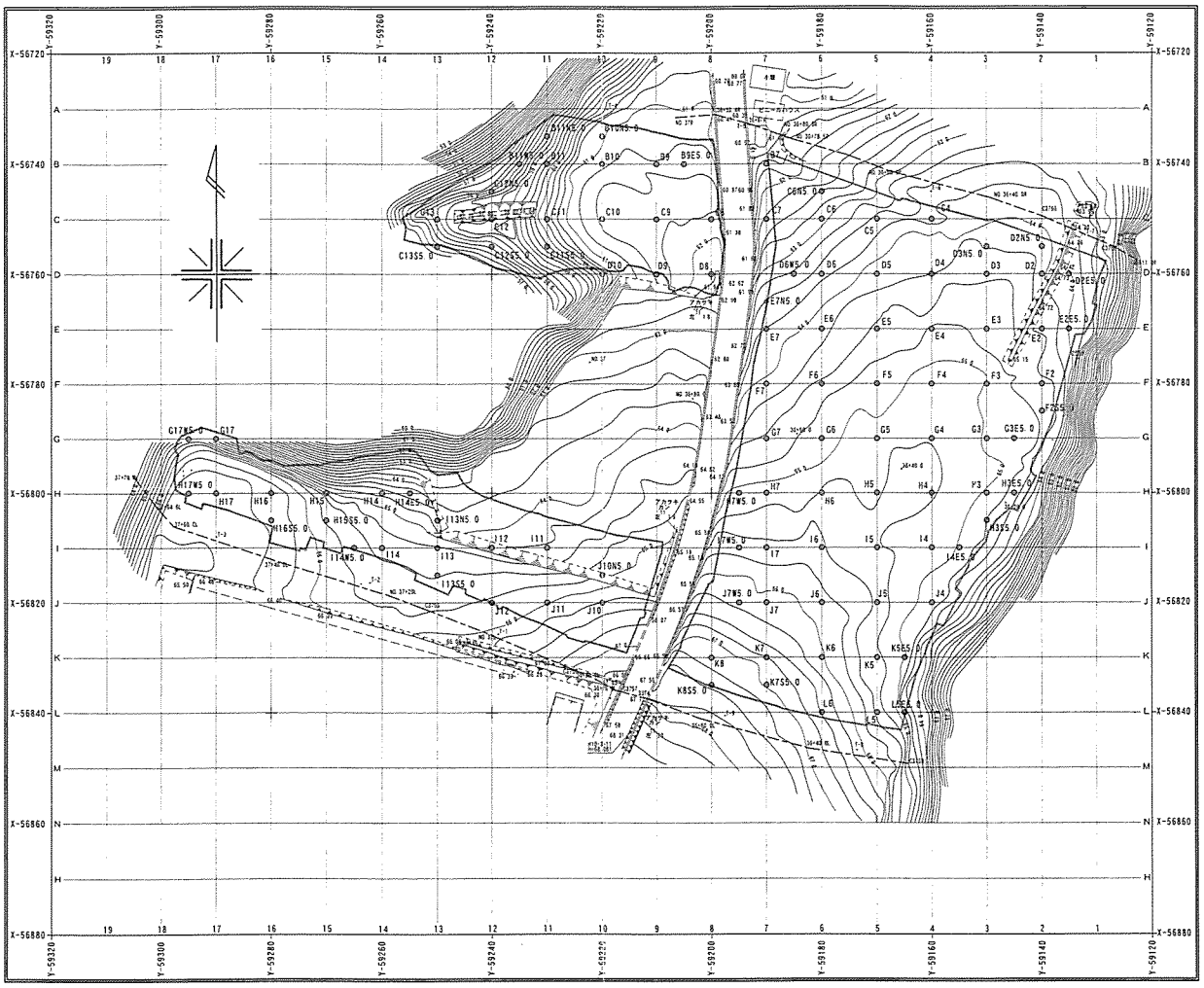
大山は第四期更新世に形成された安山岩～デイサイトの火山である。その開始期は100万年以上さかのぼるものと考えられ、約１万数千年前に最後の噴火を行ったのち活動を停止した。この間、比較的長い休止期間があったと考えられている。この休止期間以前の活動あるいはそれによって形成された火山体は古期大山、以降のそれらは新期大山とよばれている。三林遺跡の立地する丘陵は、古期大山の噴出物からなる溝口凝灰角礫岩の上に、新期大山が噴出した降下テフラが累積した台地状地形であり、浸食作用によって大小の谷が刻まれている。降下テフラは下位のものから大山最下部火山灰層・下部火山灰層・中部火山灰層・上部火山灰層に大きく分けられている。

東西で高低差のある北区では調査区内の層序のほぼすべてを確認することができる。最下層から、溝口凝灰角礫岩、下部火山灰層群、中部火山灰層の大山倉吉軽石層（DKP)、黄白色ソフトローム層、上部火山灰層の基盤である姶良Tn火山灰層（AT)、軽石混じり黄褐色ローム層、上のホーキ層、弥山軽石層、暗褐色ローム層、表土の順である。東区は黄白色ソフトローム層から暗褐色ローム層・表土、南区では加えて遺物包含層の堆積を確認した。

暗褐色ローム層は地表付近の火山灰層が風化・土壌化が進行したものと考えられる。東区の傾斜のない範囲では暗褐色ローム層が存在しなかったが、これは削平または流失によるものと推測される。



第４図　層序模式図



第５図　調査前地形および調査範囲

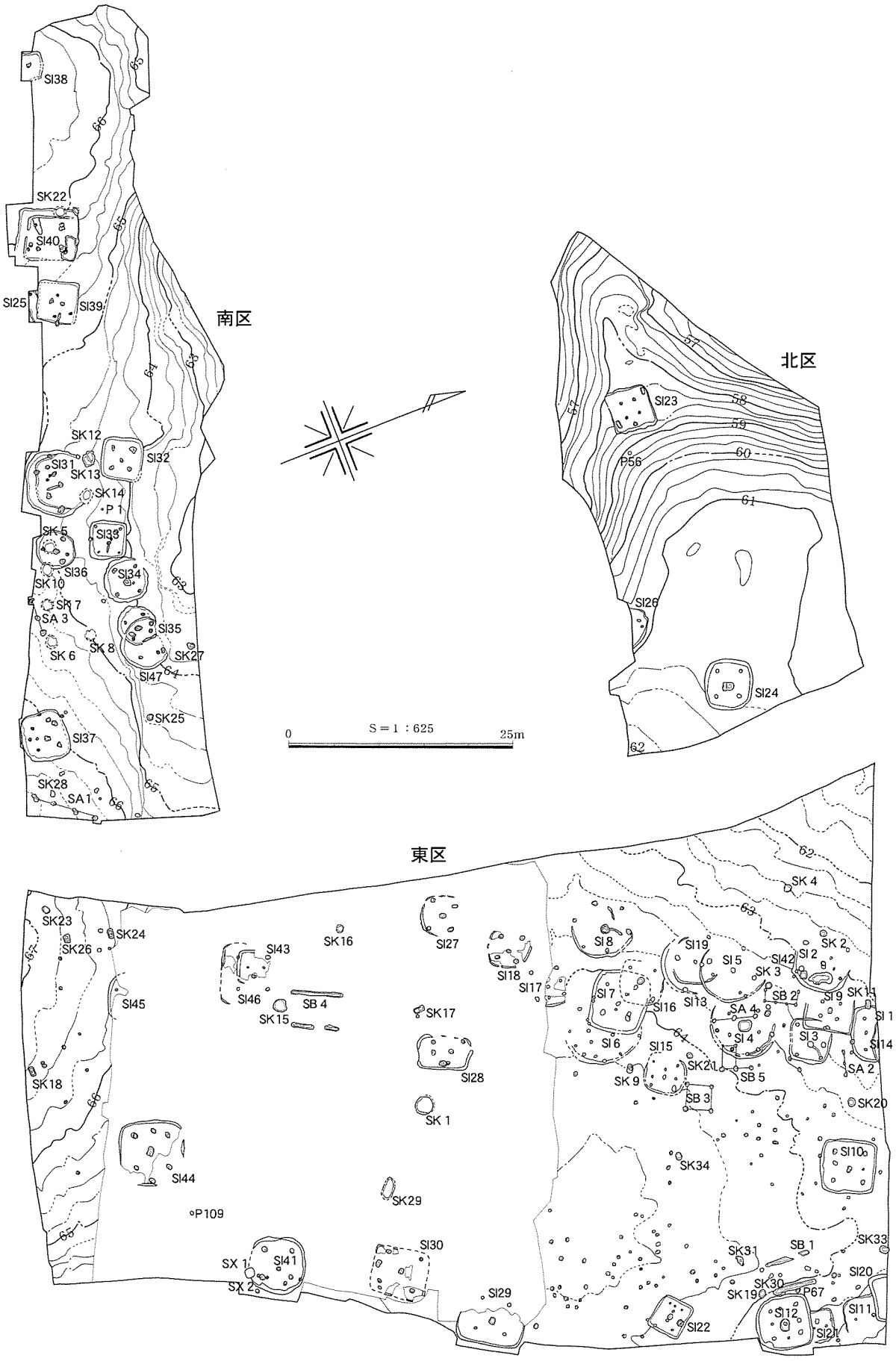
三林遺跡の遺構の埋土は暗褐色～褐色系統の色なので、ベースが火山灰層のような黄褐色系の色ならば耕作土あるいは撹乱層を除去しさえすれば、遺構を確認することが比較的容易であった。しかし東区の西際や北区の東際、南区のように暗褐色ロームが残存している場合、このロームと遺構埋土は遺物の出土の有無を除けば区別が付かず、遺構の輪郭を検出することが困難であった。この場合は検出が可能な面まで掘り下げることにした。

南区の北側斜面に堆積する包含層から出土した遺物は弥生時代後期から古墳時代中期の土器、石器で、付近で検出される遺構の時期と合致する。堆積した時期は不明であるが、時代の異なる遺物が混在することから、遺物を含む流土の自然堆積と考えられる。

本章第５節で詳しく触れるが、東区から先土器時代のものと考えられるスクレイパー（S48）が１点出土した。ただし古墳時代中期の竪穴住居跡（SI９）の中の、耕作に伴う撹乱層からの出土であるために本来の出土地点は明らかにできない。検出した遺構や、耕作の撹乱の深度はＡＴ層あるいはそれ以下に達しているため、この石器が遺跡内の火山灰層から出土した可能性はあるが、今回の調査内容でそれ以上のことに言及するのは控えておく。

【参考文献】

岡田昭明ほか1995「野外研修案内書　大山テフラと蒜山原」日本地学教育学会第49回全国大会実行委員会



第６図　調査後地形および遺構の配置

第１表　三林遺跡　時代別遺構一覧表

竪穴住居跡

時期		遺構名	地区	グリッド	平面形	規模（m）	床面積(㎡)	主柱数	中央ピット
弥生時代	後期前葉	SI13	東区	D5	円形	※7.0	※38.5	7〈	－
		SI16	東区	D5他	隅丸方形	※4.2/※4.2	※17.6	4	○
		SI27	東区	F6	隅丸方形	4.4/※4.4	※21.1	4	○
		SI42	東区	C5	隅丸方形	3.2/2.8	※9.0	3〈	不明
	後期中葉	SI２(旧)	東区	C5	隅丸方形	※4.3/※3.5	※15.1	5〈	○
		SI２(新)	東区	C5	隅丸方形	6.0/※5.0~6.0	※36.0	5〈	○
		SI５	東区	D5	円形	7.1/※6.6	36.8	6	○
		SI６	東区	E5	楕円形	※8.2/※7.0	※45.0	9	不明
		SI８	東区	E6	隅丸方形	※6.4/※6.2	※39.7	6	○
		SI15	東区	E4	隅丸方形	4.4/※4.0	※17.6	4	○
		SI19	東区	D5	隅丸五角形	※5.4/※5.4	※29.2	5	○
		SI34	南区	H11他	隅丸方形	4.8/4.8	24.2	4	○
	後期後葉	SI４(旧)	東区	D4	円形	※6.6	※34.1	4	○
		SI４(新)	東区	D4	円形	※7.2/※6.6	※37.3	6〈	○
		SI17	東区	F5	隅丸方形	※4.6/※4.4	※20.2	4	○
		SI45	東区	J7	隅丸方形	3.0/1.8〈	△1.3	不明	不明
		SI25	南区	H14他	隅丸方形？	3.5〈/1.2〈	△3.6	1〈	不明
		SI31(旧)	南区	I12他	円形	6.8	57.8	3〈	○
		SI31(新)	南区	I11	多角形？	4.3	36.8	3〈	○
		SI35	南区	I11	円形	4.3	18.5	4	○
		SI47	南区	I11	円形	5.6	25.7	4	○
	終末	SI３	東区	C4	隅丸方形	4.3/4.3	18.5	4	○
古墳時代	前期初頭	SI１	東区	B4他	隅丸方形	5.6/2.3〈	△12.9	2〈	不明
		SI30	東区	H3	隅丸方形	※5.9/5.0	※28.9	4	○
		SI41	東区	I7	隅丸方形	5.6/5.4	30.7	4	○
		SI24	北区	C8	隅丸方形	5.0/4.7	23.5	4	○
	前期前葉	SI11	東区	C1他	隅丸方形	4.0/※3.6	※13.7	2	－
		SI28	東区	G5	隅丸長方形	5.8/3.3	18.8	2	－
		SI29	東区	G2他	隅丸方形	7.2/※6.0	△24.4	4	○
		SI44	東区	J5他	隅丸方形	6.9/6.7	※45.0	4	○
		SI46	東区	I7	隅丸方形	※6.4/※6.2	※39.2	4	○
		SI26	北区	C9	隅丸方形	4.4/1.6〈	△3.5	2〈	不明
		SI33	南区	H12他	方形	4.2/4.1	17.5	4	○
	前期中葉	SI７	東区	E5	隅丸方形	6.2/5.9	36.6	4	○
		SI10	東区	C2他	隅丸方形	5.6/5.5	30.8	4	○
		SI12	東区	D1他	隅丸方形	6.2/6.1	31.4	4	○
		SI14	東区	B4	隅丸方形	3.2/0.3〈	△0.5	不明	不明
		SI18	東区	F6	隅丸方形	4.4/4.2	19.2	4	○
		SI43	東区	I7	方形	※3.6/※3.2	※11.4	2	－
		SI32	南区	H12他	隅丸方形	4.8/4.7	22.5	4	○
	前期後葉	SI23	北区	C11	方形	4.5/4.4	19.8	4	－
	中期中葉	SI20	東区	C1他	方形	4.4/1.2〈	△4.8	不明	不明
		SI21	東区	D1他	方形	3.3/※2.6	※10.9	2	－
		SI22	東区	F2	方形	3.7/3.4	12.5	2	○
		SI38	南区	H17	方形？	2.8/2.1〈	△5.9	1〈	不明
	中期後葉	SI９	東区	C4	方形	5.0/※4.4	※22.0	4	○
		SI39	南区	H14他	方形	4.5/4.5	20.5	2	－
		SI40(旧)	南区	H15他	方形	5.7/4.8	27.8	4	－
		SI40(新)	南区	H15他	方形	6.7/5.7	38.7	4	－
時期不明		SI36	南区	I12	楕円形	4.4/4.0	18.2	3	○
		SI37	南区	J10	隅丸方形	5.4/4.7	26.3	4	○

土坑

時期		遺構名	地区	グリッド	平面形	規模（cm）	特記事項
時期不明		SK２	東区	C5	円形	78×76－108	落とし穴
		SK３	東区	C5	隅丸方形	63×50－100	落とし穴
		SK４	東区	C6	円形	78×70－120	落とし穴
		SK９	東区	F3	楕円形	85×63－77	落とし穴
		SK11	東区	B4	長方形	113×48－80	落とし穴
		SK15	東区	H6他	不整円形	160×139－35	貯蔵穴
		SK16	東区	H7	不整円形	90×84－63	落とし穴
		SK17	東区	G6	隅丸長方形	123×55－50	落とし穴
		SK18	東区	K6	隅丸長方形	115×65－71	落とし穴
		SK19	東区	D1	楕円形	68×56－47	落とし穴
		SK20	東区	C3	円形	80×80－89	落とし穴
		SK21	東区	D4	円形	65×53－89	落とし穴
		SK23	東区	K8	楕円形	84×68－75	落とし穴
		SK24	東区	J8	隅丸長方形	112×60－135	落とし穴
		SK26	東区	J8	長方形	90×60－93	落とし穴
		SK30	東区	D1他	不整円形	75×68－91	落とし穴
		SK32	東区	C5	不整円形	95×70－70	落とし穴
		SK33	東区	C1	隅丸長方形	93×55－79	落とし穴
		SK34	東区	E3	楕円形	86×74－123	落とし穴
		SK12	南区	H13他	隅丸長方形	160×85－23	SK13に先行
		SK25	南区	I10	円形	75×65－94	落とし穴
		SK27	南区	H10	円形	80×73－136	落とし穴
		SK28	南区	J9	円形	68×63－102	落とし穴
弥生時代	後期後葉	SK１	東区	G5	円形	196×176－69	貯蔵穴
		SK５	南区	I12	円形	107×105－90	貯蔵穴
		SK６	南区	J11	不整円形	117×110－55	貯蔵穴
		SK７	南区	I11他	不整円形	120×120－45	貯蔵穴
		SK８	南区	I11	不整円形	120×100－45	貯蔵穴
		SK10	南区	I12	不整円形	130×100－135	貯蔵穴
		SK13	南区	H13他	隅丸長方形	140×90－40	
		SK22	南区	H12	円形	105×95－50	貯蔵穴
	終末	SK14	南区	I12	楕円形	120×85－95	貯蔵穴
古墳時代	前期前葉	SK29	東区	H4	隅丸長方形	258×124－10	
	中期中葉	SK31	東区	D2	楕円形	68×57－34	

〔凡例〕
・数値の※は復元値、△は残存値を示す。
・住居跡の規模は（長軸/短軸）または直径を示す。
・数値の「〈」は「以上」を示す。

掘立柱建物跡

時期	遺構名	地区	グリッド	間	梁行長(m)	桁行長(m)	主軸	特記事項
弥生時代終末	SB４	東区	H6	１×３	3.8	4.8	N－24°－E	布掘り
古墳時代前期中葉	SB５	東区	D4	１×２	1.3	3.0	N－20°－E	
時期不明	SB１	東区	D1他	２×３	3.1	4.2	N－ 4°－E	布掘り
	SB２	東区	C4他	１×３	1.6	4.4	N－25°－E	２間×３間の可能性もあり
	SB３	東区	D4他	１×１	2.6	2.7	N－24°－E	

柵

時期	遺構名	地区	グリッド	柱数	長さ(m)	主軸	特記事項
弥生時代後期中葉	SA２	東区	C3他	4	3.2	N－75°－W	
	SA３	南区	J11	3	3.8	N－88°－E	
時期不明	SA１	南区	J9	4	7.2	N－40°－E	
	SA４	東区	D4	3	4.5	N－12°－E	SB３、SB５と関係か？

埋葬施設

時期	遺構名	地区	グリッド	掘方（cm）	出土土器	特徴
９世紀中葉	SX１	東区	J3	方形（130×100－30〈）	土師器蔵骨器５	石槨内に木炭を充填し、その中に蔵骨器を入れ子状に納める。
９世紀中葉	SX２	東区	J3	円形（43×43－18〈）	須恵器壺１、土師器坏４	掘方中央に須恵器壺を置き、その周囲に土師器坏を並べる。

第２節　東区の調査

（１）概要

農道の東側の区域である。南北長約100m、東西幅約50～60m。調査範囲は南から北へ緩やかに傾斜する地形で、西側は農道の路面より0.5～１m程度高くなっていた。クロボクを主体とする表土（耕土）を掘り下げたところ、中央の浅いところでは約30cm程度で地山を検出したが、西側の地表面は北西へ向かって傾斜していて、農道の路面よりも30～50cm程度下がっていた。表土除去後の地表面は、果樹園の撹乱が著しく、中央部南北50m 東西50mの範囲は天地返しによって、南北で検出した地山面よりさらに約60cm下まで掘り返されていた。耕土の下は撹乱土の中に地山面が小島のように散在する状況を呈していた。撹乱土は耕土と地山土のブロックのほかに、遺物を包含する土のブロックが混ざり合っていた。遺物の出土分布には偏りがあり、遺物の集中する範囲の撹乱土下からは遺構が検出された。全般に検出した遺構は撹乱で破壊されていて、遺構埋土もほとんど残存していなかった。そのために時期決定可能な遺物も僅かであったので、遺構の範囲内の撹乱土から出土した遺物を参考資料として使用した。

東区では、竪穴住居跡32軒、掘立柱建物跡５棟、柵２列、土坑22基、ピット126基、火葬墓２基を検出した。

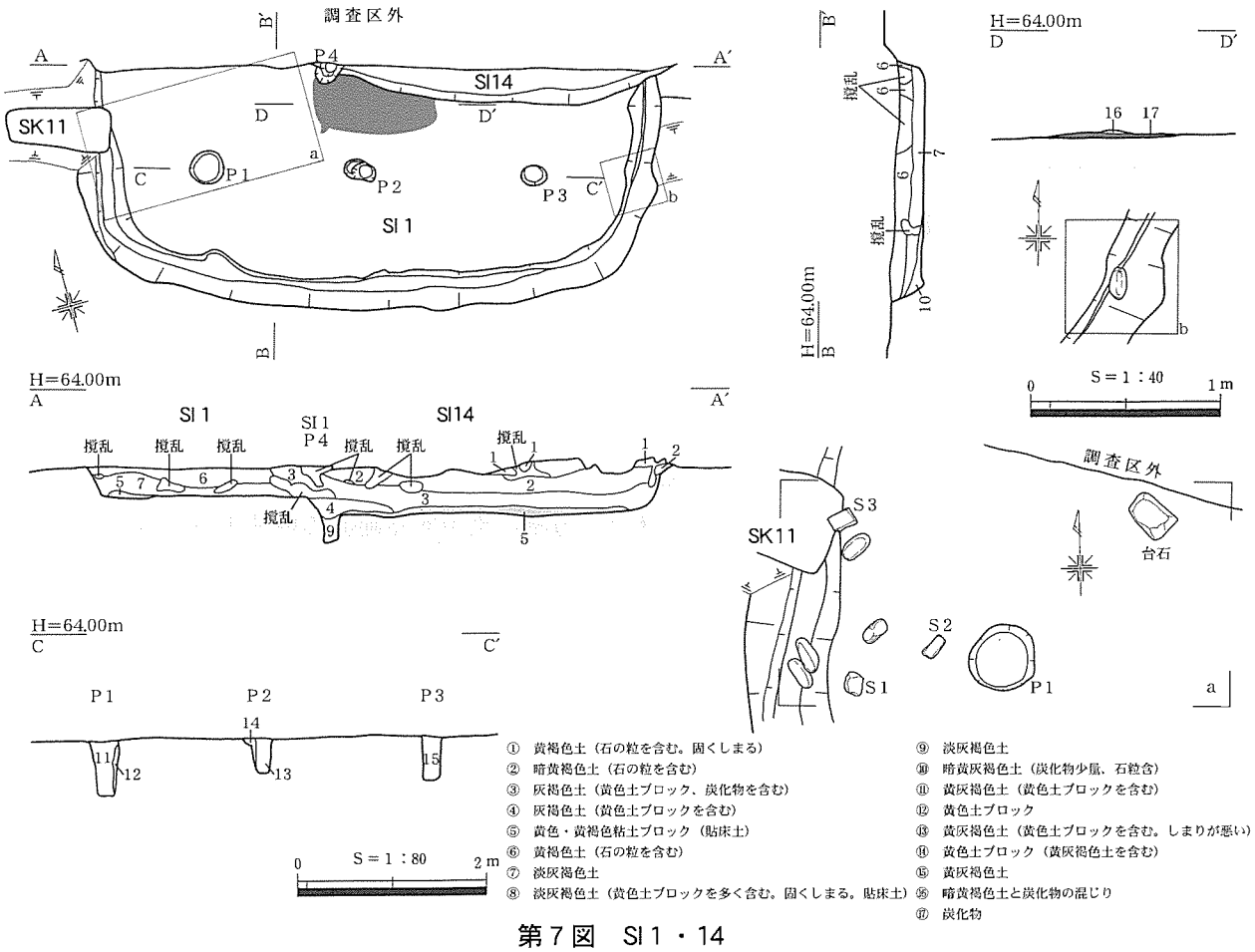
竪穴住居跡の時代は弥生時代後期前葉から古墳時代中期後葉にかけてのものである。その内訳は弥生時代後期が14軒、古墳時代前期が16軒、古墳時代中期が４軒となる。弥生時代後期の竪穴住居跡は北西側の緩斜面に、等高線に沿った幅20mの帯状の範囲で密集して検出された。平面形は円形、楕円形、胴張りの隅丸方形である。後期前葉から後葉にかけて、大型の竪穴住居（SI４、５、６、13）が一定の範囲内で、場所を移動して建て続けられた様子が伺える。古墳時代前期初頭～前葉の竪穴住居跡は東側の斜面際で検出された。弥生時代後期の居住域であった西側の緩斜面は軒数がまばらになるが、前期中葉には再び西側が居住域の中心となる。前期の竪穴住居跡の平面形は隅丸方形と方形である。古墳時代中期は中葉の住居跡が北東隅で３軒並び、後葉の住居跡は西側緩斜面で１軒のみ検出されている。中期の竪穴住居跡の平面形は方形のみとなる。

掘立柱建物跡は１間×１間、１間×２間、１間×３間がそれぞれ1棟ずつ、布掘りが２棟検出された。そのうち時期が判明しているものは、弥生時代終末期の布掘り（SB４）と、古墳時代前期中葉の１間×３間（SB５）の２棟である。

柵は東西方向、南北方向にピットが３基並ぶものをそれぞれ１列ずつ検出した。時期が判明したのは弥生時代後期中葉の南北方向のもの（SA２）であるが、同時期の竪穴住居跡から離れている。

土坑は、出土遺物から確実な時期が判明しているものは、弥生時代後期後葉の貯蔵穴１基（SK１）と、古墳時代前期初頭と中期後葉の用途不明土坑２基（SK29、31）の３基である。そのほか形状から弥生時代後期後葉の貯蔵穴と推定されるものを１基、縄文時代の落とし穴と推定されるものを18基検出している。貯蔵穴は直径約1.8mの円形で、同時期の建物跡から離れた位置にある。落とし穴は調査区内の全域で検出しており、平面が長方形のものと円形・長円形のもの、底面に小穴を持つものと持たないものとがある。

火葬墓は平安時代のもので、調査区南東側の斜面落ち際に、１mの間隔をあけて東西に２基並んで検出された。１基は土坑内に組まれた石槨の中に蔵骨専用器が納められたもので、もう１基は土坑内



第７図　SI１・14

に直接須恵器の壺と土師器の坏が埋納されていた。同時代の遺構および遺物は見つからなかった。

（２）竪穴住居跡

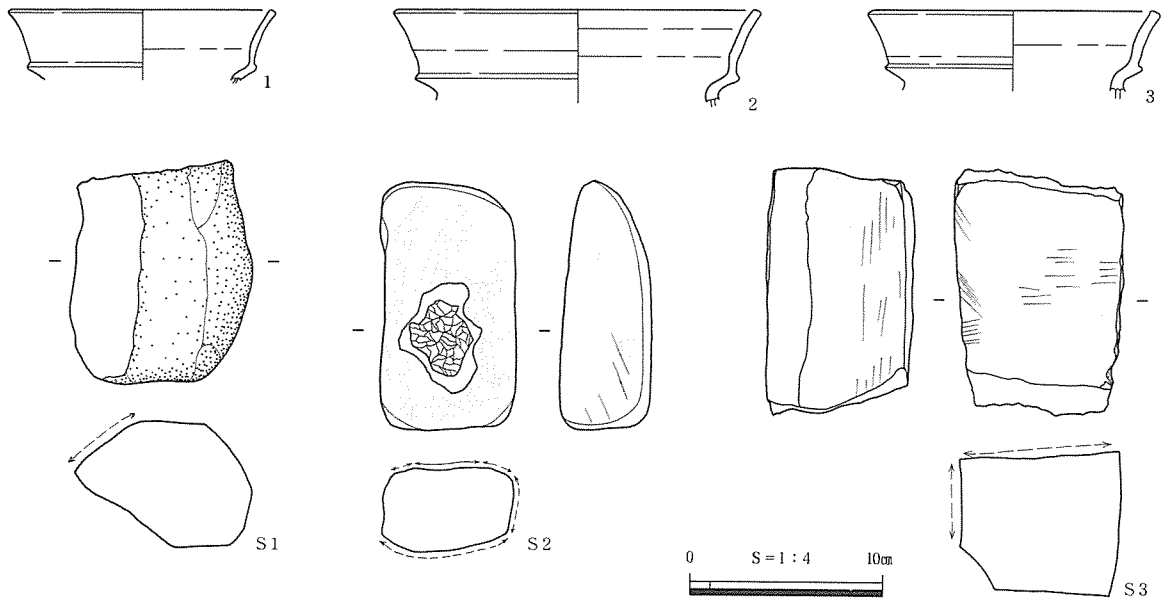
SI１（第７・８図、PL.２・30・48、第11・17表）

Ｂ４～Ｃ４グリッドの標高63mの緩斜面に立地する。半分強は調査区外に伸びる。南側15mにSB５が位置する。西端で落とし穴SK11を切る。北側をSI14に、南端をSI９に切られる。床面の平面形は隅丸方形で、長軸5.6m、短軸は不明である。検出面から床面までの深さは30cmである。

主柱穴はＰ１（37×33－60）cmとＰ３（26×21－50）cmの２基を検出した。柱痕の直径は20cmである。Ｐ１とＰ３の中間で検出したＰ２（33×20－40）cmとＰ４（30×20－47）cmは主柱穴とした２基よりも規模が小さいことから、補助柱穴と考えられる。未調査の範囲を含めると、主柱穴４基、補助柱穴３基がトランプの７の目のように配置されるものと推測される。

壁溝の断面形は逆台形で、幅15cm、深さ５cmである。壁溝際の床面は貼床を施して整地しており、床面外周は中央よりも若干高くなっている。Ｐ２から北側に30cm離れた、床面の中央に当たる位置に（1.3×0.6）ｍの範囲でカーボンベッドを検出した。木炭の砕片と灰からなり、中心の厚さは約６cmである。炉と推定されるが、炭化物の下の形状は周辺の床面と変わらず、焼土化もしていない。北側はSI14の掘方に切られているので、全体の規模や様子は不明である。検出面以下の掘方埋土は３層に分かれるが、壁際から流れ込んだ状況を示し自然堆積と考えられる。

床面出土の遺物は砥石などの礫石器のみである。Ｐ１の西側で出土したＳ１、Ｓ３は砥石、Ｓ２は砥石から敲石への転用品で、いずれも安山岩を使っている。その周辺と、Ｐ３の東側で安山岩およびデ



第８図　SI１・14出土遺物

イサイトの亜円礫が５点出土している。これらの礫の表面に敲打面などの使用痕は観察できなかったが、いくつかには炭化物が付着していたことから、炉上で土器を支えるために使ったものと考えられる。Ｐ４の西側で台石が１点出土している。埋土中から出土する土器は小片で、器種を特定できるものは少なかった。甕１は掘方埋土の下層から、甕２は上層から出土した。

時期は、出土遺物から天神川Ｉ期、古墳時代前期初頭ごろのものと考える。　（家塚）

SI14（第７・８図、PL.２・32、第11表）

Ｂ４グリッドの標高63m の緩斜面に立地する。北側の調査区境界上で検出しており、大半は調査区外に伸びる。南東側10m に竪穴住居跡 SI10が位置する。SI１を切る。床面の平面形は隅丸方形と推定される。検出した範囲での長軸3.2m、短軸0.3m、検出面から床面までの深さ46cmである。

柱穴は検出していない。壁溝の断面形は逆台形で、幅は不明、深さは約６cmである。検出した範囲の床面全体は貼床で整地されていた。厚さは４～６cmで、壁際は掘方のまま残して壁溝を作り出している。掘方埋土は４層に分かれるが、壁際から流れ込んだ状況を示し、自然堆積と考えられる。床面上での出土遺物はない。甕３は埋土中の出土で層位は不明である

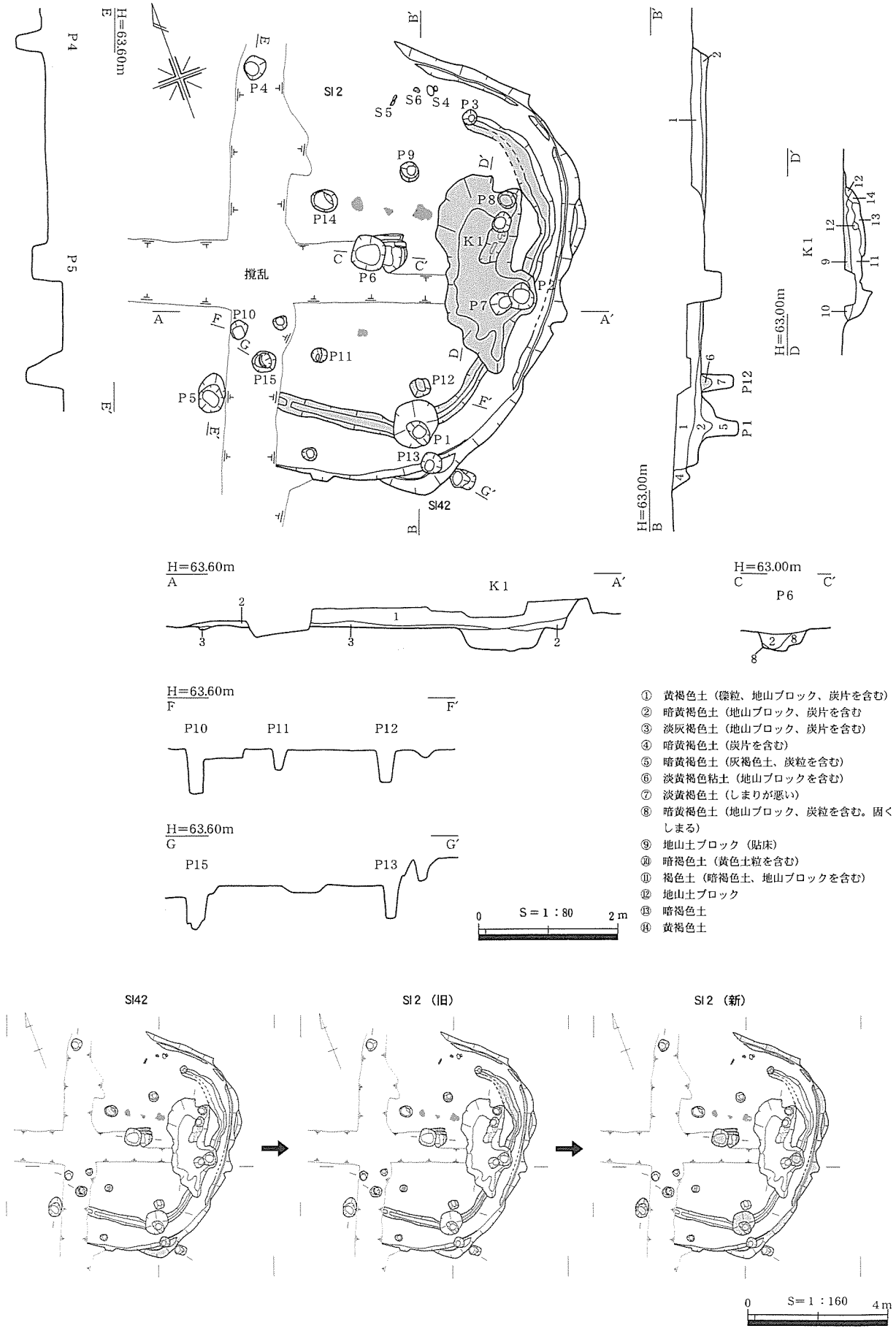
時期は、出土遺物から天神川Ⅲ期、古墳時代前期中葉ごろのものと考える。　（家塚）

SI２・SI42（第９・10図、PL.２・３・30・48・49、第11・17・19表）

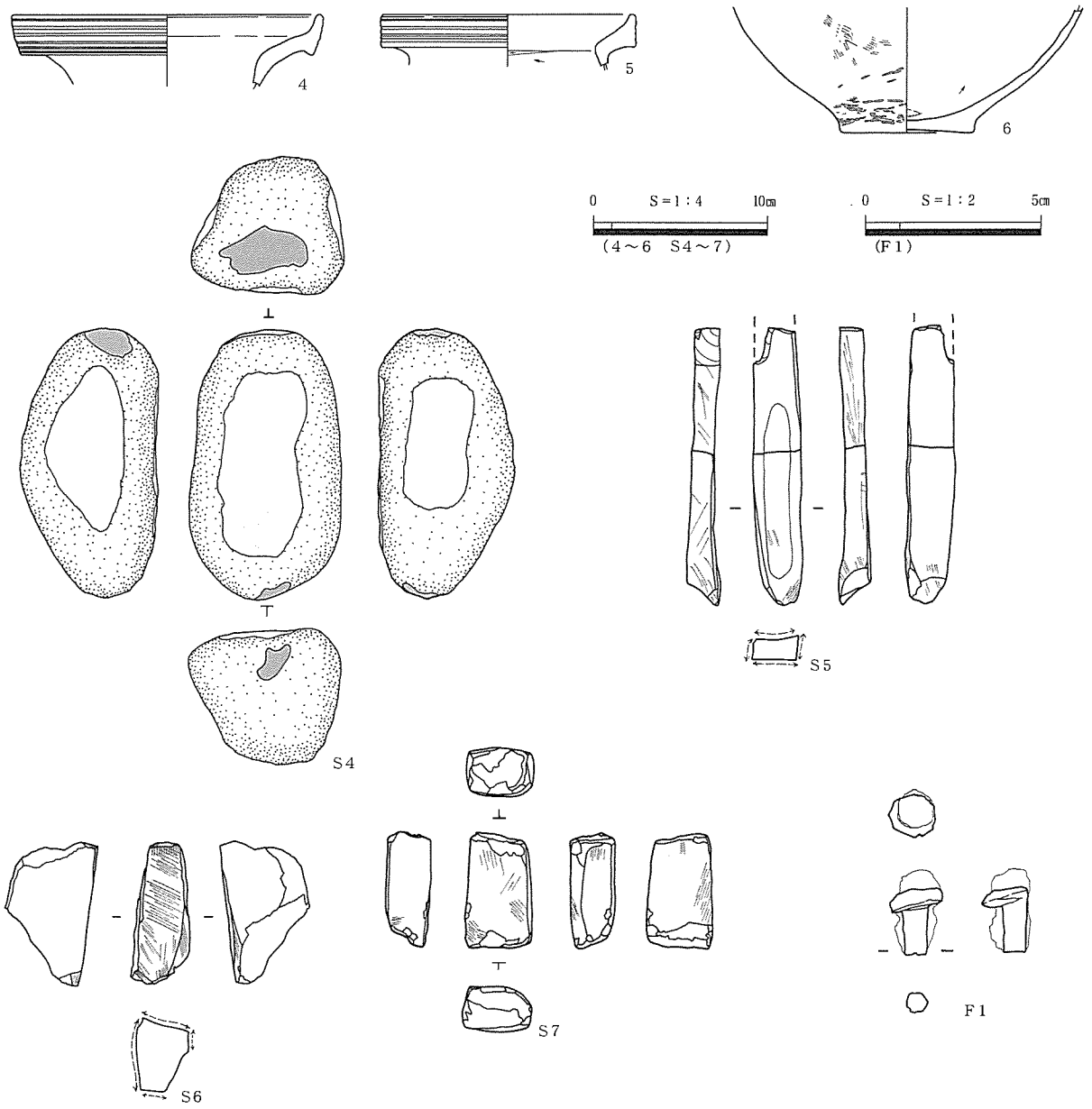
Ｃ５グリッドの北東側、標高63mの緩斜面に立地する。北西側の半分は削平によって壁面が失われている。南側５ｍに竪穴住居 SI５、東側10mに柵 SA２が立地する。SI２は SK32と SI42を切っている。SI２は床面の拡張を伴う建て替えが行われていため、古い方を（旧）、新しい方を（新）と呼称する。SI２（新）の床面で多くのピットを検出したが、その中から埋め戻しの痕跡、ピットの規模と配置に基づいて、SI２（新）、同（旧）、SI42の３軒の住居跡の主柱穴を抽出した。

・SI２（新）　床面の平面形は胴張りの隅丸方形で、長軸６ｍ、短軸は主柱穴の配列から５ｍ以上６ｍ未満と推定される。検出面から床面までの深さは40cmである

主柱穴はＰ１（70×65－50）cm、Ｐ２（37×37－56）cm、Ｐ３（23×20－50）cm、Ｐ４（33×31－63）cm、Ｐ５（56×39－55）cmの５基を検出した。Ｐ１とＰ５は柱を引き抜いた痕跡が認めら


SI2
SI42
撹乱
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
P11
P12
P13
P14
P15
K1
S4
S5
S6
H=63.60m
H=63.00m
S＝1：80
S＝1：160
① 黄褐色土（礫粒、地山ブロック、炭片を含む）
② 暗黄褐色土（地山ブロック、炭片を含む
③ 淡灰褐色土（地山ブロック、炭片を含む）
④ 暗黄褐色土（炭片を含む）
⑤ 暗黄褐色土（灰褐色土、炭粒を含む）
⑥ 淡黄褐色粘土（地山ブロックを含む）
⑦ 淡黄褐色土（しまりが悪い）
⑧ 暗黄褐色土（地山ブロック、炭粒を含む。固くしまる）
⑨ 地山土ブロック（貼床）
⑩ 暗褐色土（黄色土粒を含む）
⑪ 褐色土（暗褐色土、地山ブロックを含む）
⑫ 地山土ブロック
⑬ 暗褐色土
⑭ 黄褐色土

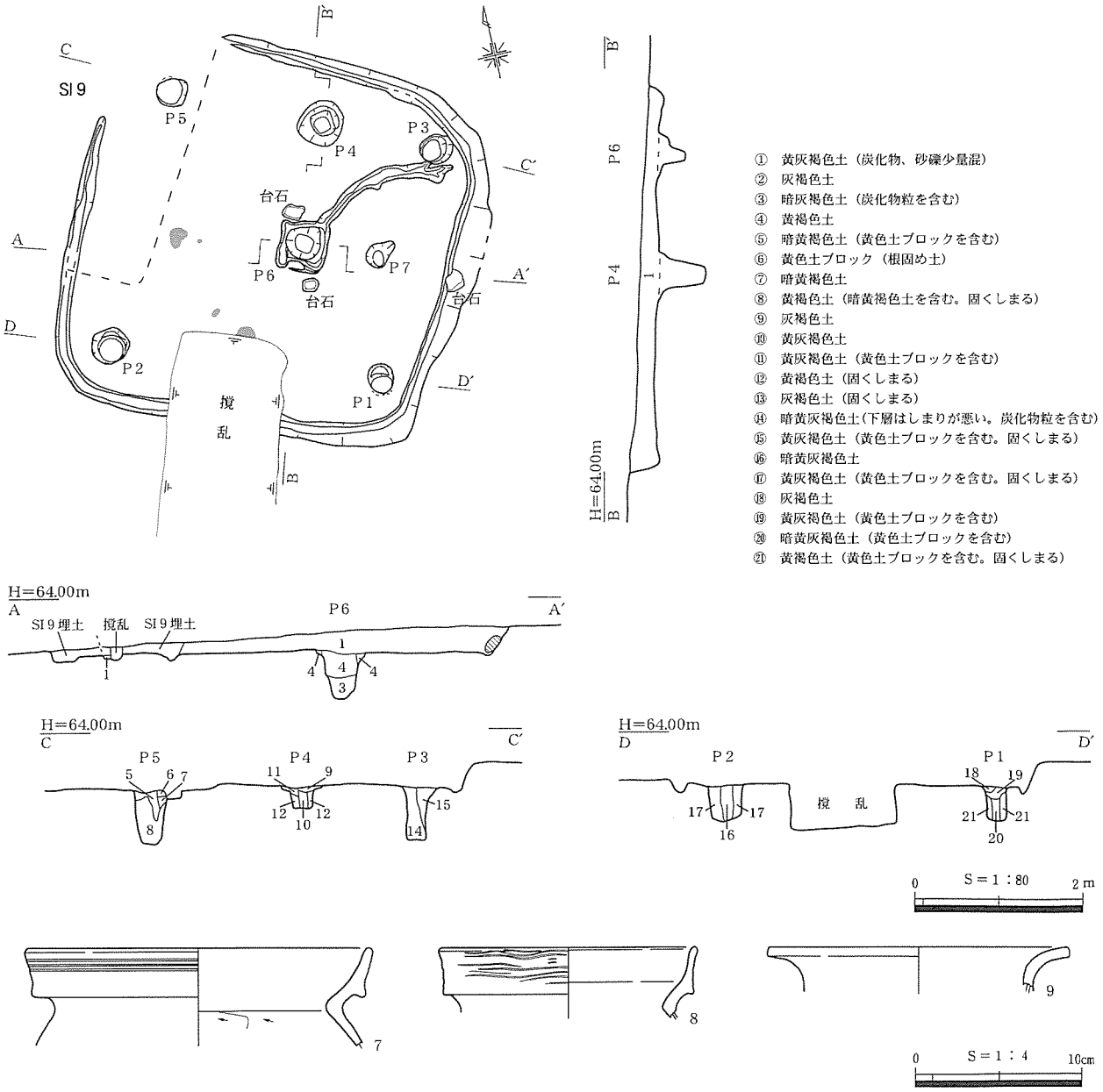
第９図　SI２・42



第10図　SI２出土遺物

れる。Ｐ４－Ｐ５間が他に比べて離れすぎているため、この間の撹乱（果樹園の排水溝による）範囲に、もう１基の主柱穴が存在したことが推定される。Ｐ２の西側に接するＰ７は地山土で埋め戻されているため、Ｐ２の前身の主柱穴か、あるいは都合により未使用のまま埋め戻された穴と推定される。中央ピットＰ６（78×57－30）cmは、東西の２つの穴を連結させたような掘方であり、北東側の上端には板を立てたような痕跡がある。埋土は自然流入で、建物全体のものと同質である。中央ピットの東側の床面に、（2.9×1.7－0.3）ｍの不整形な土坑Ｋ１が掘られていた。埋土は地山土と同質であり、上面は貼床が施されていた。Ｋ１の掘方は（旧）の壁溝を切り、埋土はＰ２、Ｐ７に切られている。このことからＫ１は（新）への建て替え作業時に掘られ、埋め戻されたものであることが分かるが、目的は不明である。

壁溝は北東側と南東側の壁際で検出した。断面形は緩やかな曲線で、規模は残りのよいところで幅22cm、深さ３cmで、不明瞭かつ断続的である。床面には、（旧）の柱穴P12上面と壁溝の部分に貼床を施している。焼土面は中央ピットの北側に３箇所、南側に１箇所確認している。埋土には炭片が含



第11図　SI 3 および出土遺物

まれる点が注目されるが炭化材や焼土ブロックのような、一般に焼失住居を示すとされる痕跡は、埋土の掘り下げ中も、断面の観察でも確認できなかった。

・SI 2（旧）　床面の平面形は胴張りの隅丸方形で、長軸4.3m、短軸は主柱穴の配列から3.5m 前後と推定される。床面のレベルは（新）と同一と推定される。

主柱穴はＰ8（26×22－41）cm、Ｐ9（30×27－55）cm、P10（30×27－64）cm、P11（22×21－29）cm、P12（27×24－47）cmの５基を検出した。本来は６本柱であったが、北隅の１基が撹乱で失われたものと考える。中央ピットはＰ6の東半分が（旧）の時期に作られた部分で、（新）への建て替えに伴って西に拡張したものと推測される。壁溝の規模は幅20cm、深さ10cm程度で、断面形は緩い曲線を描く。（新）の貼床によって埋められていた。

北東側の壁際の床面直上で、砥石Ｓ5、Ｓ6、敲石および磨石のＳ4が出土した。Ｓ5の石材は粘板岩で、出土時には二つに割れていた。出土状況から人為的なものではなく、住居廃棄後に落下物などによる衝撃が加わって割れたものと推測される。Ｓ6の石材は流紋岩で、砥面に明瞭な研磨痕が残る。

Ｓ４は安山岩の亜円礫で、敲打痕に赤褐色の顔料のようなものが付着していた。図化していないが、Ｓ４の東脇に並んで出土した磨石の表面にも赤褐色の物質が付着していた。砥石Ｓ７は遺構の検出作業中に出土したものである。土器はいずれも埋土中の出土で、床面直上のものはない。壺４、底部片６は２層の上面から、甕５は２層中の床面近くから出土している。Ｆ１は埋土中から出土した釘である。軸部の断面は円形で、軸部上端を叩き、叩打方向に直角に折り曲げて頭にしている。

SI２（新）の時期は出土遺物からＶ－２様式、弥生時代後期中葉ごろのものと考える。（旧）から（新）への建て替えは間をおかずに行われたと推測される。

・SI42　SI２に切られているため、床面は全て失われ、壁面と壁溝の一部、柱穴が残存するのみである。床面の平面形は残存部分の形状から隅丸方形と推測され、規模は主柱穴の配置から、長軸3.2m、短軸2.8m と推定される。床面からの高さは推定値で19cmである。

主柱穴はP13（30×30－67）cm、P14（38×32－81）cm、P15（33×30－81）cmの３基が想定される。本来は４本柱であったが、SI２（新）内のＫ１の掘り下げで破壊されたものと推測される。壁溝の断面形は緩いＶ字形で、幅18cm、床面からの深さは５cm程度と推定される。

埋土はSI２と類似している。遺物は出土していない。SI２に先行することから、弥生時代後期前葉ごろのものと推測される。（家塚）

SI３（第11図、PL.３・30、第11表）

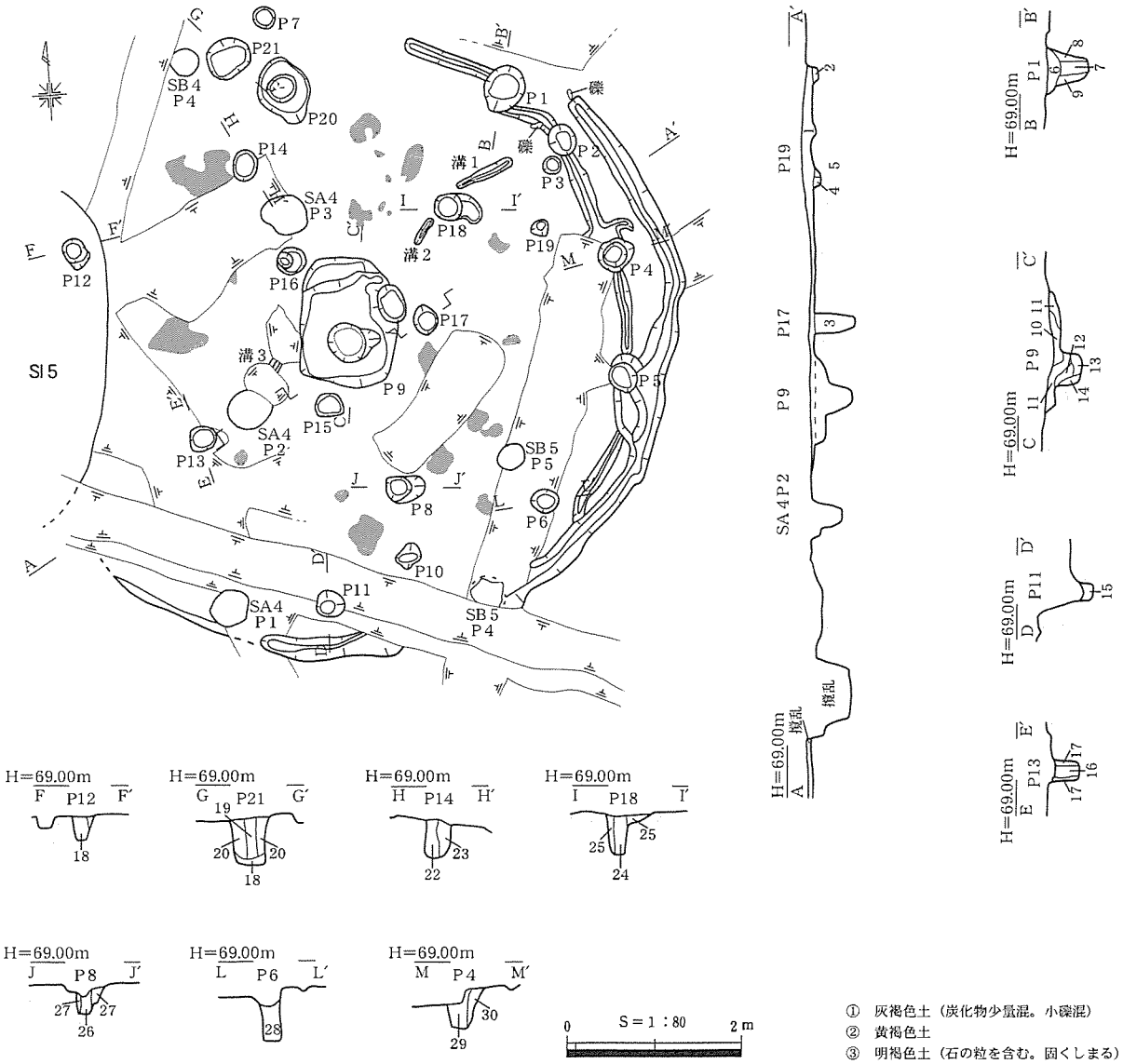
Ｃ４グリッド中央、標高63.5m の緩斜面に立地する。南側２ｍにSB５が立地する。西端はSI９に切られる。床面の平面形は隅丸方形で、地形の下る西側の幅が僅かに広い。規模は長軸4.3m、短軸4.3mである。検出面から床面までの深さは35cmである。

主柱穴はＰ１（38×28－59）cm、Ｐ２（45×40－81）cm、Ｐ３（40×35－67）cm、Ｐ５（35×33－73）cmの４基を検出した。それぞれの埋土の断面に柱痕が観察でき、その直径は10～15cmである。Ｐ４（57×50－30）cm、Ｐ７（38×28－14）cmは、主柱穴よりも浅く、直径約10cmの柱痕跡が残ることから、補助柱穴と考えられるものである。中央ピットのＰ６（56×55－60）cmは、床面の中心より50cm東側に寄っている。上端が方形で、西側に板を立て、地山土を使って固定したような痕跡がある。埋土は２層に分かれ、下層には炭化物粒が含まれていた。

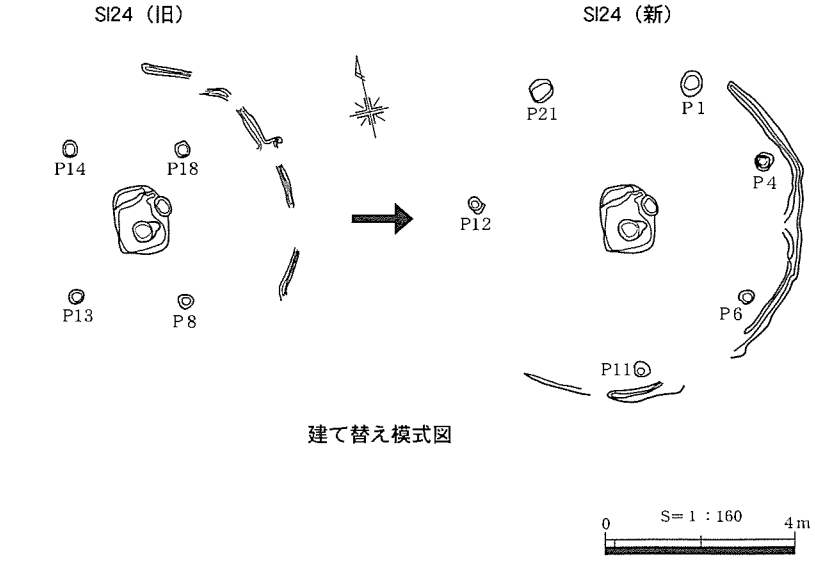
壁溝の断面は逆台形で、幅15cm、深さ５cm程度である。床面は地山の掘削のみで整形され、貼床は施されない。焼土面は中央ピットとＰ２の間で４箇所検出した。その反対側では、Ｐ３の南側から発し、中央ピットにつながる用途不明の溝を１条検出した。溝の東端は壁溝から離れている。長さは1.5m で、北へ膨らむ曲線を描く。幅は中央ピット側が10cm、Ｐ３側は20cm、床面からの深さはどこも６～７cmであるが、標高値を比較すると、溝の両端のほうが２～３cm深くなっている。溝の埋土は住居掘方の埋土と同質であった。掘方の埋土は炭化物を僅かに含んでいた。意図的に埋め戻した痕跡は無く、自然流入土の堆積によるものと考えられる。

甕７は床面付近の埋土中から、甕８は中央ピットの底面で出土した。どちらも平行沈線が部分的にナデ消されている。単純口縁の壺９は埋土中から出土した。図化していないが、中央ピットの北側と南側の床面直上で台石が２点出土している。台石はもう１点、東側の壁面に寄りかかり、壁溝の底面から浮いた状態で出土している。

時期は出土遺物からⅥ－１様式、弥生時代終末期ごろのものと考える。（家塚）

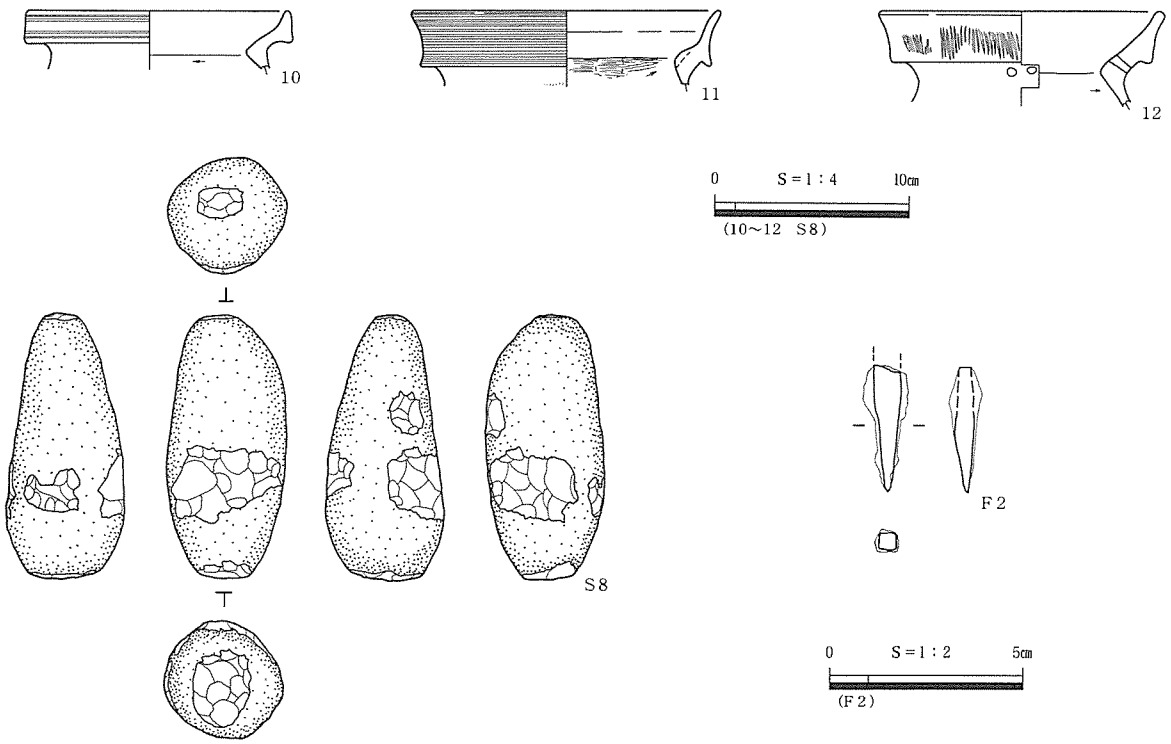


① 灰褐色土（炭化物少量混。小礫混）
② 黄褐色土
③ 明褐色土（石の粒を含む。固くしまる）
④ 淡灰褐色土
⑤ 暗黄色土ブロック
⑥ 暗灰褐色土（黄色土を含む）
⑦ 暗灰褐色土
⑧ 黄灰褐色土
⑨ 黄色土ブロック（黄灰色土を含む）
⑩ 灰褐色土（炭片を含む）
⑪ 灰褐色土（黄色土ブロックを多く含む）
⑫ 灰褐色土
⑬ 暗灰褐色土
⑭ 暗黄褐色土
⑮ 暗灰褐色土（炭片を含む）
⑯ 暗黄褐色土
⑰ 黄褐色土（固くしまる）
⑱ 暗黄褐色土（炭片を含む）
⑲ 暗黄灰褐色土
⑳ 黄褐色土（灰褐色土）
㉑ 暗黄灰褐色土
㉒ 暗黄灰褐色土
㉓ 黄褐色土（黄色土ブロックをむ）
㉔ 暗黄褐色土（しまりが悪い）
㉕ 黄褐色土（固くしまる）
㉖ 暗黄褐色土（しまりが悪い）
㉗ 黄褐色土ブロック
㉘ 淡灰褐色土（しまりが悪い）
㉙ 淡灰褐色土
㉚ 暗黄褐色土（固くしまる）



建て替え模式図

第12図　SI 4



第13図　SI４出土遺物

SI４（第12・13図、PL.４・32・48・49、第11・17・19表）

Ｄ４グリッドの北西側、標高63.8m の緩斜面に立地する。南西側20m に SI17が位置する。SB５に切られる。また SA４が重なるが前後関係は不明である。SI４は床面積の拡張を伴う立て替えが行われているため、新しい方を（新）、古い方を（旧）と呼称する。（新）の床面では多くのピットを検出しており、配置から SI４（新）・（旧）、SB５、SA４のそれぞれの柱穴を抽出した。

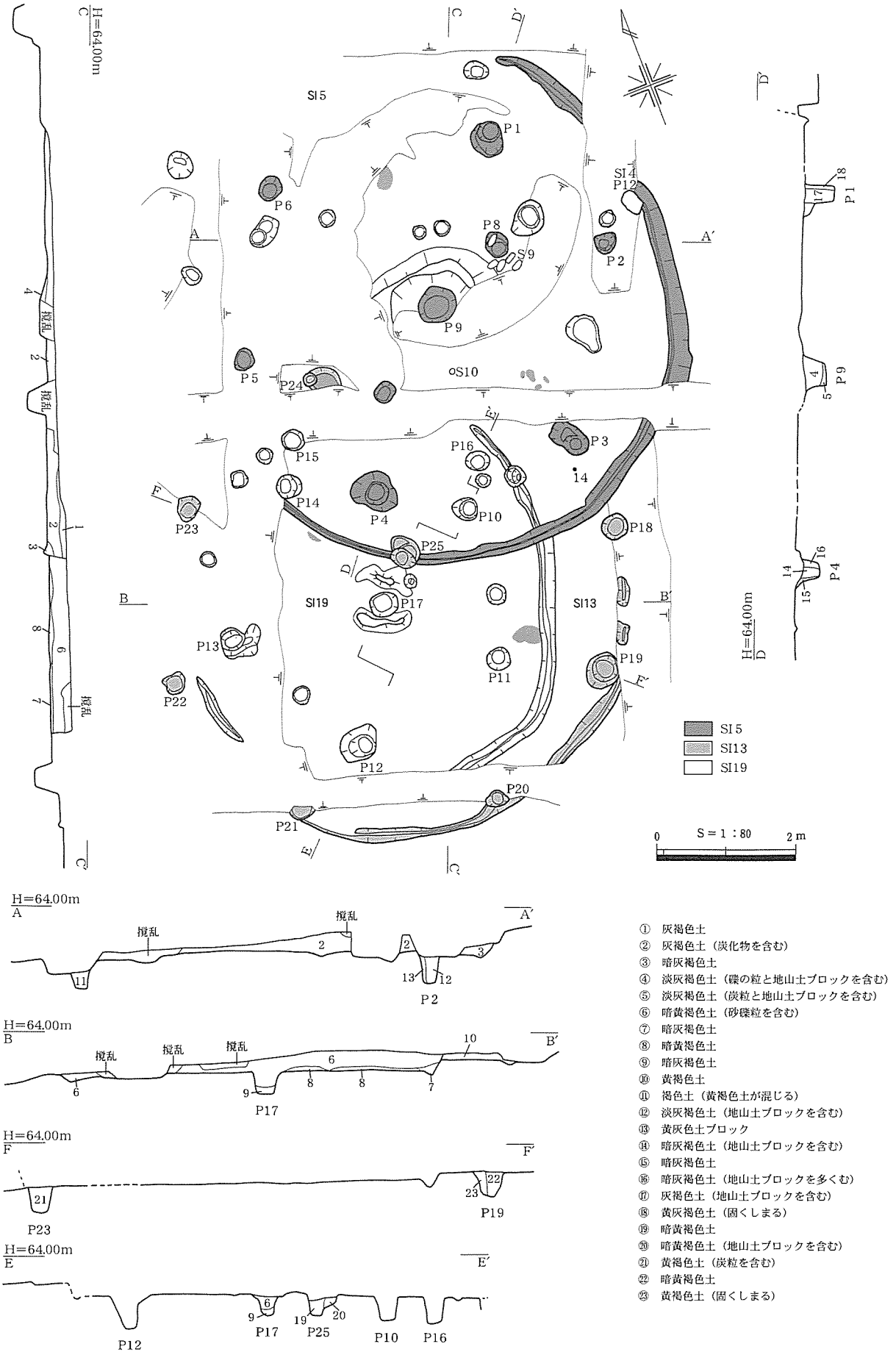
・SI４（新）　床面の平面形は円形である。北東側の壁溝が残存しないので、主柱穴の配置から長軸7.2m、短軸6.6m と推定され、面積は37.3㎡である。検出面から床面までの深さは10cmである。

主柱穴はＰ１（57×44－54）cm、Ｐ４（40×34－60）cm、Ｐ６（30×25－54）cm、P11（31×30－62）cm、P12（36×25－79）cm、P21（49×44－64）cmの６基を検出した。本来はP11－P12間の撹乱範囲にもう１基あって、７本柱で建てられていたと推測する。柱痕の直径は10～20cmである。中央ピットＰ９は床面の中心に位置する。平面形は上が隅丸方形（145×110－12）cm、下が円形（46×40－26）cmの二段掘りになっている。埋土は自然流入による堆積である。

壁溝は全体の半分弱の範囲で残存している。断面は浅いＵ字形で、幅14cm、深さ４cm程度である。床面は北西が削平されている。（旧）壁溝部分の貼床による埋め戻しを除いて、地山の削り出しのみで整形されている。焼土面は18箇所で検出した。埋土は削平のためにほとんど残っていなかった。

・SI４（旧）　床面の平面形は円形である。北西側が削平されて壁溝が残っていないが、長軸6.6m、短軸6.6m と推定され、面積は34.1㎡である。

主柱穴はＰ８（46×31－51）cm、P13（30×27－42）cm、P14（34×27－53）cm、P18（31×30－44）cmの４基を検出した。土層断面に残る柱痕の直径は12cmである。中央ピットの北東側と南西側で溝１（70×13－２）cm、溝２（34×７－２）cm、溝３（12×12－４）cmを検出した。検



第14図　SI５・13・19

出面が削平されていたので、本来の形状を残していない。溝１と溝２との間にP18を挟んでいるが、もともとは一続きに（新）の床面に掘られたものと推定する。溝３は両端が撹乱で破壊されている。どちらも用途不明である。

甕10はP21の埋土中から、甕11は床面付近の埋土中から出土した。撹乱内で出土した甕12は口縁部に縦方向のハケメあるいは貝殻腹縁を使った平行沈線が施されている。Ｓ８はＰ１東側の壁溝埋土中から出土した安山岩の敲石である。両端部に敲打痕があり、側面は手になじむようにわずかな凹みをつけている。埋土中出土のＦ２は穿孔具あるいは鏃の茎部と推測する鉄器である。軸部の断面が方形で、端部の一方は尖り、もう一方は鑿で切断したようなつぶれかたをしている。

（新）の時期は出土遺物からＶ－３様式、弥生時代後期後葉ごろと考える。（旧）から（新）への建て替えは間をおかずに行われたと推測される。（家塚）

SI５・SI13・SI19（第14・15図、PL.４・32・48・49、第11・17・19表）

Ｄ５グリッドの標高63.5mの緩斜面に３軒の竪穴住居跡が重複して立地する。北側５ｍにSI２、南側５ｍにSI８が位置する。３軒の竪穴住居跡が重複していたが、土層断面の観察からSI５はSI19を切り、SI19はSI13を切ることが判明した。したがってSI13、SI19、SI５の順に新しくなる。

・SI５　床面の平面形は円形である。北西側が削平されているが、主柱穴の配置から長軸7.1m、短軸6.6mと推定され、面積は36.8㎡である。検出面から床面までの深さは38㎝で、壁面は80度の角度で外傾して立ち上がる

主柱穴はＰ１（50×42－45）㎝、Ｐ２（34×30－42）㎝、Ｐ３（60×34－50）㎝、Ｐ４（68×54－37）㎝、Ｐ５（32×30－55）㎝、Ｐ６（38×32－56）㎝の６基を検出した。これらは中央ピットを中心とする半径2.7mの円周上に配置されている。中央ピットの両側に配置されたＰ７（30×26－58）㎝、Ｐ８（38×34－50）㎝は補助柱穴と推定される。柱痕の直径は10～18㎝である。中央ピットＰ９（58×52－33）㎝は平面円形で、埋土の下層は炭化物の粒を含んでいた。北側の上端外周に幅50～60㎝、高さ４～５㎝の周堤が検出された。南側は撹乱が入っている。

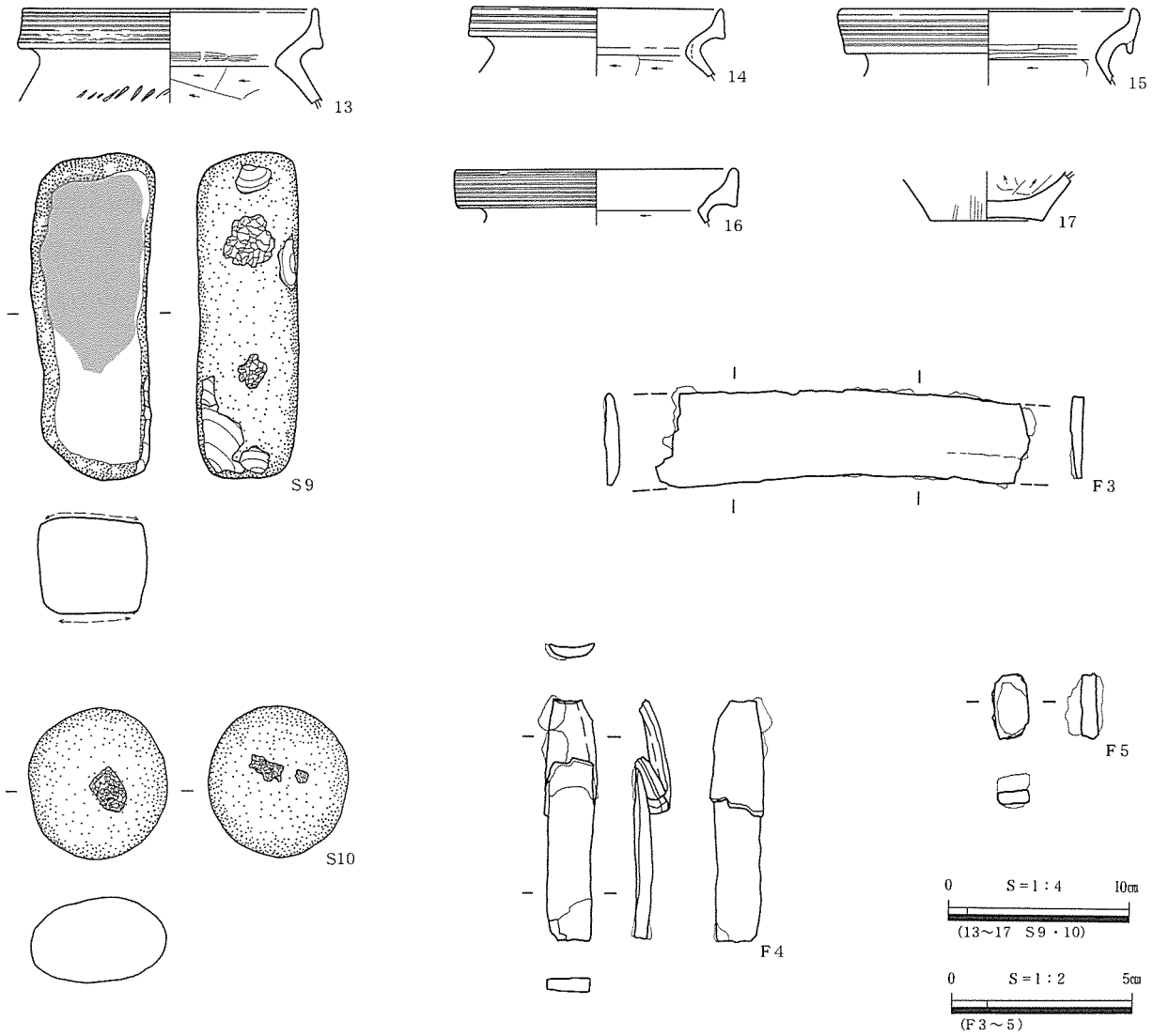
壁溝の断面はＶ字形を呈し、幅14㎝、深さ３㎝である。床面は地山を削りだして整地しており、貼床は施されない。焼土面は３箇所で検出された。いずれも床面の中心から１ｍ離れた位置にある。埋土は４層に分かれるが、自然流入による堆積と考えられる。

Ｐ８の周辺から、安山岩の亜円礫と亜角礫が５点集中して出土した。柱の根元に固めて置いていたものがそのまま埋没したと推測する。Ｓ９は敲石と磨石の兼用品で、磨面に赤色顔料が付着していたが、そのほかの礫には使用痕が認められなかった。S10は中央ピットの南側で出土した敲石である。Ｆ３は図の左側を上にして、南東側の壁面に張り付くようにして出土した。僅かに褶曲する形状から鎌と考える。Ｆ５は板状鉄片で層位不明の埋土中から出土した。甕14は床面直上で出土した。甕13、15と鉈F４は層位確認のためのサブトレンチの掘り下げ中に出土し、一括して取り上げられている。最も新しい様相を呈する土器はSI５に属するものと考えられる。

時期は出土遺物からＶ－２様式、弥生時代後期中葉ごろのものと考える。

・SI19　先行するSI13の内側に重複している。床面の標高はSI13よりも15㎝深い。残存する壁溝の廻り方から、床面の平面形は直径5.4mの隅丸五角形と推定される。検出面から床面までの深さは26㎝である。

主柱穴はP10（38×32－35）㎝、P11（32×30－39）㎝、P12（52×45－46）㎝、P13（45×



第15図　SI5・13・19出土遺物

35－52）cm、P14（35×33－48）cmの５基を検出した。P14－P10軸の北側60cmの位置に平行して並ぶP15（32×28－40）cm、P16（33×29－41）cmの2基は、その配置から建物の入り口を構成する補助柱穴と推定される。中央ピットP17（41×34－30）cmは平面円形で、北側と南側に（85×25－２～５)cmの周堤を配する。床面は地山の削り出しで整形されている。焼土面を2箇所で検出した。

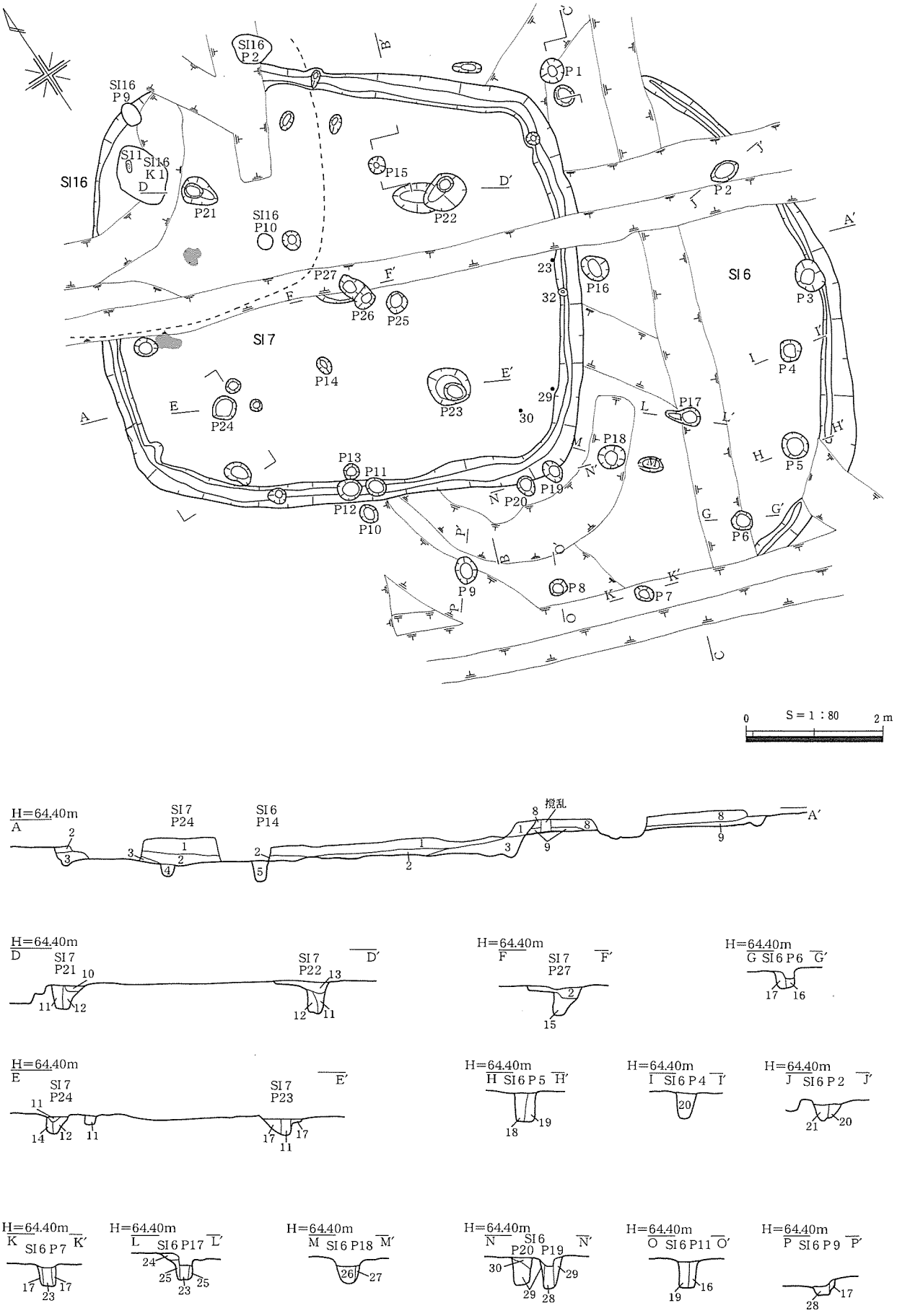
16は埋土中から出土した甕の口縁部である。端部外面は直立し、平行沈線が施されている。

時期は出土遺物から、Ｖ－２様式、弥生時代後期中葉ごろのものと考える。

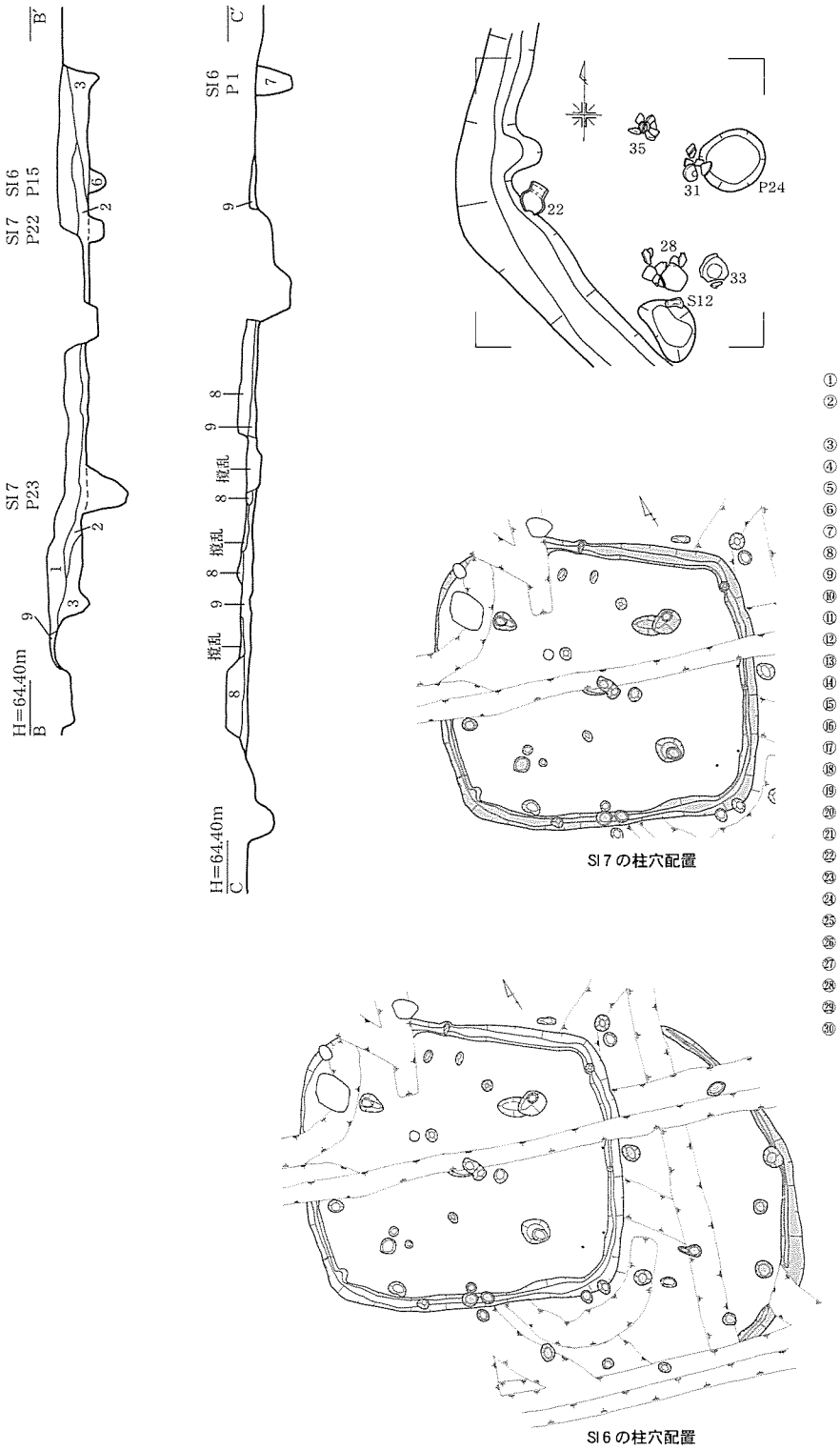
・SI13　残存する壁溝の廻り方と、主柱穴の配置から、床面の平面形は直径７ｍの円形と推定され、床面積は38.5㎡である。検出面から床面までの深さは16cmで、壁面は80度の角度で外傾して立ち上がる。

主柱穴はP18（39×37－35）cm、P19（55×47－40）cm、P20（35×25－37）cm、P21（35×20－46）cm、P22（30×28－50）cm、P23（38×30－60）cm、P24（54×34－55）cmの７基を検出した。本来はP24－P18間の撹乱範囲にもう１基あって、８本柱で建てられていたと推測する。P25（50×40－48）cmは補助柱穴と考えられる。中央ピットは検出していない。

壁溝の断面は緩いＶ字型で、幅18cm、深さ６cmである。撹乱によって破壊されているため、全体の４分の１を残すのみである。床面は全体の５％程度しか残存せず、その範囲内で貼床、焼土面は検


SI16
SI7
SI6
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
P11
P12
P13
P14
P15
P16
P17
P18
P19
P20
P21
P22
P23
P24
P25
P26
P27
SI16 P2
SI16 P9
SI16 P10
SI11
SI16 K1
S＝1：80
0
2 m
H=64.40m
A
SI7 P24
SI6 P14
撹乱
A′
D
SI7 P21
SI7 P22
D′
F
SI7 P27
F′
G SI6 P6
G′
E
SI7 P24
SI7 P23
E′
H SI6 P5
H′
I SI6 P4
I′
J SI6 P2
J′
K SI6 P7
K′
L SI6 P17
L′
M SI6 P18
M′
N SI6 P20 P19
N′
O SI6 P11
O′
P SI6 P9
P′

第16図　SI6・7（1）



① 暗灰褐色土（砂礫混。土器片を多く包含する）
② 黒灰褐色土（砂礫をやや多く含む。土器片を多く包含する）
③ 黄灰褐色土（黄色土ブロック混。砂礫少量混）
④ 灰褐色土（黄色土ブロックを含む）
⑤ 暗灰褐色土（黄色土ブロックを含む）
⑥ 黄褐色粘質土
⑦ 黄褐色土
⑧ 黄褐色土（炭化物、黄色土粒少々混）
⑨ 灰褐色土
⑩ 暗灰褐色土
⑪ 暗黄褐色土
⑫ 黄褐色土ブロック
⑬ 灰褐色土
⑭ 暗黄褐色土（黄褐色土ブロックを含む）
⑮ 灰褐粘質土（黄褐色土を多く含む）
⑯ 黄褐色土（しまりが悪い）
⑰ 黄褐色土ブロック
⑱ 暗黄褐色土（固くしまる）
⑲ 黄褐色土（固くしまる
⑳ 黄色土ブロック（固くしまる）
㉑ 淡灰褐色土
㉒ 黄褐色土
㉓ 灰褐色土
㉔ 暗灰褐色土（炭片を含む）
㉕ 暗黄褐色土
㉖ 暗灰褐色土
㉗ 暗黄褐色土
㉘ 暗黄褐色土（炭片を含む）
㉙ 黄色土ブロック
㉚ 淡灰褐色土（炭片を含む）

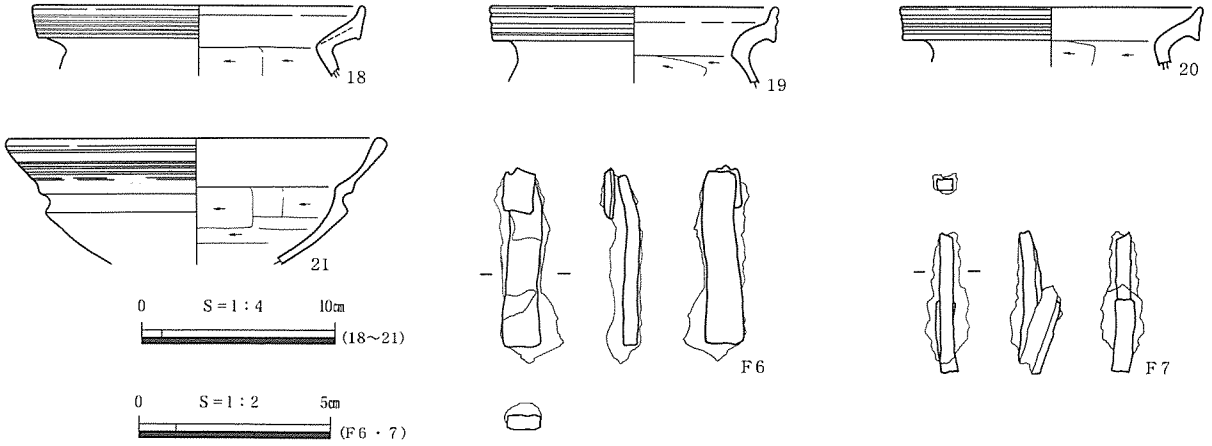
第17図　SI６・７（２）

出していない。埋土はわずかであったが、地山土に類似し、固くしまっていたことから、埋め戻された可能性がある。埋土中から甕17が出土した。

時期は、SI19に先行することと、一括取り上げをした甕13の時期からＶ－１様式、弥生時代後期前葉ごろのものと考える。（家塚）

SI６（第16～18図、PL.５・32・49、第11・19表）

E5グリッドの南東側、標高64m の平坦面に立地する。西側５m に SI８、北側５mに SI19、SI５が、



第18図　SI６出土遺物

北東側３ｍにSI15が位置する。北西側がSI７に切られる。床面の平面形は楕円形である。主柱穴の配置から長軸8.2m、短軸７ｍと推定され、面積は45㎡である。検出面から床面までの深さは36cmである。

主柱穴は規模と配置から壁沿いのＰ１（36×36－46）cm、Ｐ２（44×28－49）cm、Ｐ３（50×39－41）cm、Ｐ５（40×37－48）cm、Ｐ７（30×22－52）cm、Ｐ９（40×32－40）cm、P12（36×31－69）cm、P14（28×19－65）cm、P15（26×26－未計測）cmの９基と推定される。Ｐ４（32×30－34）cm、Ｐ６（31×28－30）cm、Ｐ７（26×24－52）cm、P10（28×24－38）cm、P11（26×22－62）cm、P13（24×20－50）cmについては、主柱の建て替えが行われたことを示すものと考える。P16（42×34－52）cm、P17（50×26－41）cm、P18（38×34－45）cm、P19（34×24－49）cm、P20（30×24－48）cmは補助柱穴と推測される。柱痕の直径は10～16cm程度である。

壁溝の断面は緩いＶ字形で、幅18cm、深さ８cmである。床面は地山を削り出して整地しており、貼床は施されていない。焼土面は検出されなかった。埋土は上層と下層の２層に分けられるが、自然堆積によるものと考える。

出土した土器は破片のみである。甕18、19、高坏21は埋土上層から出土した。甕20は甕の口縁部で、P16の埋土中から出土した。Ｆ６とＦ７は埋土下層から出土した鉄製品である。Ｆ６は幅10㎜、厚さ４㎜の板状で、端部の1方が折れ曲がっている。形状から鉈の基部と推定する。Ｆ７は幅５㎜、厚さ３㎜の棒状鉄製品で、二つに折れ曲がっている。

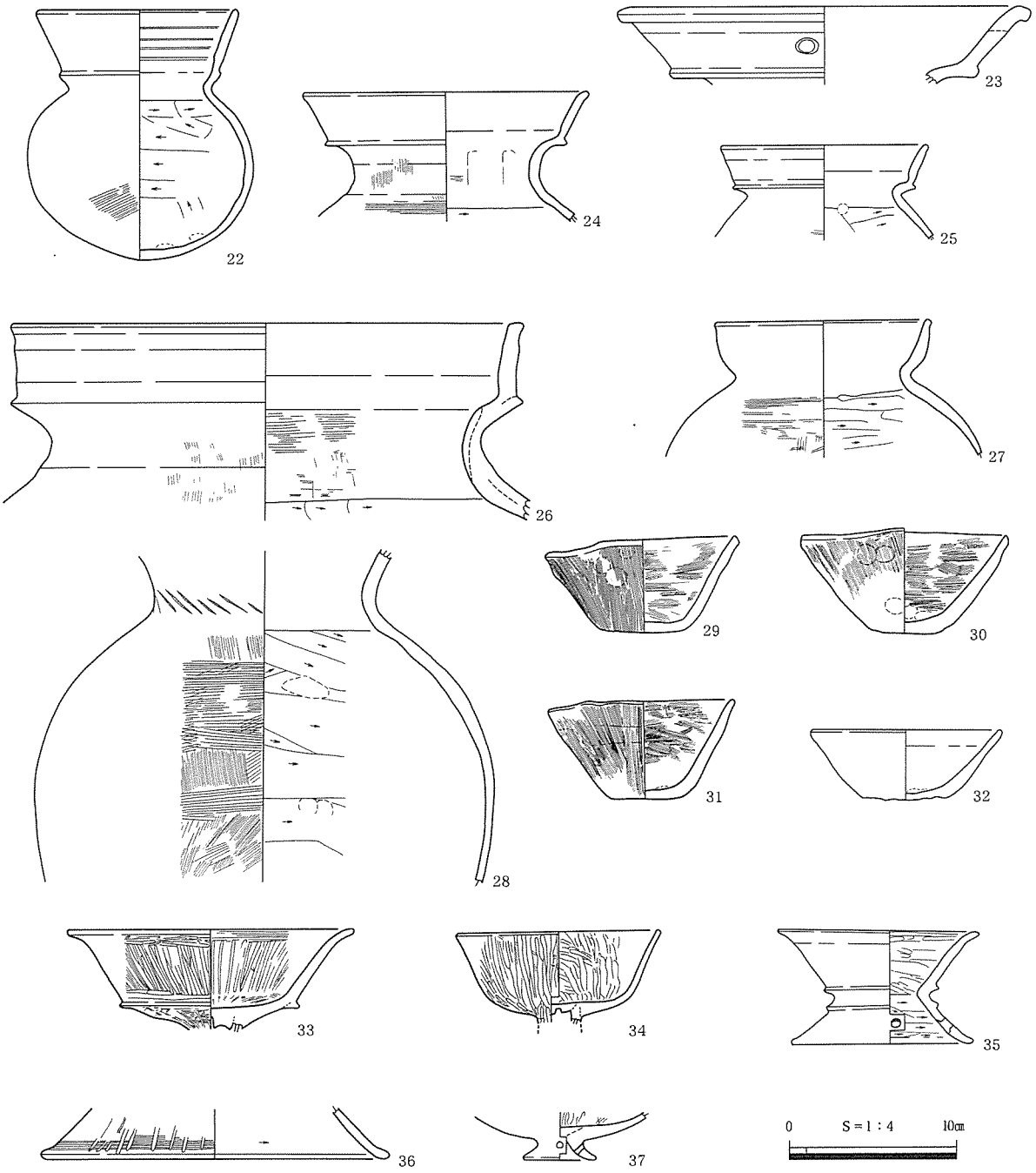
時期は出土した遺物から、Ｖ－２様式、弥生時代後期中葉ごろのものと考える。　（家塚）

SI７（第16・17・19・20図、PL.５・30・31・48、第11・12・17表）

Ｅ５グリッドの標高64mの平坦面に立地する。南西側10mにSI15、北東側30mにSI10が立地する。北側でSI16、南東側でSI6を切る。床面の平面形は隅丸方形で、地形が下る北西側の幅が、南東側よりも90cm広い。規模は長軸6.2m、短軸5.9mである。検出面から床面までの深さは30cmである。

主柱穴はP21（56×38－50）cm、P22（64×50－61）cm、P23（66×54－41）cm、P24（38×36－29）cmの４基を検出した。中央ピット南東側のP25（40×33－16）cm、P26（32×24－30）cmは補助柱穴と考える。P26は埋め戻されていた。中央ピットP27（80×40－55）cmは撹乱で破壊されていて、埋土の残りも悪い。上段の深さ約10cmの二段掘りである。

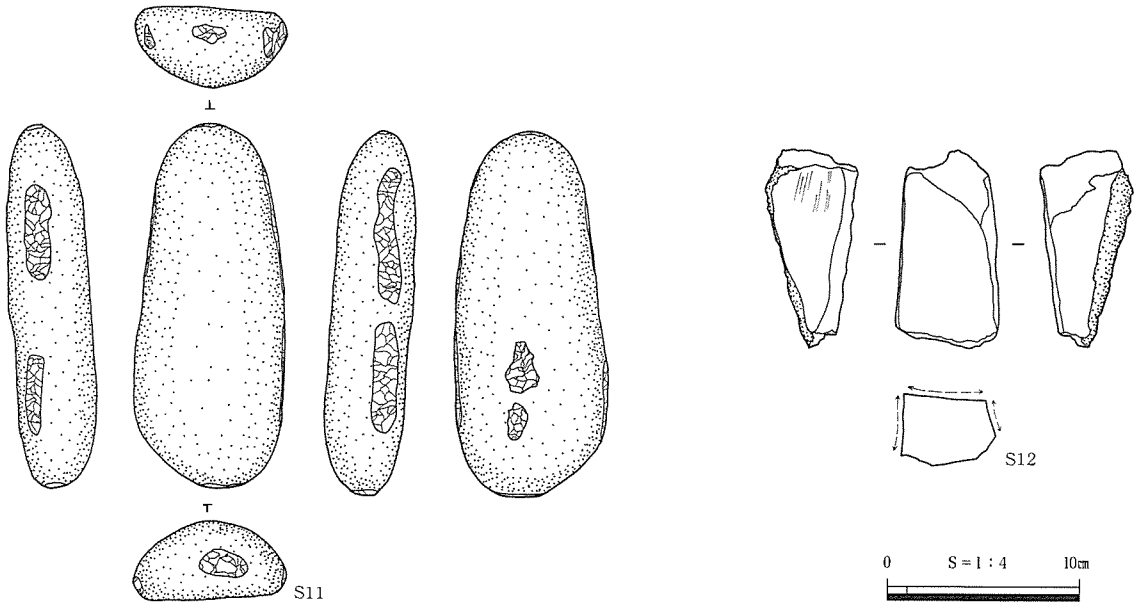
壁溝の断面は逆台形で、幅20cm、深さ10cmである。床面に貼床は施されておらず、主柱穴に囲まれた範囲は風化によるものなのか、凹凸が著しい。焼土面はP21とP24の間で２箇所検出した。



第19図　SI７出土遺物（１）

埋土は大きく上層（１層）と下層に分かれ、下層はさらに壁際周辺に堆積した層（３層）と、その後中央に堆積した層（２層）に分かれる。１～２層からは３層に比して多量の土器が出土した。このことから住居廃絶後の窪地が土器捨て場に利用され、埋土はその過程で徐々に堆積したものと考えることができる。

小型甕22、高坏33、鼓形器台35、壺28、椀31がP24の周囲の床面で出土した。35は脚部の４方向が穿孔されている。いずれも破損品である。壺23、椀29、30、32は３層中から出土した。23は口縁部の小片で、外面に竹管文が刻印されている。32は完形品で、壁溝の底面から３cm程度浮いた状態で正立していた。甕25、26、27、高坏34、低脚坏37、器台脚部36、壺24は２層からの出土である。37は脚部に１箇所穿孔されている。甕27と高坏34は布留系の土器である。北隅の床面で出土



第20図　SI７出土遺物（２）

した敲石S11は安山岩の亜円礫を用いている。両端に敲打痕があり、側面は手になじむように加工している。砥石S12は流紋岩の角礫を用いている。西隅の床面で22などの土器とともに出土した。

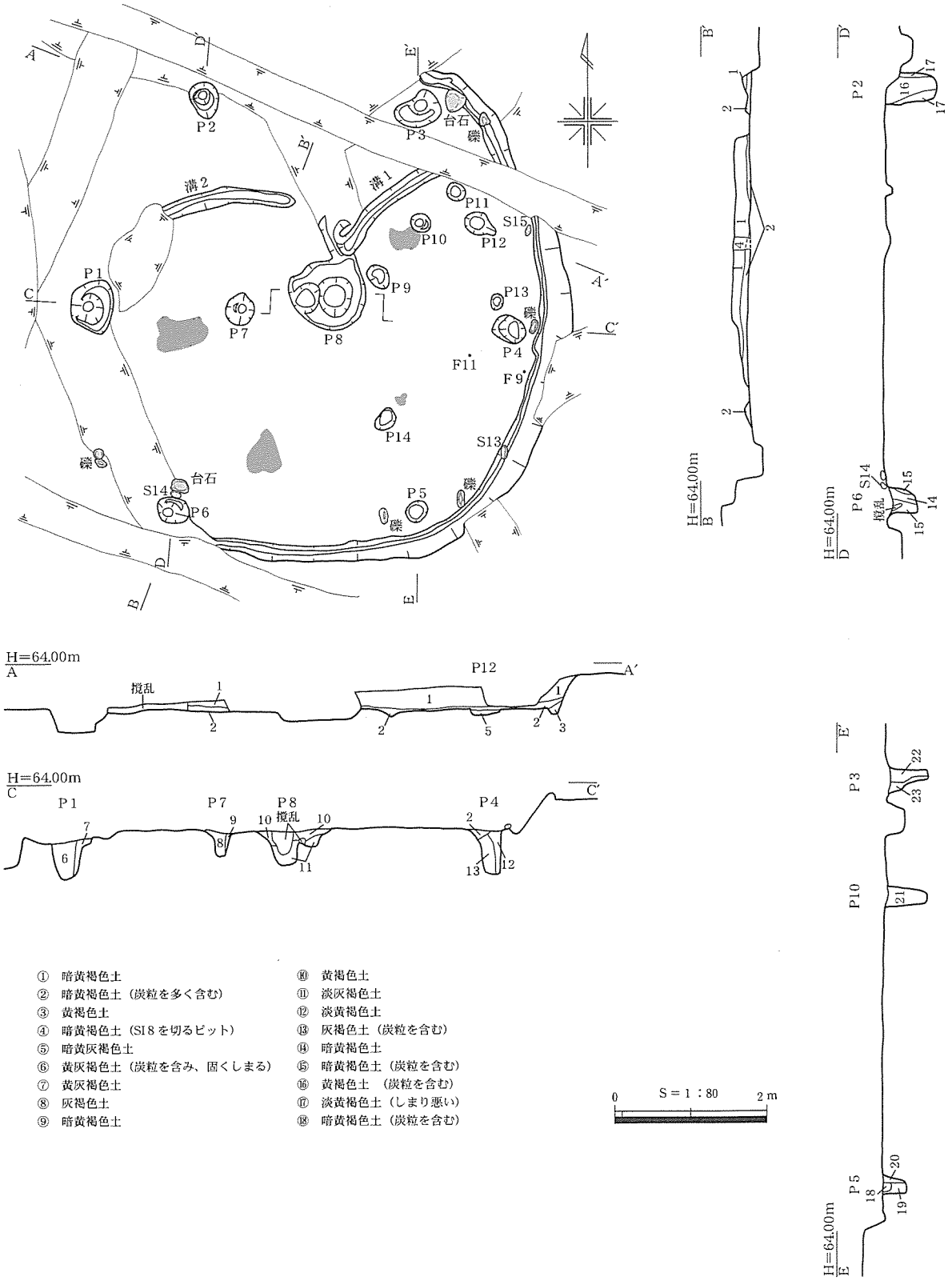
床面出土の28の頸部の施文は天神川Ⅱ期の特徴だが、22、33、35は小型化するⅢ期の特徴を示す。３層出土の23はⅢ期、２層出土の34はⅡ期の特徴を示す。時代は天神川Ⅲ期に移りながらも若干Ⅱ期の余韻が残る過渡期にあたり、古墳時代前期中葉ごろのものと考える。　（家塚）

SI８（第21・22図、PL.6・30・48・49、第12・17・19表）

Ｅ６グリッドの緩斜面の標高63.5mに立地する。東側５mにSI６、北東側10mにSI５が位置する。床面の平面形は、残存する壁溝と主柱穴の配列から長軸6.4m、短軸6.2mの胴張りの隅丸方形に復元される。検出面から床面までの深さは46cmである。

主柱穴は壁溝沿いに配置されているＰ１（72×54－74）cm、Ｐ２（48×38－77）cm、Ｐ３（60×44－62）cm、Ｐ４（44×34－64）cm、Ｐ５（30×26－34）cm、Ｐ６（42×34－59）cmの６基を検出した。柱痕の直径は15cm前後である。P1－P4線上のＰ７（42×38－43）cmは直径10cmの柱痕が残り、補助柱穴と推測する。Ｐ２－Ｐ５間のP14（30×20－29）cmも補助柱穴と推測されるが、他の柱穴とは異なり埋め戻されていた。中央ピットＰ８（104×88－53）cmは上段円形、下段円形の二段掘りである。下段のピットの西脇に底が27cm浅いピットが並ぶ。配置から浅いほうのピットが後から掘られたものと推測される。中央ピットの埋土は２層に分かれる。上層は床面の下層の埋土と同一であるが、下層は地山土のブロックを多く含むことから、中央ピットは住居の廃棄時に埋め戻されたものと推測される。

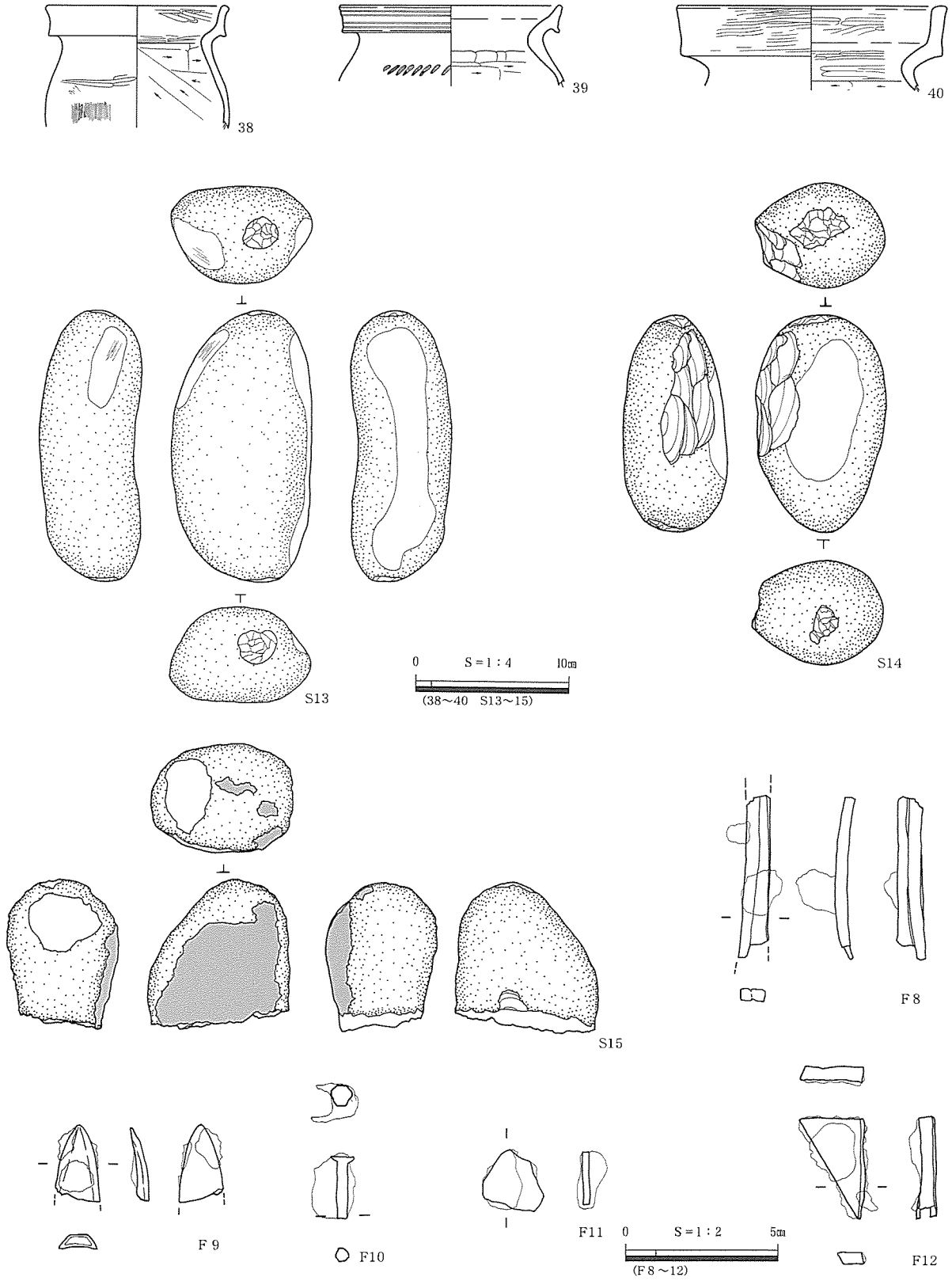
壁溝の断面形は幅15cm、深さ８cmの緩いＶ字形である。床面の整地は貼床を施さず、地山の削り出しのみで行われている。焼土面は中央ピットの周りで４箇所検出した。北側の床面上で溝１（200×18－６）cm、溝２（180×20－７）cmを検出した。溝１は中央ピットから北東に向かって弧を描いて伸びるが、壁溝までは至らず、溝底に傾斜の方向は認められない。溝２はＰ２とP8の間で東西方向に弧を描き、単独で終結する。溝底は東から西に向かって傾斜している。どちらも断面は緩いＶ字形で、埋土は床面埋土下層と同一である。建物の掘方は床面の外周を埋める３層、床面の中央を埋



第21図　SI８

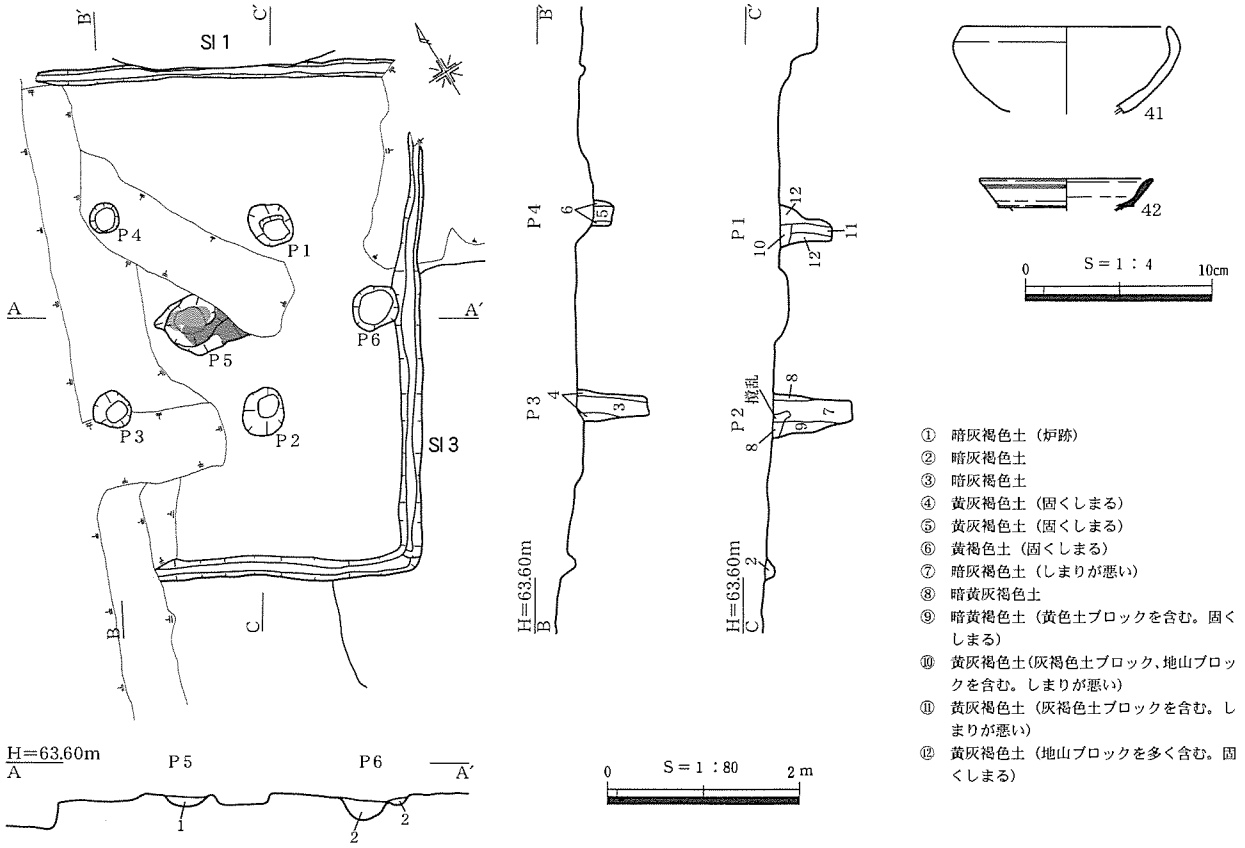
める２層、容積の大半を占める１層によって埋没している。３層は地山土に類似し、東側に偏る分布と検出状態から人為的な土の投棄が考えられるが、１、２層は自然堆積と考えられる。

主柱穴の周辺および、壁面沿いで多くの礫石器が出土した。Ｐ３の東側の床面上で安山岩の台石が出土した。磨石 S15はP12の東側の壁溝際から出土した。石材はデイサイトで、磨面に多量の赤色



第22図　SI８出土遺物

顔料および煤が付着している。Ｐ４－Ｐ５間の３層中で敲石と磨石を兼用するS13が出土した。安山岩の亜円礫を用い、表面には煤が付着している。Ｐ６の北側の床面上で台石と敲石S14が出土した。両方とも安山岩で、S14は磨石から敲石に転用している。そのほかにも使用痕が認められない安山岩あるいはデイサイトの亜円礫が５点、壁際の３層中から出土している。



第23図　SI９および出土遺物

土器の出土量は、撹乱が著しいせいもあり、非常に少ない。甕38、39は１層から、甕40は２層からの出土である。埋土中から５点の鉄製品が出土した。Ｆ９、F11は３層から出土した。Ｆ９は鉈の刃部で、表面に鎬が見える。F11は厚さ２㎜の鉄片である。Ｆ８、F10は層位不明の埋土中から出土したもので、Ｆ８は２本の角棒を接合したような形状をしている。F10は円形の頭部と軸部を持つ釘で、現代の釘に酷似することから、撹乱からの出土の可能性が考えられる。F12は撹乱から出土した厚さ４㎜の三角形の板で、破損した製品の断片と考えられる。

時期は出土遺物からＶ－２様式、弥生時代後期中葉ごろのものと考える。　（家塚）

SI９（第23図、PL.３・32、第12表）

Ｃ４グリッドの緩斜面の標高63ｍに立地する。近辺に同時期の遺構が存在しない。北側でSI１、南東側でSI３をそれぞれ切る。西側の３分の１は削平されている。床面の平面形は長軸５ｍ、短軸4.4ｍの方形に復元され、面積は22㎡である。検出面から床面までの深さは５㎝で、壁面はほとんど残存しない。

主柱穴はＰ１（52×43－58）㎝、Ｐ２（50×48－75）㎝、Ｐ３（40×36－79）㎝、Ｐ４（30×29－42）㎝の４基を検出した。柱痕の直径は10～23㎝である。床面中央の炉Ｐ５（70×65－12）㎝は大小２つの皿状の窪みが東西に連結し、それぞれが焼土面を持つ。東側の小さい炉は炭化物の間層を２層挟んで地山土で埋め戻されていた。西側の大きい炉は南西側を地山土で埋め戻し、規模を縮小（約0.6倍）している。南西側の壁溝際に位置するＰ６（48×46－26）㎝は壁溝と同じ埋土が堆積することから柱穴ではなく、いわゆる特殊ピットと考える。

壁溝の断面は逆台形で、幅16㎝、深さ６㎝である。床面はＰ５の部分的な埋め戻し以外には貼床

が施されず、地山の削り出しのみで整地している。床面の埋土はほとんど残存していなかった。

Ｐ６の埋土中から土師器椀41、須恵器甕42が出土した。41は口縁端部が内湾している。42は口縁部片で、頸部と口縁部の境界に鋭い凸帯がめぐる。

時期は出土遺物から天神川Ⅷ期、TK208～23、古墳時代後期後葉ごろのものと考える。　（家塚）

SI10（第24～28図、巻頭PL.１・２、PL.８・35・36・49、第12・17・19表）

Ｃ２、Ｃ３グリッドの標高64mの平坦面に位置する焼失住居である。南東側15mにSI12、南西側30mにSI７が位置する。床面は長軸5.6m、短軸5.5mの隅丸方形である。検出面から床面までの深さは48cmである。

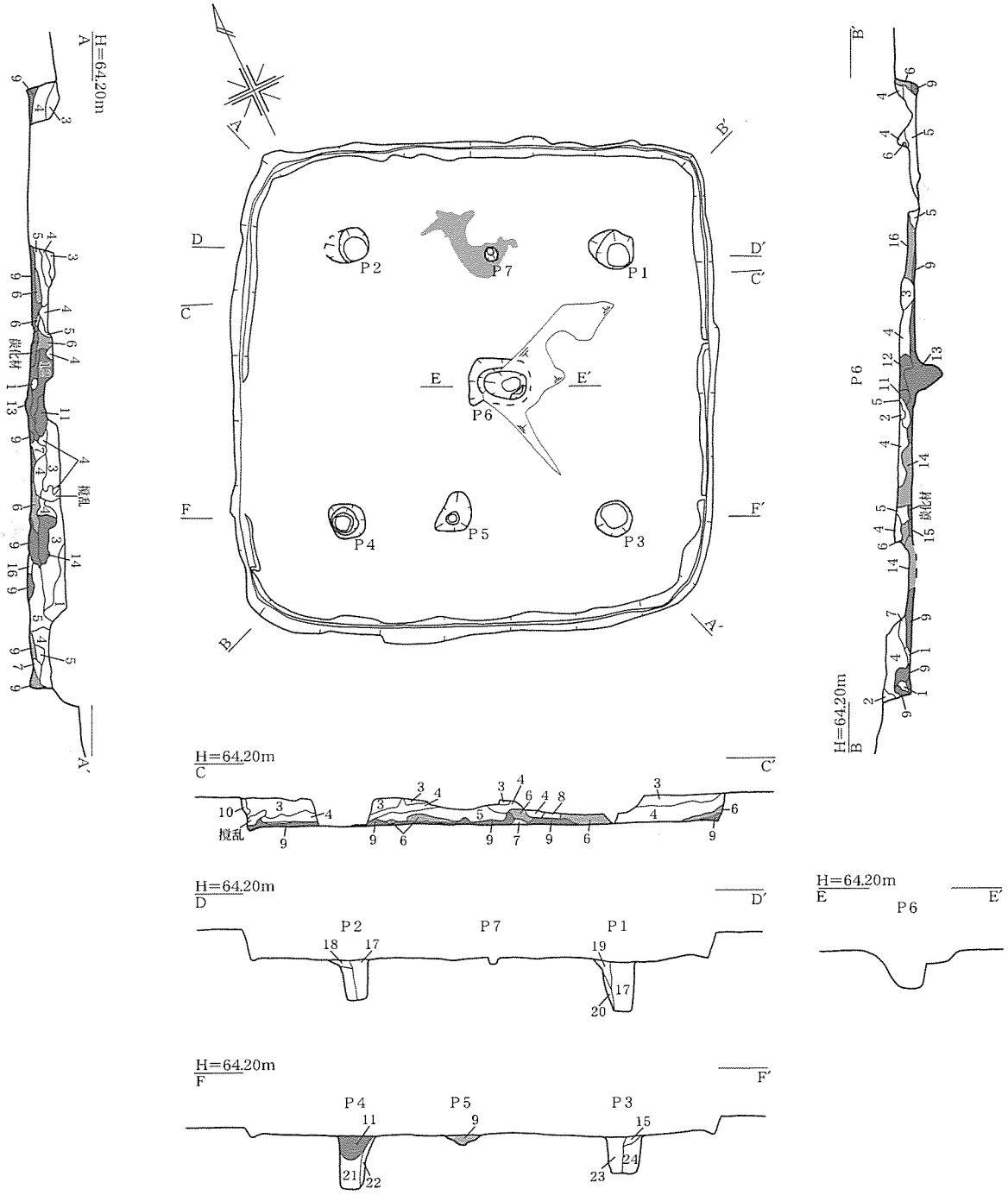
主柱穴はＰ１（58×44－73）cm、Ｐ２（54×40－56）cm、Ｐ３（42×42－58）cm、Ｐ４（50×44－70）cmの４基を検出した。いずれも柱痕が残り、その直径は20～30cmである。Ｐ７（18×15－13）cm、Ｐ５（46×38－15）cmは４基の主柱穴に比べて掘方の規模が小さいが、窪みの大きさがそのまま柱材の直径とすれば、Ｐ２、Ｐ３の柱痕の直径より一回り小さい程度である。主柱に渡された梁を支えるための補助柱穴と考える。中央ピットＰ６周辺は調査中に入れたサブトレンチの底面が床面よりも深くなっているが、平面は隅丸方形に復元され、残存する規模は（70×57－49）cm、上段の深さ約５cmの二段掘りである。

壁溝の断面はＶ字形で、幅16cm、深さ２～３cmと非常に浅く、床面が壁際で僅かに傾斜するという程度である。貼床は北西側の壁際付近で部分的に施され、床面と壁溝をあわせて整地したようである。焼土面はＰ７を中心に検出した。

掘方の埋土は複雑に重なり合っていたが、包含物の占める割合から、①黄色土ブロックを多く含む層、②焼土ブロックを多く含む層、③炭化物を多く含む層、の3種類に大別できる。断面図をみると床面上に③の土、その上に②の土、①の土が堆積していることが分かる。

炭化物は床面のほぼ全域で検出した。主柱穴に囲まれる範囲内は微細な炭片ばかりであるが、その外側の壁寄りの範囲は板材や縦割の丸太材のように、形の判明する大きな部材が出土している。焼土ブロックは主柱穴よりも内側で多く検出されるが、建物中心は希薄で、ドーナツ状の分布を示す。焼土ブロックが炭化材の直上から出土することから、カヤ葺きの上に土を被せた土葺き屋根の可能性を考えることができる。黄色土ブロックを含む①の層は全域にわたって検出されるが、②、③の層を被覆するものと捉えることができる。焼土ブロックや炭化材と混ざり合うものは屋根に葺かれた土であり、そういったものを含まず上層に堆積する土は、埋め戻しに使われたものと考えられる。

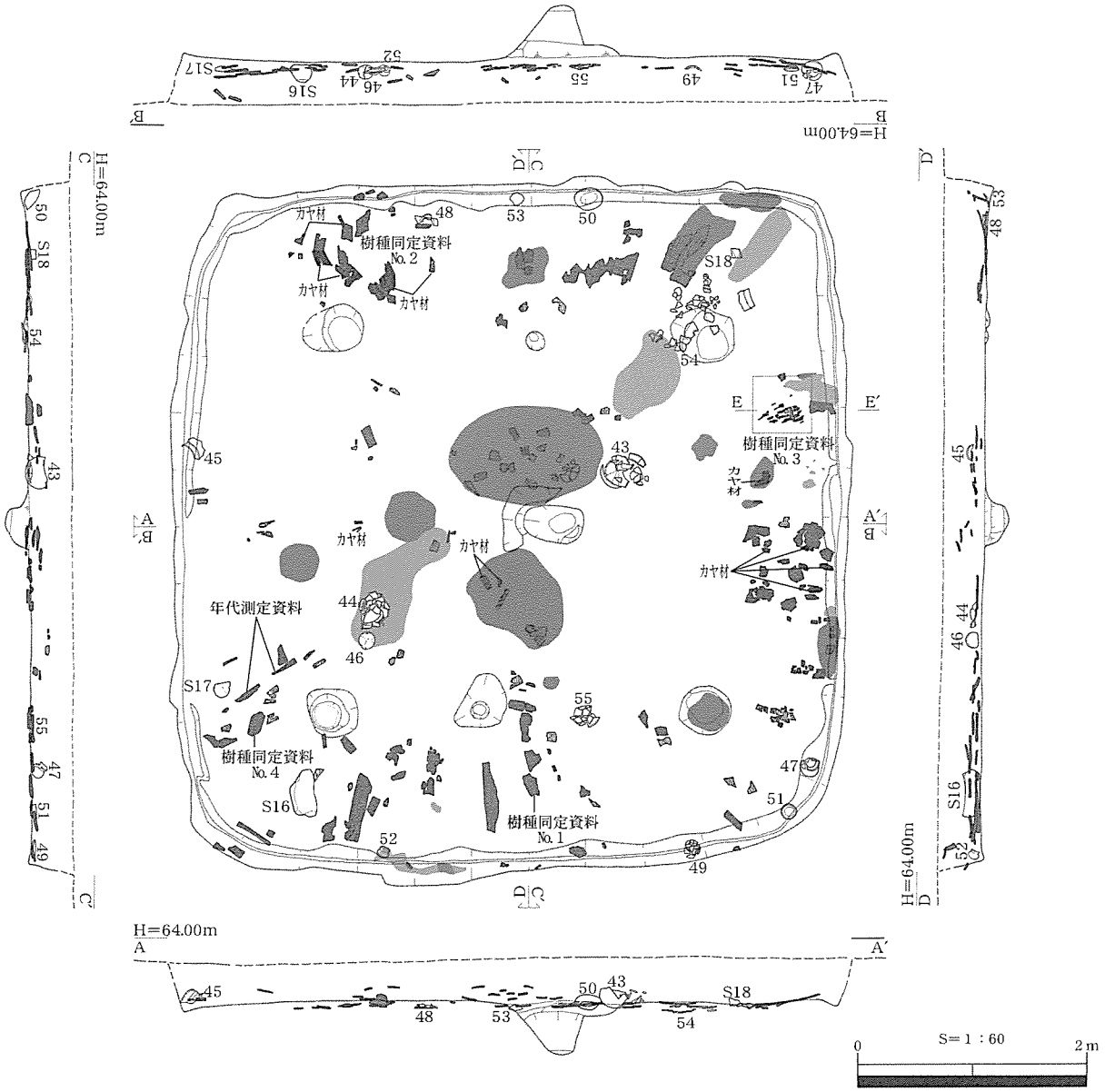
主柱穴より外側の床面上で、建物の中心に向かって放射状に並んで出土した炭化材は垂木と推定される。これらのうち４点の資料について分析を行ったところ、すべてクリ材という同定結果が出た（第５章参照）。そのほか直径５mm程度のストロー状の植物繊維の束が垂木の上に重なって出土した。束の向きは垂木とほぼ同じ、建物の中心を向いている。建物中心付近でも同じ材質のものが小片となって出土している。これらは屋根に葺かれていたカヤのようなもの（分析の結果、イネ科に同定されている）と考えられる。そのほか、Ｐ１の東側の壁際から約30cm離れた位置で、床面に約８cm堆積した焼土ブロック（６層）上面と黄色土ブロック・焼土ブロック・炭化材混じり土（４層）に挟まれた状態で、屋根葺き材と同じ素材（同定結果：イネ科）を網代編みにしたものが出土した。大きさは（35×45）cm程度で、５、６本の繊維を１幅にして編みこんでいる。出土状況から住居の壁面を保護するために被せていた壁材の一部分と推定される。炭化材と埋土の堆積状況から、竪穴住居の屋根は垂



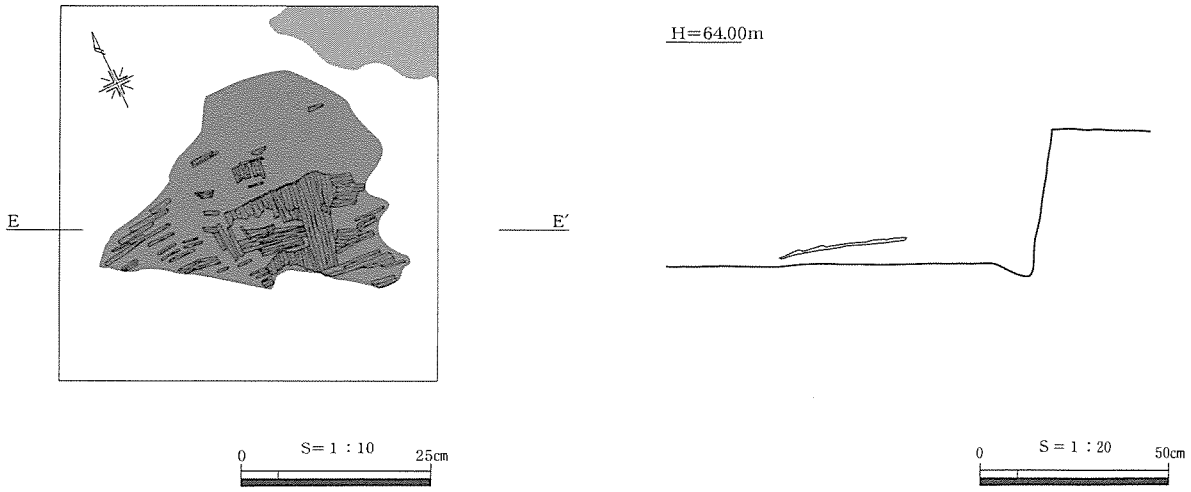
① 黄色土ブロック
② 灰褐色土（黄色土ブロック、炭化材を含む）
③ 明黄褐色土（黄色土ブロックを含む）
④ 黄灰褐色土（黄色土ブロック、焼土ブロック、炭化材を含む）
⑤ 黄褐色土（黄色土ブロックを含む）
⑥ 焼土ブロック（灰褐色土を含む）
⑦ 明黄褐色土
⑧ 灰褐色土（黄色土粒、炭化物粒を含む）
⑨ 暗黄灰褐色土（焼土ブロック、炭化材を含む）
⑩ 暗黄灰褐色土
⑪ 灰褐色土（黄色土ブロック、炭化材を含む）
⑫ 黄褐色土（黄色土ブロック、炭化材を含む）
⑬ 灰褐色土（黄色土ブロックを含み、炭化材を多く含む）
⑭ 灰褐色土（黄色土ブロック、焼土ブロック、炭化材を含む）
⑮ 黄白色粘土ブロック（焼土ブロック、炭化材を含む）
⑯ 黄灰褐色土（炭化物粒を含む）
⑰ 明黄褐色土（炭化物粒を含む）
⑱ 灰黄褐色土
⑲ 黄褐色土（炭化物粒を僅かに含み、固くしまる）
⑳ 黄褐色土（固くしまる）
㉑ 暗黄褐色土（炭化物粒を少量含む）
㉒ 暗赤褐色土（黄色土ブロック、炭化物粒を僅かに含む）
㉓ 暗黄褐色土（炭化物粒を多く含む）
㉔ 黄灰褐色土（炭化物粒を含む）

0　S＝1：80　2m

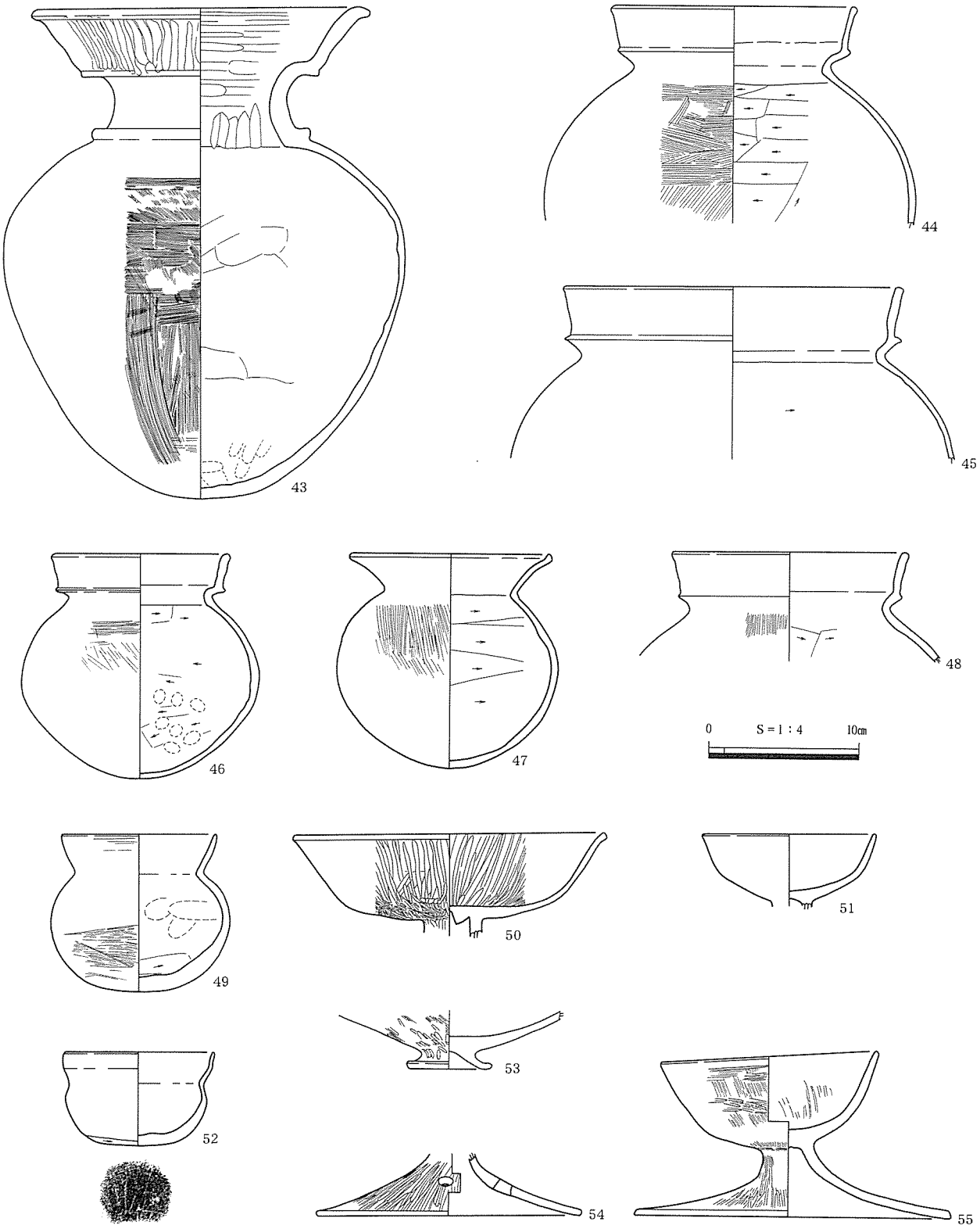
第24図　SI10



第25図　SI10遺物および炭化材出土状況

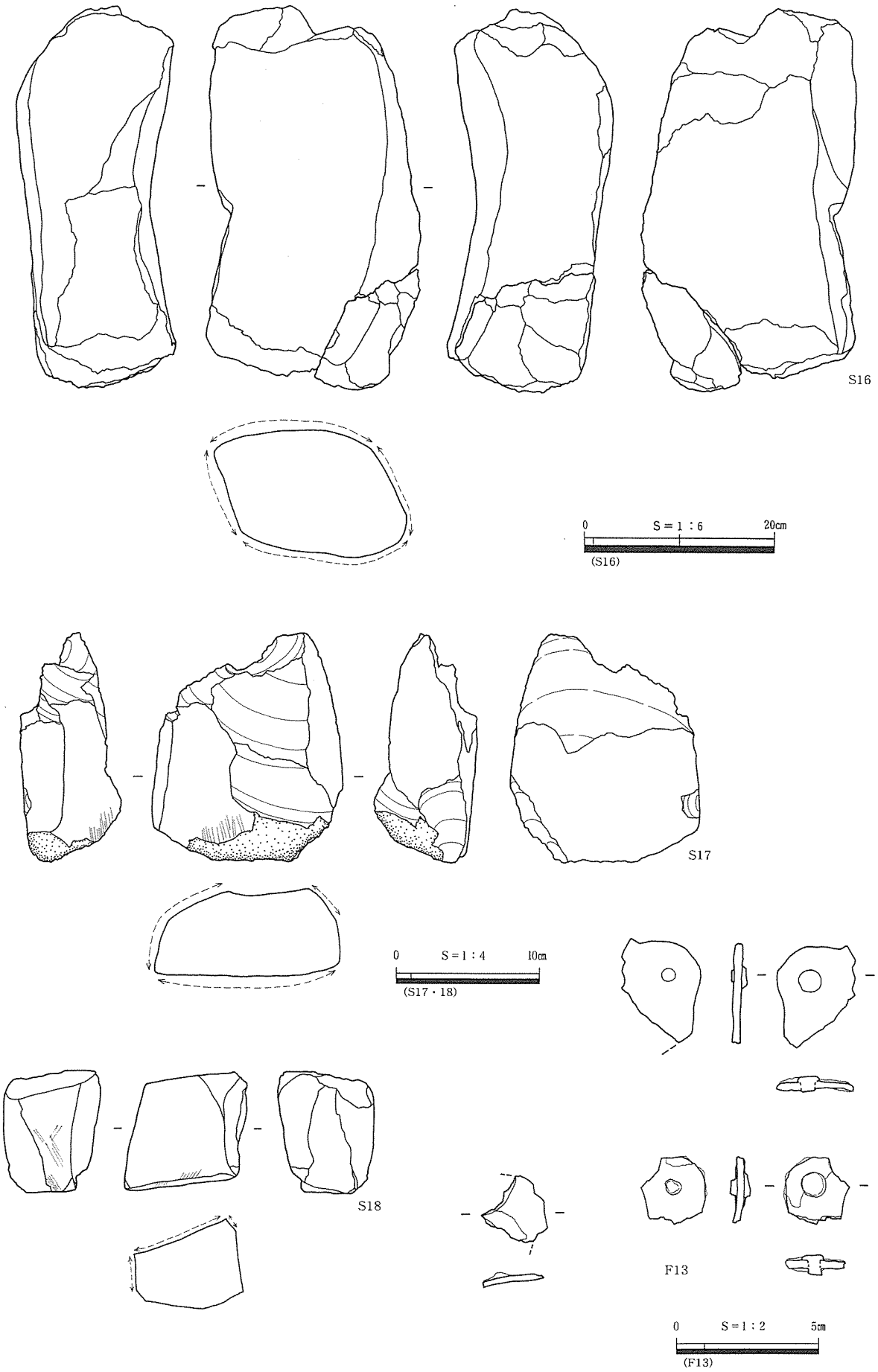


第26図　SI10編物出土状況



第27図　SI10出土遺物（１）

木の上にカヤを葺き、その上から土を被せていたと復元される。中央部から焼土ブロックが出土しないことから、天井部までは土が被せられなかったようである。火は内側から柱や垂木、カヤ材を燃焼させ、それらが徐々に崩落して床面に堆積する。さらに土屋根が焼けて、ブロックとなって崩落する。この過程が複雑に何度も繰り返されて住居は埋没していったと考えられる。建材が床面の中央で出土しないのは、天井が高い中央部分は火の回りが強く、完全燃焼したためで、一方壁際付近は生焼け状



第28図　SI10出土遺物（２）

態の建材の上に焼土ブロックが被さり、蒸し焼きになったと考えられる。同様に前述のカヤ状素材の編物も、焼土ブロックが崩落している最中に剥がれた壁材が挟まれて、蒸し焼きになって残ったものと推測される[註)]。

床面上で多くの土器が出土した。壺43は中央ピットの東側で、甕44と小型甕46はＰ４の北東側で横倒しになっていた。44は押しつぶされた状態で、破片は底部まである。小型甕47は布留系の土器であり、Ｐ３南東側の壁際で、口を上に向けた状態で出土した。小型丸底壺49と高坏51は南東隅の壁溝内から出土した。49は口を上に向け、押しつぶされた状態だった。51は脚部が無く、坏部は完形である。中央ピットの南側から出土した高坏55は、坏部を上に向け、押しつぶされた状態だった。高坏50は脚部がないが坏部は完形で、北東側の壁面に立てかけた状態で出土した。甕48、高坏54、低脚坏53は破損品で、押しつぶされていた。小型丸底鉢52は南西側の壁際、床面よりも若干浮いた状態で口を斜め下に向けて出土した。底部外面に木の葉の葉脈の圧痕が残る。甕45は破片であり、北西側の壁際、床面より若干浮いた状態で出土した。砥石S16はＰ４の南西側の床面上で出土した。石材は花崗岩質アプライトで、重さは19kgである。４面が使用されており、表面は火災時の被熱によって赤色化している。S16の北西側１ｍの地点から出土した砥石S17はS16を母材とするもので、S16との接合面が砥面に使われている。砥石S18は流紋岩で、東隅の床面上で出土した。F13は層位不明の埋土中から出土した鉄製品であり、板に鋲が打ち込まれた破片が２点含まれる。整理中に破損した同一個体のようであるが接合点はない。混入品の可能性がある。

時期は出土遺物から天神川Ⅲ期、古墳時代前期中葉ごろのものと考える。炭化材の放射性炭素年代測定を実施したところ、約1800年前という結果が出ている。(第5章第1節参照)　　(家塚)

註）浅川滋男氏のご教示による。

SI11・20（第29図、PL.10・33、第12表）

Ｃ１・Ｄ１グリッドの緩やかに東側に傾斜する標高63.5ｍに立地する。２棟の竪穴住居跡が重複しており、出土遺物からSI11がSI20に先行すると考えられる。両遺構の床面の比高差は約40cmを測る。

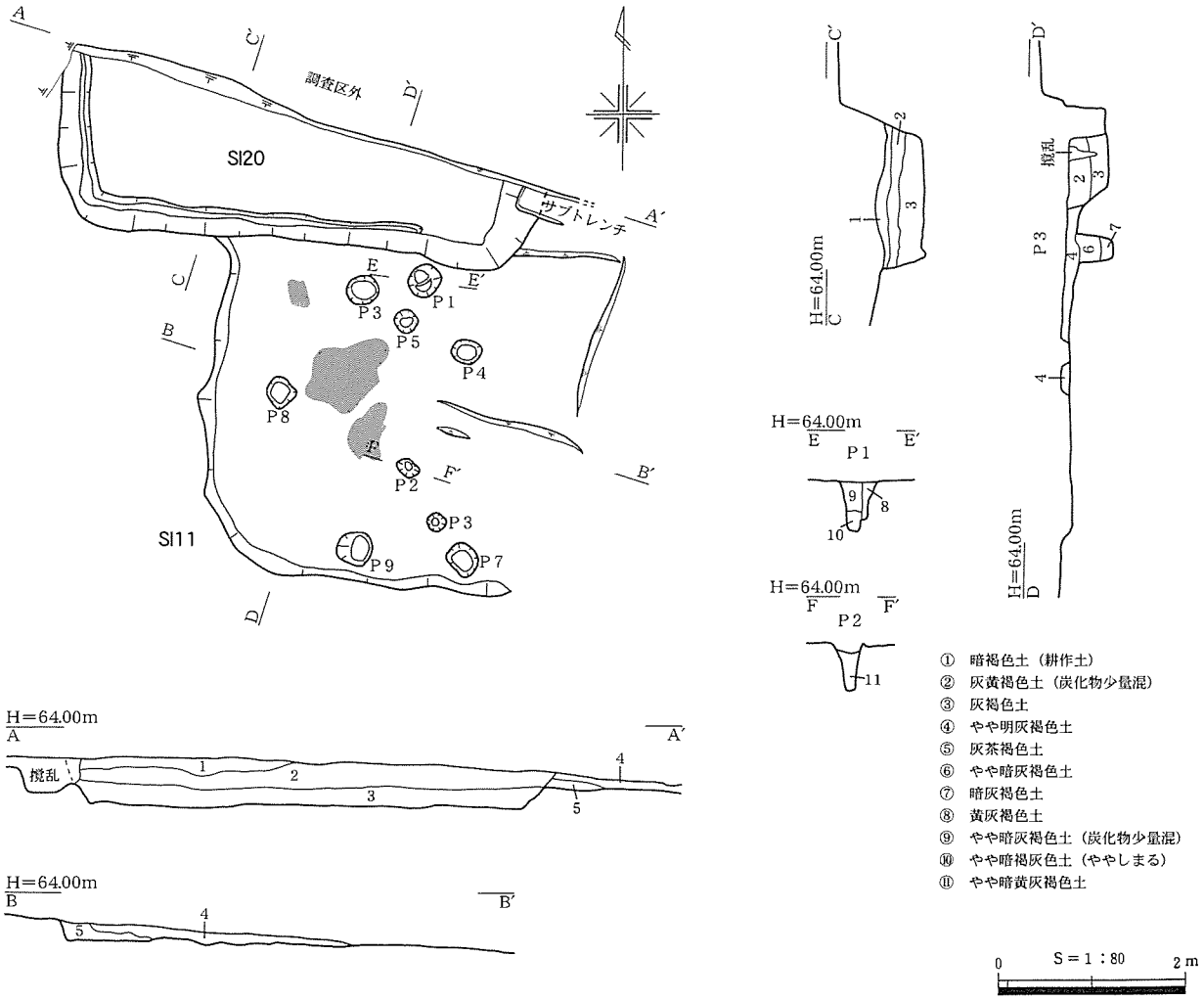
・SI11　床面の形態は長軸４ｍ、短軸3.6ｍの隅丸方形と推定される。検出面から床面までの深さは23cmである。床面の大部分が樹根によって撹乱されているため、遺存状態は良くない。また、東側部分は緩やかに東側谷部に向かって傾斜しているため、土が流出してしまった可能性が高く、東側の壁面は確認できなかった。

ピットは全部で９基検出された。そのうち主柱穴と推定されるのはＰ１（38×35－55）cm、Ｐ２（27×22－50）cmである。南北側の壁際に柱を立てていたと考えられる。床面で焼土が３箇所検出された。埋土は２層に分けられるが、流れ込みによる自然堆積と考えられる。

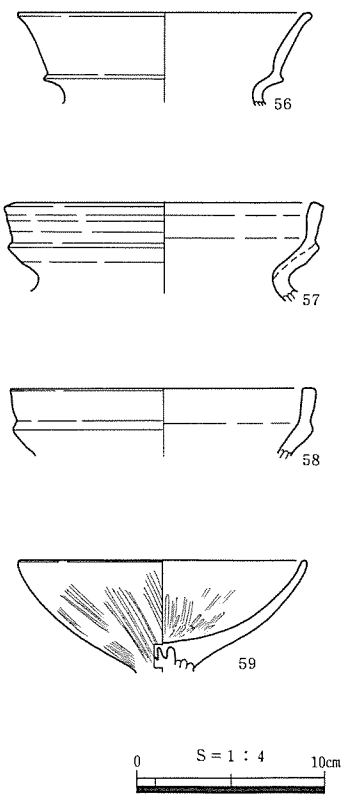
床面近くの埋土中から甕56が出土した。この遺物から、天神川Ⅱ期、古墳時代前期前葉ごろの遺構であると考えられる。

・SI20　遺構の北側半分以上が調査区外であるが、床面の形態は１辺4.4ｍの方形と推定される。検出面から床面までの深さは南側部分で最大67cmを測る。壁溝は西側と南側で検出した。断面はＶ字形で、最大幅23cm、深さ８cmを測る。調査範囲内では床面でピットを検出できなかった。遺構埋土は３層に分層できた。１層は耕作土であり、２、３層は流れ込みによる自然堆積である。

埋土中から甕57、58、高坏59が出土した。出土遺物から判断して天神川Ⅵ期、古墳時代中期中葉ごろの遺構であると考えられる。　　(小谷)



第29図　SI11・20および出土遺物



SI12・21（第30～32図、PL.９・33・34・48、写真１、第12・13・17・19表）

Ｄ１・Ｅ１グリッドの緩斜面の標高63.7ｍに立地する。両遺構の約２ｍ東側からは谷部への傾斜が急になる。SI12とSI21は床面がほぼ同レベルであるが、遺構埋土、出土遺物等から判断し、SI12が廃絶された後、SI21が建てられたと考えられる。これらは東区では比較的残りのよい遺構である。

・SI12　床面の平面形態は隅丸方形で、長軸6.2m、短軸6.06mの隅丸方形の建物である。検出面からの深さは南西部で最大77cmを測る。

ピットは全部で10基検出された。そのうち主柱穴と想定されるのはＰ１～Ｐ４で、４本柱建物であると考えられる。ピットの規模はＰ１（45×36－53）cm、Ｐ２（52×48－51）cm、Ｐ３（45×40－61）cm、Ｐ４（50×40－55）cmである。P1、3、4には幅25cm前後の柱痕あるいは抜き取り痕がみられる。また、それぞれの主柱穴間には補助柱穴Ｐ６（41×38－22）cm、Ｐ７（29×29－28）cm、Ｐ８（31×

26－12）cm、Ｐ９（23×23－18）cmが配置されている。中央ピットＰ５は二段掘りで、長円形の浅い掘り込み（134×105－８）cmのほぼ中央に、ピット（45×39－81）cmが深く掘り込まれている。ピット埋土の中～下層（24層）は炭化物・炭化物粒が多く混じる。

壁溝の断面は緩いＶ字形で、幅18cm、深さ６cmで全周している。SI21と重複する範囲の壁溝はSI21の建造に伴い貼床が施された。床面には部分的に貼床が施されていたが、正確な範囲を確認できなかった。焼土面は柱穴に囲まれた範囲内で６箇所に散在している。埋土は耕作土を除き３層（10層、11層、12層）に分層できた。遺構埋土の大半を占める10・11層は流れ込みによる自然堆積であると考えられ、多量の土器片を包含していた。床面を薄く被覆する12層は貼床土の可能性がある。

11層中から直口壺61、壺62、甕63、65、67、68、低脚杯70、鼓形器台71、72が出土した。12層中からは壺60、甕66、69が出土した。床面直上の12層中から甕64が出土した。他にもSI12の埋土全域から大量の土器片が不規則に出土し、器種も様々であるが完形品は出土しなかった。この遺構から出土した遺物の多くは本来この遺構に伴うものではなく、建物廃絶後に他所から持ってきて廃棄されたものであると推測される。南東部壁際にあるP10（81×64－13）cm埋土中から、ラグビーボール形で、縦２条、横３条の溝を施した有溝石錘S19が出土している。また、南東部埋土から袋状鉄斧F14、Ｐ２内から鉄製の穿孔具F15、その他にも埋土中から安山岩の敲石S20、21等が出土した。

時期は出土遺物から天神川Ⅲ期、古墳時代前期中葉ごろと考えられる。

・SI21　SI12の北側部分の掘方と埋土を切って作られている。平面形は長軸3.3m、短軸2.6mの方形で、検出面からの深さは西側で最大44cmを測る。

ピットは全部で６基検出された。そのうち主柱穴と想定されるのはＰ５（27×26－66）cm、Ｐ２（27×26－30）cmで、２本柱建物であったと考えられる。主柱穴間距離は1.38mを測る。また、中央付近に位置し、溝と重複するＰ４（35×20－13）cmは炭化物・焼土粒の混じりがある。

壁溝は北側でのみ検出したが、それとは別に中央付近のＰ４から幅12cm、深さ５cmの溝が約1.7m東方向に伸び、壁に到らず収束している。埋土は耕作土も含めて４層に分層できた。埋土状況から判断すると流れ込みによる自然堆積と考えられる。

埋土中から甕73が出土した。遺物から天神川Ⅵ期、古墳時代中期中葉ごろの時期と考えられる。（小谷）

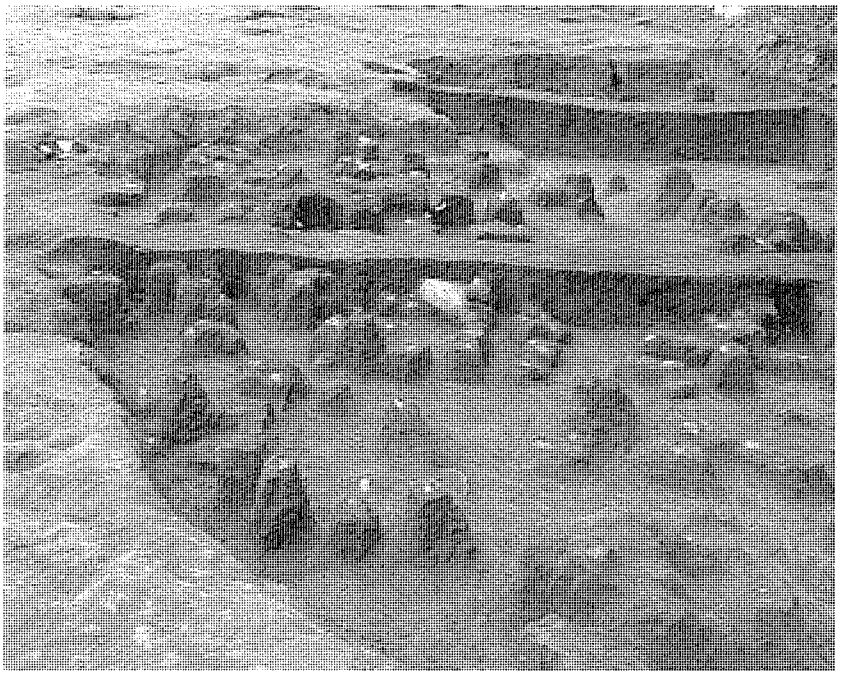
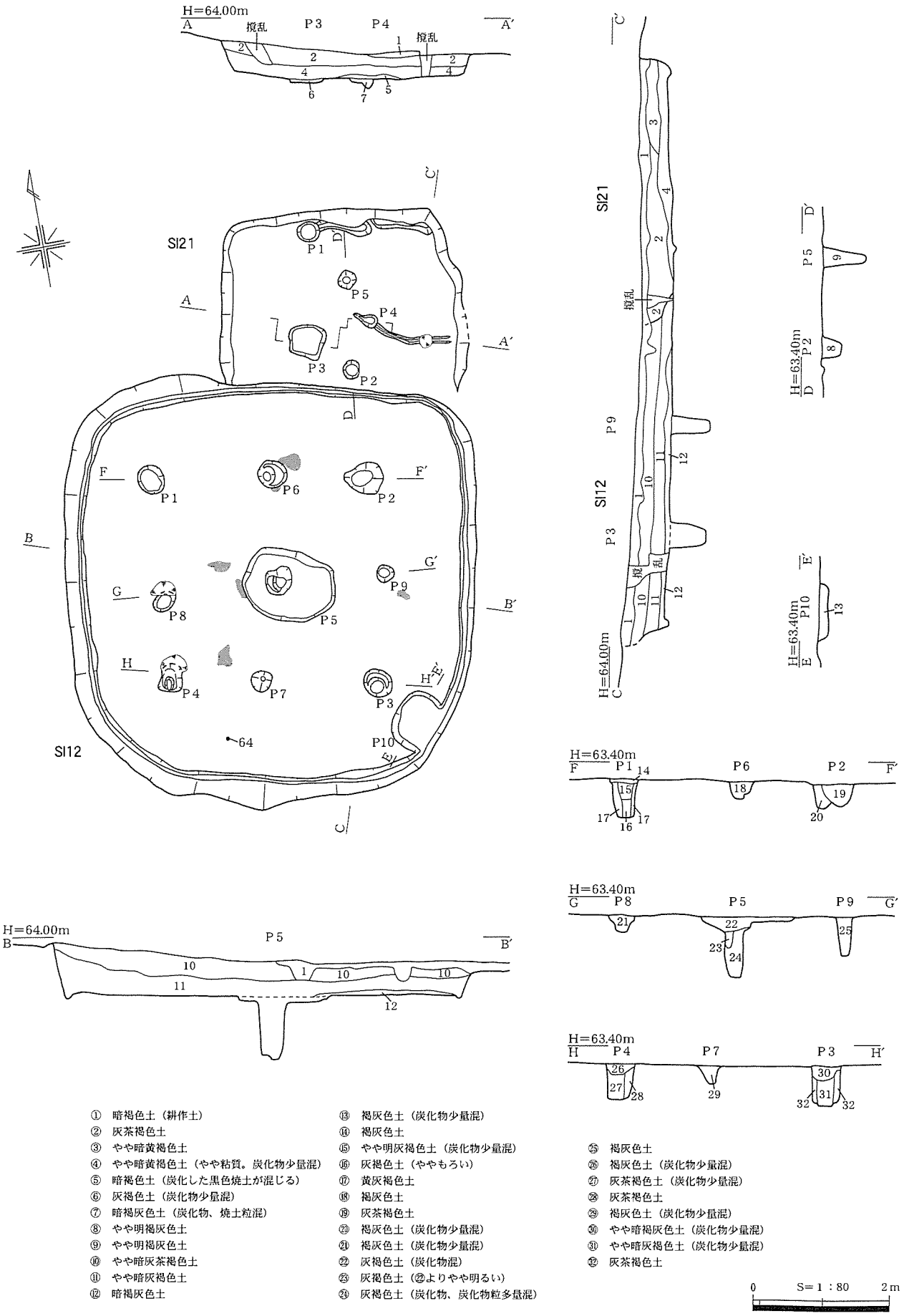


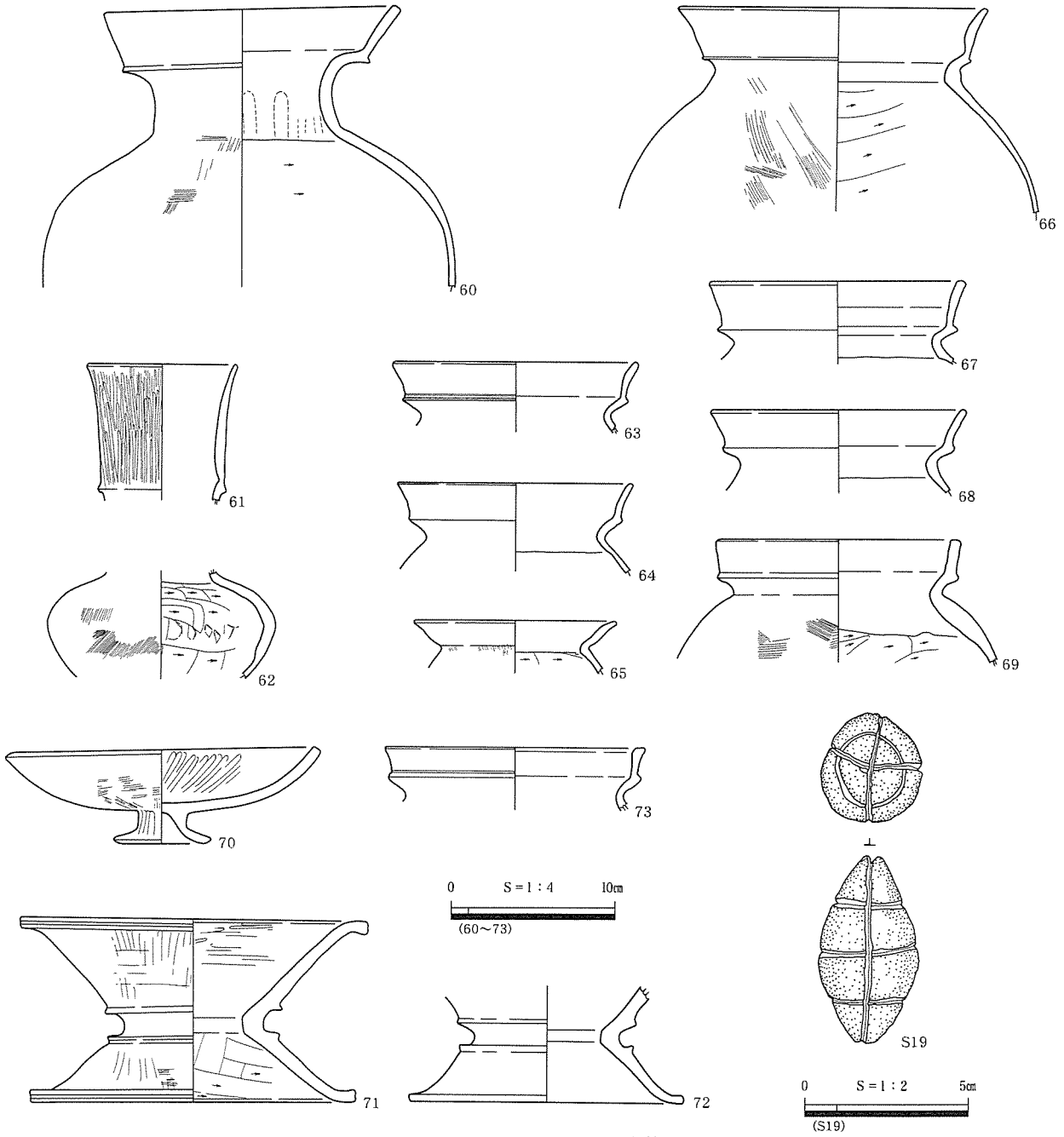
写真１　SI12遺物出土状況（南から）



① 暗褐色土（耕作土）
② 灰茶褐色土
③ やや暗黄褐色土
④ やや暗黄褐色土（やや粘質。炭化物少量混）
⑤ 暗褐色土（炭化した黒色焼土が混じる）
⑥ 灰褐色土（炭化物少量混）
⑦ 暗褐灰色土（炭化物、焼土粒混）
⑧ やや明褐灰色土
⑨ やや明褐灰色土
⑩ やや暗灰茶褐色土
⑪ やや暗灰褐色土
⑫ 暗褐灰色土
⑬ 褐灰色土（炭化物少量混）
⑭ 褐灰色土
⑮ やや明灰褐色土（炭化物少量混）
⑯ 灰褐色土（ややもろい）
⑰ 黄灰褐色土
⑱ 褐灰色土
⑲ 灰茶褐色土
⑳ 褐灰色土（炭化物少量混）
㉑ 褐灰色土（炭化物少量混）
㉒ 灰褐色土（炭化物混）
㉓ 灰褐色土（㉒よりやや明るい）
㉔ 灰褐色土（炭化物、炭化物粒多量混）
㉕ 褐灰色土
㉖ 褐灰色土（炭化物少量混）
㉗ 灰茶褐色土（炭化物少量混）
㉘ 灰茶褐色土
㉙ 褐灰色土（炭化物少量混）
㉚ やや暗褐灰色土（炭化物少量混）
㉛ やや暗灰褐色土（炭化物少量混）
㉜ 灰茶褐色土

0　S=1：80　2m

第30図　SI12・21

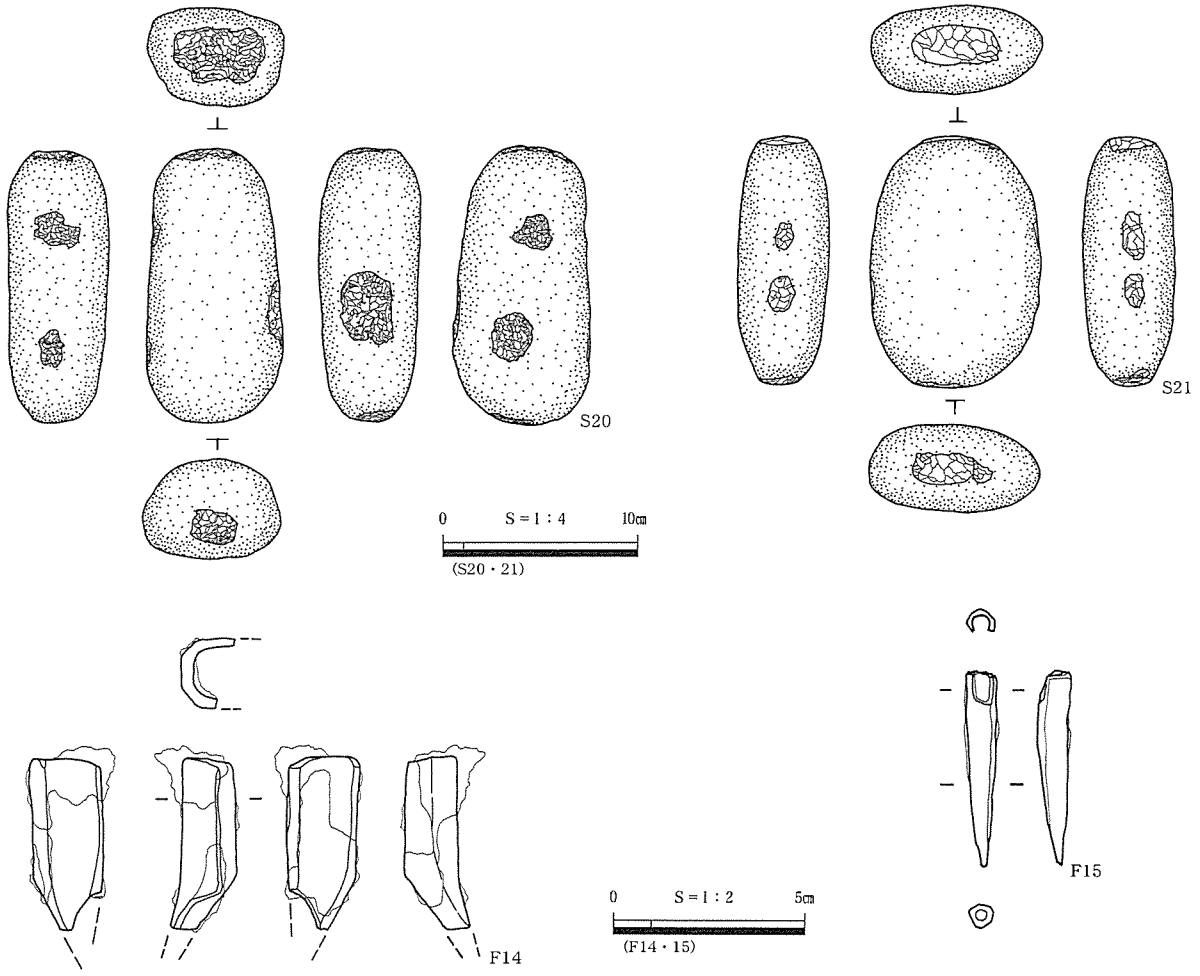


第31図　SI12・21出土遺物

SI15（第33・34図、PL.6・32・48、第13・17表）

Ｅ４グリッド、標高64.2mの平坦面に立地する。南西側３mにSI6、北西側10mにSI5が位置する。床面の形態は胴張りの隅丸方形である。規模は長軸4.4m、短軸４mに復元される。検出面から床面までの深さは６cmである。

主柱穴はＰ1（34×29－57）cm、Ｐ3（59×37－55）cm、Ｐ7（23×23－48）cm、Ｐ9（44×30－44）cmの４基を検出した。床面の四隅の、壁面から40cm内側に配置される。主柱穴間距離はＰ1－Ｐ3間が2.8m、Ｐ3－Ｐ9間が2.7m、Ｐ9－Ｐ7間が2.8m、Ｐ7－Ｐ1間が2.7mである。柱痕はＰ9に残り、直径は16cmである。Ｐ1は柱が抜き取られている。補助柱穴はＰ2（30×25－17）cm、Ｐ4（23×12－16）cm、Ｐ6（35×20－9）cm、Ｐ8（35×28－29）cmの４基を検出した。Ｐ1－Ｐ3間のＰ2と、Ｐ7－Ｐ9間のＰ8が対になり、中央ピットの両側に並ぶＰ4、Ｐ6が対になる。Ｐ2



第32図　SI12出土遺物

は焼土面を切っていることから同一場所での建て直し、あるいは補助柱の追加が行われたことが推測できる。中央ピットＰ５（47×38－27）cmは主柱穴の対角線の交点に位置する。埋土は不明である。

壁溝の断面は緩いＶ字形で、幅10cm、深さ５cmである。壁際を全周していたものと推測される。検出時から床面が露出し、掘方埋土はほとんど残っていなかった。床面は撹乱が著しい。貼床は施されていない。焼土面をＰ２の位置に２箇所検出した。

甕74は掘方埋土中から出土した。75は中央ピットの埋土中から出土した小型の甕である。内面は頸部までヘラケズリされ、体部外面に指頭圧痕がある。実用品かどうかは不明である。砥石S22はＰ３南東側の床面上から出土した。石材は流紋岩質凝灰岩であり、全面が砥面として使用されている。

時期は出土遺物から、Ｖ－２様式、弥生時代後期中葉ごろのものと考える。　（家塚）

SI16（第35図、PL.6・43、第13表）

Ｄ５～Ｅ５グリッド、標高63.8mの北西向きの緩斜面に立地する。南西側20mにSI27が位置する。南東側がSI７に切られ、北東端が同時期のSI13と重複する。SI７に切られていることと、撹乱によって床面の３分の２が破壊されている。残存する壁溝と主柱穴の配置から復元される床面の形態は、長軸4.2m、短軸4.2mの胴張りの隅丸方形となる。

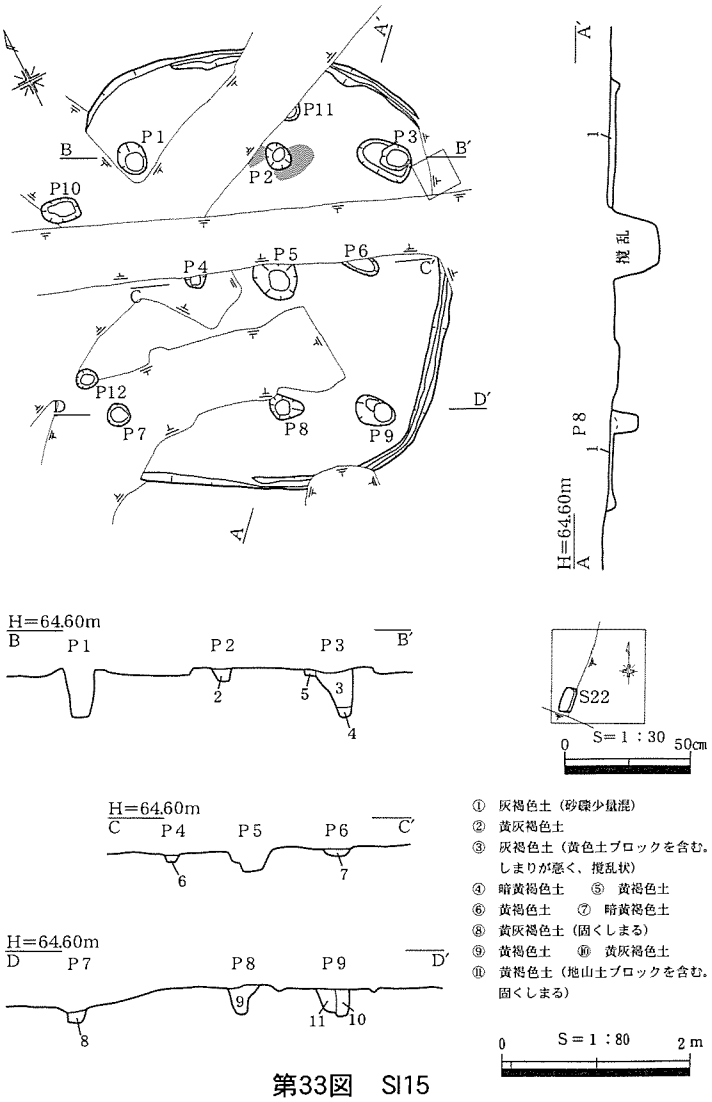
主柱穴はＰ２（62×40－72）cm、Ｐ４（28×24－56）cm、Ｐ６（32×28－68）cm、P10（22×20－46）cmの４基を検出した。それぞれ床面の四隅の、壁面から40cm内側に配置されたものと推測される。主柱穴間距離はＰ２－Ｐ６間が3.4m、Ｐ６－Ｐ４間が2.8m、Ｐ４－P10間が3.1m、P10－

Ｐ２間が2.8mである。柱痕はＰ７に残り、直径は20cmである。Ｋ１（88×68－49）cmはSI７の床面で検出した土坑である。規模は大きいが位置的にSI16の中央ピットに当たるものと考える。埋土４層から土器が出土した。

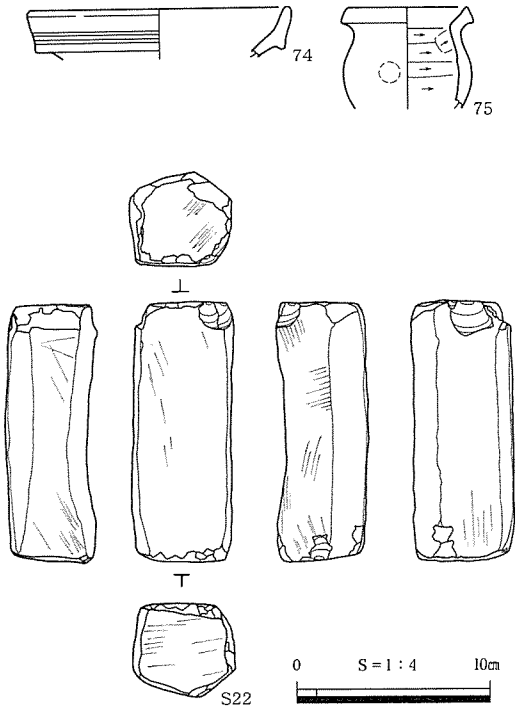
壁溝の断面は緩いＶ字形で、幅15cm、深さ４cmである。壁際を全周していたものと推測される。検出時から床面が露出し、掘方埋土は残っていなかった。床面は撹乱が著しい。断面図Ａ－Ａ′の１層は貼床土の可能性がある。焼土面をＰ４の北東側に１箇所検出した。Ｐ７はこの焼土面を切るため、SI16に伴わない柱穴である。

76は中央ピットＫ１から出土した小型の甕である。破片がまとまって出土し、上半が完全に復元された。口縁端部は僅かに上方につまみ出され、外面に２条の凹線が引かれる。内面は頸部まで削られる。外面に煤が付着している。

時期は出土遺物から、Ｖ－１様式、弥生時代後期前葉ごろのものと考える。（家塚）



第33図　SI15

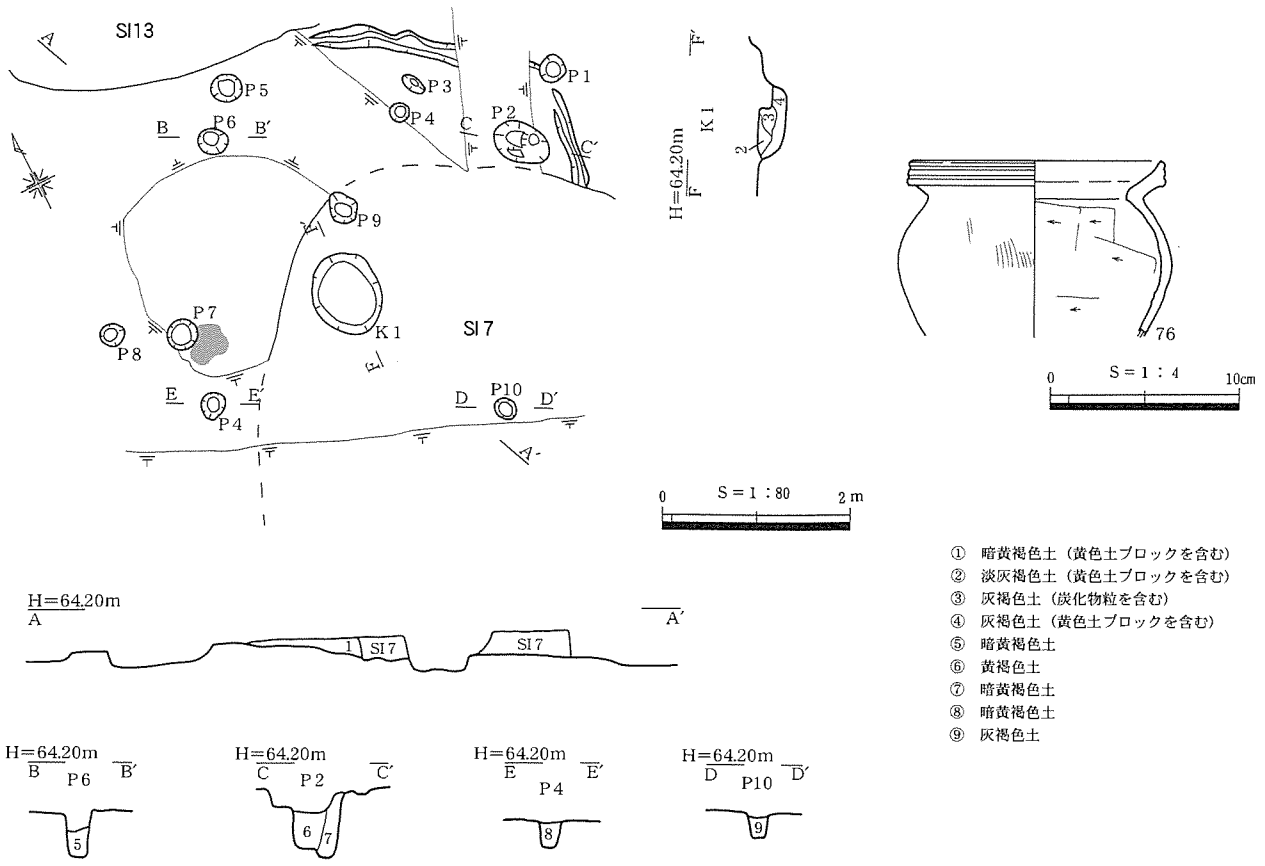


第34図　SI15出土遺物

SI17（第36図、PL.７・48、第17表）

Ｆ５グリッド北東隅の平坦面に立地する。南半は転地返しで破壊されている。北半も耕作の撹乱が著しい。北東側30mにSI３が位置する。床面の形態は残存する壁溝と柱穴の配置から、長軸4.6m、短軸4.4mの隅丸方形と推定する。検出面から床面までの深さは６cmである。

主柱穴はＰ１（38×36－65）cm、Ｐ３（38×32－58）cm、Ｐ６（48×35－48）cm、Ｐ７（35×34－63）cmの４基を検出した。壁面から60cm内側に配置される。主柱穴間距離はＰ１－Ｐ３間が3.1m、Ｐ３－Ｐ６間が3.1m、Ｐ６－Ｐ７間が3.1m、Ｐ７－Ｐ１間が2.9mである。柱痕はＰ３、Ｐ６、Ｐ７に残り、直径は20～24cmである。Ｐ１－Ｐ３間のＰ２（24×21－19）cm、Ｐ３－Ｐ６間のＰ４（25×



第35図　SI16および出土遺物

27－26）cmは規模と配置から補助柱穴と考える。南半の天地返しの範囲は床面よりも30cm以上掘り下げられているために、Ｐ６－Ｐ７間、Ｐ７－Ｐ１間に存在した補助柱穴は破壊されたと推測される。中央ピットＰ５（47×40－59）cmは主柱穴の対角線の交点より40cm東寄りに位置する。ピットの検出面は削平されているが、二段掘りで作られていることが確認できた。主柱穴と同じ程度の深さを持つが、埋土は単一層であり柱痕は確認できなかった。

壁溝の断面はＶ字形で、幅15cm、深さ４cmである。掘方埋土はわずかしか残っていなかった。残存する範囲の床面で、貼床と焼土面は検出されなかった。

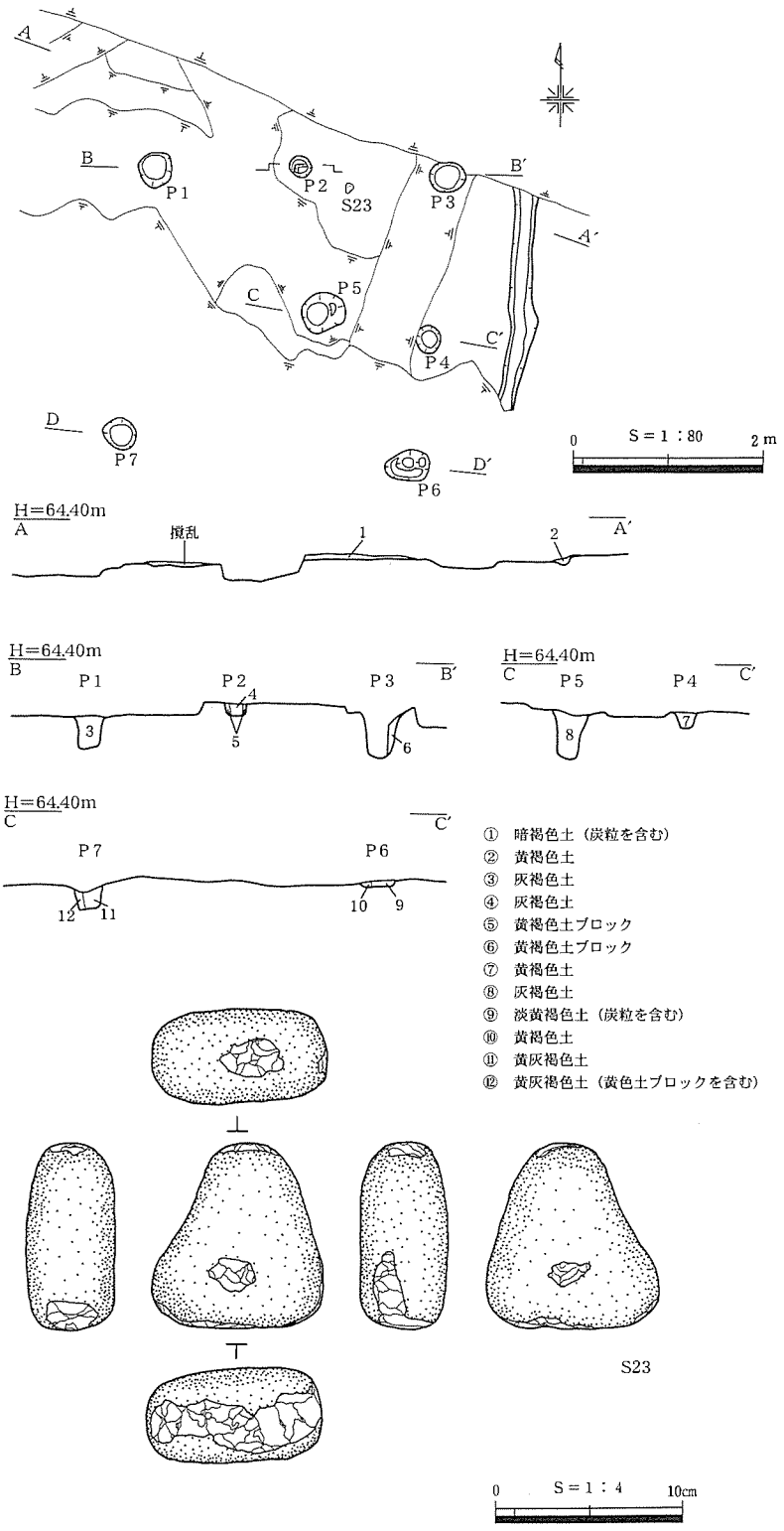
Ｐ２－Ｐ３間の床面付近で敲石 S23が出土した。おにぎり形の安山岩の亜円礫で、辺部とその反対側の頂点に敲打痕がある。

埋土中から図化できないほど小片の甕の口縁（取り上げ№693、図・写真なし）が出土した。それに基づき、Ｖ－３様式、弥生時代後期後葉ごろの住居跡と考える。（家塚）

SI18（第37図、PL.７・32、第13表）

Ｆ６グリッドの西向きの緩斜面に立地していたと推定される。天地返しのために本来の遺構検出面が完全に破壊されている。北東側５ｍに SI７、南側30ｍに SI43が位置する。床面の形態は胴張りの隅丸方形である。規模は長軸4.4m、短軸4.2mである。検出面から床面までの深さは６cmである。

主柱穴はＰ１（44×38－69）cm、Ｐ２（46×44－59）cm、Ｐ３（43×39－53）cm、Ｐ４（44×42－58）cmの４基を検出した。床面の四隅、壁面から60cm内側に配置される。主柱穴間距離はＰ１－Ｐ２間が2.7m、Ｐ２－Ｐ４間が2.2m、Ｐ４－Ｐ３間が2.3m、Ｐ３－Ｐ１間が2.4mである。柱痕は



第36図　SI17および出土遺物

Ｐ１～３に残り、直径は12～24㎝である。中央ピットＰ５（42×34－41）㎝は建物の中央よりもピット１基分南東側に位置する。埋土は不明である。

壁溝の断面はＶ字形で、幅16㎝、深さ６㎝である。壁際を全周していたものと推測される。掘方埋土は僅かしか残っていなかった。床面の撹乱が著しく、本来の面積の約４分の１が島状に残存する。貼床は施されていない。

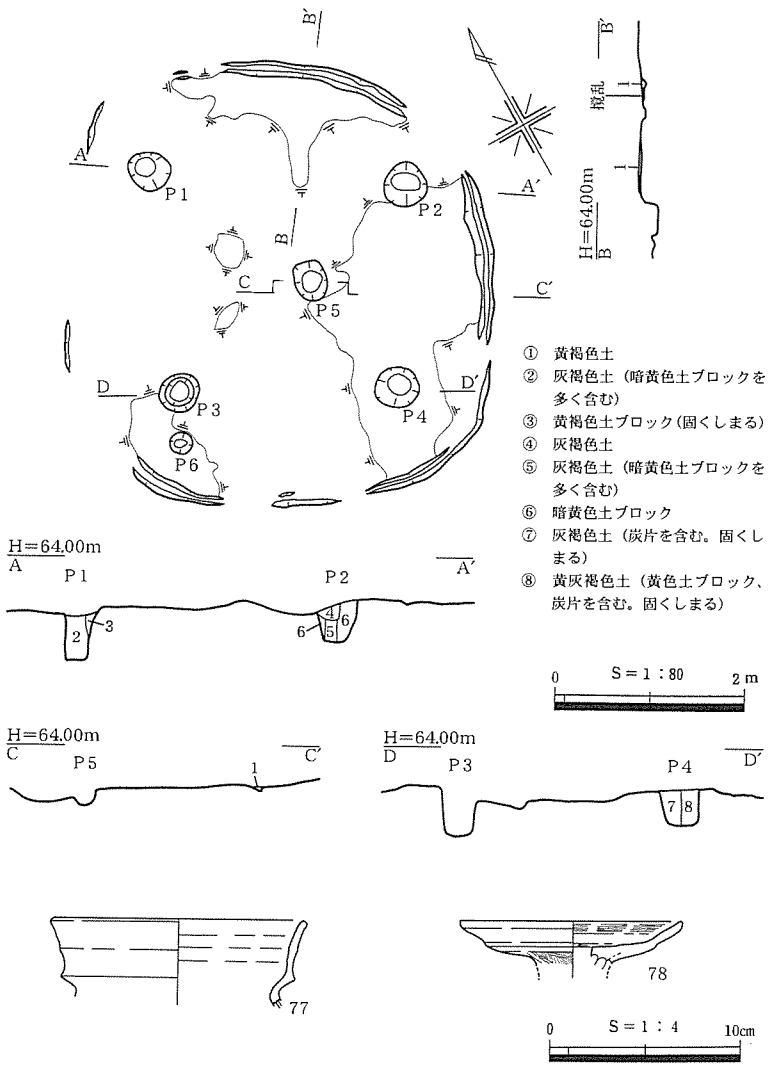
出土遺物はＰ２の埋土中から甕あるいは壺の底部の小片が出土したが、図化不能であり、時期も不明である。図化された土器は遺構検出中に、天地返しで撹乱された土から出土したものである。77は小型の甕、78は小型器台の受け部である。

時期は出土遺物から、天神川Ⅲ期、古墳時代前期中葉ごろのものと推定される。　（家塚）

SI22（第38・39図、PL.9・33・43・48、第13・17表）

Ｆ２杭を中心とする、標高64.2mの平坦面に立地する。撹乱をあまり受けておらず、遺存状態の良い建物である。平面形は方形で長軸3.7m、短軸3.4mを測る。検出面から床面までの深さは最大64㎝を測る。

ピットは全部で８基検出された。そのうち主柱穴と推定されるのはP2（26×26－67）㎝、Ｐ３（35×30－57）㎝で、２本柱建物であると考えられる。主柱穴間距離は1.35mを測る。配置状況から補助柱穴と考えられるＰ４（26×23－5）㎝、Ｐ５（25×22－24）㎝、Ｐ６（20×19－55）㎝、Ｐ７（27×27－60㎝）の４基を検出した。中央ピットＰ１（58×47－21）㎝は２段に掘り込まれており、下層埋土は褐灰色土と炭化物が混じる層（12層）で、焼土ブロックも少量含んでいる。北東側の壁際



第37図　SI18および出土遺物

で上段（81×67－３）cm、下段（58×35－44）cmの二段掘りの特殊ピットＰ９が検出された。南隅壁際のＰ８（38×32－23）cmの底面から高坏82が同一個体の脚部に坏部を被せた状態で、甕の胴部片とともに出土した。Ｐ８は検出に失敗したが、埋土は地山土であり、住居の床面に土器を埋納するための穴であるといえる。

壁溝は断面台形であり、幅22cm、深さ６cmで全周している。床面に貼床はなく、焼土面も検出されなかった。埋土は４層確認された。埋土堆積状況から判断すると、流れ込みによる自然堆積であると考えられる。埋土は暗黄褐色土系の埋土が主体で、全体的にしまりがない。

Ｐ９の２段目の掘方の西側から椀81が伏せた状態で、そのほかＰ８付近の床面で甕80、埋土下層から甕79、Ｐ３底面から細粒花崗岩の敲石S24が出土している。

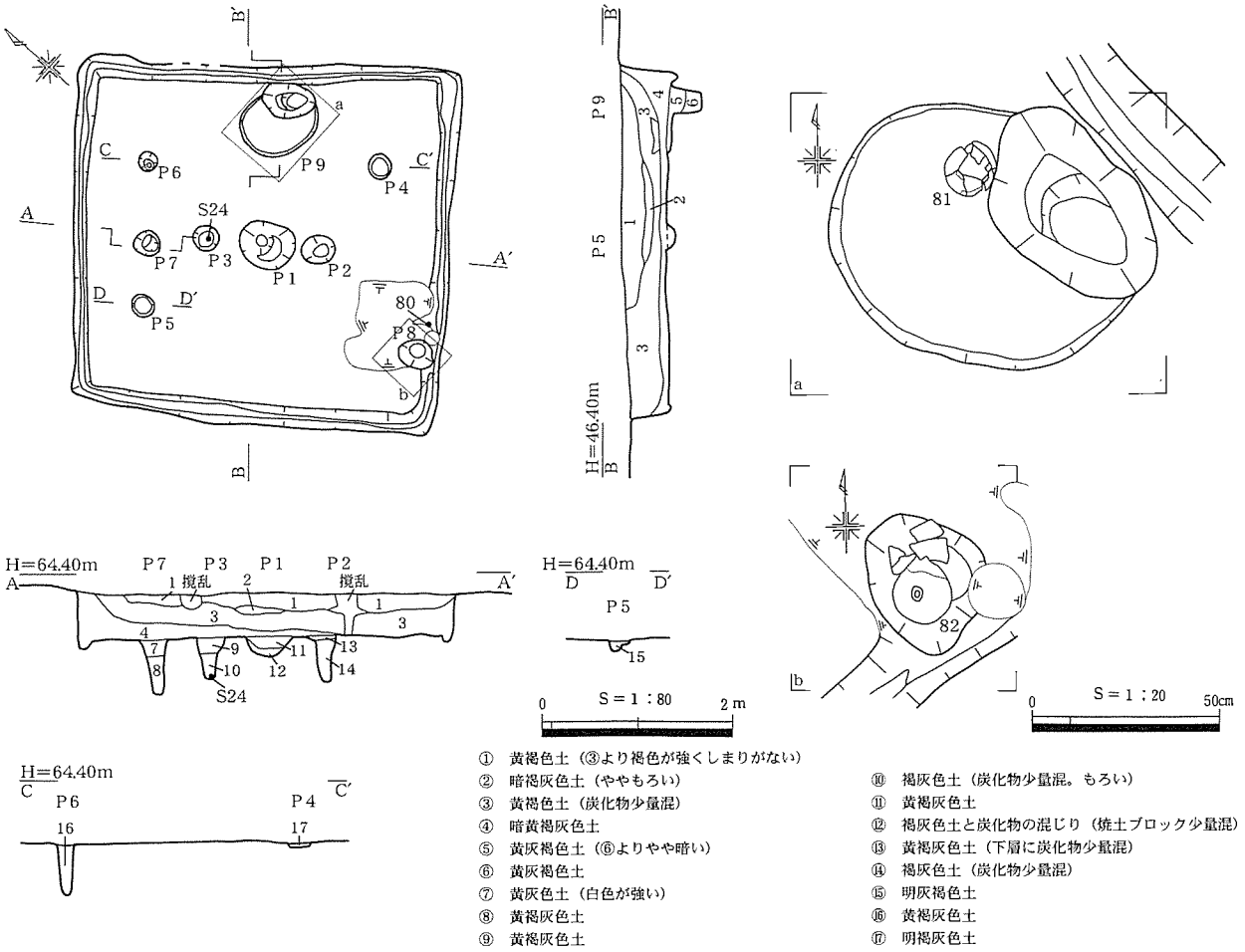
時期は出土遺物から、天神川Ⅵ期、古墳時代中期中葉ごろと考えられる。（小谷）

SI27（第40・41図、PL.７・38・48、第13・17表）

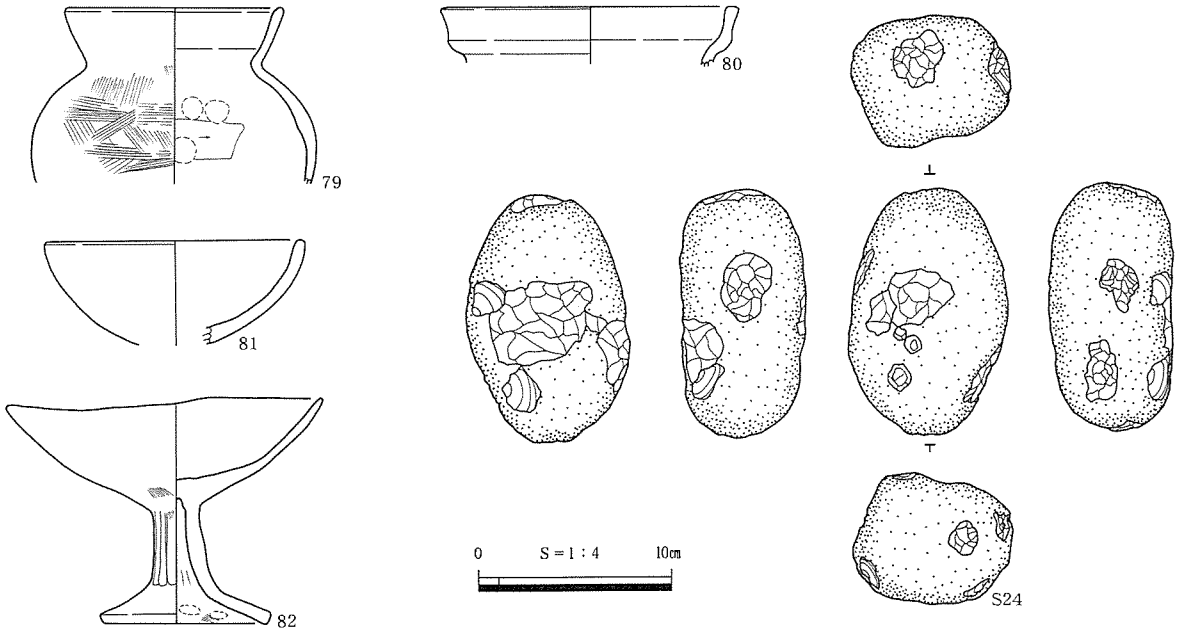
Ｆ６グリッドの西向きの緩斜面に立地していたと推定される。天地返しのために本来の遺構検出面が完全に破壊されている。北東側20mにSI16が位置する。床面の形態は円形に近い胴張りの隅丸方形である。規模は長軸4.４m、短軸4.4mである。検出面から床面までの深さは26cmである。

主柱穴はＰ１（64×43－38）cm、Ｐ２（70×56－46）cm、Ｐ３（49×32－40）cm、Ｐ４（48×41－48）cmの４基を検出した。Ｐ３、Ｐ４が壁溝際に寄るのに対し、Ｐ１は40cm離れた位置にある。主柱穴間距離はＰ１－Ｐ２間が2.7m、Ｐ２－Ｐ３間が2.5m、Ｐ３－Ｐ４間が3.1m、Ｐ４－Ｐ１間が2.5mである。柱痕はＰ１～４に残り、直径は10～20cmである。中央ピットＰ５（60×58－28）cmは主柱穴４基の対角線の交点に位置する。埋土は外側からの流れ込みによる堆積状況を示す。主柱穴４基と中央ピットの配置は、床面の中心から約20cm南西側に寄っているといえる。床面Ｐ６（44×36－18）cmは壁溝埋土を切ることから、この住居跡に伴わない。

壁溝の断面はＶ字形で、幅10cm、深さ10cmである。壁際を全周していたものと推測される。床面の撹乱が著しく、本来の面積の約３分の１が島状に残存する。貼床は施されていない。焼土面は検出できなかった。



第38図　SI22



第39図　SI22出土遺物

Ｂ－Ｂ′の断面を見ると、断面に柱痕の残るＰ１の範囲は床面と同じ高さで掘方埋土が堆積していることから、住居の柱材が床面から切り離されたと考えられる。住居は自然倒壊ではなく、解体されたと言える。

出土遺物はＰ２の埋土中から甕83が出土した。口縁端部は僅かに拡張し、外面に３条の凹線が引

かれる。内面は頸部下までケズリが入る。甕84は掘方埋土中から出土した。S25は北東側の床面よりもやや上から出土した、花崗岩質アプライトの砥石である。４面が使用されている。Ｐ４の東側の床面から安山岩の亜円礫が出土した。使用痕はなく、用途不明である。

時期は出土遺物から、Ｖ－１様式、弥生時代後期前葉ごろのものと考える。　　（家塚）

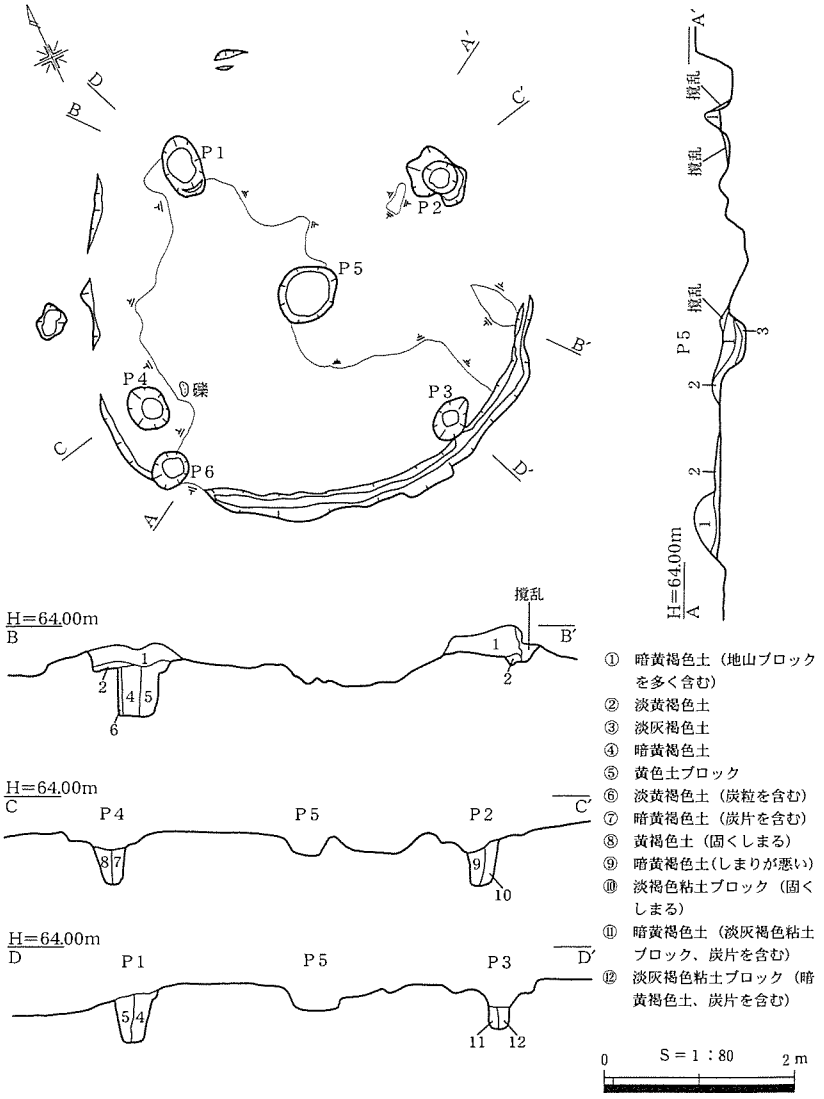
SI28（第42・43図、PL.11・38・48、第13・17表）

Ｇ５グリッドに位置する。天地返しによる撹乱が著しく、床面レベル付近まで掘削された範囲も広く、遺存状態は悪い。地形図の周辺の等高線の流れから、北西側に下る緩斜面に立地していたと推定される。平面形は長軸5.8m、短軸3.3mの隅丸長方形である。

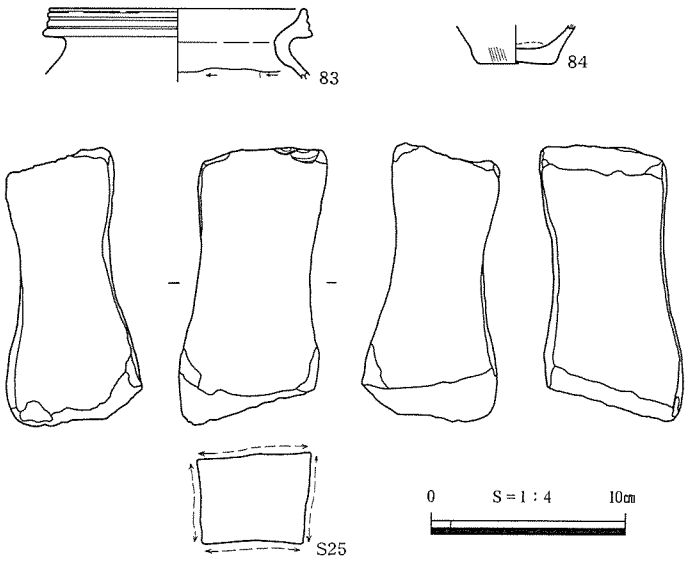
ピットは全部で６基検出した。そのうち主柱穴はＰ１（47×46－65）cm、Ｐ２（54×38－40）cmで、２本柱建物であると考えられる。主柱穴間距離は2.05mを測る。Ｐ３（42×27－67）cm、Ｐ５（53×38－46）cm、Ｐ６（42×40－50）cmも規模が大きく、３本柱の時期があったことも考えられる。

また、上面が隅丸長方形状の特殊ピットＰ４（84×63－67）cmの下層部には炭化物・炭化物粒が混じっていた。

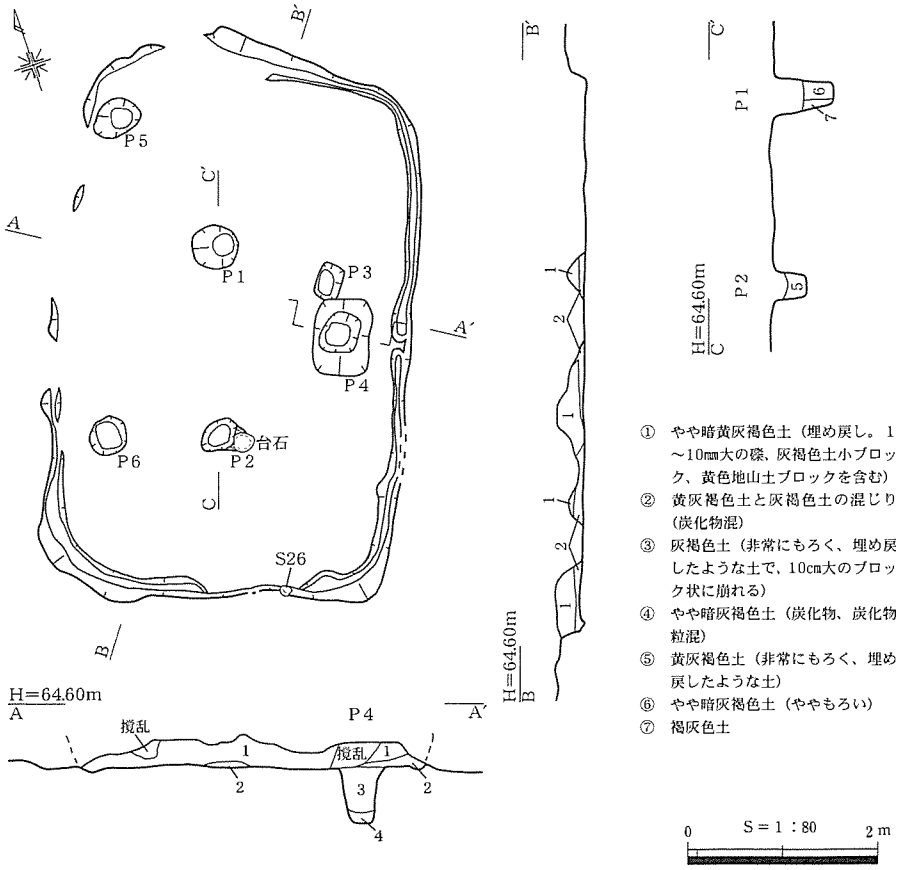
周溝の断面はＵ字形で、最大幅16cm、深さ７cmを測る。東側と北側の壁溝は埋め戻されて、床面を拡張した痕跡がわずかに認められた。焼土面は検出できな



第40図　SI27



第41図　SI27出土遺物



第42図　SI28

かったが、Ｐ１－Ｐ２間の床面付近の埋土には炭化物・炭化物粒が混じっていた。掘方埋土は暗黄褐色土が主体で、断面を見ると地山土ブロックがモザイク状に堆積していた。これらの層は自然堆積ではなく、埋め戻しがなされたと考えられる。

埋土中からの出土土器は小片で、器種、時期ともに不明であった。甕85、86、88、直口壺87、低脚坏89、鼓形器台90は床面範囲内の撹乱土中から出土したものである。南側壁際からは安山岩の敲石 S26が出土している。Ｐ２の東側部分には床面に埋め込んだような状態で台石が出土した。

時期は撹乱層出土の遺物から、天神川Ⅱ期、古墳時代前期前葉ごろのものと推定する。　（小谷）

SI29（第44・45図、PL.11・38、第13表）

Ｇ２～Ｈ２グリッドの標高64.2m の平坦面に立地する。西側半分は天地返しによる撹乱のため床面が削平され、柱穴が残るのみであるが、東側半分は比較的良く残っていた。残存部分の掘方の形態、ピット配置状況から判断すると、床面の平面形態は長軸7.2m、短軸６ｍの隅丸方形と復元される。検出面から床面までの深さは30cmである。

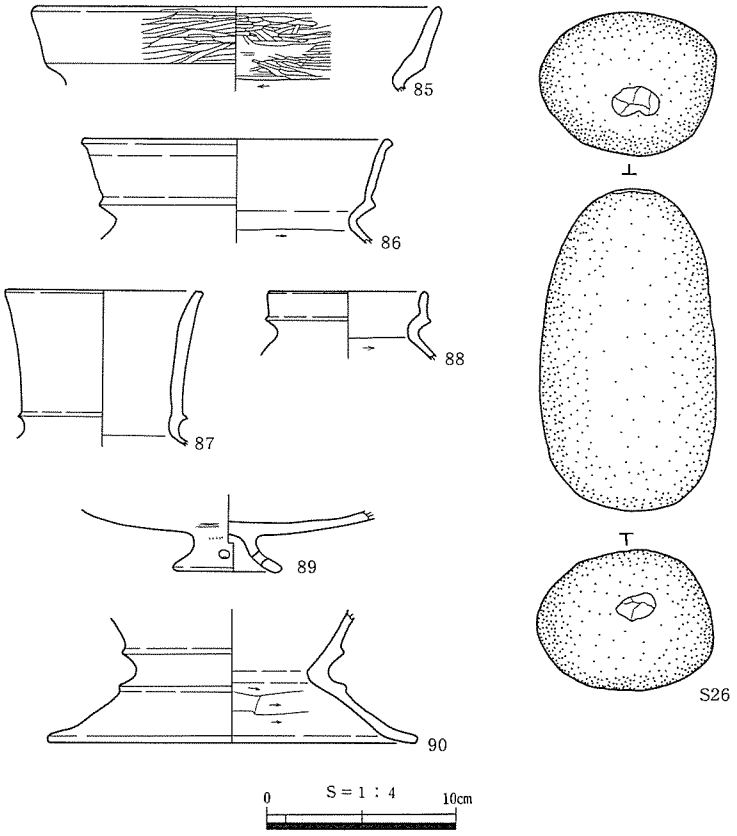
ピットは全部で６基検出された。主柱穴はＰ１（35×34－72）cm、Ｐ２（39×34－72）cm、Ｐ３（34×24－56）cm、Ｐ６（29×28－61）cmの４基である。それぞれの主柱穴ピット内には炭化物が混じっていた。Ｐ１には柱痕又は抜き取り痕（幅約16cm）が認められ、Ｐ２は他の柱穴より多くの炭化材・炭化物を含んでいた。また、P3からは３～４cm大の長さをもつ炭化材片も出土している。中央ピットＰ４（81×64－14）cmは隅丸方形で浅く、埋土中から遺物・炭化物等は出土しなかった。

中央ピットの西側の床面上の（47×43－１～２）cmの範囲は砂及び砂質土が多く混じり、0.5～２cm大の礫・小石がまばらに敷き詰められていた。被熱した痕跡、炭化物等は認められないが、東と西

の両側の床面で焼土面を検出したことから炉に関係する施設と推定する。残存する部分の埋土は南北ベルトで２層に分層できた。流れ込みによる自然堆積であると考えられる。

主柱穴の１つであるＰ３中層からは土器片が数点出土し、そのうち甕91を図化した。掘方埋土中から甕92、低脚坏93、床面付近から低脚坏94、95が出土した。

時期は出土遺物から、天神川Ⅱ期、古墳時代前期前葉の時期に相当すると考えられる。　（小谷）



第43図　SI28出土遺物

SI30（第46図、PL.11・44、第13表）

Ｈ３グリッドに位置する。天地返しの撹乱を全域にわたって受けているため、遺存状況は極めて悪く検出は困難を極めた。重機によって大部分を床面レベル以下まで掘り削られており、床面はほとんど残存しないような状況であった。残存する壁溝とピットの配置から、床面の形態は隅丸方形で、長軸5.9m、短軸５ｍと復元される。検出面から床面までの深さは30cmである。

床面推定範囲内でピットを７基検出した。そのうち主柱穴はＰ１（43×40－75）cm、Ｐ２（50×43－84）cm、Ｐ３（42×32－72）cm、Ｐ４（35×35－75）cmの４基である。主柱穴間距離はＰ１－Ｐ２間から順に（3.8、4.0、3.5、3.7）ｍである。中央ピットＰ５（68×57－100）cmは２段に掘り込まれており、上段は床面から20cm程度の深さをもつ。下段の埋土下層（11、12層）には炭化物が混じっている。

また、南西側の壁際に位置する平面隅丸方形の特殊ピットＰ６（67×48－96）cmの埋土は、地山土主体でもろくブロック状に崩れやすいことから埋め戻し土である可能性が高い。このピットはかなり深く掘り込まれているのが特徴であるが、遺物・炭化物等の出土もなく、用途等は不明である。

東隅には床面より10cm程度高く造った部分（推定復元値約1.6m以上×約0.9m）があり、ベッド状遺構であった可能性が考えられる。

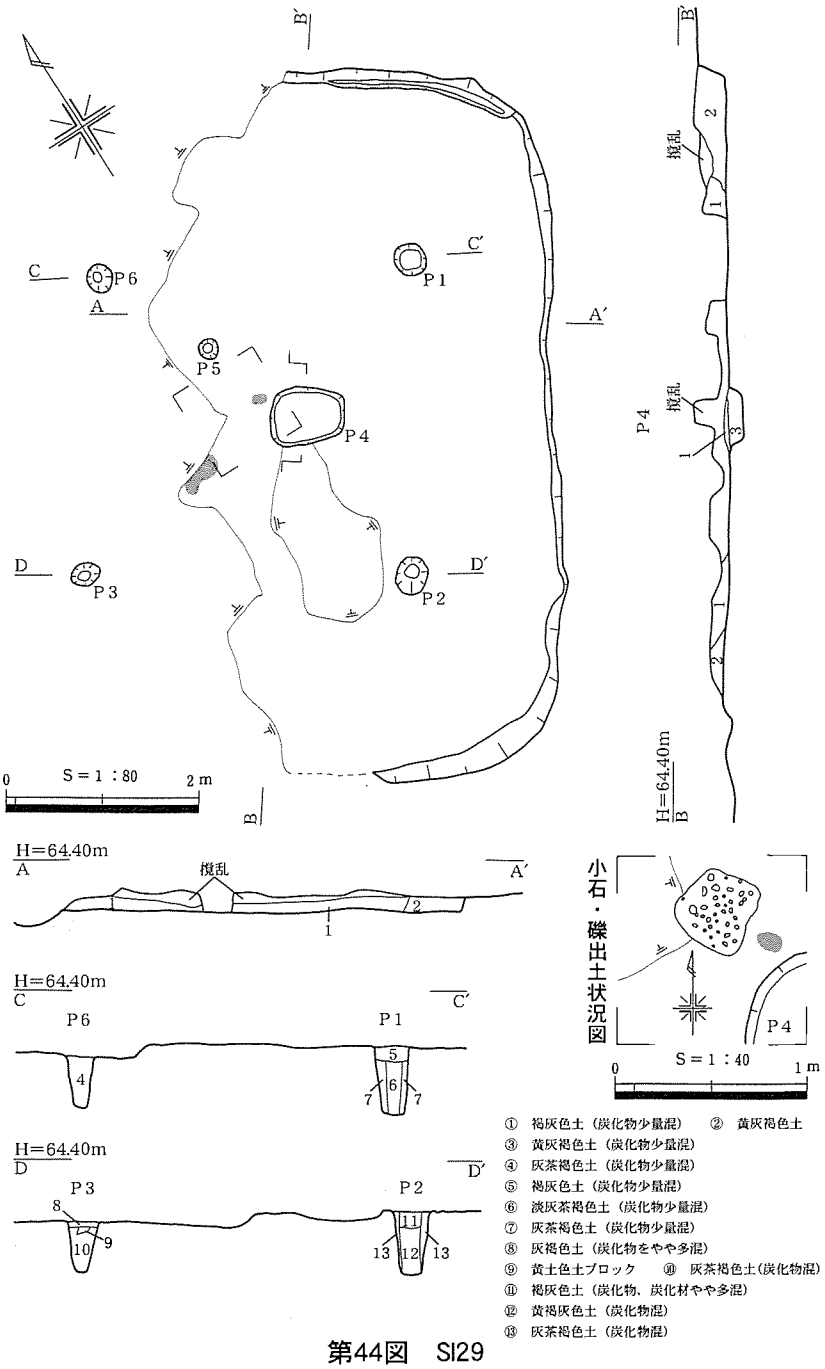
埋土中から甕96、高坏97が出土した。出土遺物から判断して天神川Ⅰ期、古墳時代前期初頭ごろの遺構であると考えられる。　（小谷）

SI41（第47・48図、PL.10・42・48、第13・14・17表）

Ｉ７杭を中心とする範囲、標高64mの平坦面に位置する。遺構の約２～３ｍ東側からは谷部への傾斜が急になっている。天地返しによる撹乱で、床面レベル以下まで削平された範囲が広く、東側部分を除いて残りは悪い。南東隅で平安時代の火葬墓ＳＸ１と重複している。平面形は長軸5.6m、短軸5.4

mの胴張りの隅丸方形で、遺構検出面が残る東側部分で、標高64.0m前後を測る。

ピットは全部で12基検出された。主柱穴はＰ１（55×48－50cm、Ｐ２（54×47－51）cm、Ｐ３（55×48－54）cm、Ｐ４（60×59－68）cmの４基で、主柱穴間距離はＰ１－Ｐ２間から順に（3.2、3.3、3.2、3.1）mである。Ｐ１には幅18cm程の柱痕または抜き取り痕が残っており、Ｐ４の埋土中層からは土器片が数点出土している。また、Ｐ７（44×30－56）cm、Ｐ８（40×38－32）cmは４基の主柱穴の深さにほぼ近いレベルまで掘り下げられている。柱痕等は残っていないが、この建物の建て替え等に伴うピットである可能性がある。中央ピットＰ９（48×35－28）cmは撹乱により上部が掘り削られて原型を留めないが、残存部分は平面隅丸方形を呈している。このピット内からは遺物、炭化物等は検出されなかった。

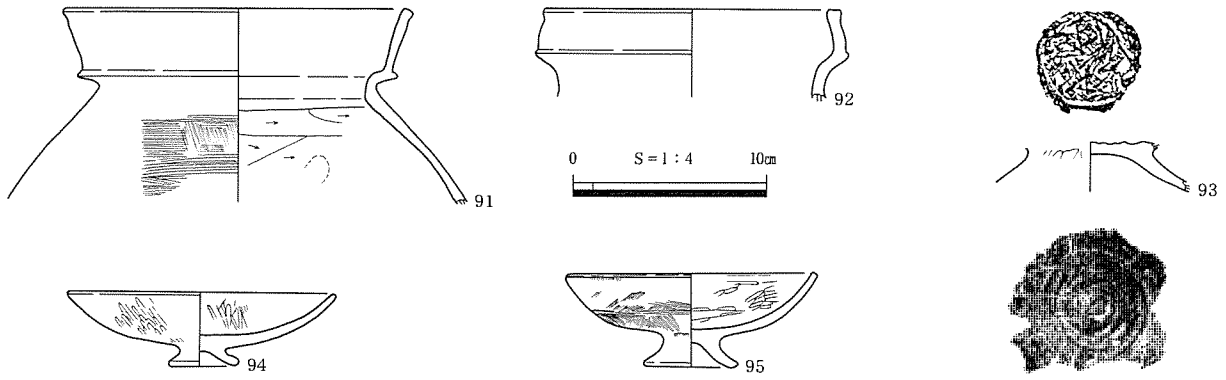


第44図　SI29

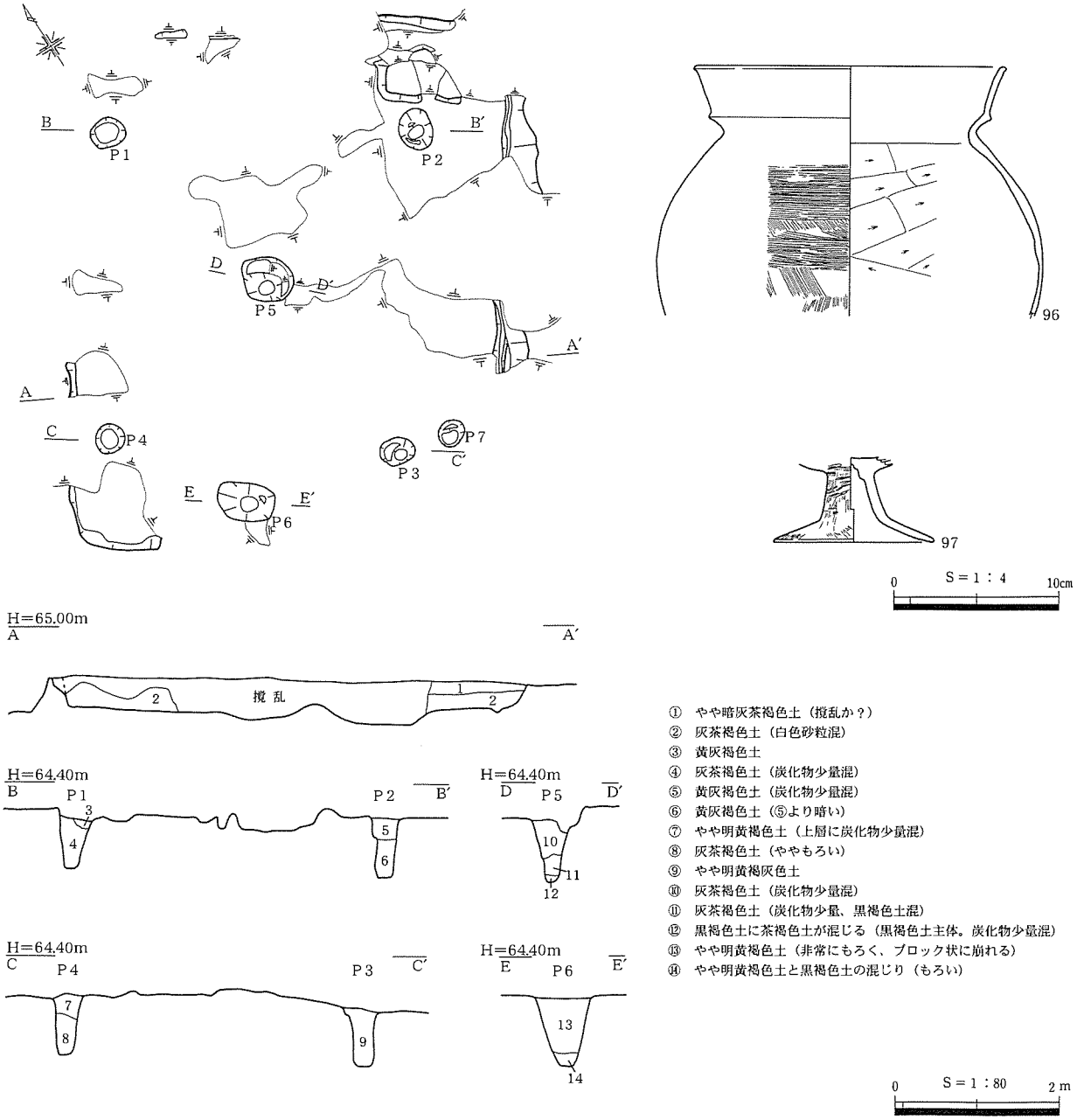
壁溝は断面Ｕ字形で幅10cm、深さ６cmを測り、撹乱で一部途切れる箇所もあるが本来は全周していたが可能性が高い。壁溝際の床面は貼床が施され、壁溝と合わせて整形していた。焼土面はＰ１－Ｐ４の中間に１箇所認められる。撹乱が著しいが、遺構埋土は残存する部分で５層が確認できた。灰褐色系の土が主体である。

主柱穴Ｐ２と北東側壁面との間で、甕99と高坏坏部100が床面に伏せた状態で出土した。99は100の端部の上に載っていた。99はひび割れていることを除けば完全な状態で出土したが、底部側の直径24cmが穿孔されていた。割れ口は丁寧に整えられており、焼成後の穿孔と考えられる。99と壁面との間に堆積した埋土中から甕98が口縁部を下に向けた状態で出土した。98は99に接していないことから、99が半分埋没したころに投棄されたものと考えられる。そのほか埋土中から敲石S27が、Ｐ７の東側の床面上では台石が出土した。

時期は出土遺物から天神川Ｉ期、古墳時代前期前葉前葉ごろの遺構であると考える。　（小谷）

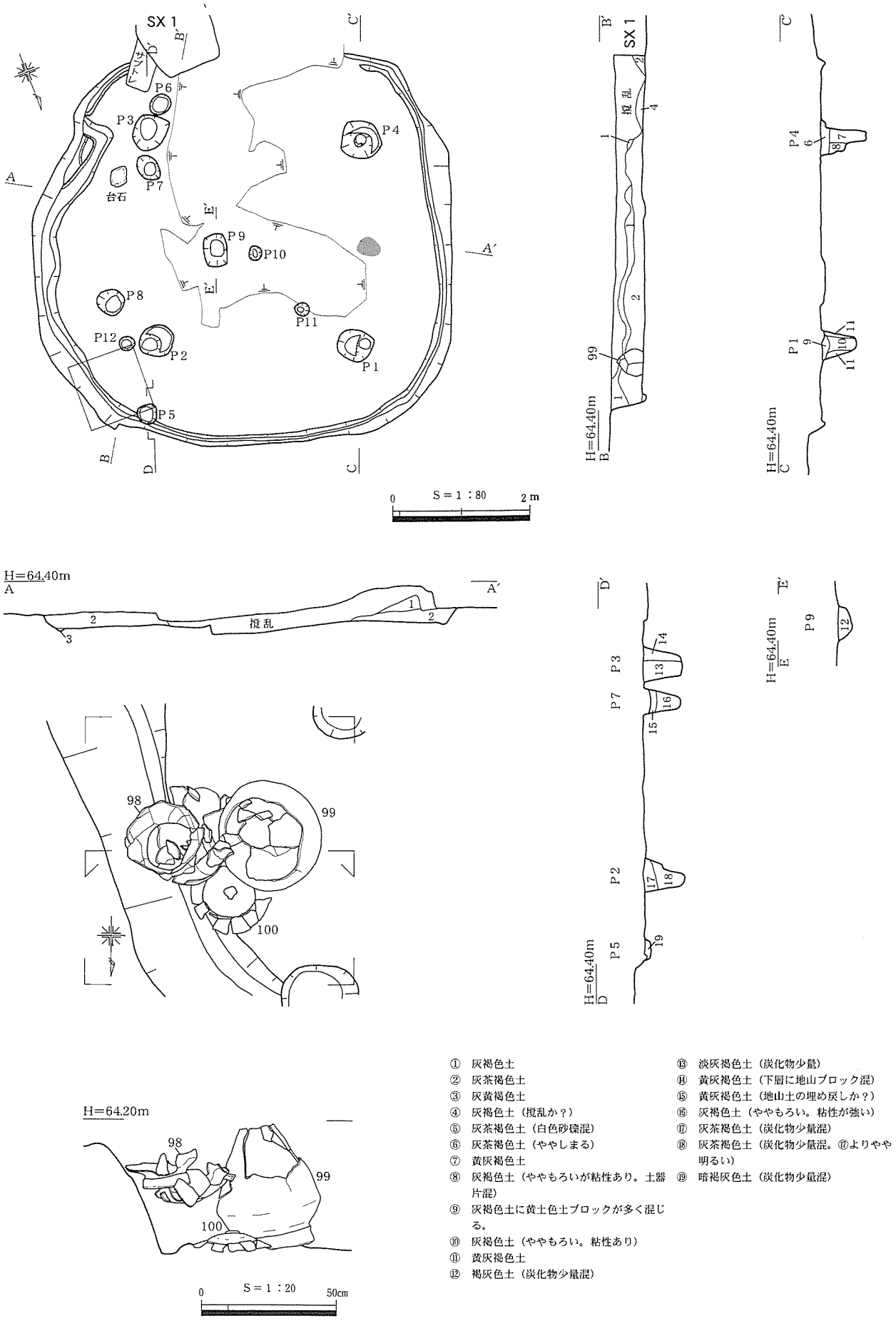


第45図　SI29出土遺物



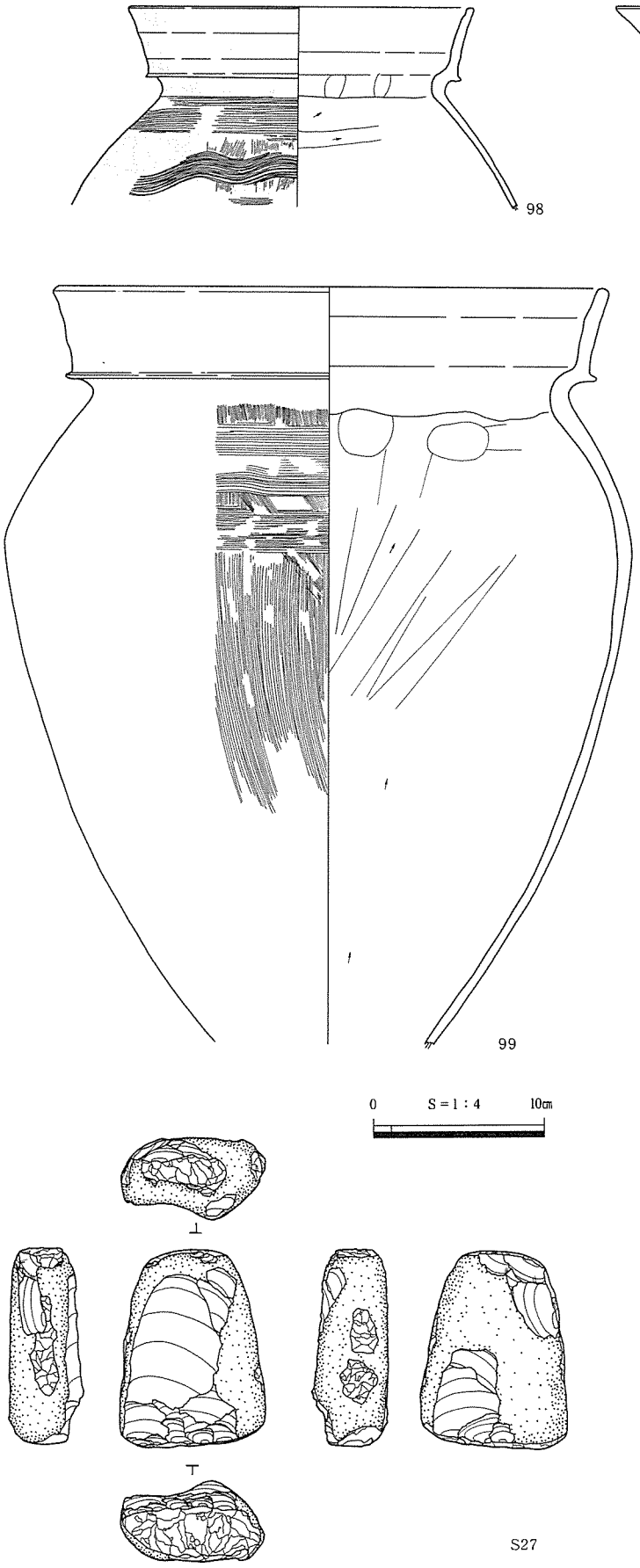
① やや暗灰茶褐色土（撹乱か？）
② 灰茶褐色土（白色砂粒混）
③ 黄灰褐色土
④ 灰茶褐色土（炭化物少量混）
⑤ 黄灰褐色土（炭化物少量混）
⑥ 黄灰褐色土（⑤より暗い）
⑦ やや明黄褐色土（上層に炭化物少量混）
⑧ 灰茶褐色土（ややもろい）
⑨ やや明黄褐灰色土
⑩ 灰茶褐色土（炭化物少量混）
⑪ 灰茶褐色土（炭化物少量、黒褐色土混）
⑫ 黒褐色土に茶褐色土が混じる（黒褐色土主体。炭化物少量混）
⑬ やや明黄褐色土（非常にもろく、ブロック状に崩れる）
⑭ やや明黄褐色土と黒褐色土の混じり（もろい）

第46図　SI30および出土遺物

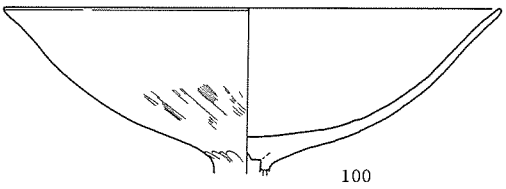


① 灰褐色土
② 灰茶褐色土
③ 灰黄褐色土
④ 灰褐色土（撹乱か？）
⑤ 灰茶褐色土（白色砂礫混）
⑥ 灰茶褐色土（ややしまる）
⑦ 黄灰褐色土
⑧ 灰褐色土（ややもろいが粘性あり。土器片混）
⑨ 灰褐色土に黄土色土ブロックが多く混じる。
⑩ 灰褐色土（ややもろい。粘性あり）
⑪ 黄灰褐色土
⑫ 褐灰色土（炭化物少量混）
⑬ 淡灰褐色土（炭化物少量）
⑭ 黄灰褐色土（下層に地山ブロック混）
⑮ 黄灰褐色土（地山土の埋め戻しか？）
⑯ 灰褐色土（ややもろい。粘性が強い）
⑰ 灰茶褐色土（炭化物少量混）
⑱ 灰茶褐色土（炭化物少量混。⑰よりやや明るい）
⑲ 暗褐灰色土（炭化物少量混）

第47図　SI41



第48図　SI41出土遺物



SI43・46（第49図、PL.12・41・49、第14・19表）

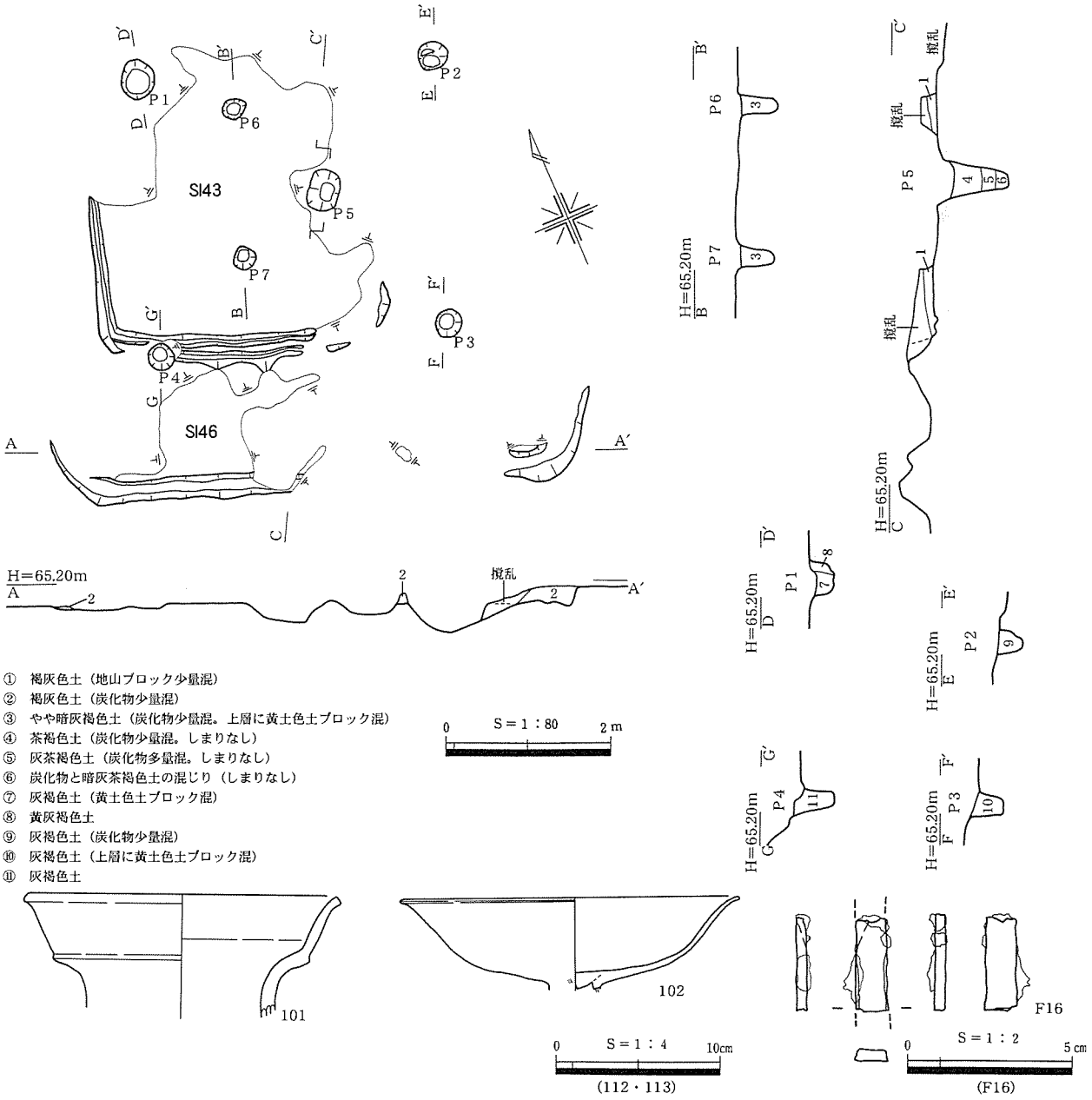
I7杭を中心とする範囲に２棟の竪穴住居跡が重複している。両方とも天地返しによる撹乱を著しく受け、とりわけ北側半分は一部の柱穴以外は全く残っていないような遺存状況である。地形図の等高線の流れから、北西に下る緩斜面に立地していたと考えられる。SI46の主柱穴Ｐ４をSI43の壁溝が切ることからSI43がSI46に先行することが判明した。

・**SI43**　壁溝と柱穴の配置から床面形態は長軸3.6m、短軸3.2mの方形に復元される。検出面から床面までの深さは10cmである。主柱穴はＰ6（30×24－44）cm、Ｐ7（30×27－45）cmの２基で、柱穴間の距離は1.8mである。壁溝の断面はＵ字形で、幅14cm、深さ５cmである。南側は壁溝が二重に巡らされているが、溝と溝との間は15cmで、拡張とは考えにくい規模である。

Ｐ6－Ｐ7間の、床面から６～７cm程浮いた埋土中から高坏102が出土した。層位不明の埋土中から壺101、鉄製品F16も出土している。F16は幅９mm、厚さ３mmの板状を呈し、表面に僅かに鎬のような稜が認められることから鉈と推測される。

時期は出土遺物から天神川Ⅲ期、古墳時代前期中葉ごろと考える。

・**SI46**　SI43以上に残りが悪く、かろ



第49図　SI43・46および出土遺物

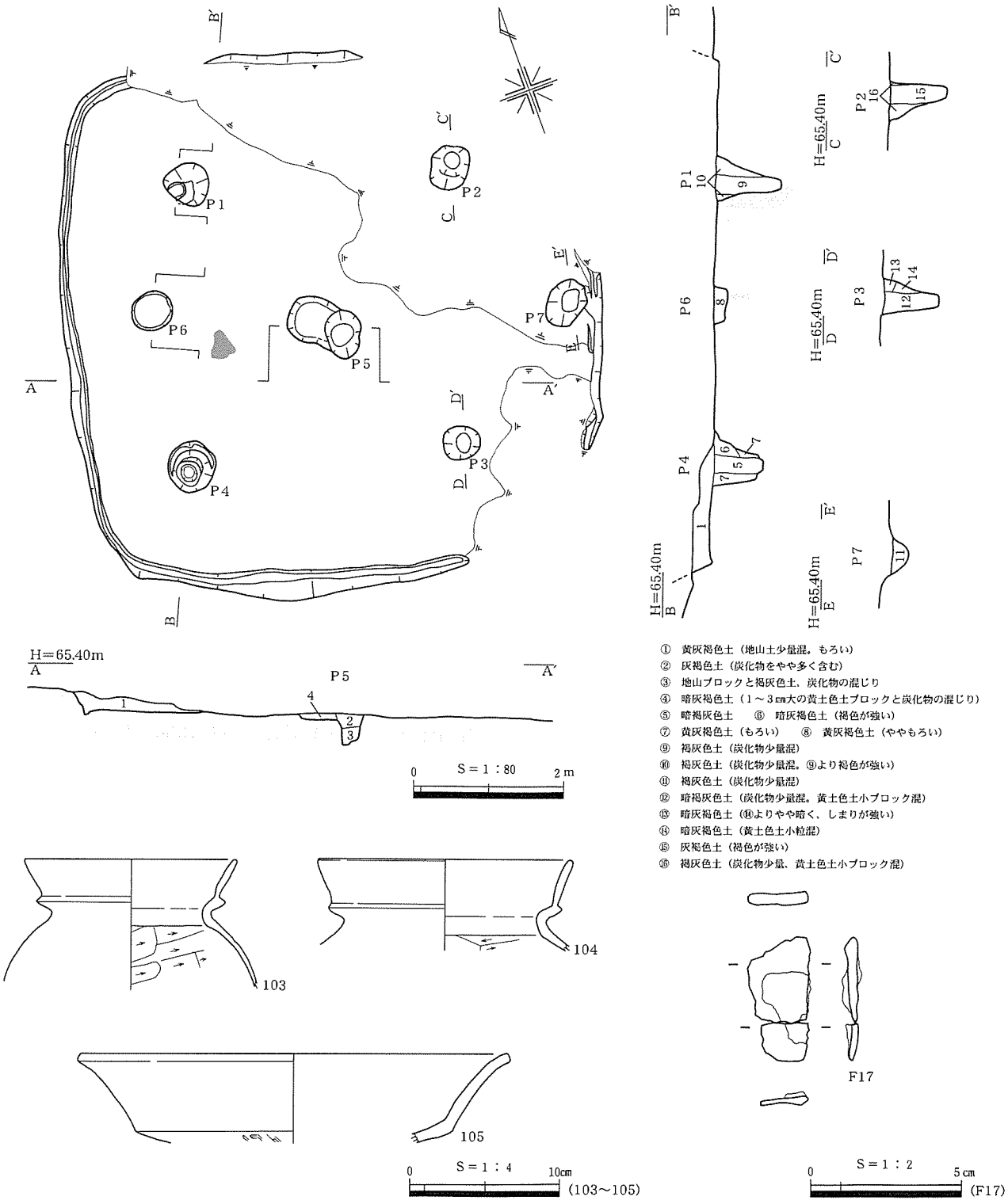
うじて南側壁面と床面の一部、ピット５基が検出できたのみであった。床面形態は長軸6.4m、短軸6.2m の隅丸方形に復元される。検出面から床面までの深さは25cmである。主柱穴はＰ１（49×42－29）cm、Ｐ２（35×33－42）cm、Ｐ３（34×32－43）cm、Ｐ４（35×32－56）cmの４基である。主柱穴間距離はＰ１－Ｐ２間から順に（3.6、3.2、3.5、3.3）mである。中央ピットＰ５（48×39－76）cmの埋土は多量の炭化物を含む。

遺構の時期を決定できる遺物は出土しなかった。平面形態と規模がSI29に類似することから、天神川Ⅱ期、古墳時代前期前葉ごろの住居跡と推定する。（小谷）

SI44（第50図、PL.12・44・49、第14・17表）

Ｊ５～Ｋ５グリッドに位置する。天地返しによる撹乱を広範にわたって受けている。本来は北へ下る緩斜面に立地していたと推測される。床面形態は長軸6.9m、短軸6.7m の隅丸方形である。検出面から床面までの深さは25cmである。

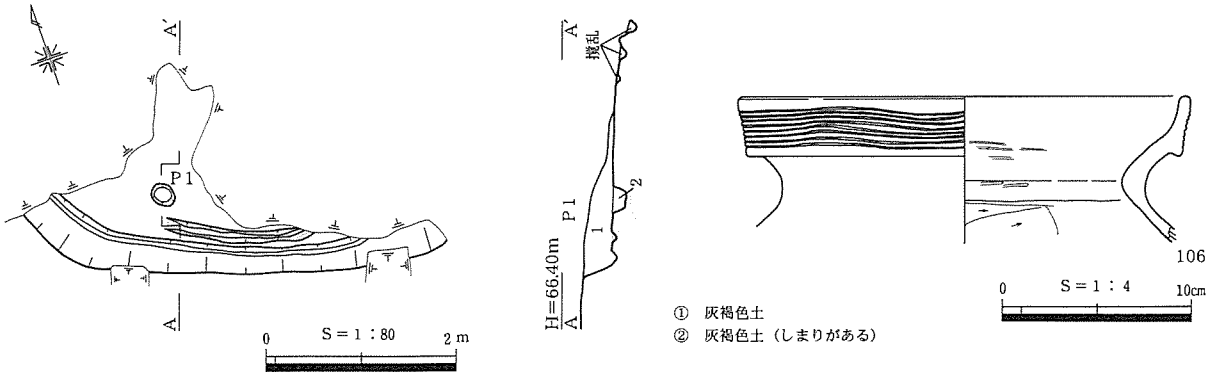
ピットは全部で７基検出された。主柱穴はＰ１（62×56－87）cm、（58×52－90）cm、（50×44



第50図　SI44および出土遺物

－82）cm、（70×65－72）cmの４基である。主柱穴間距離はＰ１－Ｐ２間から順に（3.6、3.8、3.7、3.8）mである。それぞれの土層断面には柱痕あるいは抜き取り痕（幅22～26cm）が認められる。

中央ピットである平面長円形のＰ５（102×62－54）cmは二段掘りで、東側にもう１段深く掘り込まれた断面Ｕ字型ピット状部分（深さ44cm）がある。被熱した部分はないが、下層部には炭化物が混じり、炭化物の付着した石が出土した。Ｐ１－Ｐ６間のＰ６（57×49－16）cmと東壁際のＰ７（65×50－30）cmは特殊ピットと考えられる。



第51図　SI45および出土遺物

壁溝は断面Ｕ字形で、幅18cm、深さ９cmを測り、本来は全周していたと考えられる。焼土面はＰ５－Ｐ6間で１箇所認められた。遺構埋土は残存部で床面直上の１層のみ確認できた。地山ブロックが混じり、もろく崩れやすいため、埋め戻された可能性が考えられる。

埋土中から多くの土器片が出土したが、図化できたものは、甕103、104、高坏105である。また、Ｐ１内から板状鉄片Ｆ17が出土している。

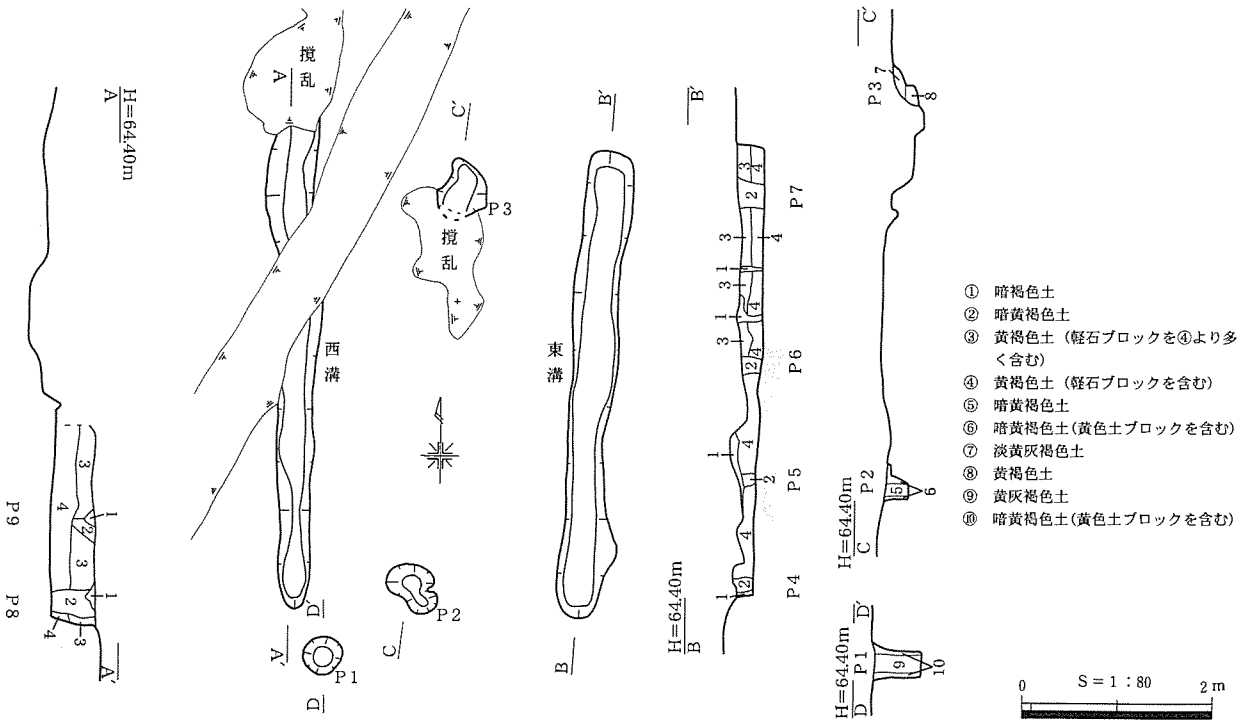
時期は出土遺物から、天神川Ⅱ期、古墳時代前期前葉ごろのものと考える。　（小谷）

SI45（第51図、PL.12・43、第14表）

Ｊ７グリッドの北向きの緩斜面、標高65.3mに立地している。南側部分を残して、大部分が天地返しによる撹乱を受けており、遺存状況は非常に悪い。残存部分から床面の平面形態は隅丸方形と推測される。残存する床面の長軸は３m、短軸1.8m、検出面から床面までの深さは36cmである。

壁溝は幅12cm、深さ５cmで二重に巡らされていた。内側の溝は埋め戻されていたことから、拡張を伴う建て直しが行われていたことが判明した。壁寄りの床面で検出されたＰ１（23×23－15）cmは規模が小さく、主柱穴とはなりえないと考える。南側の残存する部分の埋土は灰褐色土の単層である。床面直上から出土した遺物はないが、埋土中から甕106が出土した。

時期は出土遺物からＶ－３様式、弥生時代後期後葉ごろのものと考える。　（小谷）



第52図　SB１

（３）掘立柱建物跡

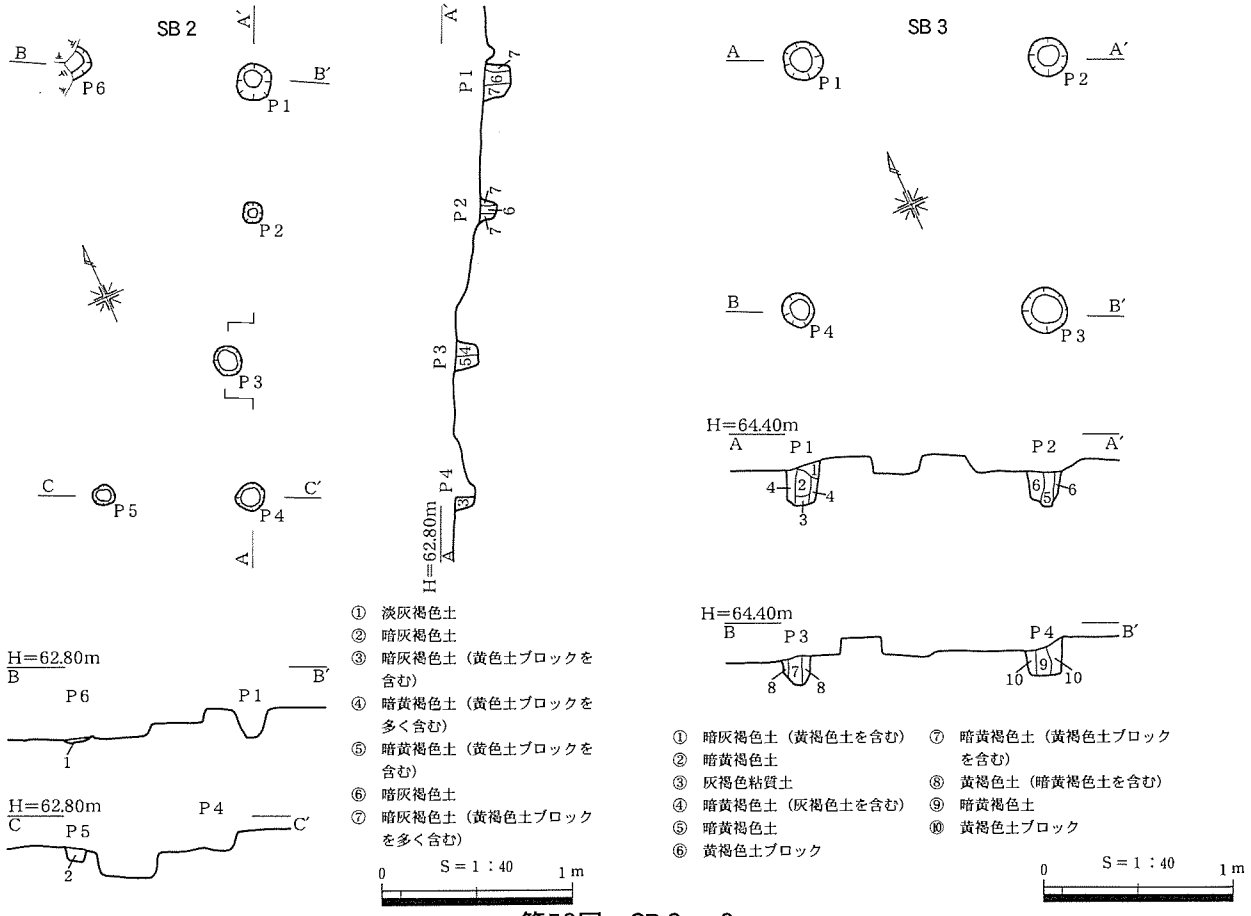
SB１（第52図、PL.13）

Ｄ１～Ｄ２グリッドの標高64mの平坦面に立地する、布掘りの掘立柱建物跡である。東西に並ぶ２条の溝と２基の柱穴によって構成される。２条の溝は南北方向に、1.3～1.4m の間隔を空けて平行に掘られており、それぞれ東溝、西溝と呼称する。

東溝の掘方は全長4.8m、幅50cm、検出面から底面までの深さは30cmである。埋土上面では柱痕跡を検出できなかったが、土層断面でＰ４～Ｐ７（穴ではないが便宜上Ｐをつける）の４本を確認した。柱痕（２層）の直径はＰ４から順に15cm、12cm、19cm、25cmである。柱間距離はＰ４－Ｐ５間から順に1.1m、1.2m、1.8m となっている。Ｐ６－Ｐ７間の縦方向に入る土層（１層）は樹根の撹乱と認識している。埋土は２層であり、柱を掘方底面に据えた後から下層（４層）、上層（３層）と土を入れている。上層のほうが下層よりも包含する地山土ブロックの量が多い。埋土は上層、下層ともに特別固く締まっているという様子はなかった。掘方の底面は平らで、柱の立つ位置をあらかじめ掘り窪めることはしていない。

西溝は撹乱によって中央が分断され、樹根の撹乱で北端を欠く。掘方の全長は5.2m、幅36cm、検出面からの深さは52cmである。北半の埋土は失われている。土層断面でＰ８、Ｐ９の２本の柱痕を確認した。柱の直径はともに25cmで、柱間距離は0.8m である。埋土および底面の状況は東溝と同様である。

東溝と西溝の南端側の中間にＰ２（50×36－32）cm、北端側の中間にＰ３（64×50－34）cmがある。Ｐ２は若干西溝側に寄っているものの、Ｐ３は両溝の中心に位置しており、全体の配置から２基のピットは棟持柱と推定される。Ｐ２は柱痕があり、直径12cmである。Ｐ３は樹根で撹乱されている。西溝南端のさらに南側に位置するＰ１（40×40－52）cmは柱痕直径20cmで、底面の標高は西溝の底面と同じ高さである。同様の規模のピットが周辺に存在しないことから、SB１に関連するものと考える。



第53図　SB２・３

布掘り溝の柱と棟持柱によって、梁行２間（3.1m）×桁行３間（4.2m）の掘立柱建物跡を復元できる。主軸方向は東溝を基準にするとＮ－４°－Ｅであり、ほぼ真北を向く。

埋土中から出土したのは土器の小片で、時期を特定できるものはなかった。西溝から出土した甕の破片が、頸部までヘラケズリされていたことから、弥生時代後期以降であることが分かるのみである。東側でSI12と隣接することから、この住居跡の時期である天神川Ⅲ期を挟む前後と考えられる。

（家塚）

SB２（第53図、PL.13）

Ｃ４～Ｃ５グリッド、北西向きの緩斜面の標高63.5mに位置する。SI２、SI３、SI４、SI５、SI９の狭間にある。梁行１間（1.6m）×桁行３間（4.4m）で、主軸方向はＮ－25°－Ｅである。

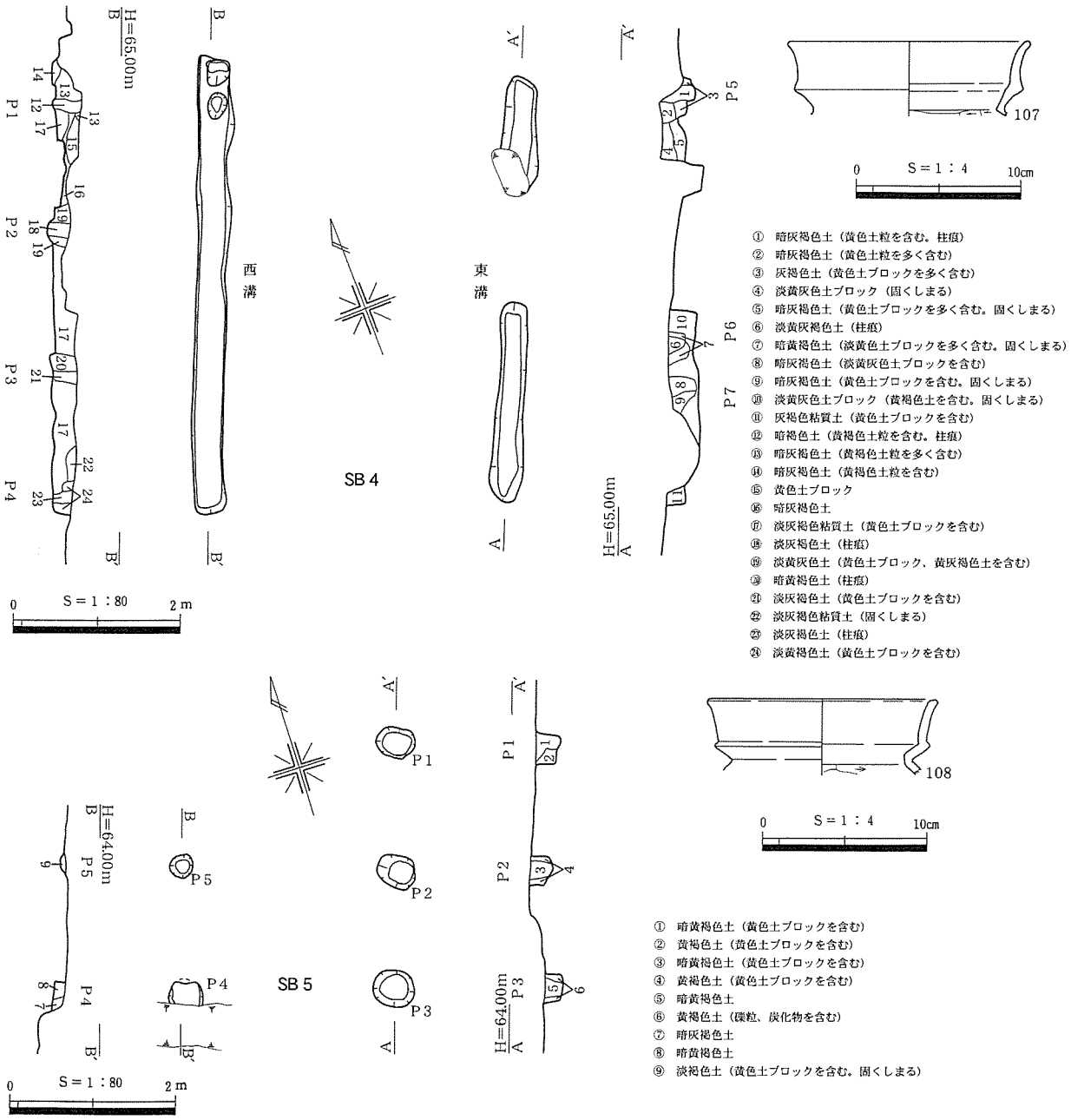
柱穴の規模は、Ｐ１（39×34－30）cm、Ｐ２（22×22－20）cm、Ｐ３（31×31－26）cm、Ｐ４（31×30－23）cm、Ｐ５（22×22－26）cm、Ｐ６（35×29－８）cmである。柱痕の直径は10～15cmである。北西側のＰ５－Ｐ６間の桁柱穴は果樹園の撹乱によって失われたか、あるいはさらに北西側に桁柱が並ぶ、２間×３間の建物であったとも考えられる。

ピット埋土中から遺物が出土せず、切り合い関係もないため、遺構の時期は不明である。（家塚）

SB３（第53図）

Ｄ４～Ｅ４グリッドの東側、標高64.2mの平坦面に立地する。梁行１間（2.6m）×桁行１間（2.7m）で、主軸方向はＮ－24°－Ｅである。

柱穴の規模は、Ｐ１（42×40－52）cm、Ｐ２（42×40－36）cm、Ｐ３（48×48－47）cm、Ｐ４（36×34－32）cmで、柱痕の直径は12～15cmである。



第54図　SB４・５および出土遺物

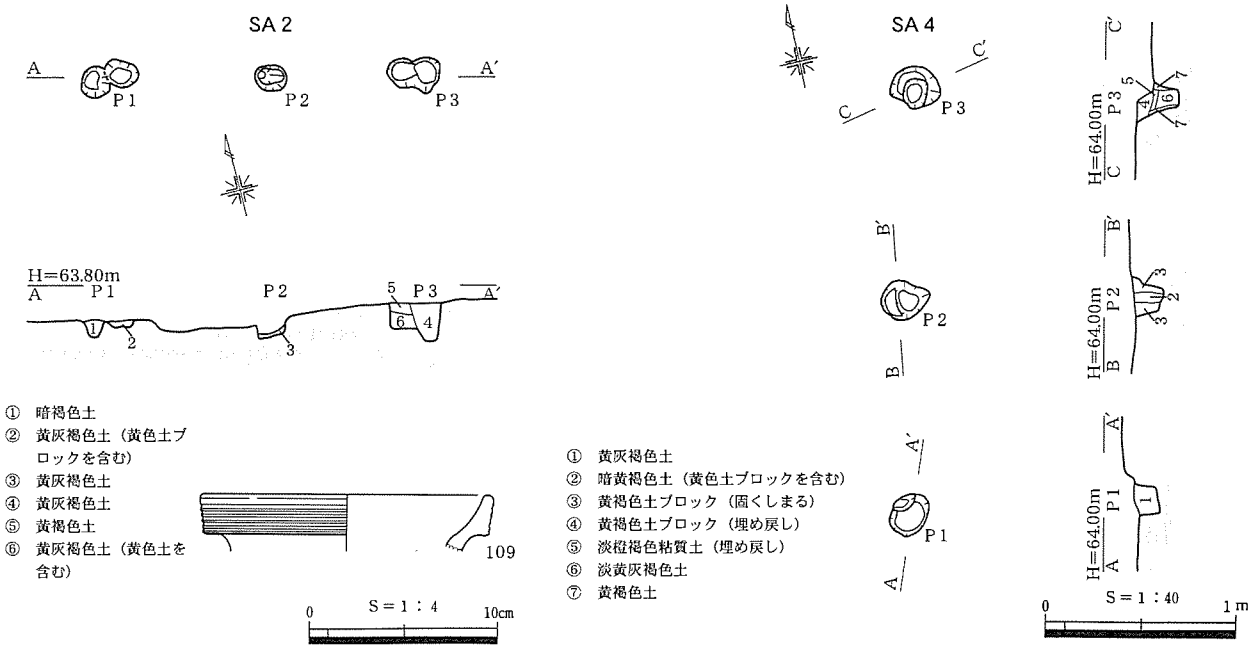
ピット埋土中から遺物が出土せず、切りあい関係もないため、遺構の時期は不明である。　（家塚）

SB４（第54図、PL.13、第14表）

Ｈ６グリッドに位置する布掘りの掘立柱建物跡である。天地返しによって深く掘り下げられているが、地形図の等高線の流れから判断して、平坦面から北西に緩やかに傾斜し始める地点に立地していたと考えられる。検出面の標高は64.4m である。２条の溝が南北方向（N －24°　－ E）に、3.3～3.4 mの間隔をあけて平行に掘られている。それぞれ東溝、西溝と呼称する。

西溝は全長5.6m、幅35～40cm、検出面からの深さは26cmである。埋土上面では柱痕跡を検出できなかったが、土層断面でＰ１～Ｐ４の４本を確認した。柱痕（12、18、20、23層）の直径はＰ１から順に14cm、16cm、22cm、15cmである。柱間距離はＰ１－Ｐ２間から順に1.3m、1.8m、1.6m となっている。

東溝の全長は5.2m であるが、中間に1.3m 途切れる区間がある。北側の長さは1.45m、幅38cm、



第55図　SA２・４および出土遺物

検出面からの深さ35cmで、南側の長さが2.45m、幅34cm、検出面からの深さ30cmである。柱痕はＰ５～Ｐ７の３本を検出した。柱痕（１、６、８層）の直径はＰ５から順に18cm、16cm、17cmである。柱間距離はＰ５から順に3.1m、0.5mである。

溝の掘方埋土は場所によって層の数と土の質が異なり、SB１と比較すると施工が雑である。SB１が溝の掘方に直接柱を立て、掘方全体を埋め戻して柱を固定するのに対して、SB４は掘方を埋めた後に穴を掘り、その中に柱を立てて裏込め土で固定している。Ｐ２、Ｐ５は穴が溝の底面を掘りぬいており、Ｐ６、Ｐ７は柱穴の底面が溝の底面に達していないことがそれを裏付けている。一般的な掘立柱建物跡と変わらないか、むしろ脆弱な施工と思われるが、建物の建て直しの時に柱を掘り返して、柱を据え直した可能性が考えられる。

東溝と西溝の間では棟持柱を立てる穴は検出できなかった。天地返しで失われた可能性もあるが、現況では梁行１間（4.8m）×桁行３間（3.8m）の掘立柱建物跡が復元される。東溝の途切れる区間は、入り口を設けるために意図的に掘り残されたものか、あるいは掘方の深さが一定しない一続きの溝が、天地返しの削平によって二つに分かれているように見える、という可能性が考えられる。

埋土中から出土する遺物は少ない。東溝の埋土中から甕107が出土した。口縁端部は外半し、外面は横ナデである。

時期は出土遺物からⅥ－１様式、弥生時代終末期ごろと考える。　（家塚）

SB５（第54図、第14表）

D4グリッド、標高64mの平坦面に位置する。西側はSI４を切る。梁行１間（1.3m）、桁行２間（３m）で、主軸方向はＮ－20°－Ｅである。

柱穴の規模は、Ｐ１（47×38－31）cm、Ｐ２（48×42－28）cm、Ｐ３（51×44－24）cm、Ｐ４（42×30－14）cm、Ｐ５（30×28－10）cmである。西側の桁柱Ｐ４、Ｐ５はSI４の掘方内で検出した。Ｐ１と対になる位置の柱穴は耕作の撹乱によって検出し得なかった。柱痕の直径は16cmである。甕108はＰ３埋土中から出土した。

時期は出土遺物から天神川Ⅲ期、古墳時代前期中葉ごろと考える。　（家塚）

（４）柵

SA２（第55図、第14表）

Ｃ３～４グリッドの西向きの緩斜面、標高63.5ｍに立地する。西側６ｍにSI２が位置する。

Ｐ１（51×38－43）cm、Ｐ２（35×26－24）cm、Ｐ３（36×26－14）cm、Ｐ４（33×30－20）cmの4基のピットが東西方向（Ｎ－75°－Ｗ）に一直線に並ぶ。Ｐ３、Ｐ４は接しており、いずれか一方だけが柵の柱であるならば、Ｐ１、Ｐ２との埋土の類似性から、Ｐ３と考えられる。Ｐ１～Ｐ３までの全長は3.2ｍである。Ｐ１埋土中から甕109が出土した。

時期は出土遺物からＶ－２様式、弥生時代後期中葉と考えられるが、周囲の同時期の遺構との関連性を積極的に見出すことができない。（家塚）

SA４（第55図）

Ｄ４グリッドのSI４内に位置する。３基のピットで構成される柵列である。

ピットの規模は、Ｐ１（48×42－37）cm、Ｐ２（52×44－34）cm、Ｐ３（54×47－45）cmを測る。Ｐ３は単層であるが、Ｐ１、２にはそれぞれ幅11～18cmの柱痕又は抜き取り痕がみられる。

Ｐ２内から土器片が出土したが小片で図化できなかった。SB３、SB５が東側に位置し、SA４の向き（Ｎ－12°－Ｅ）とそれらの主軸の方向は近似しているため、掘立柱建物跡との関連性が伺える。（小谷）

（５）土坑

SK１（第56図、PL.14・45、第14表）

Ｇ５グリッドに位置する。天地返しによる撹乱のため、上部が掘り削られているため、遺存状態は良くない。

残存部分は長軸196cm、短軸176cmで、残存する深さは最大69cmを測る。底面（長軸180cm、短軸168cm）の形状や壁面の立ち上がり状況から推測すると、本来はほぼ円形の土坑であったと想定される。撹乱の影響で上部が残存しないが、壁面の傾きから、上部がすぼまる袋状の掘方であったと考えられ、貯蔵穴と推定される。

埋土は３層に分層できた。１層は暗灰茶褐色土で土器片が混入しており、２層は炭化物が混じっている。床面直上にあたる３層はもろく、地山ブロックもやや多く混じっている。

１層から土器片10数点、３層から土器片10点程度が出土した。小片が多くほとんどは図化できなかった。床面南東部直上から甕110が出土した。

遺構の時期は出土遺物からＶ－３様式、弥生時代後期後葉ごろのものと考えられる。（小谷）

SK２（第56図、PL.14）

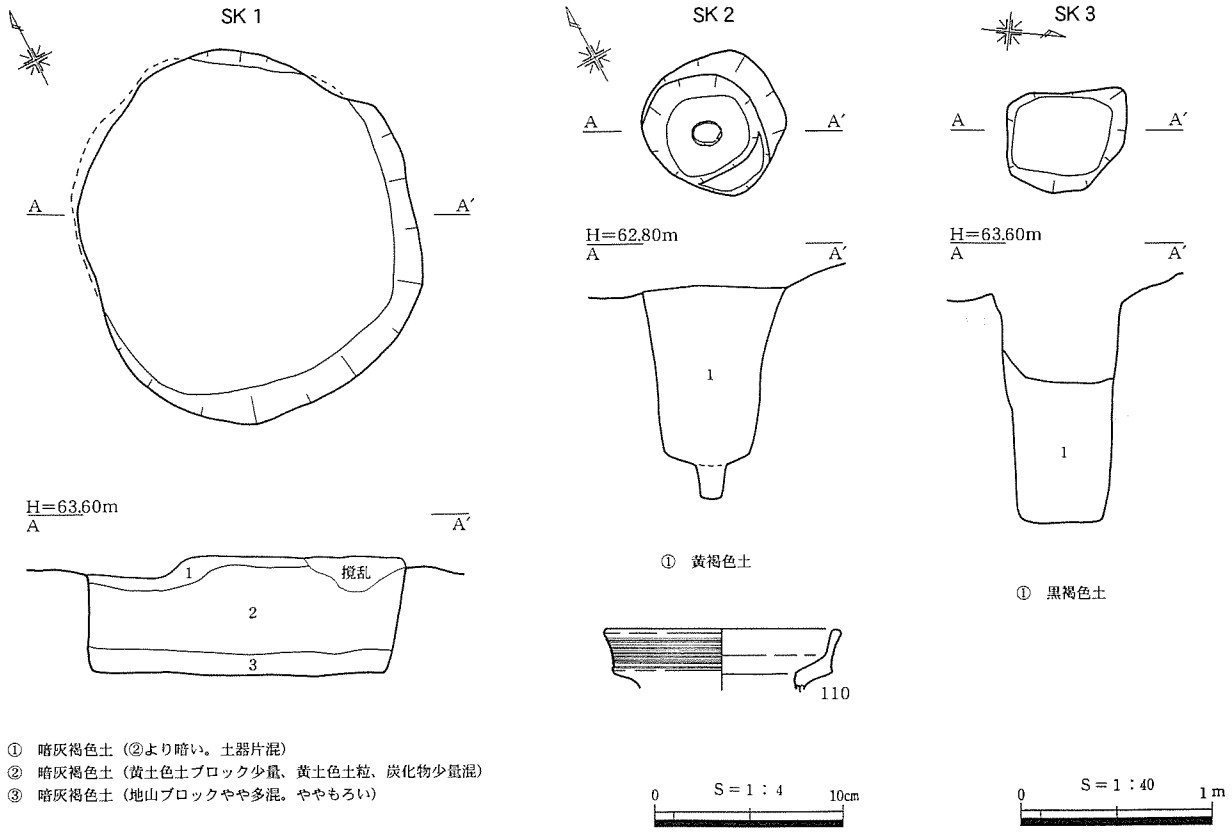
Ｃ５グリッドの北端、南西向きの緩斜面の標高62.8ｍに立地する。西南西側６ｍにSK４、南南東側８ｍにSI３、東北東側９ｍにSK11が位置する。

平面形態は円形で、長軸78cm、短軸76cm、検出面から底面までの深さは108cmである。埋土は１層で、短期間に埋没したものと考える。遺物は出土しなかった。底面の中央に（16×12－20）cmの小ピットが掘られている。逆茂木を立てるための穴と考える。

時期は不明であるが、落とし穴と考えられる。（家塚）

SK３（第56図、PL.14）

Ｃ５グリッドの北端、南西向きの緩斜面の標高63.5ｍに立地する。果樹園の排水溝の底面で検出し



第56図　SK１・２・３および出土遺物

た。北北東側８ｍにSK２、南南東側11ｍにSK21が位置する。

平面形態は隅丸方形で、長軸63cm、短軸50cm、検出面から底面までの深さは１ｍである。埋土は１層で、短期間に埋没したものと考える。遺物は出土しなかった。底面に小ピットはない。

時期は不明であるが、落とし穴と考えられる。（家塚）

SK４（第57図、PL.14）

Ｃ６グリッドの東端、南西向きの緩斜面の標高62.5ｍに立地する。東北東側６ｍにSK２が位置する。

平面形態は円形で、長軸78cm、短軸70cm、検出面から底面までの深さは120cmである。埋土は１層で、短期間に埋没したものと考える。遺物は出土しなかった。底面に小ピットはない。

時期は不明であるが、落とし穴と考えられる。（家塚）

SK９（第57図、PL.14）

Ｆ３グリッド、標高64.3ｍの平坦面に位置する。上部は耕作による撹乱で遺存状態は良くない。

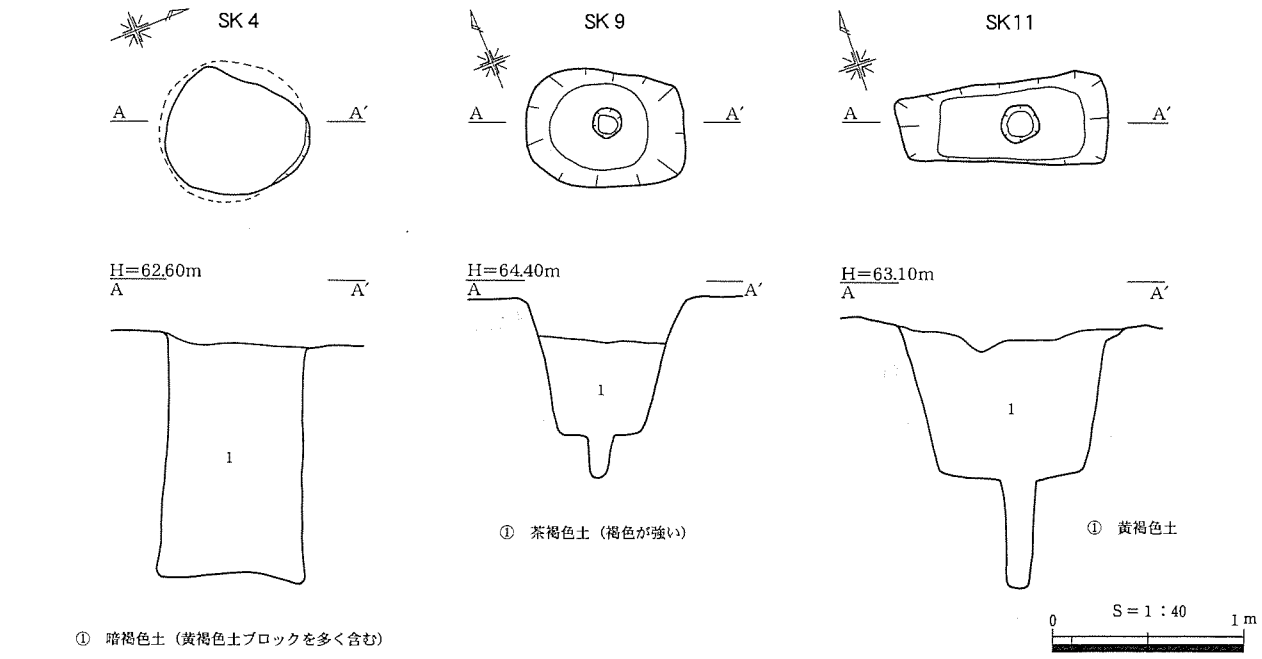
平面形は隅丸方形を呈し、長軸85cm、短軸63cm、検出面からの深さは最大で77cmを測る。掘り下げ中、埋土中位から炭化米粒が１点出土した。その後は注意深く掘り進めたが、他に米粒を検出することはできなかった。これが混入したものか、意図的に埋められたものの一部であるかは不明である。土器等他の遺物の出土はない。埋土はしまりがない灰褐色土の単層で、炭化物を少量含んでいる。

底面にはピット（17×16－28）cmが検出された。このため、この遺構は落とし穴であると考える。（小谷）

SK11（第57図、PL.15）

Ｂ４グリッドの南側、南西向きの緩斜面の標高63ｍに立地する。果樹園の排水溝の底面で検出した。西南西９ｍにSK２、東南東11ｍにSK20が位置する。東側をSI１に切られる。

平面形態は長方形で、長軸113cm、短軸48cm、検出面から底面までの深さは80cmである。埋土は



第57図　SK４・９・11

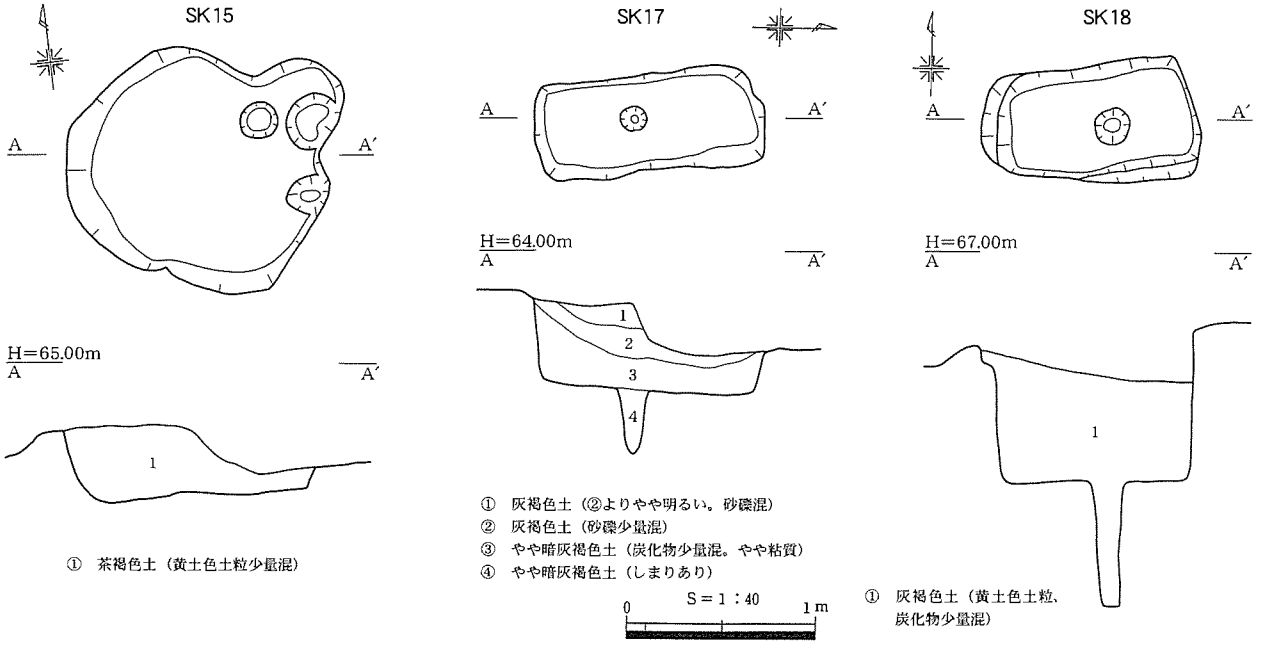
１層で、短期間に埋没したものと考える。遺物は出土しなかった。底面の中央に（22×20－58）cmの小ピットが掘られている。逆茂木を立てるための穴と考える。小ピットの埋土は土坑の埋土と同質であった。

時期は不明であるが、落とし穴と考えられる。（家塚）

SK15（第58図、PL.14）

東区Ｈ・I6グリッドに位置する。北方向にはSB４、南方向にはSI43・46が位置している。天地返しによる撹乱のため、遺存状態は極めて悪い。遺構の上部半分以上は掘り削られているものと思われる。

残存部の平面形は歪んだ円形を呈し、長軸160cm、短軸139cm、残存部分の深さは最大35cmを測る。残存部分の埋土は茶褐色土の単層である。



第58図　SK15・17・18

埋土中から土器片が数点出土したが、いずれも小片であり図化しえず、出土遺物から時期を判断することはできなかった。掘方の形態がSI１に類似することから、貯蔵穴と推定する。　（小谷）

SK16（第59図、PL.15）

東区Ｈ７グリッドに位置する。天地返しによる撹乱のため、上部がかなり掘り削られている。

残存部の平面形は不正円形を呈し、長軸90cm、短軸84cm、残存部分の深さは最大63cmを測る。埋土は３層に分層された。半裁時は２層であると考えていたが、２層までの掘り下げ時さらに下に層があることが認められた。２層までとは明確に分層される３層はしまりがある粘土質埋土で流れ込みとは考えにくいため、人為的に埋められた層である可能性が考えられる。

遺物等は出土していないため、遺構の時期は不明であるが、形状から落とし穴と考える。　（小谷）

SK17（第58図、PL.15）

東区Ｇ６グリッドに位置する。天地返しによる撹乱により、上部半分以上は掘り削られているため、遺存状態は非常に悪い。

残存部分の平面形は隅丸長方形を呈し、長軸123cm、短軸55cm、残存部分の深さは最大50cmを測る。本来はもっと高位に検出面があったと想定される。埋土は４層に分層でき、床面上の３層は炭化物を少量含んでいた。底面中央部に底面ピット（14×13－37）cmが検出されたため、落とし穴であると想定される。

出土位置は不明であるが黒曜石片が１点出土した。土器等他の遺物は出土していない。　（小谷）

SK18（第58図、PL.15）

東区南端Ｋ６グリッド、標高65.3mの北方向へ緩やかに下る位置にある。耕作等による撹乱をあまり受けておらず、遺存状態は良い。

平面形は方形で、長軸115cm、短軸65cm、検出面からの深さは最大71cmを測る。底面にはピット（19×18－76）cmがある。埋土は灰褐色土の単層である。この遺構は底面ピットが、かなり深くまで掘り下げられていることが特徴として挙げられる。

床面付近から黒曜石片が１点出土した。埋土中から他の遺物は出土していないが、遺構の形状から落とし穴であると想定される。　（小谷）

SK19（第59図、PL.15）

東区Ｄ１グリッド、標高64.0mの平坦面に位置する。北方向にはSB１、北東方向にはSI12が位置している。

平面形は楕円形を呈し、長軸68cm、短軸56cm、検出面からの深さは最大47cmを測る。埋土は３層に分層され、３層は炭化物を含んでいる。底面中央には深くはないがピット（16×14－6）cmが検出されたため、落とし穴と推定される。

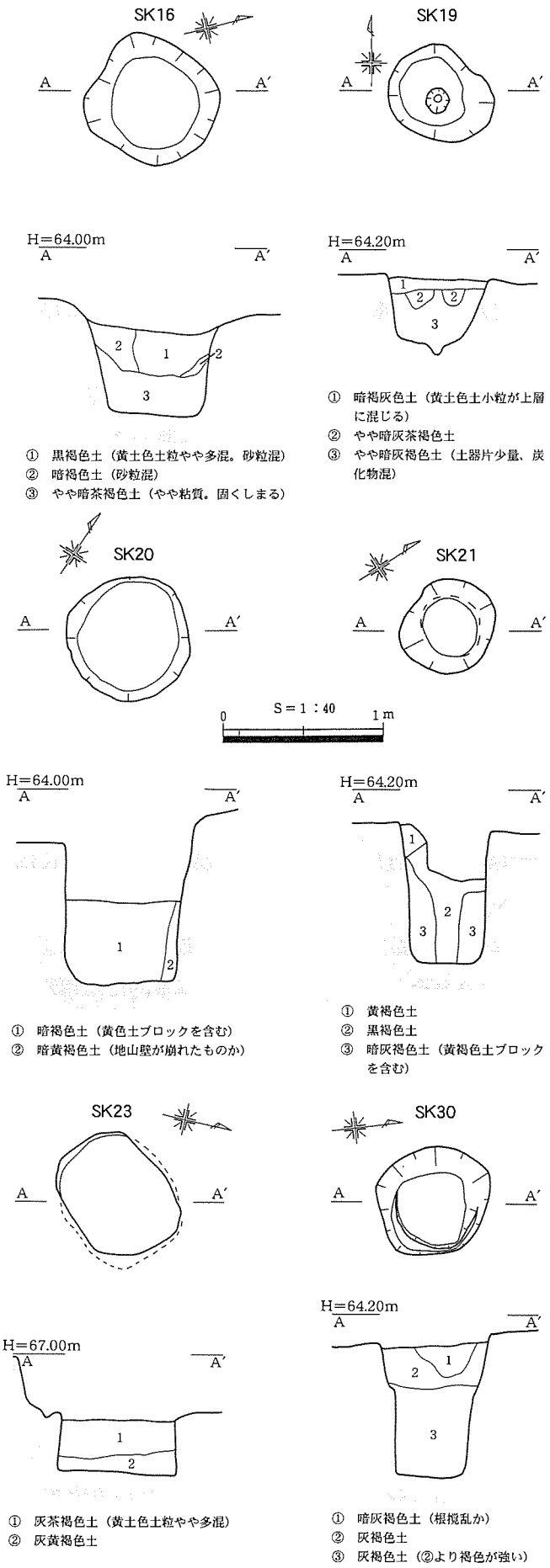
掘り下げ中に土器片が数点検出されたが、いずれも小片で図化しえなかった。時期は不明である。

（小谷）

SK20（第59図、PL.16）

Ｃ３グリッドの標高63.7mの平坦面に立地する。果樹園の排水溝で埋土の上半分を失う。西南西11mにSK11、東側17mにSK33が位置する。

平面形態は円形で、直径80cm、検出面から底面までの深さは89cmである。埋土については、壁際をつたうように堆積する層は壁面の崩落によるものと捉えられ、基本的には単層で短期間に埋没した



第59図　SK16・19・20・21・23・30

ものと考える。遺物は出土しなかった。底面に小穴はない。

時期は不明であるが、落とし穴と考えられる。

（家塚）

SK21（第59図、PL.16）

Ｄ４グリッドの標高64ｍの平坦面に立地する。果樹園の排水溝の底面で検出した。北北西11ｍにSK３、南側７ｍにSK９、東南東11ｍにSK34が位置する。

平面形態は円形で、長軸65cm、短軸53cm、検出面から底面までの深さは89cmである。埋土については、壁際をつたうように堆積する層は壁面の崩落によるものと捉えられ、基本的には単層で短期間に埋没したものと考える。遺物は出土しなかった。底面に小穴はない。

時期は不明であるが、落とし穴と考えられる。

（家塚）

SK23（第59図、PL.16）

Ｋ８グリッド、標高66.9mの平坦面に位置する。耕作による撹乱を受けており、遺存状態は良くない。

残存部分の平面形は楕円形を呈し、長軸84cm、短軸68cm、検出面からの深さは最大75cmを測る。壁面はほぼ垂直に底面まで達し、底面は平坦である。埋土は２層確認できた。

遺物等は出土していないため、遺構の時期は不明であるが、形状から落とし穴と考える。

（小谷）

SK24（第60図、PL.16）

Ｊ８グリッド、標高66.3mの北向きの緩斜面に立地する。遺存状態は良い。

平面形は隅丸長方形を呈し、長軸112cm、短軸60cm、検出面からの深さは最大135cmを測り、かなり深く掘り込まれているのが特徴である。底面にはピット（19×16－43）cmがある。埋土は３層に分層され灰茶褐色土主体であるが、上部には黄土色土が混じる灰褐色土の層がある。

遺物等は出土していないため、時期は不明であるが、形状から落とし穴と推定する。　（家塚）

SK26（第60図、PL.16）

東区Ｊ８グリッド、標高66.6mの北向きの緩斜面に立地する。５m北方向にSK24が位置している。

平面形は長方形を呈し、長軸90cm、短軸60cm、検出面からの深さは最大93cmを測る。底面中央部にはピット（15×12－24）cmがある。埋土は灰茶褐色土主体で、上部には黄土色土が混じっている。

遺物等は出土していないため時期は不明であるが、形状から落とし穴と考える。　（小谷）

SK29（第61図、PL.17・43、第14表）

東区Ｈ４グリッドに位置する。天地返しによる撹乱のため、著しく掘り削られており、本来の検出面は残存しない。

検出中、この付近の撹乱土中から広範囲に土師器片が比較的多く出土し、竪穴住居跡と想定して遺構検出を始めたが、柱穴や壁面も検出されなかったため、図のような土坑であると判断した。本来は深く掘り込まれた土坑であったと推定されるが、最大壁高10cm程度しか残っておらず、どのような形態の土坑であったかは不明である。

長軸は258cm、短軸は124cmである。残存する埋土は灰褐色土の単層で、下層には土器小片が混入していた。土器は破片が多く、十分な形を留めていないものが大半である。そのため、当時の廃棄坑であった可能性が考えられる。掘り返された撹乱埋土中と、床面直上及び床面から１～２cm浮いた位置から遺物がまとまって出土した。埋土からは肩部に刺突列点文を施した甕111、床面近くからは鼓形器台112、低脚坏113等が出土した。

時期は出土遺物から判断し、天神川Ⅰ期、古墳時代前期初頭の遺構と考えられる。　（小谷）

SK30（第59図、PL.17）

Ｄ１～Ｄ２グリッド、標高64.2m の平坦面に立地する。北側13m にSK33、南東側２m にSK19が位置する。SB１の２本の布掘り溝の中間に位置する。

平面形態は円形で、長径75cm、短軸68cm、検出面から底面までの深さは93cmである。埋土は上部の撹乱状のものも含めて３層に分けたが、下２層はしまり具合の違いがあるものの基本的には単層と考える。遺物は出土しなかった。底面に小穴はない。

正確な時期は不明であるが、形状から落とし穴と考える。　（家塚）

SK31（第63図、PL.17・45、第14・17表）

東区Ｄ２グリッド、標高64.2mの平坦面に位置し、東西両端で2基のピットに切られている。

平面形は不正円形を呈し、長軸68cm、短軸57cm、検出面からの深さは最大34cmを測る。埋土は２層に分層できた。灰褐色土系の埋土で下層には炭化物が混じっている。

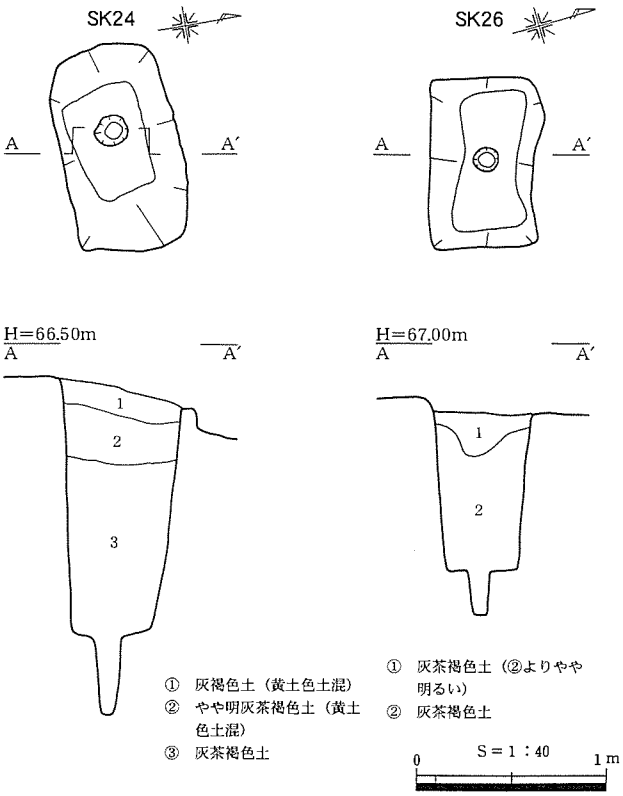
１層から土師器甕114が出土した。その下の２層からは敲石と砥石を兼用したS28が出土した。

出土遺物から推定される時期は、天神川Ⅷ期、古墳時代中期後葉であるが、遺構の性格は不明である。　（小谷）

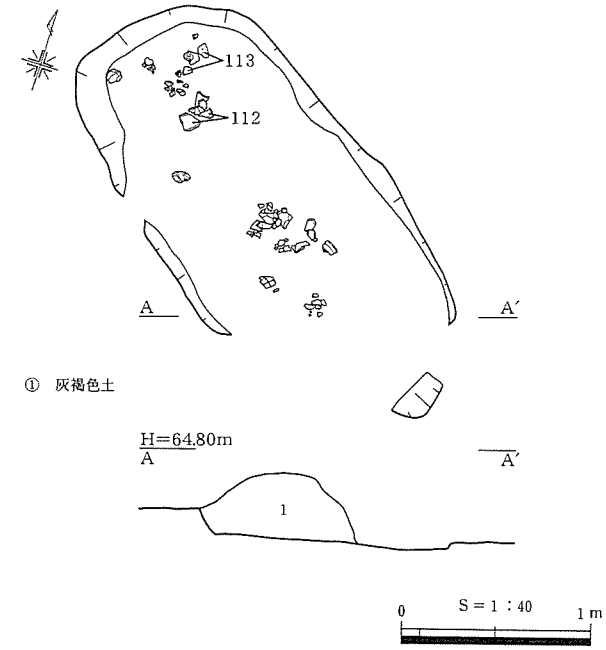
SK32（第62図、PL.16）

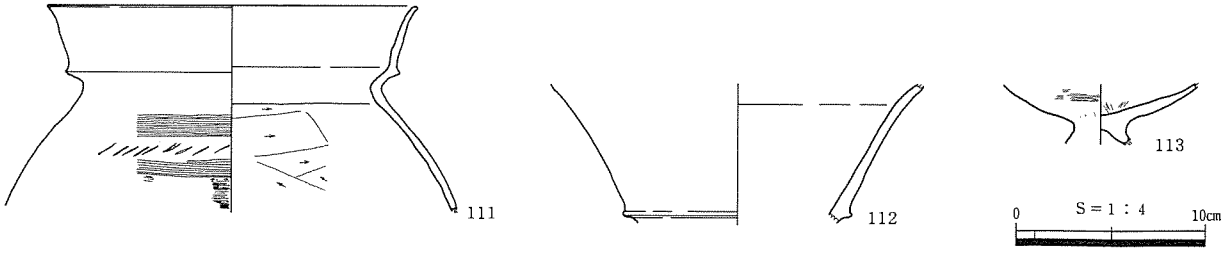
Ｃ５グリッド東側、標高63mの緩斜面に立地する。SI２（新）の床面で検出した。SI２（旧）の壁溝が埋土を切るので、SI２に先行する遺構である。南側４mにSK３、北西側５m にSK２が位置する。

平面形態は不正円形で、長軸95cm、短軸70cm、検出面から底面までの深さは70cmである。埋土は２層に分かれ、埋没の過程で停滞期があったものと考える。遺物は出土しなかった。底面に小穴はない。



第60図　SK24・26





第61図　SK29および出土遺物

時期は不明であるが、形状から落とし穴と考える。（家塚）

SK33（第62図、PL.17）

Ｃ１グリッド西側、標高63.8mの平坦面に立地する。西側17mにSK20が位置する。

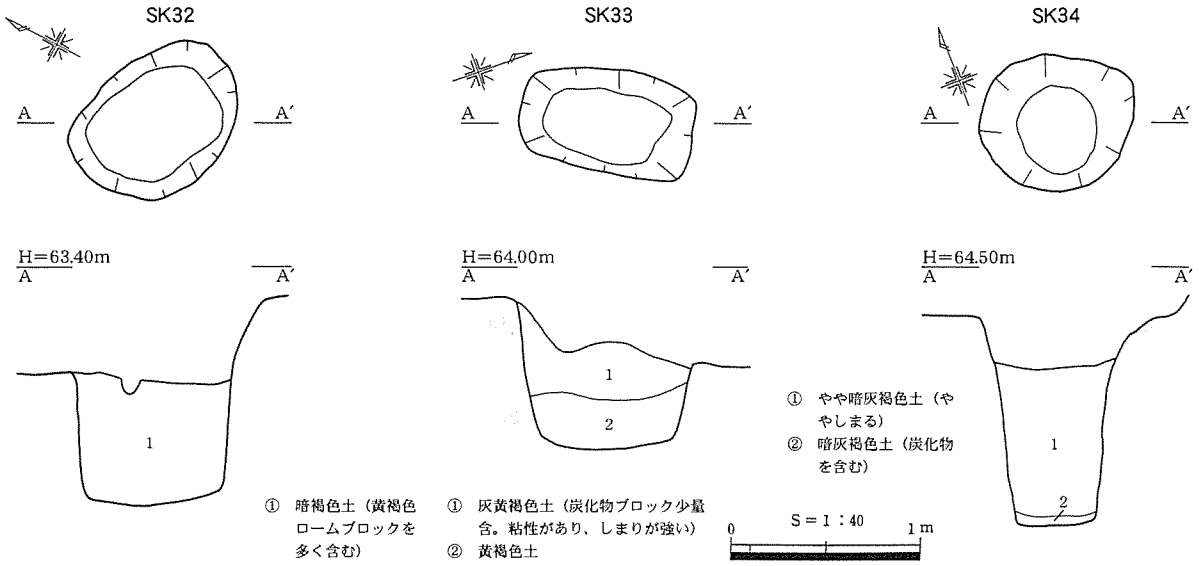
平面形態は隅丸長方形で、長軸93cm、短軸55cm、検出面から底面までの深さは79cmである。埋土は2層に分かれ、埋没の過程で停滞期があったものと考える。遺物は出土しなかった。底面に小穴はない。

時期は不明であるが、形状から落とし穴と考える。（家塚）

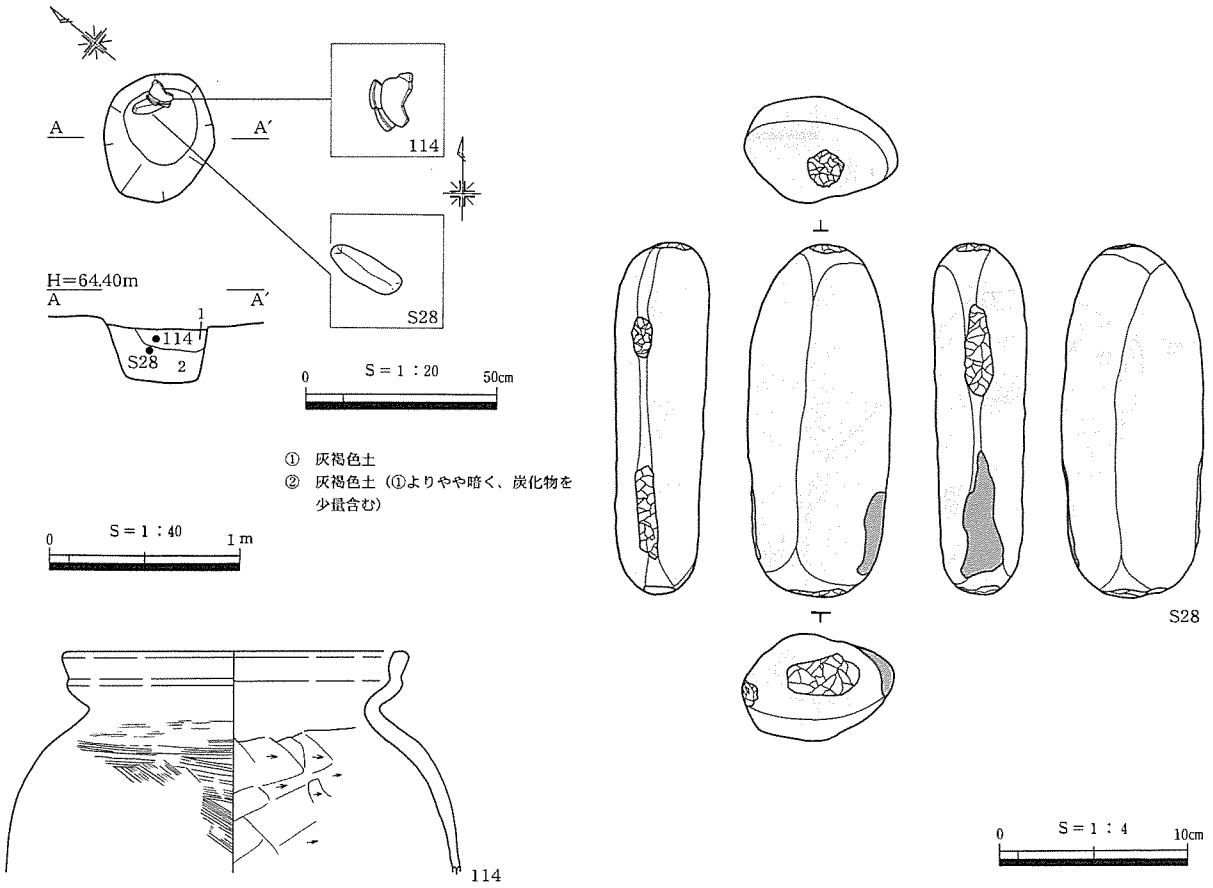
SK34（第62図、PL.17）

東区Ｅ３グリッド、標高64.4mの平坦地に位置する。上部は梨耕作による撹乱を受けて遺存状態が良くない。

平面は楕円形を呈し、長軸86cm、短軸74cmで、検出面からの深さは最大123cmを測る。遺物は出土していないため、遺構の時期は不明であるが、形状から落とし穴と考える。（小谷）



第62図　SK32・33・34



第63図　SK31および出土遺物

（６）ピット

総数126基のピットを検出した。北東側に多く分布している。中央付近から南側にかけての撹乱が著しい範囲からも２基、検出された。南側部分でもまばらな状態であるが検出されている。それらのうちほとんどは径40cm以下のピットであるが、中には60cm以上の径を持つもの、50cmを越える深さを持つものもある。

埋土は暗褐色土系で単層のピットが多いが、黒褐色土、褐色土、灰褐色土のピットもみられる。土器片が出土したピット（19基）もあったが、大半は小片で図化できず、P67を除き時期は不明である。

北東側部分には比較的多くのピットが検出され、それらが方形又は直線上に並ぶ箇所もあったが、ピットの規模が一致せず、また柱痕も見られなかった。遺構面全体に言及できることであるが、果樹園の耕作による撹乱のため、掘立柱建物跡や、柵を構成する柱穴が失われた可能性がある。

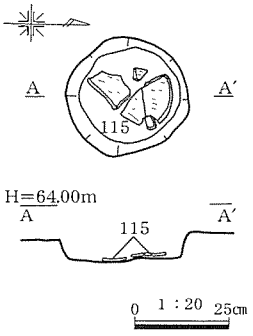
P67（第64・65図、第14表）

東区Ｄ１グリッド、SI12とSB１東溝の間に位置する。SI12とは隣接している。木の根による撹乱のため、遺存状態は良くない。規模は（50×38－17）cmである。ピット底面から土師器甕115が５片に割れた状態で出土した。

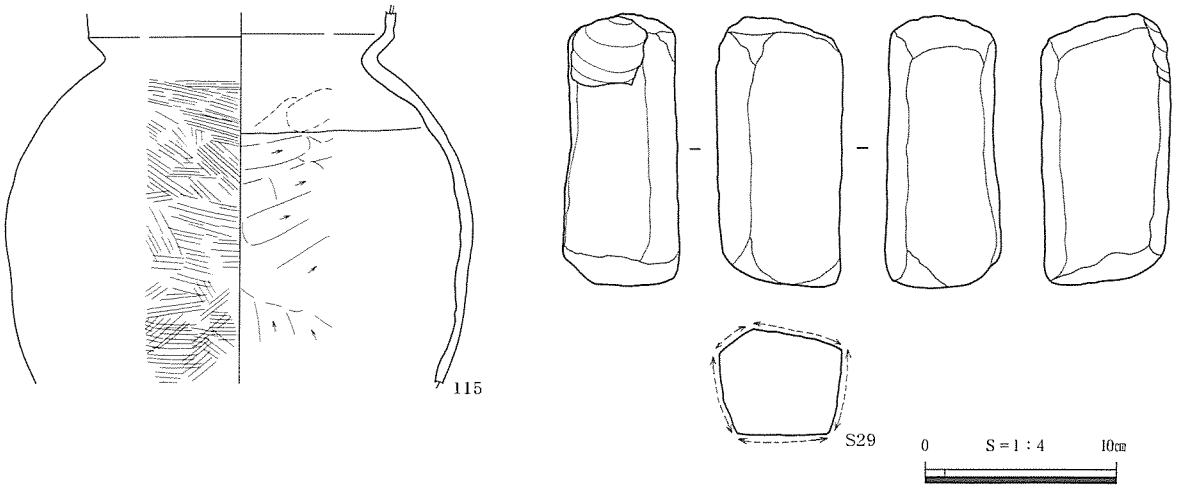
時期は出土遺物から天神川Ⅸ期、古墳時代中期後葉である。（小谷）

P109（第65図、第17表）

Ｊ４グリッドに位置する。天地返しによる撹乱が著しい。ピットの規模は（40×30－37）cmで、中層付近から20cm大の亜円礫が２つ重なるようにして出土した。そのうちS29はデイサイトの砥石である。土器は出土せず、周辺に他のピットは検出されなかった。他遺構との関連及び時期・性格等は不明である。（小谷）



第64図　P67



第65図　P67・109出土遺物

（７）埋葬施設

SX１（第66・67図、巻頭PL.３・PL.18・19・47、第14表）

Ｊ３グリッドの、東側斜面際の平坦面に立地する。東側１ｍにSX２が位置する。古墳時代前期の竪穴住居跡SI41の南隅を切っている。果樹園の耕作に伴う天地返しの際に、重機によって北西側が破壊されている。検出面は表土除去後の地山面で、墳丘の有無は不明である。土坑内に２段積みの石槨が組まれ、その中に蔵骨器が納められていた。

土坑の掘方は長軸1.3m、短軸１ｍの方形に復元される。検出面から底面までの深さは30cmであるが、内側に組まれた石槨が検出面より30cm上まで露出しているので、本来の掘方の深さは60cm以上になるものと推測される。掘方の向き（短軸）は真北から約20度、磁北から約10度西に振るが、地面の傾斜の方向とは無関係であることから、概ね東西南北を意識したものと推測される。

掘方底面の中央部は（47×40－８）cmの範囲が掘り窪められ、（44×27－11）cmの大きさの自然礫が平坦な面を上にして水平に据えられていた。この礫を取り囲むように、（40～50×35－20～25）cm大の自然礫が東側に2個、南側に１個、西側に１個据えられていた。南側の礫は東西の礫に挟まれている。これらの礫は平坦な面が内側に向けられている。この礫の上に、隣り合う礫を跨いで２段目の礫が積まれている。２段目の礫は東側で１個、南側で２個検出した。２段目の西端の礫は天地返しの時に砕かれ、その破片が内側の蔵骨器にめり込んでいる。土坑掘方と石槨との隙間および石槨の下段と上段の礫の隙間は地山土とSI41埋土、つまりは当時土坑を掘ったときに出た土を裏込め土として充填し、石組みが固定されていた。

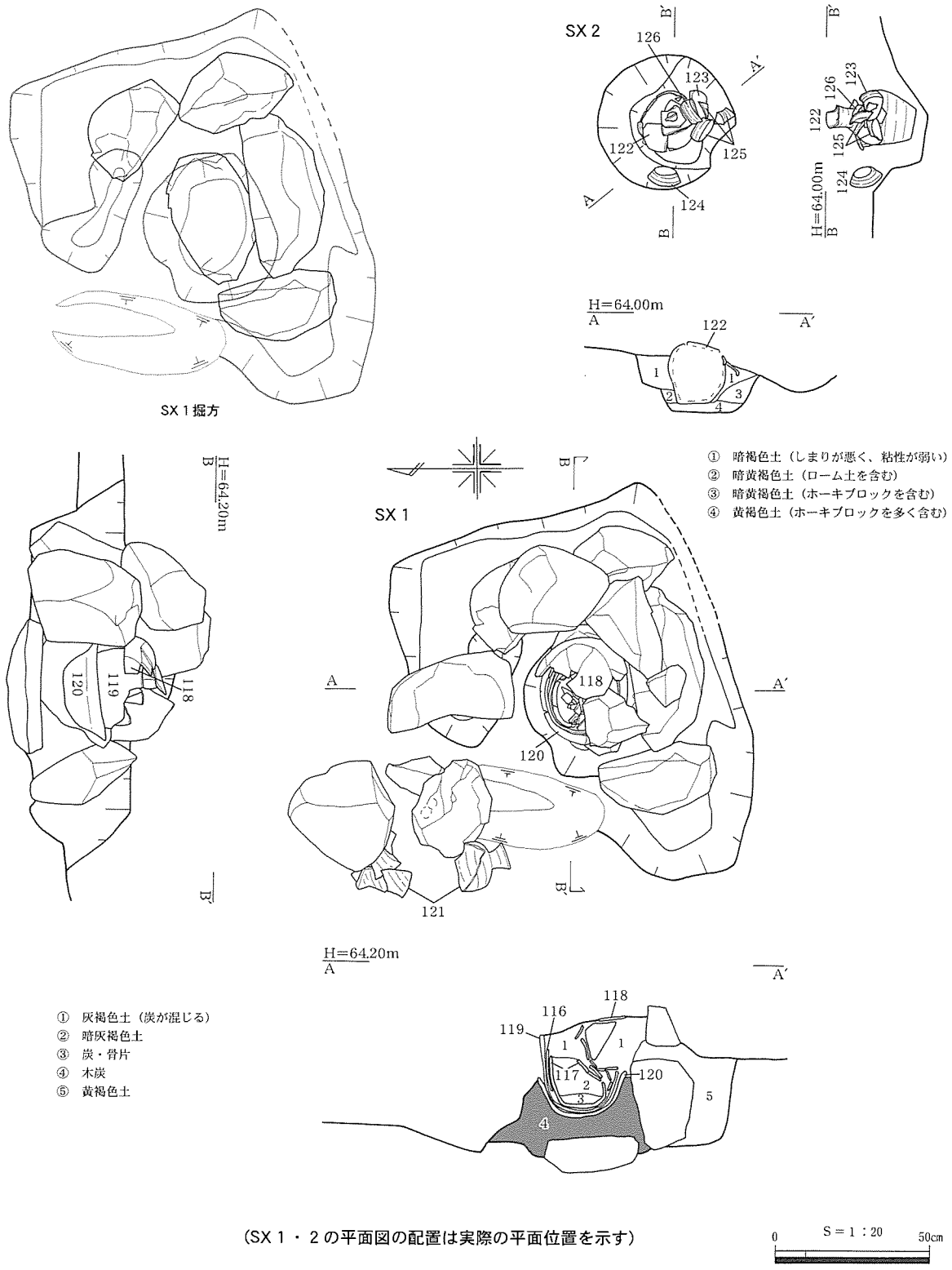
石槨内には握り拳半分くらいの大きさの木炭（４層）が下段の高さまで充填され、その中心に蔵骨器の下３分の１がうずめられていた。木炭層中からは遺物が出土しなかった。

蔵骨器は５点の土師器の組み合わせからなる。これらは日常使用される土器とは異なる形状をしていることから、埋葬のために作られた専用器と呼ぶことができる。内訳は、口縁部の拡がらない甕のような形をした、少しずつ大きさの異なる土器（116、117、119）が３点、三度笠のような形をした土器が１点（118）、底の浅い甕のような形をした土器（120）が１点である。以下は組み合わせの順序である。火葬骨は117の内部に納められていた。厚さは５cm程度である。119は外容器として使われており、117は119の中に納められていた。117が119の中でぐらつかないように、隙間に土師器片が差し込まれていた。116は117の蓋として使われ、117と119の隙間に差し込まれていた。118は119の蓋として使われていた。119は120の中に納められていて、120は木炭の中に口縁部の高さまで埋められていた。蔵骨器は天地返しによって半分が破壊されていた。

石槨内の埋土は、遺構検出時にはほとんど残存していなかったが、砕けた116、118、119の破片を包含する埋土（１層）は炭が混じっており、蔵骨器117の口縁部の高さまで堆積していた。117内の堆積土（２層）はきめが細かく、混入物がない。上部は固くしまっているが、下半から火葬骨（３層）との境目にかけて、徐々にしまりが悪くなっていた。１、２層の堆積状況から、石槨は木蓋が被せてあったと推測される。木蓋が崩落した衝撃で蔵骨器の外容器に亀裂が入り、その隙間から少しずつ土が流入して２層が堆積し、１層は天地返し以降に流入したものと考えられる。

火葬骨は１cm以下の大きさの骨片、骨灰、木炭が均一に混ざった状態であった。分析・鑑定を行っていないため、被葬者の性別、年齢、骨格の部位ともに不詳である。

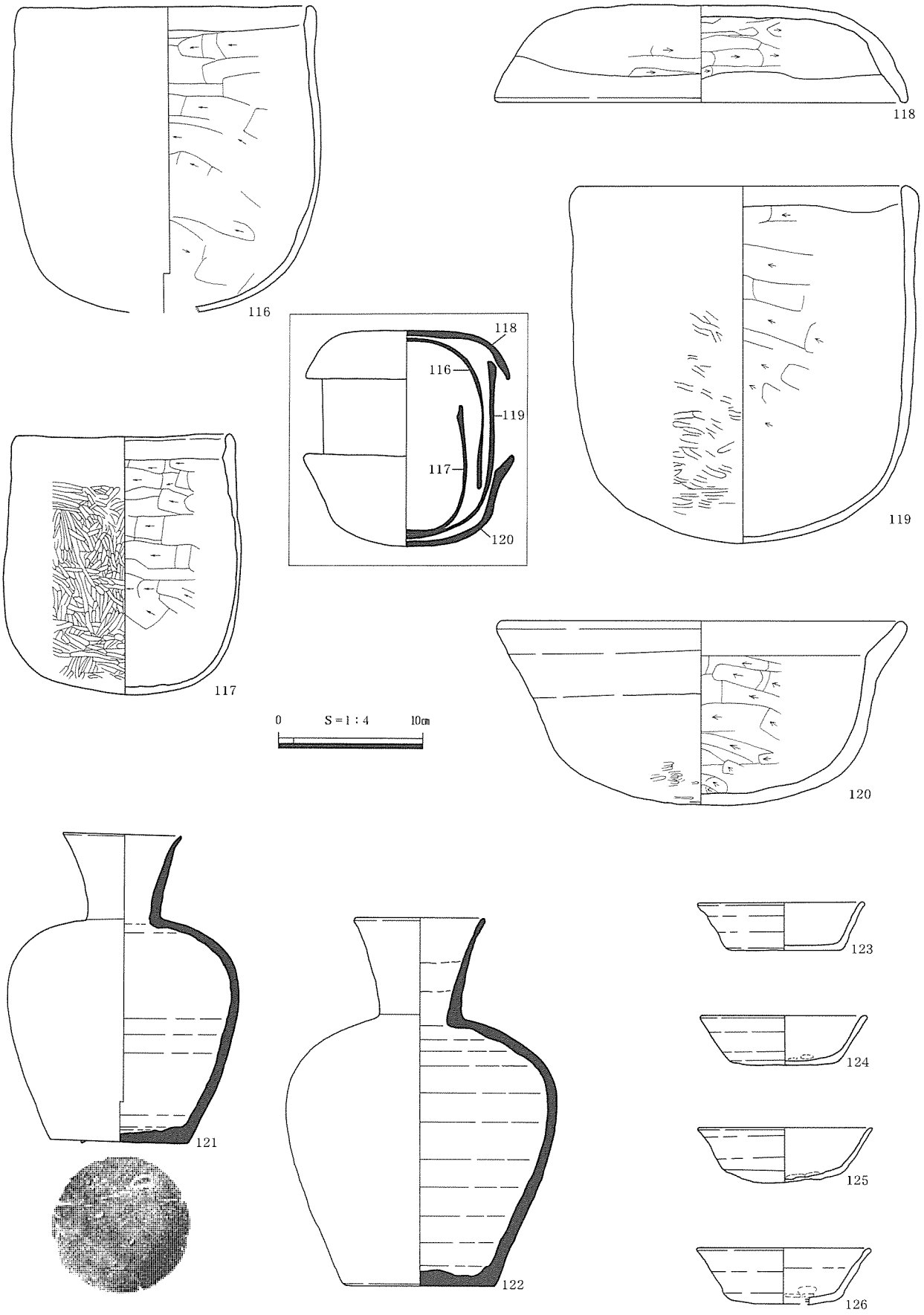
蔵骨器の体部内面はヘラケズリの上からナデ調整が施され、外面は丁寧なヘラミガキあるいはナデ



第66図　SX１・２

が施されるなど、日常容器には施されない仕上げが加えられている。寸法についてはそれぞれが隙間無く組み合わせられる大きさになっている。これらのことからも5点の土器が、SX１の被葬者のためだけに作られた専用の蔵骨器であるといえる。

掘方の北西の外側で、転地返しで移動した石槨の礫とともに須恵器の壺121が出土した。破片の一部が礫の下敷きになっていることから、SX１に伴う土器と考えられるが、本来の位置は不明である。底面に「×」のヘラ記号が刻まれている。



第67図　SX１・２出土遺物

SX２（第66・67図、巻頭 PL.４・PL.18・19・47、第14表）

Ｊ３グリッドの、東側斜面際の平坦面に立地する。西側１ｍに SX２が位置する。検出面は表土除去後の地山面で、墳丘の有無は不明である。土坑内に須恵器の壺と土師器坏が埋められていた。

土坑の掘方は直径43cmの円形である。検出面から底面までの深さは18cmであるが、埋納された須恵器の壺が検出面より15cm上まで露出しているので、本来の掘方の深さは33cm以上になるものと推測される。

土坑の掘方の底面は、３cmの厚さで地山土（４層）が埋め戻されている。これは底面を整地するために施された貼床のようなものと解釈される。４層上面の、掘方の中心に須恵器壺122が据えられ、３、２、１層の順に堆積する。122の上半は破損しているが、耕作によるものと推測される。壺の内部に堆積した土を水で洗浄したが、何も回収できなかった。土師皿123～126は遺構検出面の高さですでに上半が露出していた。須恵器壺の肩部の高さで、壺の西側から完形の坏124、南側から３個体分（123、125、126）の坏の破片が出土した。須恵器壺の埋納途中に土師器坏を配したと推定される。122は SX１の121よりも一回り大きな個体であるが、形状、製作技法ともに同一で、同時期のものと考えられる。123～126は底部がヘラ切りで切り離され、内側から指で少し押し出している。内外面は薄い赤彩が施される。

SX１の時期については、蔵骨器が専用器であり、類例が無いために時期が決定できない。SX２の坏は伯耆国庁第２様式、八峠編年の平安１期、９世紀中ごろのものである。したがって共半する須恵器壺122も同時期のものである。SX１の撹乱中から出土した須恵器壺121が SX１に伴うものであるならば、SX１も９世紀中頃のものと推定される。

SX２の性格については、火葬墓 SX１と同時期の遺構で近接した距離にあり、土器が意図的に埋納されていることから、両者の関連は非常に強いものといえる。確証は無いが、火葬墓と考える。（家塚）

第３節　北区の調査

（１）概要（PL.21）

東区北西部から農道を挟んで連続する地形である。東半は標高61ｍの平坦面で、西半は斜面地となっている。全域において果樹園の耕作に伴う撹乱が著しい。南側は廃棄物投棄のために掘削された坑によって断崖となっている。調査の結果、古墳時代前期の竪穴住居跡３軒と、ピット１基を検出した。農道際で検出した SI24は周堤で囲まれた炉と中央ピットが併設された特殊な住居である。検出面からの掘方の深さが70cm以上あったため果樹園の撹乱の影響をほとんど受けておらず、今回調査した中でも最も遺存状態がよい遺構であった。斜面中腹にあるテラス状の地形に立地する SI23は全調査区域内で、最も標高の低い地点で検出された遺構である。斜面に取り囲まれ、地形的に孤立しているため他の住居と比べると異質な立地である。SI24以西、以北の平坦面の範囲は果樹園の撹乱土から弥生時代後期前葉～古墳時代中期後半の土器が出土したが、遺構は検出されなかった。SI24、26は暗褐色ローム層を掘り込んでいるが、遺構が検出できなかった範囲は暗褐色ローム層がなかった。かつては SI24の北西側にあった高まりが削平されて、浅い掘方の遺構が削平されてしまった可能性が考えられる。しかし地形図の等高線の流れから見て、多く見積もっても最高所で50cm程度の削平であり、東区の天地返し範囲での遺構検出状況を勘案すれば、もともと遺構の密度が低い空間であったと考える。（家塚）

（２）竪穴住居跡

SI23（第68・69図、PL.21・38、第14表）

C11グリッドの、西向きの斜面中腹、標高58mにあるテラス状の地形に立地する。住居跡の位置はかつて梨の木が植えられていたところで、それを掘り返すためにあけられた大穴に多量の廃材が投棄されていた。この影響で大半の埋土が失われ、床面は樹根によって撹乱されていた。

床面の形態は長軸4.5m、短軸4.4mの方形で、床面積は19.8㎡である。検出面から床面までの深さは87㎝で、壁面は60度の角度で立ち上がる。

主柱穴はＰ１（30×28－52）㎝、Ｐ２（35×26－47）㎝、Ｐ３（28×28－40）㎝、Ｐ４（32×30－58）㎝の４基を検出した。主柱穴間距離はＰ１－Ｐ２間が1.6m、Ｐ２－Ｐ３間が1.6m、Ｐ３－Ｐ４間が1.7m、Ｐ４－Ｐ１間が1.6mで、壁面から1.4m内側に配置される。円形の特殊ピットＰ５（41×40－24）㎝が東壁際中央に、方形の特殊ピットＰ６（73×38－36）㎝、Ｐ７（88×48－29）㎝はそれぞれ北西隅と南東隅の対角に位置する。埋土中から遺物が出土していない。

北東隅の壁際で壁溝を検出した。断面は緩いＶ字形で、幅14㎝、深さ４㎝前後である。床面が撹乱されているため、焼土面、貼床の有無について確認ができなかった。土層断面をみると、東壁から1.9m、南壁から1.5mの範囲の床面が、中央から北西側にかけての範囲よりも約８㎝高くなっていることが観察できる。このことから東壁側と南壁側に平面Ｌ字形の高床部分が存在したことが推測される。

甕127は北東隅の床面付近から出土した。口縁下端の突出は鈍く、体部上半はヨコハケ、下半はナナメハケである。128は埋土中から出土した甕または壺の底部片である。

時期は出土遺物から天神川Ⅳ期、古墳時代前期後葉ごろのものと考える。（家塚）

SI24（第70・71図、PL.20・37・48・49、第14・15・17・19表）

Ｃ８グリッド北側、東区から連続する西向きの緩斜面が平坦面へと地形変換する標高約61.2mの地点に位置する。南西側10mにSI26が位置する。

床面の形態は長軸５m、短軸4.7mの隅丸方形である。検出面から床面までの深さは75㎝で、壁面は70度の角度で立ち上がる。

主柱穴はＰ１（44×32－62）㎝、Ｐ２（60×45－66）㎝、Ｐ３（41×38－68）㎝、Ｐ４（43×40－68）㎝の４基を検出した。主柱穴間距離はＰ１－Ｐ２間が2.9m、Ｐ２－Ｐ３間が2.6m、Ｐ３－Ｐ４間が2.8m、Ｐ４－Ｐ１間が2.6mで、壁面から70～80㎝内側に配置される。柱痕跡がＰ１～Ｐ４で確認でき、直径は20㎝である。Ｐ１の断面は柱痕の中心をずれたようである。

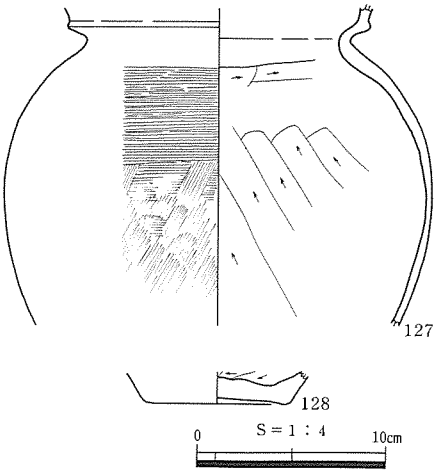
中央ピット（102×88－54）㎝は床面の中央に位置する。上段隅丸方形、下段円形の二段掘りになっている。北西側に周堤（100×40－７）㎝を持つ。Ａ－Ａ′の土層断面では中央ピットの東側の床面に、厚さ６～８㎝の固くしまった土の堆積があり、調査中に出土地点が柱状に残されていたS30は固くしまった土の上に載っていた。これらのことから中央ピットの南東側にも周堤が存在したが、誤って掘り飛ばしたものと考える。中央ピットの底面には炭化物が８㎝の厚さで堆積していた。その上には３層の土が堆積しているが、最上層（５層）は下の２層と比べてしまりが強く、床面の埋土とは異なることから埋め戻されたものと考える。ピットの底面および壁面に被熱の痕跡は認められなかった。

中央ピットの南西側に、幅20～28㎝、高さ４㎝の周堤に囲まれた炉が併設されている。平面の形態は隅丸の長方形であり、周堤を含めた規模は（152×48）㎝で、周堤の内側は（90×40）㎝であ

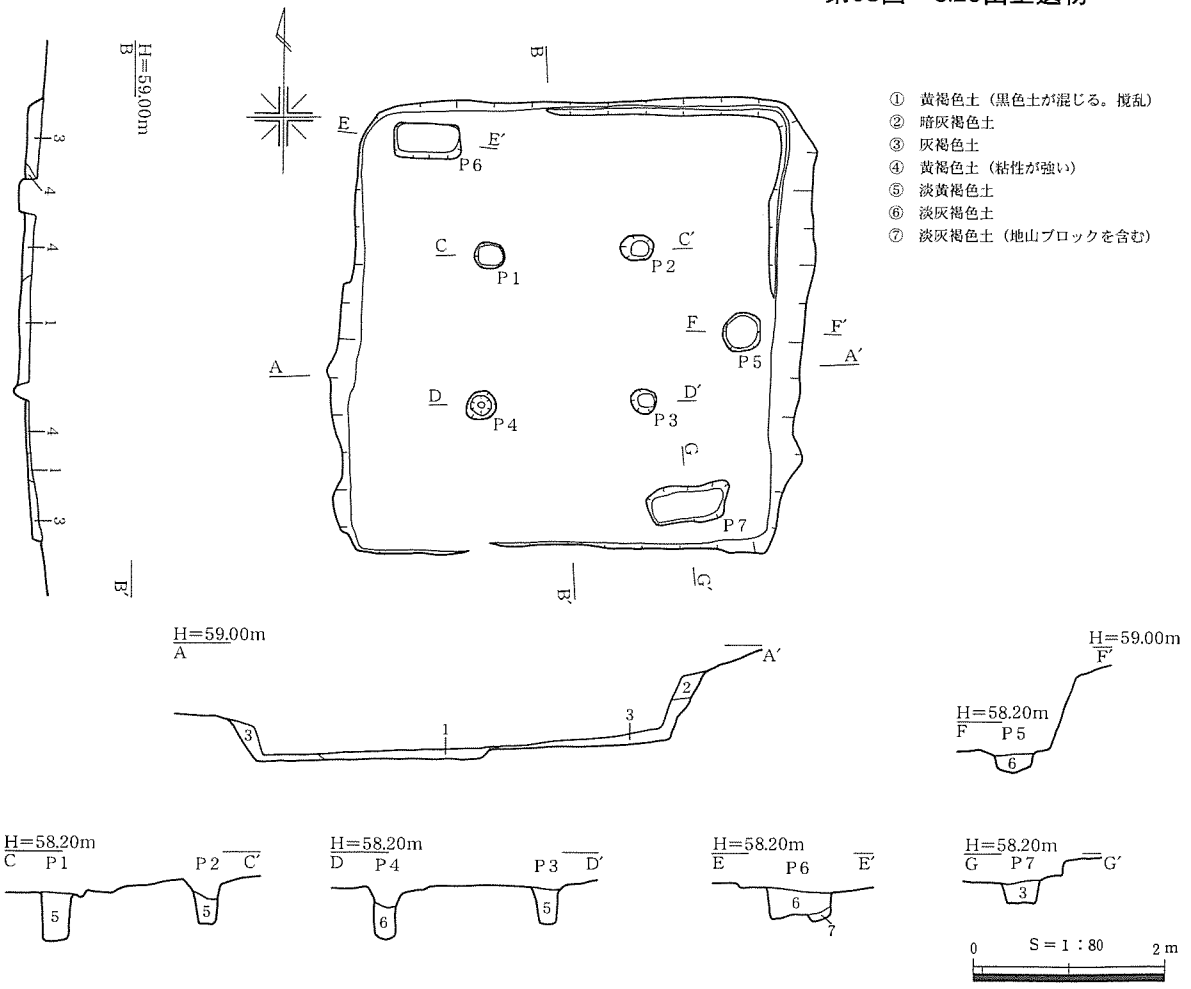
る。周堤の上面から炉底までの深さは８cmであり、住居の床面から４cm掘り窪められている。炉内には炭化物が周堤の高さまで堆積しており、北西側は炉外の床面にあふれていた。炭化物は木炭の細粒と灰で、遺物は出土していない。炭化物除去後の底面は平坦で、被熱による変色や著しい硬化は認められなかった。土層断面Ｈ－Ｈ′をみると、炉の周堤が中央ピットの掘方上段を埋めて作られていて、中央ピットの埋め戻し土が炉の周堤を埋めているのが分かる。炉の周堤と中央ピットの周堤は繋がって一体のものとなっている。掘り下げ中に断面を観察したが、炉の周堤をあとから取り付けたような痕跡は確認できなかった。このことから中央ピットと炉は同時に作られ、その後中央ピットが埋め戻されたと考えられる。

壁溝は壁際を全周する。断面は緩いＶ字形で幅16cm、深さ６cmである。床面に貼床は施されていない。焼土面がＰ１－Ｐ２間に１箇所検出された。埋土は自然堆積と考えられる。

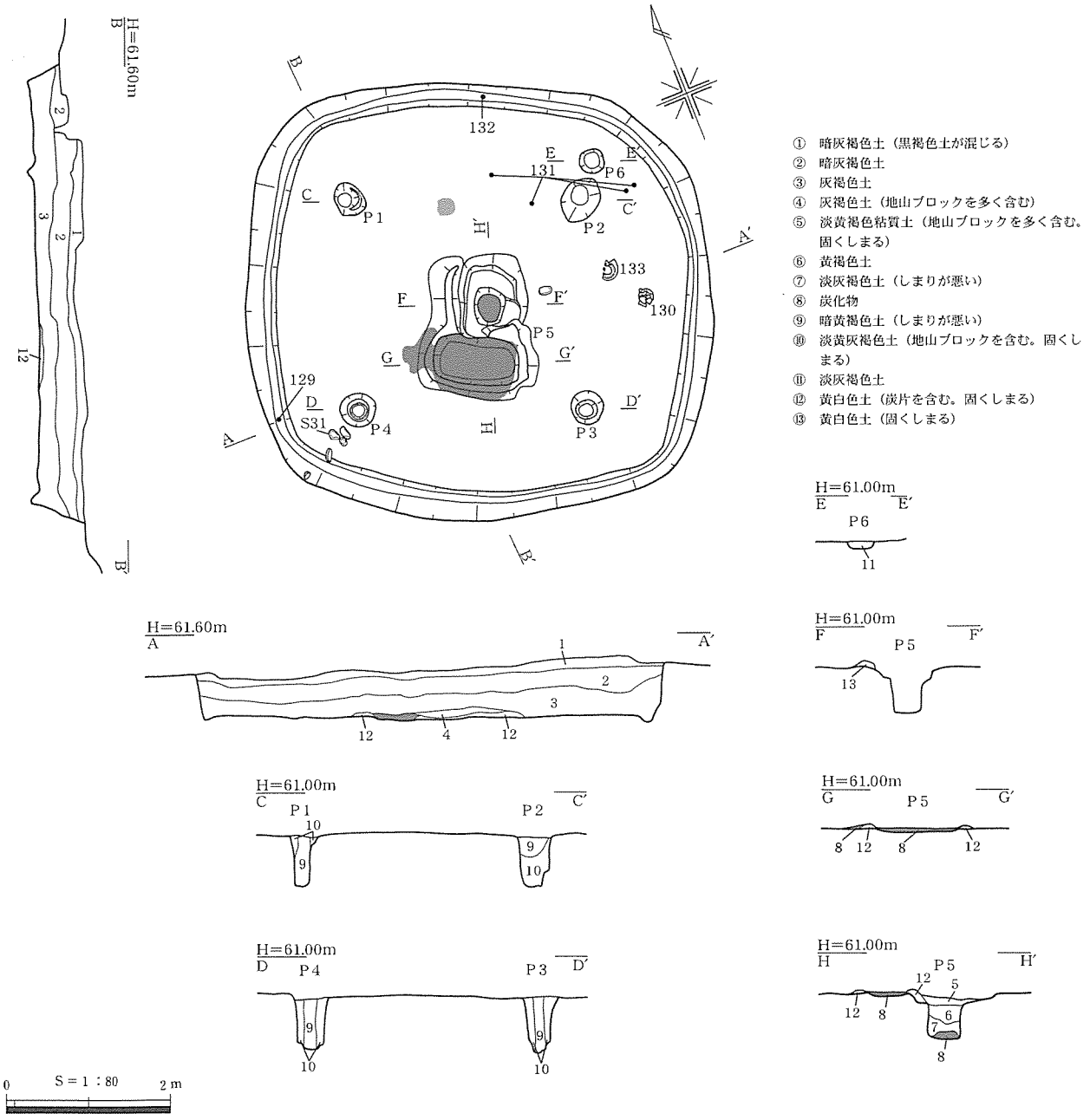
床面直上および床面付近から土器、石器、鉄器が出土した。甕130、鼓形器台133はＰ２－Ｐ３間の床面直上から出土した。130は完形品で、横倒しの状態でひびが入っていた。胴部は肩が張っている。133は正立した状態であったが頸部が崩れ、口縁部が破損していた。器高が高く、口径も大きい。壁溝の埋土から出土した132は133の破片の可能性があ



第68図　SI23出土遺物



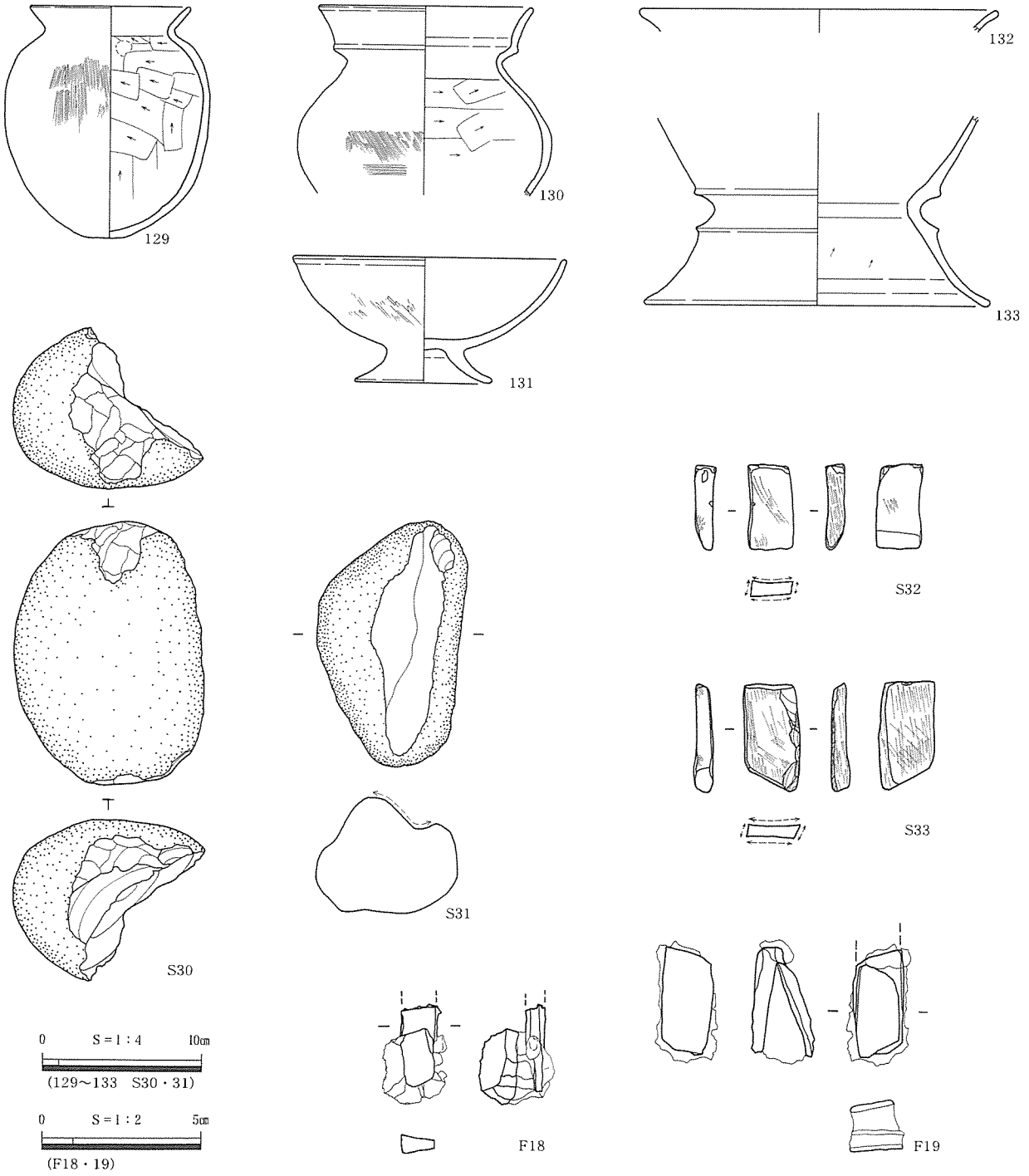
第69図　SI23



第70図　SI24

る。西隅の壁際付近の埋土中から出土した甕129は単純口縁と長胴の胴部という、当地域での同時期の土器には見られない形態的特徴を示すことから、他地域の影響を受けたものと考える。低脚坏131は床面および埋土中出土の破片が接合した。Ｐ４の南西側の床面上および壁面にめり込んだ状態で安山岩およびデイサイトの亜円礫が出土した。その内の１点であるS31は溝状の砥面を１条有しており、原礫面に炭化物が付着していた。S30は中央ピットの周堤上に載っていたと復元される安山岩の敲石である。この敲石の表面にも煤が付着していた。砥石S33はＰ３西側の床面で出土した。石材は滑石である。砥石32は埋土中から出土した。石材は流紋岩である。F18は中央ピット付近の床面で出土した、幅1.1㎝、厚さ0.6㎝の棒状鉄製品で、F19は床面近くの埋土中から出土した、幅1.7㎝、厚さ0.2㎝の棒状鉄製品である。どちらも二つに折り曲げられている。形状から鉈の基部と推測する。

時期は出土遺物から、天神川Ｉ期、古墳時代前期前葉ごろのものと考える。　（家塚）



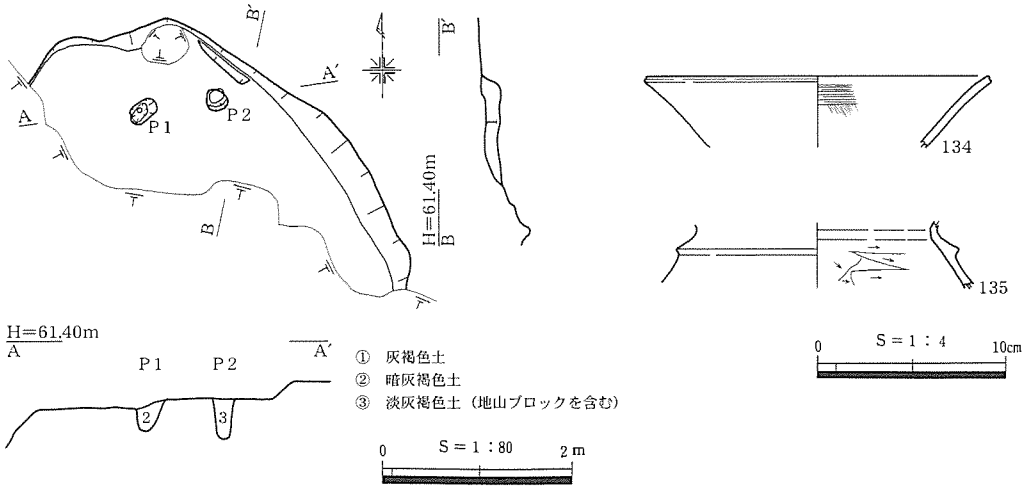
第71図　SI24出土遺物

SI26（第72図、PL.21・38、第15表）

Ｃ９グリッドの南西向きの緩斜面、標高60.8m に立地する。北東側10mに SI24が位置する。

南側の大半が撹乱によって失われているが、残存部の形状から床面の平面形態は隅丸方形に復元できる。残存範囲の長軸は4.4m、短軸は1.6m、検出面から床面までの深さは26cmである。

床面で２基のピットＰ１（32×20－32）cm、Ｐ２（23×23－41）cmを検出した。復元される隅丸方形の床面の隅に位置することから主柱穴と考えられるが、同時に２本立っていたのか、建て直しに



第72図　SI26および出土遺物

伴い柱の位置を替えたのかどうかは不明である。壁溝は北東側の壁際で僅かに検出された。幅10cm、深さ５cmで、全周していたかどうかは床面の保存状態が悪いために不明である。貼床、焼土面は検出していない。埋土は１層で、残りが悪かった。

埋土中から土器片が出土したが、器種、時期が判別できるものは少なかった。134、135は鼓形器台の破片である。径の大きさは復元値で小片のため信頼性を欠くが、小型化する前の段階と考えられる。

時期は出土遺物から、天神川Ⅰ～Ⅱ期、古墳時代前期前葉ごろのものと考える。　（家塚）

（３）ピット

C11グリッド内、西側の斜面中腹、標高59mにおいてP56（23×22－18）cmを検出した。SI23の後背斜面上の２m東側に位置する。埋土は灰褐色土でSI24の埋土とよく似ている。位置関係からこのピットは例えば垂木を固定するための杭であるなど、SI23に関連するものと考えられる。遺物は出土しなかった。　（家塚）

第４節　南区の調査

（１）概要

南区は北西―南東方向に細長い調査区である。東区とは地形的に連続し、北区とは谷を挟んで向かい合う。標高は約65～67mであり、北区より３～５mほど高い。地形はおおむね平坦であるが、丘陵の高所側である南東側から谷に面した北西辺に向けてわずかに傾斜している。北東辺が段状に大きく削平されている他に、果樹園に関係する撹乱の影響が調査区全域に及んでいる。それでも、遺構の遺存状況は北区、東区と比較すると良好である。調査の結果、竪穴住居跡14軒（建て替えによる重複２軒を含む）、土坑12基、柵列２条、ピット８基を検出した。また、北側の谷に面した斜面地形であるG13、G14、G15グリッド付近には包含層が堆積しており、弥生時代後期～古墳時代中期の土器・石器が多く出土した。竪穴住居跡は、弥生時代後期中葉（清水編年Ｖ－２様式期）のもの１軒（SI34）、後期後葉（同Ｖ－３様式期）のもの５軒（SI25、31（旧）（新）、35、47）、古墳時代前期のもの２軒（SI32、33）、古墳時代中期中葉～後葉のもの４軒（SI38、39、40（旧）（新））、時期決定の根拠を欠くもの２軒（SI36、37）である。これらのうちSI31（新）、33は焼失住居である。土坑は弥生時代後期後葉～終末のもの８基（SK５、６、７、８、10、13、14、22）、時期不明のもの４基（SK12、25、27、28）である。弥生時代後期～終末の土坑のうち、SK13を除く７基は断面が袋状を呈する土坑であり、貯蔵穴としての機能が想定される[註]。また、時期不明の土坑のうちSK25、27、28は、その形態から縄文時代の落とし穴と考えられる。柵列は、SA１は時期不明であるがSA３は弥生時代後期中葉の可能性が高い。また、ピットの多くは時期・性格ともに不明であるが、Ｐ１からは古墳時代中期の小型丸底壺が完形で出土した。

以上のように、南区における弥生時代以降の集落の展開は後期中葉に始まり、後期後葉を最盛期として古墳時代中期～後期初頭まで継続する。遺構の分布をみると、弥生時代後期～古墳時代前期の遺構は調査区中央からやや東寄りにかけての範囲に集中している。この付近では住居跡が互いに近接している他、土坑・貯蔵穴のうち４基が住居跡と重複している。一方で、古墳時代中・後期の住居跡はこれらとは空閑地を隔てて、調査区の西側に散在している。

南区の特徴として、弥生時代後期後葉の貯蔵穴が多い点をあげられる。さらに、住居跡と重複する貯蔵穴はすべて住居に後出することから、後期後葉の時期幅の中で土地利用のあり方に変化が起こった可能性も考えられる。（君嶋）

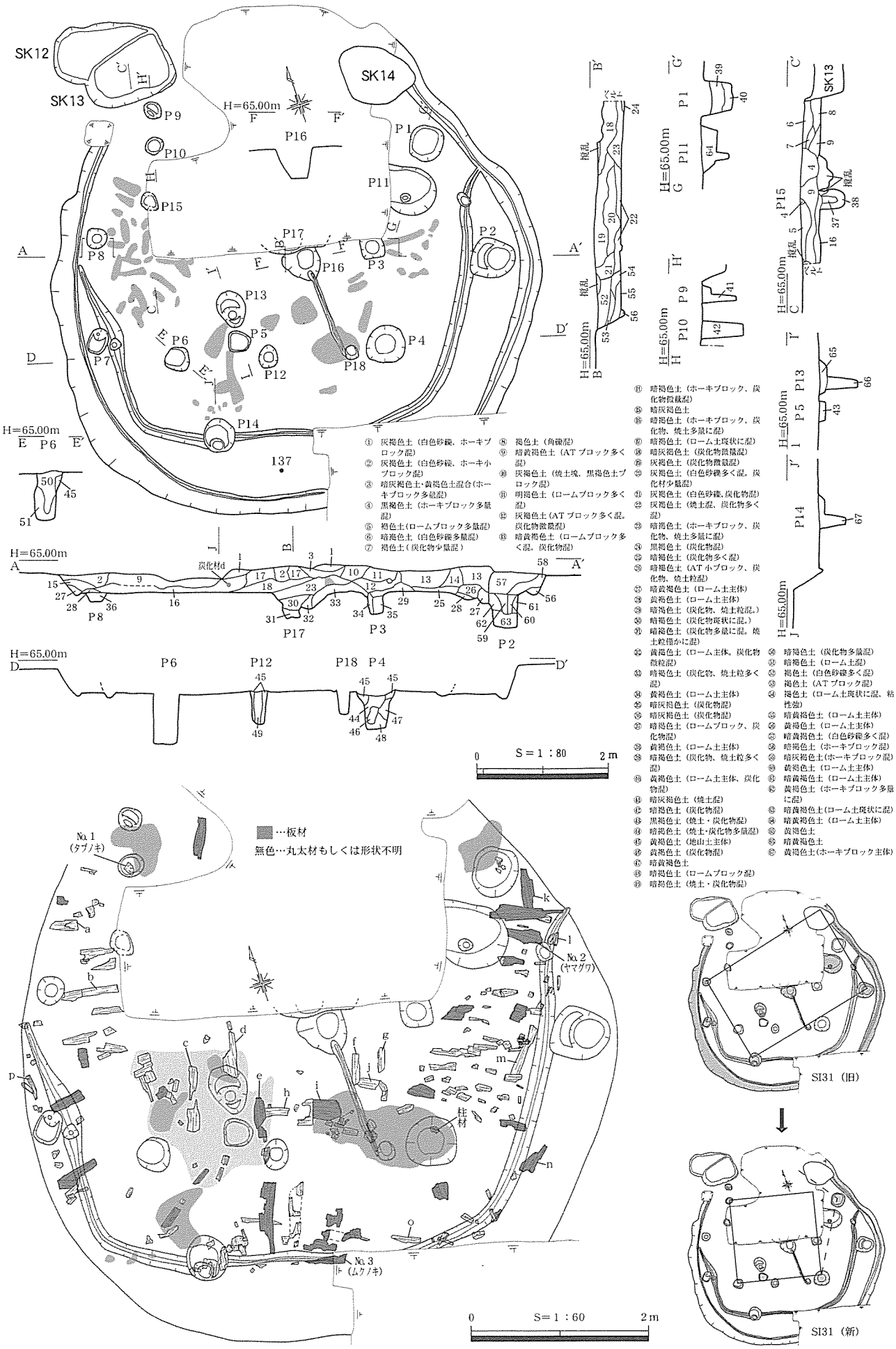
註）八峠　興　2000「弥生時代の集落内における貯蔵穴の役割―東伯耆を中心として―」
『島古墳群　米里三ノ嵜遺跡　北尾釜谷遺跡（北尾古墳群）』鳥取県教育文化財団

（２）竪穴住居跡

SI31（第73・74図、PL.22・43、第15表）

Ｉ12・Ｉ13グリッド、標高64.8mの平坦面に位置する。果樹園に関係する撹乱によって、床面中央から北壁にかけての範囲と、南東隅の一部分とが大きく方形に破壊されている。また、北西隅ではSK12・13と、北東隅ではSK14とそれぞれ重複しているが、切り合い関係よりこれらの土坑はいずれも本住居跡に後出する。北側にSI32が、東側にSI36が近接する。また、西側は遺構の確認されていない空閑地である。

本住居跡は焼失住居であるが、東・南・西壁から0.4～1.0m内側の床面に方形の壁溝が巡っており、

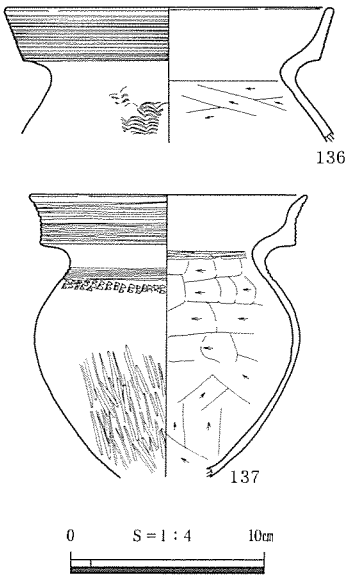


SI31（新）焼土・炭化材検出状況

第73図　SI31

SI31 建て替え模式図

炭化材及び焼土の出土はこの方形の壁溝より内側に限られる。したがって、本住居跡は新旧２軒の住居が重複したものであり、これらのうち古い住居の埋没後に構築された方形の住居が焼失によって廃絶されたものと判断される。



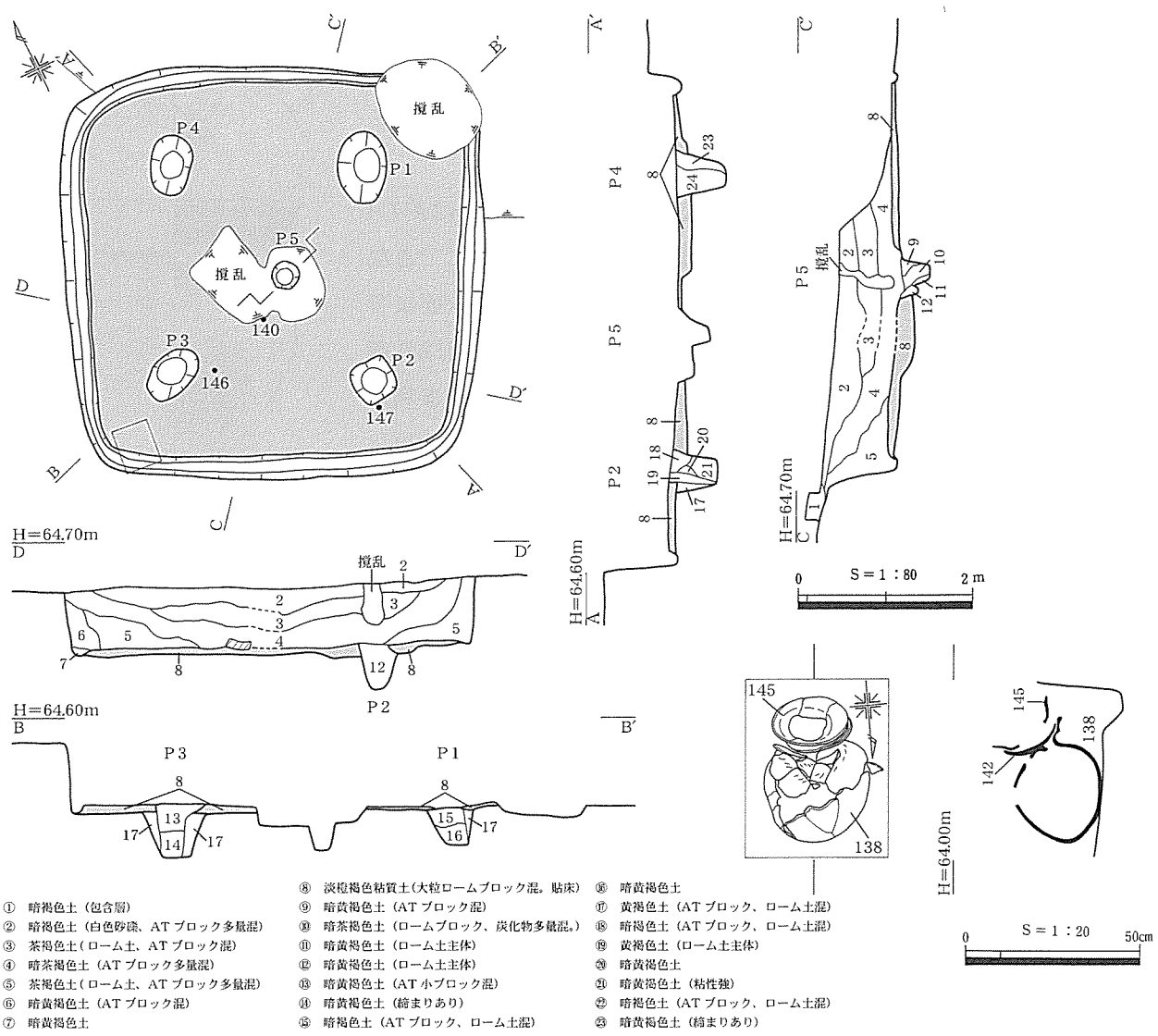
第74図　SI31出土遺物

SI31（旧）は円形ないし楕円形を呈し、東西方向の最大径は約7.4ｍである。北壁が破壊されているため南北方向の長さは明確にできないが、復元すれば7.3～7.4m程度と考えられる。検出面から床面までの深さは、最も残りのよい南東壁付近で約40cmである。壁面は外側に傾斜して立ち上がる。床面は基盤土であるホーキ層をそのまま利用しており、貼床は認められない。床面の周囲には壁溝が巡り、検出した範囲内では全周する。

床面で検出したピットのうち、Ｐ２、Ｐ７、Ｐ８、Ｐ11、Ｐ13、Ｐ14、P16の７基については、SI31（新）の外側に位置すること、あるいは埋土に焼土や炭化物を含まないことからSI31（旧）に伴うものと判断される。規模と位置関係から主柱穴と考えられるものはＰ２、Ｐ14、Ｐ８であり、これらはほぼ長方形の配置をとる。したがって、本来はもう１基の主柱穴がSK14の位置に存在していたものと推測される。それぞれの規模は、Ｐ２（70×65－50）cm、Ｐ14（52×48－40）cm、Ｐ８（35×32－15）cmである。主柱間の距離は、Ｐ２－Ｐ14間が5.2m、Ｐ14－Ｐ８間が3.6mである。また、P16はいわゆる中央ピットに相当する。住居の埋土は褐色土、暗黄褐色土を主体とする。埋土中からは土器片十数点が出土したが殆どが小片である。南壁際の床面上からは、甕形土器137がつぶれた状態で出土した。Ｖ－３様式の特徴を示すことから、SI31（旧）は弥生時代後期後葉の住居と考えられる。

SI31（新）の東、南、西辺については壁溝によって認識されるが、北辺についてはSI31（旧）と同様に撹乱によって破壊されているため、全体の形状は不明である。ただし、東、西辺の壁溝がSI31（旧）の壁溝に合流する形で途切れていることから、北半部の壁をSI31（旧）と共有した不整多角形であった可能性も考えられる。その場合、各辺の長さは南辺約4.5m、南東辺約3.6m、南西辺約2.5m、東西方向の長さは最大で約6.8mとなる。床面は（旧）住居の床面と同じレヴェルであり、貼床は認められない。SI31（新）に伴うと考えられるピットはＰ１、Ｐ３、Ｐ４、Ｐ５、Ｐ６、Ｐ９、Ｐ10、Ｐ12、Ｐ15、Ｐ17の10基である。これらはいずれも埋土中に焼土ないし炭化物が流入している。規模と位置関係から主柱穴と考えられるのはＰ４、Ｐ６、Ｐ10である。Ｐ１も主柱穴の候補ではあるが、これら４基を結ぶとややいびつな長方形の配置となる。ただし、床面北側の撹乱部分に本来主柱穴が存在していた可能性もある。したがって、主柱配置としてはＰ４、Ｐ６、Ｐ10と失われた１基による４本柱、あるいはこれにＰ１を加えた５本柱の可能性が考えられる。これら主柱穴の規模は、Ｐ１（55×50－48）cm、Ｐ４（62×58－58）cm、Ｐ６（40×40－75）cm、Ｐ10（30×24－64）cmである。主柱間の距離は、Ｐ１－Ｐ４間、Ｐ４－Ｐ６間、Ｐ６－Ｐ10間のいずれも約3.2mである。なお、Ｐ４、Ｐ10では柱材が炭化した状態で遺存していた。また、P17は中央ピットに相当し、（旧）住居の中央ピットP16を破壊して掘り込まれている。

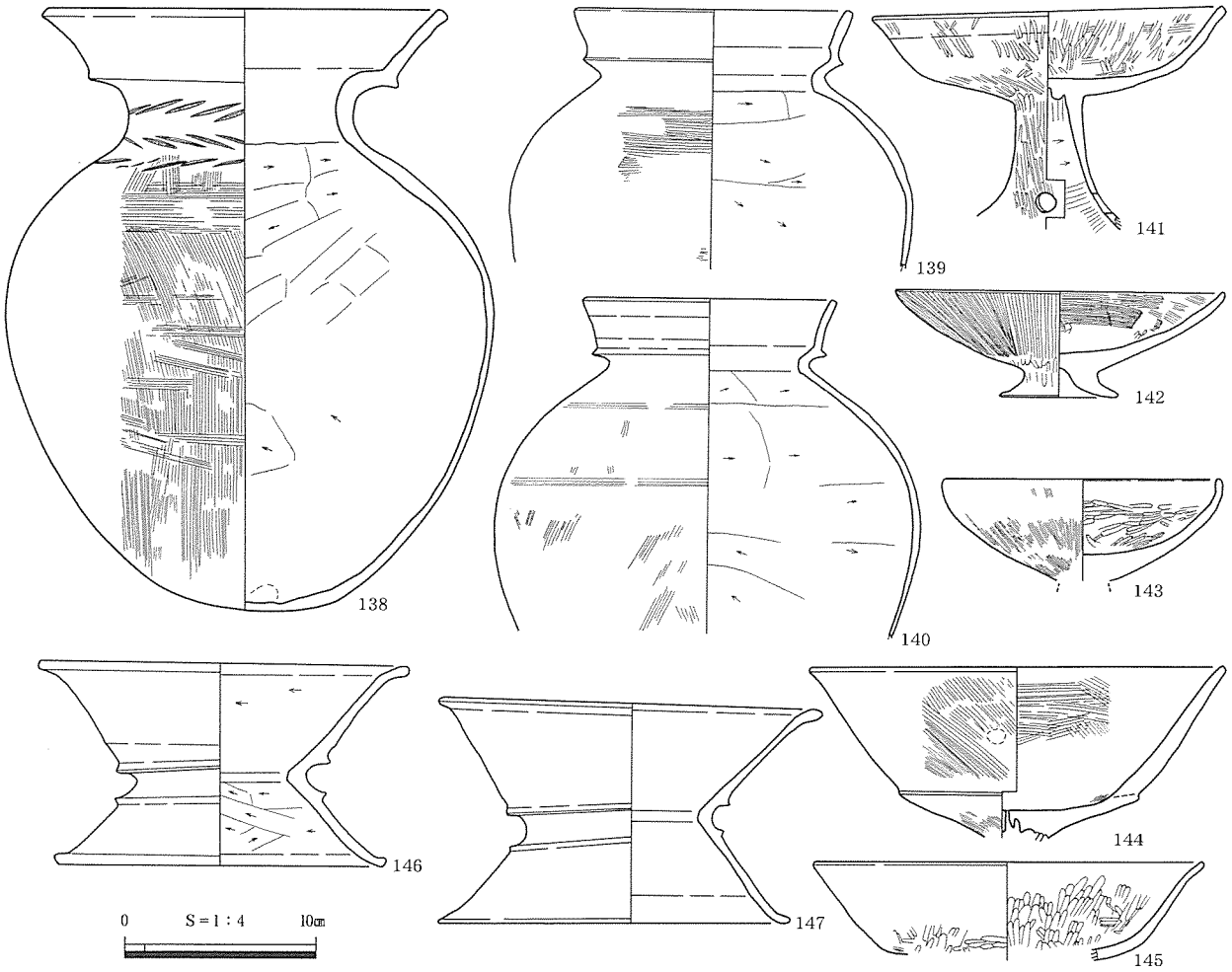
埋土中および床面直上からは多量の炭化材が良好な状態で出土した。これらはすべて木質であり、草本質のものは確認されなかった。住居内のほぼ全域から出土しているが、南東、南西の隅角部分で



第75図　SI32

はやや少ない。壁溝際では壁溝に直交する部材が多く検出されており、垂木材と考えられる。これらは床面に密着しているもののほかに、住居内に倒れこむように折れ曲がり、住居内側の端部のみが床面に接地した状態のものもある。形状を確認できたものでは板材が多いが、西壁際のａ、ｂは上面が刳りこまれたような断面Ｕ字形を呈している。主柱穴間を結ぶ線の内側には、南北方向を向くもの（ｃ～ｇ）とこれに直交するもの（ｈ～ｊ）とがある。（ｃ）～（ｇ）は、住居の中心を向いているようにも見受けられるが、放射状ではなくそれぞれが平行な配列で検出された。（ｅ）を除いて丸太材である。（ｄ）は焼土塊の上面で出土した。（ｈ）、（ｊ）は南北方向をとる（ｅ）、（ｆ）の下面で直角に組み合っている。（ｊ）は角材の可能性もある。（ｉ）は床面に密着して出土した扁平な板材である。床面の構造に関連する部材、あるいは木製品の可能性もある。その他に、壁溝際で壁溝と平行して検出された部材がある（ｋ～ｐ、№３）。形状は板材と丸太材とがあり、出土位置も床面上のものとやや高い位置のものとがある。床面上の（ｋ）、（ｍ）はいずれも垂木材の下からの出土である。板材である№３は住居内に倒れこむように斜めになって出土した。これらは壁面の構造に関係する部材であろうか。なお、これら炭化材のうち３点について樹種同定を行ったところ、主柱材№１はタブノキ、垂木材№２はヤマグワ、壁際の部材№３はムクノキとの結果を得た（第５章第２節参照）。

住居の埋土は複雑な堆積状況を示している。住居の縁辺では水平ないしレンズ状に堆積しているも



第76図　SI32出土遺物

のの、中央部の上層には２層、10層、11層などの灰褐色土がブロック状の単位で堆積している。床面直上の16層、23層、33層は焼土粒、炭化物、炭化材を多量に含む。Ｐ５・P13付近では、床面上に炭混土が厚さ10cmほどで堆積しており、その上面の２箇所で締まった焼土が堆積していた。焼土のまとまりはその他に主柱穴付近の４箇所に認められた。これらはすべて床面直上ないし２～５cmの間層を挟んで堆積したもので、厚さは５～10cmである。床面上にはこの他に、被熱して赤化した面が多数認められる。その形状から、床面上で燃え続けた部材を原因とするものであろう。撹乱坑際の断面での観察によれば、これらの赤化は床面下２cmの深さにまで及んでおり、焼失の初期段階で床面上に落下した部材が長時間高熱を保ち続けたことが推測される。

遺物は、埋土中から土器の小片十数点が出土したものの、時期を判断できる個体は殆どみられなかった。ただし、先行するSI31（旧）と、後出するSK14がともに弥生時代後期後葉であることから、SI31（新）も同様の時期と推測される。なお、丸太材（ｃ）について^{14}C年代測定を行ったところ、３世紀中葉～４世紀初頭の値が得られた（第５章第１節参照）。

以上のように、本住居跡の調査は、建て替えによる住居規模の縮小が行われたことを確認できた点で貴重な例となった。　（君嶋）

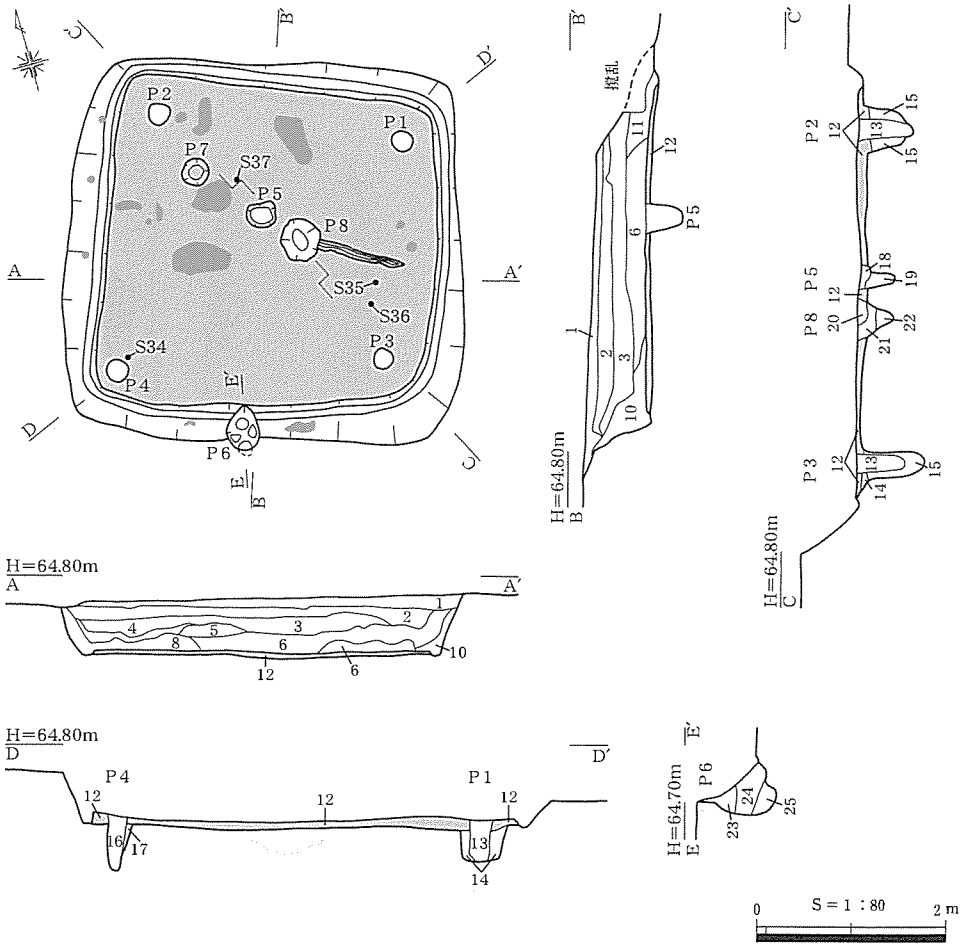
SI32（第75・76図、PL.23・39～41、第15表）

H12・H13グリッド、標高63.6～64.5mの緩斜面に位置する。南側にはSI31、SK12・13が近接する。北側は谷に面し、西側は遺構の確認されていない空閑地である。北東隅角と床面中央付近を撹

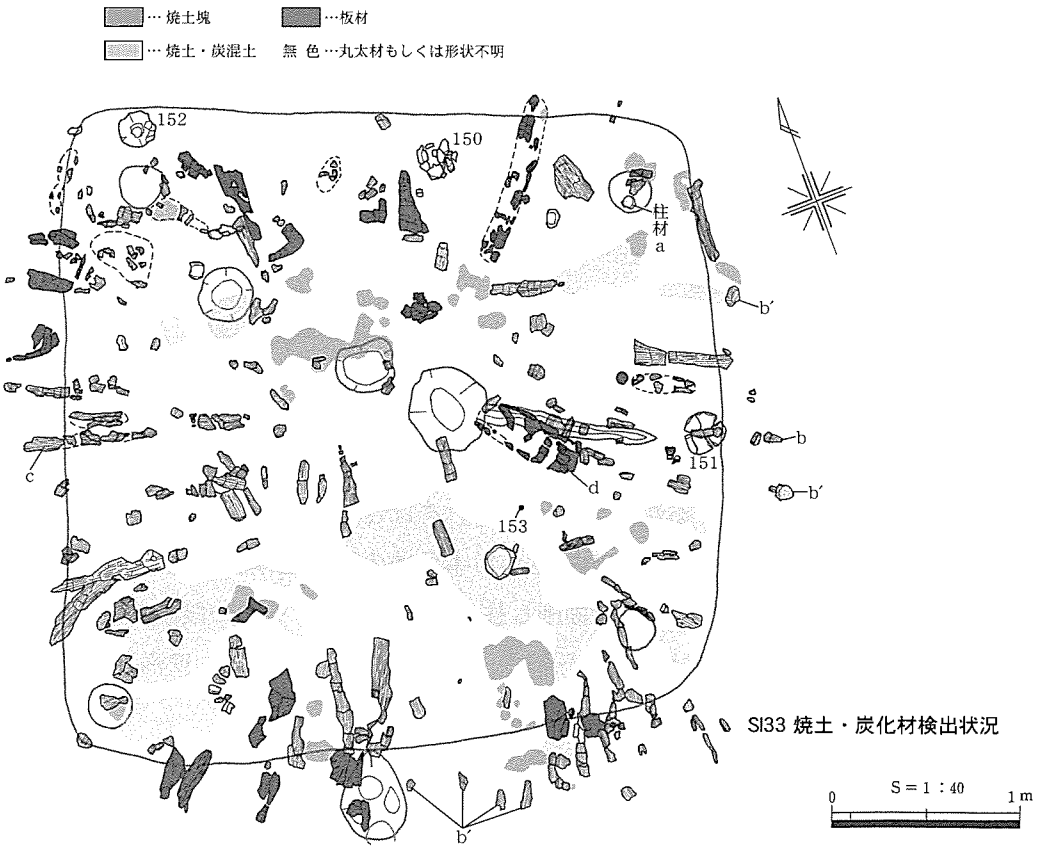
乱によって破壊されているものの、遺存状況はおおむね良好である。平面形は長軸4.8m、短軸4.7mの隅丸方形を呈する。検出面から床面までの深さは、最も残りのよい南壁付近で約70cmである。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。床面は、全面がローム土質の淡橙褐色土による貼床である（８層）。厚さは約10cmであるが、主柱穴（Ｐ２、Ｐ４）付近の２箇所では特に厚く、15～20cmに達する。壁際には壁溝が全周する。幅は15～20cm、深さは約10cmである。床面ではピットを５基検出した。これらのうち規模と位置関係から主柱穴と考えられるのはＰ１～Ｐ４の４基である。これらのうちＰ１～Ｐ３については、主柱を立てた後に貼床が施されているため、貼床面で確認できたのは柱痕のみである。その規模はＰ１（54×45－42）cm、Ｐ２（38×36－52）cm、Ｐ３（56×42－62）cmであり、使用された柱材の大きさはこれらの数値に近いと考えられる。また、Ｐ４の掘方の規模は（70×45－56）cmであり、土層断面より径25cm前後の柱材の使用が想定される。柱間距離は、Ｐ１－Ｐ２間から順に2.5m、2.3m、2.3m、2.2mである。Ｐ５はいわゆる中央ピットに相当する。撹乱により本来の輪郭は失われているが、およそ径30cm、床面からの深さ約45cmである。埋土は炭化物の多く混じった暗茶褐色土である。住居全体の埋土は暗褐色土、茶褐色土を主体とし、自然に埋没した状況を示している。遺物は、埋土中および床面上より土器片が数十点出土した。壺138は南西隅角の床面直上から、南壁に立てかけたような状態で出土した。口縁部には低脚坏142で蓋をし、さらに脚部を打ち欠いた高坏坏部145をかぶせていた。138の内部には、胴部の割れ口から埋土が流入していたが、本来の内容物については不明である。床面上からはその他に140、146、147が出土しており、146、147はいずれも完形に近い状態に復元できた。また、139、141、144は床面から数cm浮いた高さからの出土であり、いずれも遺存度の高い破片である。床面出土の土器は天神川Ⅱ～Ⅲ期の特徴を備えていることから、本住居跡の時期は古墳時代前期中葉と考えられる。（君嶋）

SI33（第77・78図、PL.24・41・48、第15・17表）

調査区中央よりやや東のH12・Ｉ12グリッド、標高63.9m～64.6mの緩斜面に位置する焼失住居跡である。付近には住居跡が集中しており、西側にSI32が、南西にSI31が、南側にSI36が位置する。東側に隣接するSI34とは重複しているが、切り合い関係からSI33がSI34に後出する。北側の1/4程度が削平を受けているが、床面の遺存状況はおおむね良好である。平面形は方形を呈し、検出面での規模は南北4.1m、東西4.2m、床面積は約17.5㎡である。検出面からの深さは、最も残りのよい南壁側で約60cmである。壁面はやや外側に傾斜して立ち上がる。壁溝は全周を巡り、幅15cm～20cm、深さは３cm～４cmである。床面には、ローム土質の黄褐色土によって厚さ５～10cmの貼床が全面に施されている（12層）。貼床面では６基のピットを検出した。これらのうち、規模および位置関係から主柱穴と考えられるのはＰ１～Ｐ４である。これらは貼床によって柱の掘方が覆われており、貼床面では柱痕のみを明瞭に確認できた。これは焼失により主柱が立ったまま廃絶されたことに由来する。腐朽し空洞化した柱痕に住居内の炭化材や焼土が流入したため、柱痕が明瞭に残ったのであろう。主柱穴の柱痕の規模はＰ１（22×20－42）cm、Ｐ２（24×22－60）cm、Ｐ３（22×22－52）cm、Ｐ４（24×20－60）cmであり、これらの数値が主柱の大きさに近いと考えられる。また、Ｐ１には柱材が炭化して遺存していた（ａ）。Ｐ８はいわゆる中央ピットに相当し、長径45cm、短径40cmである。周堤は伴わず、貼床面から掘り込まれている。また、Ｐ８から東に向かって溝が伸びている。この溝も貼床面でのみ検出できたもので、貼床下までは達していなかった。Ｐ７は貼床下で検出したもので、焼土が詰まった状態であった。ただし炭化物は含まないことから、住居構築時、あるいはそれ

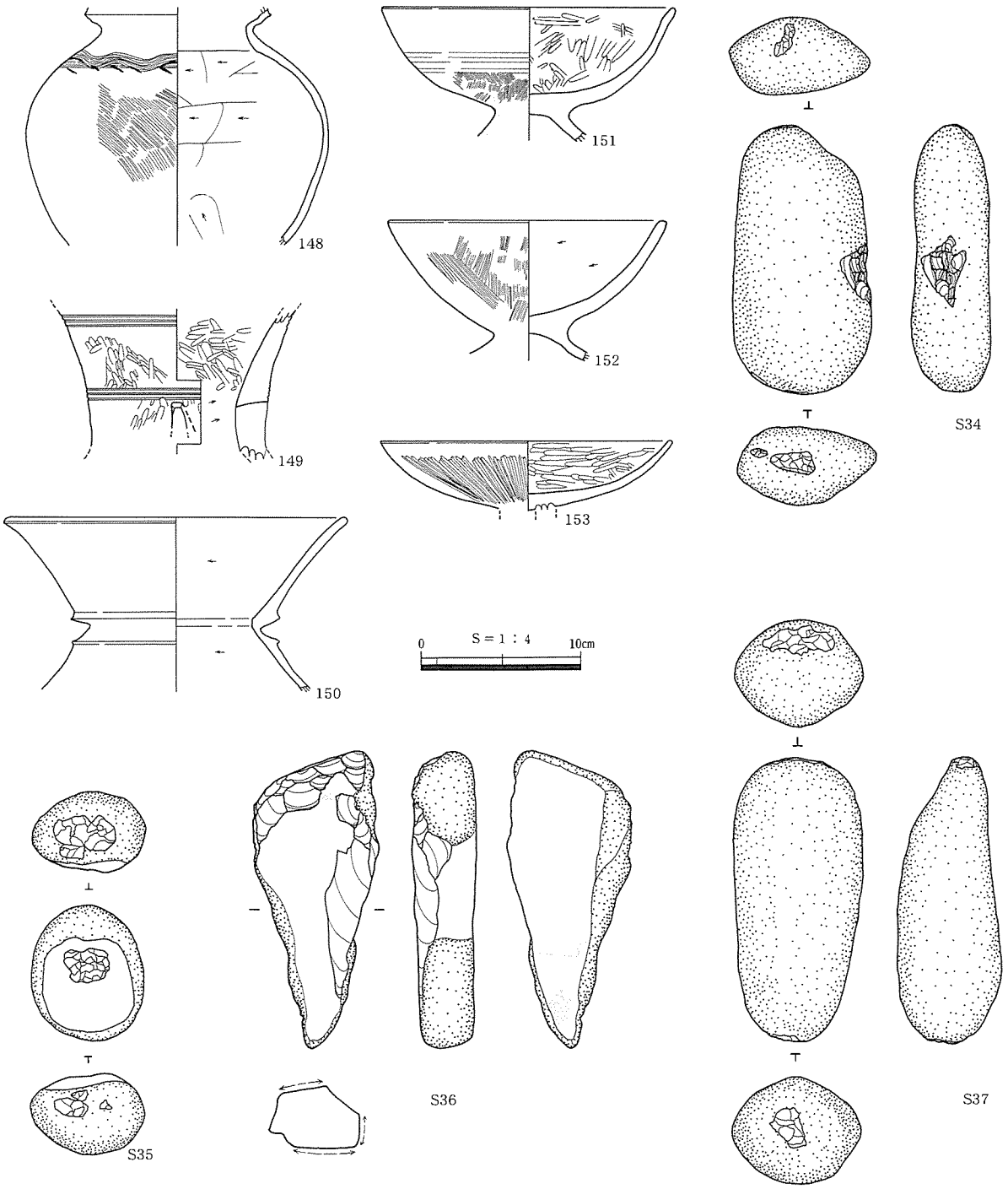


① 褐色土（炭粒混。焼土含まず）
② 暗褐色土（炭、白色礫多量に混。焼土少量混）
③ 茶褐色土（AT ブロック混、焼土少量混）
④ 黄褐色土（AT ブロック主体、炭僅かに混）
⑤ 暗茶褐色土（焼土粒大量に混）
⑥ 暗黄褐色土（AT ブロック混。炭少量、焼土多量に混）
⑦ 暗褐色土（炭化材大量に混）
⑧ 暗褐色土（炭化材、炭化物大量に混）
⑨ 暗茶褐色土（炭粒多く混、焼土含まず）
⑩ 暗黄褐色土（AT ブロック多く混、炭化材混）
⑪ 黒褐色土（焼土大量に混、炭化材混）
⑫ 黄褐色土（ロームブロック多量に混、貼床）
⑬ 黒褐色土（炭粒、焼土大量に混）
⑭ 明黄褐色土（均質）
⑮ 暗黄褐色土（ロームブロック大量に混）
⑯ 黒褐色土
⑰ 黒灰色土（黄褐色土混、炭・焼土大量に混）
⑱ 暗褐色土（炭・焼土混）
⑲ 茶褐色土
⑳ 暗黄褐色土（炭僅かに混）
㉑ 褐色土（炭多量に混、ロームブロック混）
㉒ 黄褐色土
㉓ 褐色土（ロームブロック大量に混）
㉔ 黒褐色土（炭化物多く混）
㉕ 暗褐色土（ロームブロック、炭粒多く混）



SI33 焼土・炭化材検出状況

第77図　SI33



第78図　SI33出土遺物

以前に行われた何らかの作業による被熱かもしれない。Ｐ６は南壁の壁面に掘り込まれている。埋土下層には住居焼失時の炭化材が多量に含まれるが、上層にはこれをほとんど含まないことから、Ｐ６は住居焼失時には開口していたと考えられる。以上の所見から本住居の構築過程を復元すると以下のようになる。①住居を掘削する。②主柱穴の柱掘方を掘削し柱を立てる。Ｐ７もこの段階で掘削する。③貼床を施して床面を作る。この際に壁際には貼床を行わず、貼床との段差を利用し壁溝とする。④貼床面上に中央ピット（Ｐ８）と溝を掘削する。Ｐ５もこの段階で掘削する。

検出された炭化材はすべて木質であり、草本質のものは確認されなかった。四方の壁際に多く、住居中心部にはあまり遺存していない。壁際において、壁に直交する方向で検出された部材は垂木材と考えられる。垂木材には、幅広で厚みのない板状のものと、幅が細く厚みがある丸太材か角材と考え

られる部材とが認められる。また、住居の隅角付近の垂木材は、不明瞭ながら住居の中心を向いて放射状に配列されているようにも見受けられる。東・南壁際には、床面に垂直に立てられた細い丸太材が計７本検出された（ｂ、ｂ′）。これらは一定の間隔で並んでいたようであり、その間隔は最も短い箇所で約20cmである。これらは壁材を固定するための部材と考えられる[註)]。なお、これらの炭化材のうち３点について樹種同定を行ったところ、主柱材（ａ）と壁際の部材（ｂ）はクリ、垂木材（ｃ）はシイとの結果を得た（第５章第２節参照）。

これらの炭化材は、床面直上に堆積した７、８、10層に含まれる。焼土は床面直上の６層、およびその上層の５層に特に多く含まれる。平面的には、４基の主柱穴付近とそのやや内側に広がっている。これらの焼土や炭化材よりも上層では、１～３層がほぼ水平に堆積している。これらのうち２、３層は焼土粒を少量含む。また、床面では数箇所の被熱面が検出された。壁面や床面に見られる小さな被熱痕は、焼失時に燃え続けた部材によって熱を受けたものと考えられる。これらの他に、床面には比較的大きな被熱面が３箇所認められる。

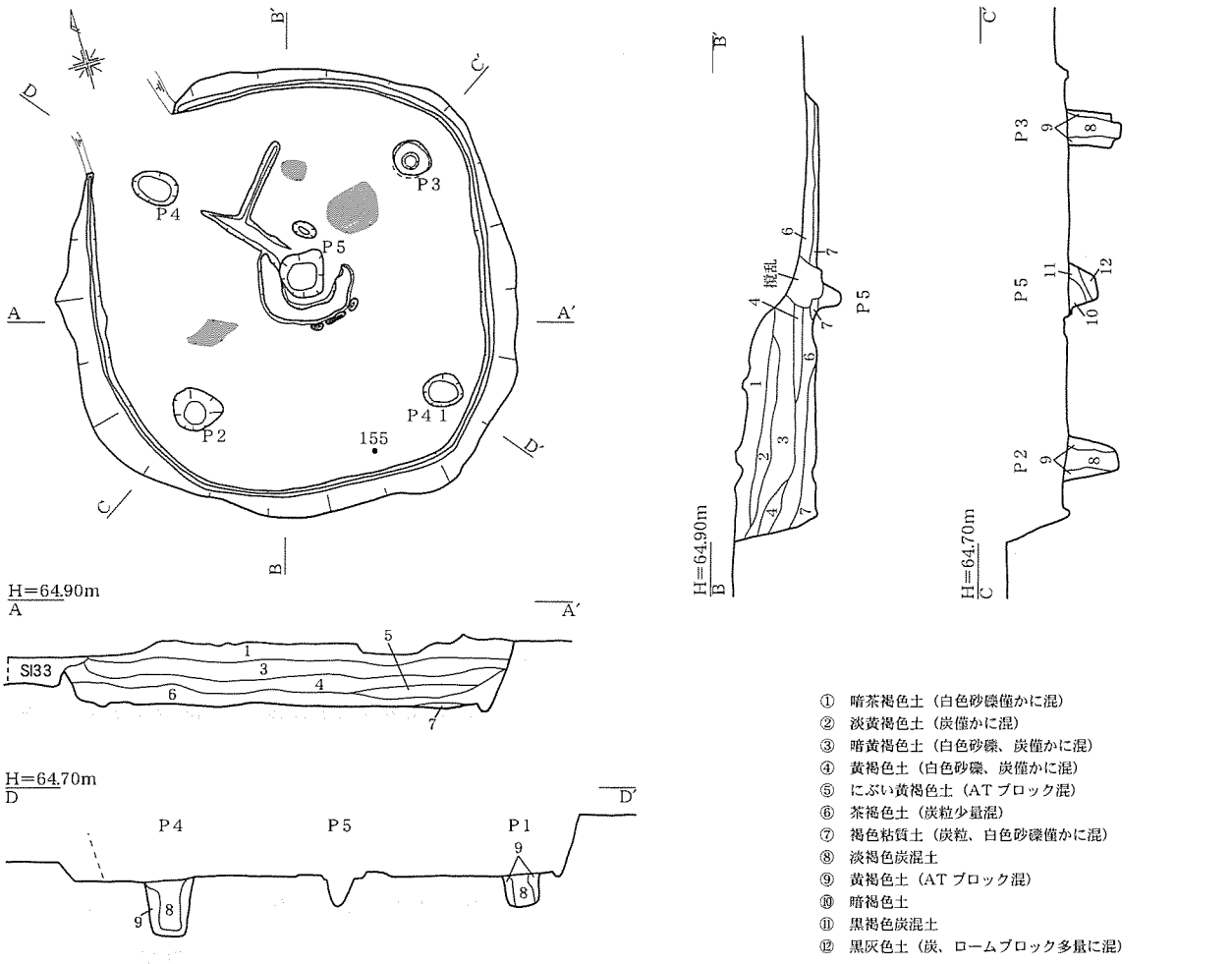
遺物は、埋土中および床面直上から土器・石器が多数出土した。床面直上からは低脚坏２個体（151、153）、甕１個体（148）が出土した。153が炭化材の直下で出土したことから、これらの土器は住居焼失時に床面に置かれていたものと考えられる。また、焼土や炭化材の検出面（３層の下面）では、拳大～20cm角の円礫、角礫が多数出土した。弥生時代後期の器台149、Ｓ34～37の石器類はこれらの礫に混じって出土したものである。円礫・角礫には被熱の痕跡は特に認められない。これらの石材は、屋根上に置かれていたものが落下した可能性もあるが、弥生土器や石器がともに出土している点を評価すれば、焼失後の窪地に投げ込まれたものであり本住居に伴うものではないと考えられる。床面出土の遺物は天神川Ⅱ期前後の特徴を示すことから、本住居跡の時期は古墳時代前期前葉に位置づけられる。なお、垂木材（ｄ）について^{14}Ｃ年代測定を行ったところ、紀元前1300年前後の結果を得た（第５章第１節）が、これは当該期の年代観とは整合しない。　（鈴木・君嶋）

註）浅川滋男氏のご教示による。

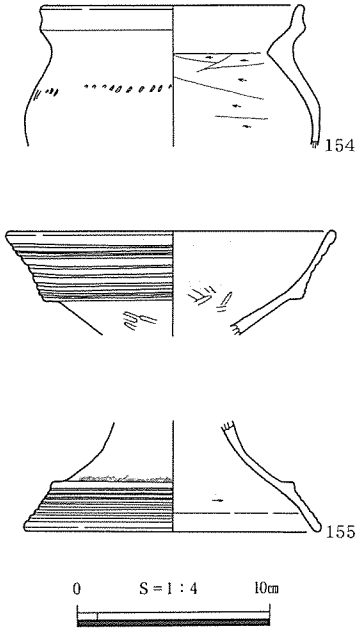
SI34（第79・80図、PL.23・44、第15表）

調査区中央東寄りのＨ11・Ｉ11グリッド、標高64.4～64.7mの緩斜面に位置する。付近には住居跡が集中しており、東側にはSI35・47が近接する。西側ではSI33と重複するが、切り合い関係より本住居跡がSI33に先行する。北西隅角を撹乱によって破壊されているほか、北側半分の壁面が大きく削平されているが、床面の遺存状況はおおむね良好である。

平面形は一辺約4.8mの隅丸方形を呈する。検出面から床面までの深さは、最も残りのよい南壁際で約85cmである。壁面はやや外側に傾斜して立ち上がる。床面は基盤土をそのまま利用しており、貼床は認められない。床面の周囲には壁溝を伴い、検出した範囲では全周する。床面ではピットを６基検出した。主柱穴と考えられるのはＰ１～Ｐ４の４基で、それぞれの規模はＰ１（44×35－36）cm、Ｐ２（56×46－51）cm、Ｐ３（46×44－57）cm、Ｐ４（52×35－52）cmである。Ｐ５はいわゆる中央ピットに相当する。隅丸方形を呈し、規模は（48×46－35）cmである。南側に地山掘り残しによる周堤をもち、北西側に溝（108×24－３）cmが接続する。さらに、もう１条の溝（92×９－４）cmが直交する形で北東に伸びている。床面には被熱面が３箇所検出された。中央ピット北東側がもっとも大きく被熱している。埋土は７層に分層され、ほぼ水平に近い堆積状況を示す。２層以下には炭がわずかに混じるが焼土は含まない。遺物は埋土中や床面直上から土器片数点が出土したが、図化に



第79図　SI34



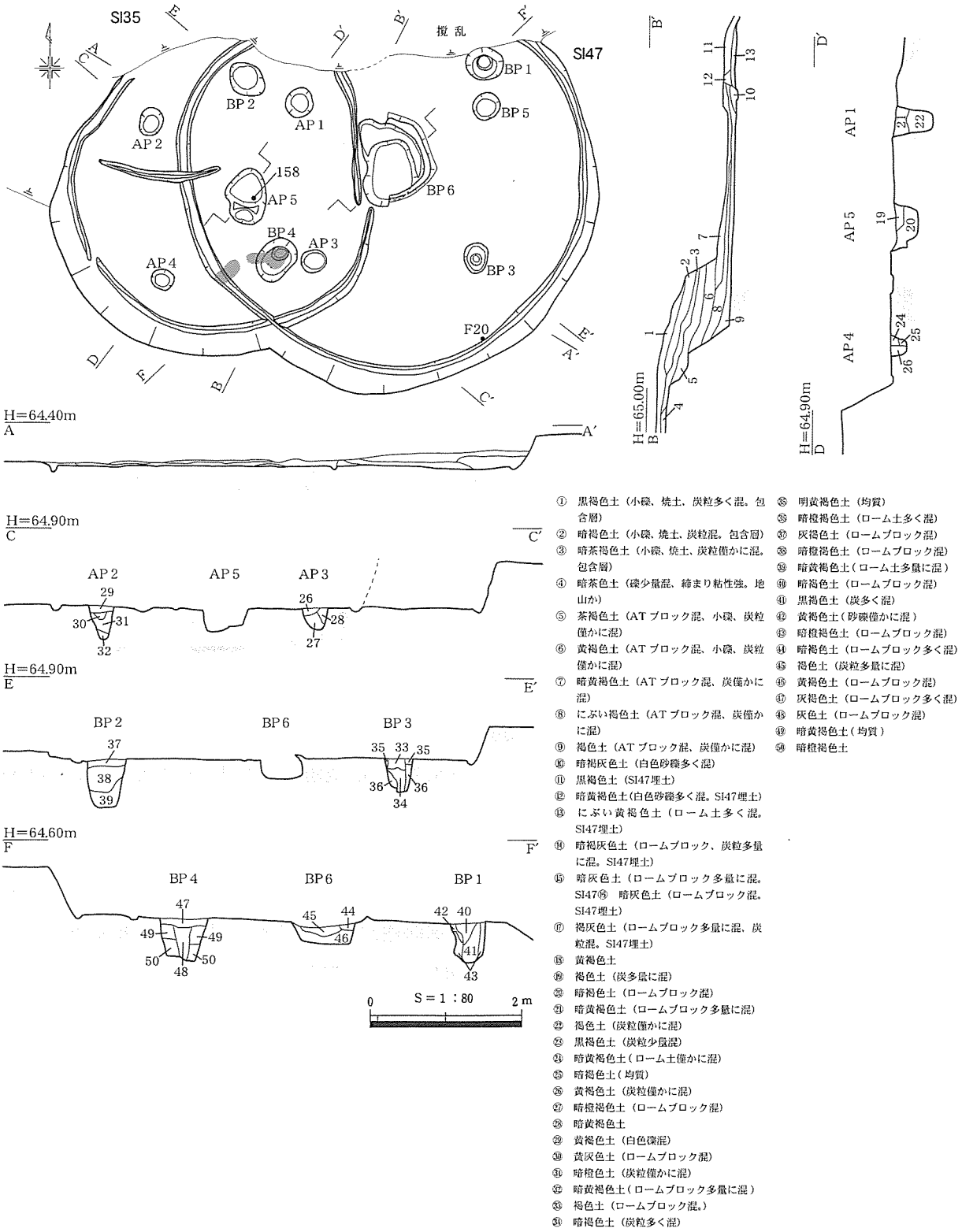
第80図　SI34出土遺物

耐えうるものは少ない。155は床面直上から出土した同一個体と考えられる器台である。Ｖ－２様式の特徴を示すことから、本住居跡の時期は弥生時代後期中葉と考えられる。　（鈴木・君嶋）

SI35・47（第81・82図、PL.23・43・44、第15・19表）

調査区東寄りのI11グリッド、標高64.2～63.9m付近の緩斜面に位置する、重複する２軒の住居跡である。SI35の被熱面がSI47のBP4を覆っていること、SI35の床溝がSI47の壁溝埋没後に掘られていることから、SI35がSI47に後出する。西側にはSI34が近接し、南側には少し離れて貯蔵穴SK８が位置する。東側には、落とし穴と考えられるSK25が位置するが、住居跡は確認されていない。

両住居は北端が撹乱により破壊され、壁面および埋土も北側2/3ほどが削平されている。平面形はともに円形を呈し、SI35は直径約4.3m、床面積約11.34㎡である。SI47は直径約5.6m、床面積21.23㎡である。両住居の床面はほぼ同じレヴェルにあり、ともに基盤土をそのまま利用している。

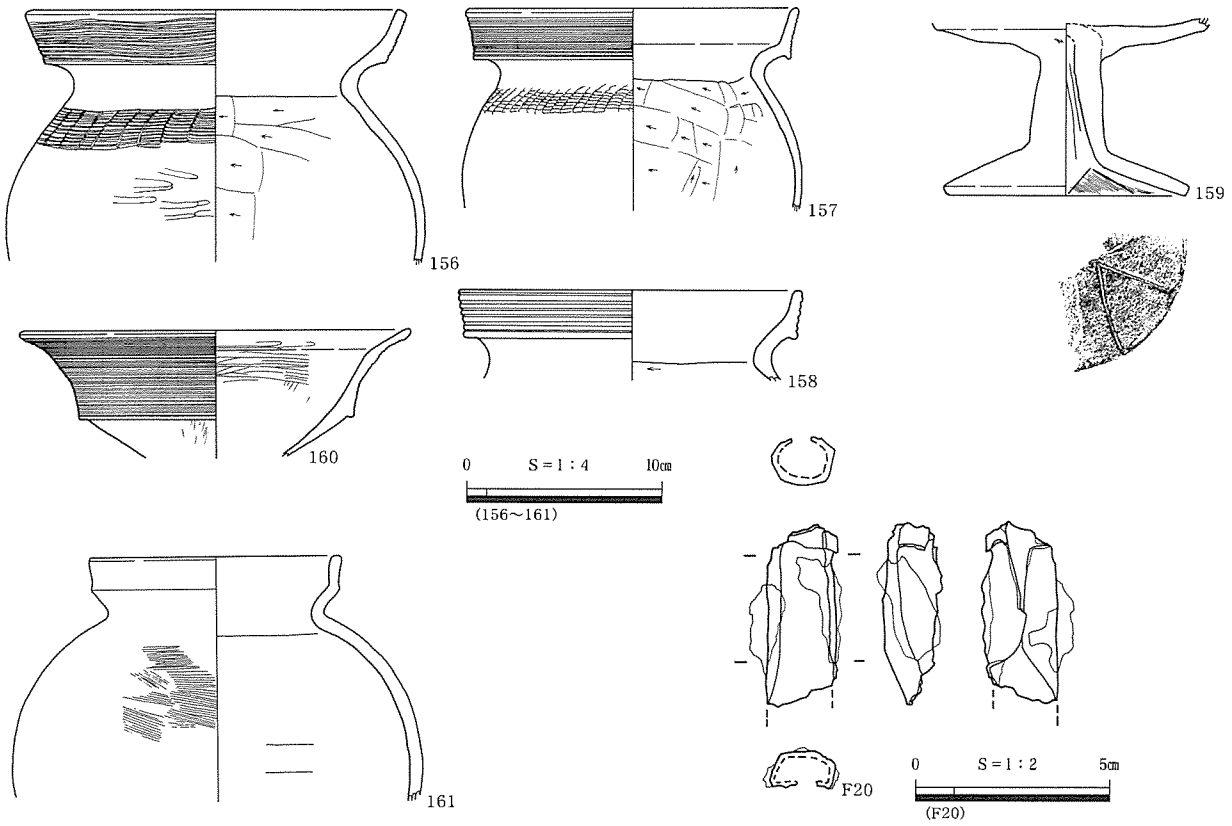


① 黒褐色土（小礫、焼土、炭粒多く混。包含層）
② 暗褐色土（小礫、焼土、炭粒混。包含層）
③ 暗茶褐色土（小礫、焼土、炭粒僅かに混。包含層）
④ 暗茶色土（礫少量混、締まり粘性強。地山か）
⑤ 茶褐色土（ATブロック混、小礫、炭粒僅かに混）
⑥ 黄褐色土（ATブロック混、小礫、炭粒僅かに混）
⑦ 暗黄褐色土（ATブロック混、炭僅かに混）
⑧ にぶい褐色土（ATブロック混、炭僅かに混）
⑨ 褐色土（ATブロック混、炭僅かに混）
⑩ 暗褐灰色土（白色砂礫多く混）
⑪ 黒褐色土（SI47埋土）
⑫ 暗黄褐色土（白色砂礫多く混。SI47埋土）
⑬ にぶい黄褐色土（ローム土多く混。SI47埋土）
⑭ 暗褐灰色土（ロームブロック、炭粒多量に混。SI47埋土）
⑮ 暗灰色土（ロームブロック多量に混。SI47⑯ 暗灰色土（ロームブロック混。SI47埋土）
⑰ 褐灰色土（ロームブロック多量に混、炭粒混。SI47埋土）
⑱ 黄褐色土
⑲ 褐色土（炭多量に混）
⑳ 暗褐色土（ロームブロック混）
㉑ 暗黄褐色土（ロームブロック多量に混）
㉒ 褐色土（炭粒僅かに混）
㉓ 黒褐色土（炭粒少量混）
㉔ 暗黄褐色土（ローム土僅かに混）
㉕ 暗褐色土（均質）
㉖ 黄褐色土（炭粒僅かに混）
㉗ 暗橙褐色土（ロームブロック混）
㉘ 暗黄褐色土
㉙ 黄褐色土（白色礫混）
㉚ 黄灰色土（ロームブロック混）
㉛ 暗橙色土（炭粒僅かに混）
㉜ 暗黄褐色土（ロームブロック多量に混）
㉝ 褐色土（ロームブロック混。）
㉞ 暗褐色土（炭粒多く混）
㉟ 明黄褐色土（均質）
㊱ 暗橙褐色土（ローム土多く混）
㊲ 灰褐色土（ロームブロック混）
㊳ 暗橙褐色土（ロームブロック混）
㊴ 暗黄褐色土（ローム土多量に混）
㊵ 暗褐色土（ロームブロック混）
㊶ 黒褐色土（炭多く混）
㊷ 黄褐色土（砂礫僅かに混）
㊸ 暗橙褐色土（ロームブロック混）
㊹ 暗褐色土（ロームブロック多く混）
㊺ 褐色土（炭粒多量に混）
㊻ 黄褐色土（ロームブロック混）
㊼ 灰褐色土（ロームブロック多く混）
㊽ 灰色土（ロームブロック混）
㊾ 暗黄褐色土（均質）
㊿ 暗橙褐色土

第81図　SI35・47

検出面から床面までの深さは、もっとも残りのよい南壁で約60cmである。両住居とも床面の周囲には壁溝を伴う。検出した範囲において、SI47では全周するが、SI35では２箇所でわずかに途切れる。

ピットは２棟合わせて11基検出した。SI35に伴うと考えられるのは５基である。主柱穴と考えられるのはAP１～AP４の４基で、それぞれの規模はAP１（38×34－51）cm、AP２（38×33－45）cm、AP３（33×29－30）cm、AP４（31×27－18）cmである。AP５はいわゆる中央ピットに相当する。２基のピットが重複しているように見受けられるが、土層から切り合い関係は把握できな

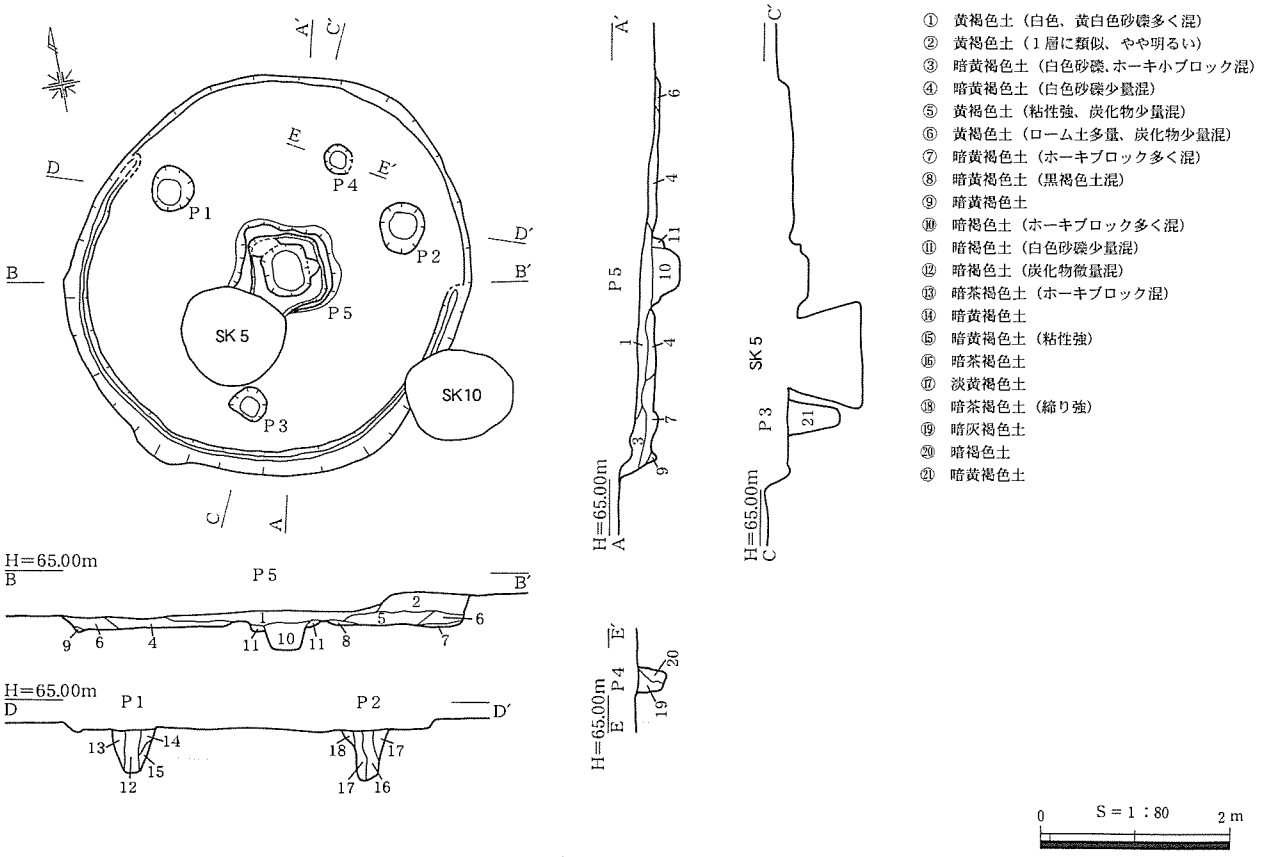


第82図　SI35・47出土遺物

い。それぞれの規模は(58×53－34)、(34×21－25)cmである。周堤は伴わず、西に向かって溝(162×16－7) cmが伸びる。また、南側に帯状の被熱面がある。

SI47では６基のピットを検出し、主柱穴と考えられるのはBP１～BP４の４基である。それぞれの規模はBP１（50×44－69）cm、BP２（54×44－64）cm、BP３（40×32－43）cm、BP４（62×46－56）cmである。BP１の南側に位置するBP５は補助柱穴と考えられ、規模は（36×28－54）cmである。BP６はいわゆる中央ピットに相当する。東側のみに周堤を伴うが、本来全周していたものがSI35に破壊された可能性も考えられる。２段に掘り込まれており、それぞれの規模は（108×93－18）cm、（77×70－35）cmである。

埋土は17層に分層される。１～４層は、住居の南壁より外側へ広がっていることから、住居の埋没後に堆積した包含層と判断される。これら包含層を含め、各層はおおむね水平の堆積状況を示す。また、炭化物や焼土粒がわずかに混じる。遺物は、包含層および埋土中より土器片十数点が出土した。高坏159、甕161は包含層からの出土であり、本住居に伴うものではない。ともに古墳時代中期中葉頃の特徴を示す。袋状鉄斧Ｆ20はSI47の南東隅壁溝際の床面上から出土した。床面出土の土器は殆ど無いが、遺構の時期を示し得るのは、SI35の中央ピット埋土中から出土した158である。Ｖ－３様式の特徴をもつことから、SI35の埋没時期は弥生時代後期後葉と考えられる。また、両住居跡の床面は同一レヴェルにあり、SI35の東側壁溝がSI47の中央ピットを避けるように巡っていることから、SI35はSI47の廃絶後時間を置かずに、SI47の床面を可能な限り再利用して建て替えられた可能性が高い。したがって、SI47の時期についても弥生時代後期後葉と考えられる。　（鈴木・君嶋）



第83図　SI36

SI36（第83図、PL.25）

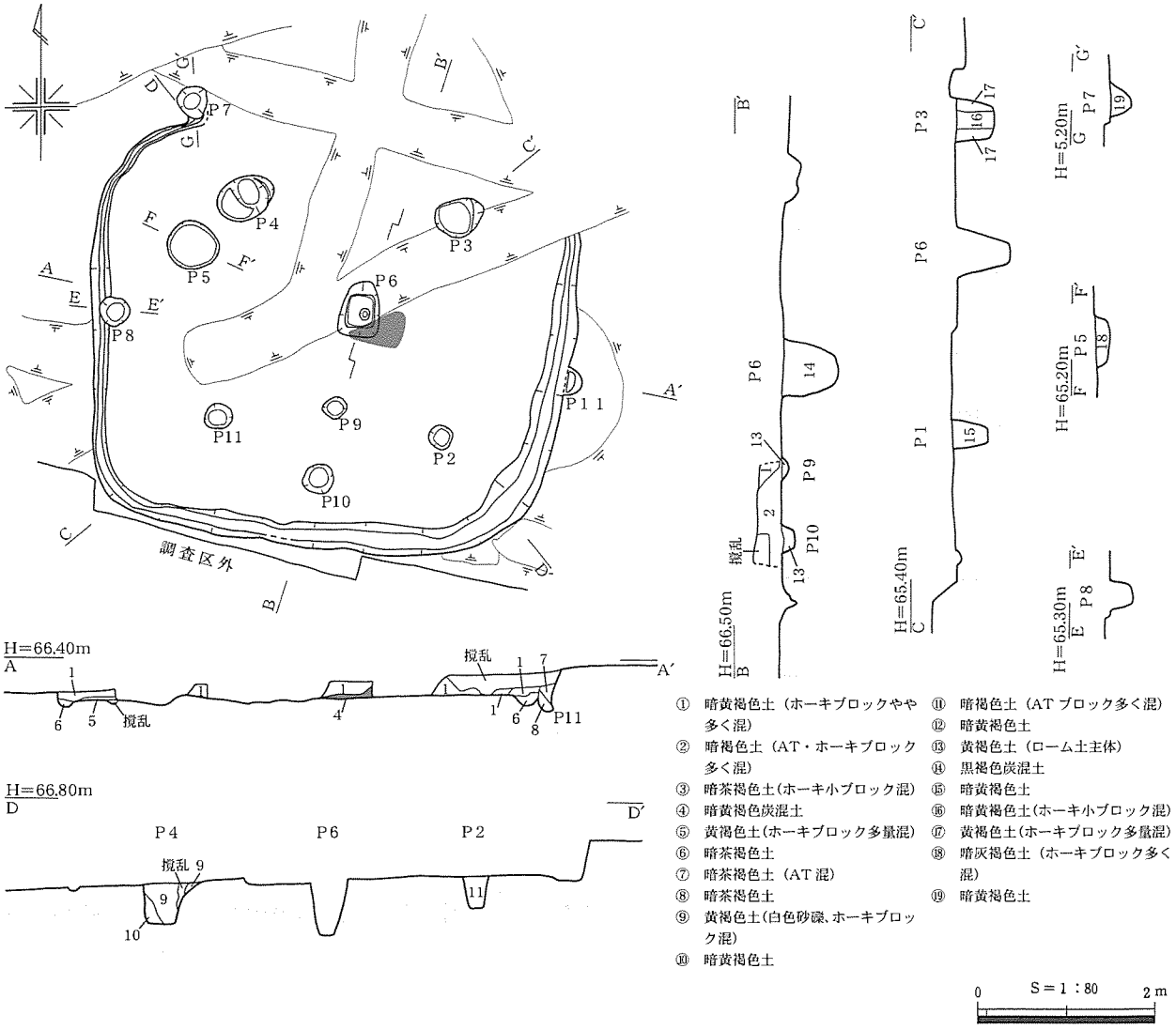
I12グリッド、標高64.7～65.1mの平坦面に位置する。付近には住居跡が集中し、北側にSI33、西側にSI31が近接する。東側には貯蔵穴と考えられるSK６、SK７およびSA３が位置する。本住居跡はSK５、SK10と重複するが、土層断面の検討から両土坑に先行することが明らかである。

平面形は長径約4.4m、短径約4.0mの楕円形を呈する。検出面からの深さは、最も残りのよい南壁付近で約35cmである。壁面はやや外側に傾斜して立ち上がる。床面は基盤土であるホーキ層をそのまま利用しており、貼床は認められない。東、南、西壁際には壁溝を伴う。幅は10～15cm、深さは５cm程で、断面はU字形を呈する。床面上でピットを５基検出した。これらのうち規模と位置関係から主柱穴と考えられるのはＰ１～Ｐ３の３基である。それぞれの規模はＰ１（48×44－46）cm、Ｐ２（54×48－52）cm、Ｐ３（40×38－56）cmで、Ｐ１、Ｐ２には径約15cmの柱痕が認められる。これらの柱間距離はそれぞれ2.5mであり、ほぼ正三角形の配置をとる。Ｐ５はいわゆる中央ピットに相当する。長径55cm、短径46cmの楕円形を呈し、深さは約25cmである。埋土はホーキ土の小ブロックが多く混じる暗褐色土である。このＰ５は地山を掘り残すことによって構築した高さ約５cmの周堤によって囲まれており、土堤内に堆積した暗褐色土（11層）の上面から掘り込まれている。

住居全体の埋土は地山に類似する黄褐色土、暗黄褐色土を主体とし、自然に埋没した状況を示している。埋土中からは土器片十数点が出土したが、いずれも小片で図化に耐えず、時期を示す根拠に乏しい。ただし、Ｖ－３様式の土器が出土したSK５、10に先行すること、中央ピットを伴うことから、弥生時代後期の住居跡と考えられる。（君嶋）

SI37（第84図、PL.25）

Ｊ10グリッド、標高65.9～64.2mの平坦面に位置する。東側に落とし穴と考えられるSK28及び

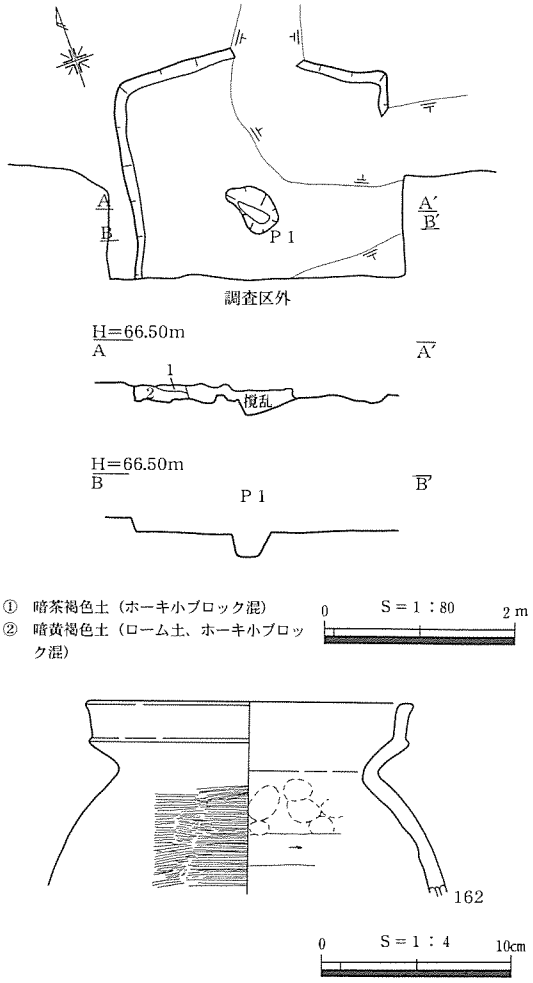


第84図　SI37

SA１が位置するが北側は空閑地であり、住居跡が集中する範囲からは外れている。

平面形は隅丸方形を呈し、四壁をほぼ東西南北方向に向ける。果樹園の暗渠による撹乱が著しく、遺存状況はよくない。東西は約5.4m、南北は推定で約4.7mである。検出面からの深さは、最も残りのよい東南隅角付近で約45cmである。壁面は、わずかに東～東南隅にかけて部分的に遺存するのみであるが、ほぼ垂直に立ちあがる。床面は基盤土であるホーキ層をそのまま利用しており、貼床は認められない。床面の周囲には壁溝を伴う。東・南壁際では幅約30cm、深さ５～15cmである。西壁際では幅が狭くなり、幅10～20cmとなる。北辺側では壁溝は認められないが、本来無かったのか、撹乱・削平によって失われたのかは不明である。床面でピットを11基検出した。これらのうち規模と位置関係から主柱穴と考えられるのはＰ１～Ｐ４の４基である。それぞれの規模はＰ１（32×28－40）cm、Ｐ２（28×26－36）cm、Ｐ３（56×43－42）cm、Ｐ４（66×50－46）cmであり、Ｐ３では径約18cmの柱痕が認められる。これら主柱間の距離は、Ｐ１－Ｐ２間から順に2.5m、2.5m、2.4m、2.6mであり、ほぼ正方形の配置をとる。Ｐ６はいわゆる中央ピットに相当する。長軸約60cm、短軸約45cmの方形を呈し、深さは約60cmである。埋土は炭を多量に含んだ黒褐色土の単層である。また、Ｐ６の南縁に接する床面上にも、厚さ５cm程の炭混土の広がりが検出された（４層）。Ｐ９、Ｐ10はＰ６と直線状に並ぶ浅いピットであり、中央ピットに関係する施設を構成していた可能性も考えられ

る。それぞれの規模はＰ９（28×24－10）cm、Ｐ10（38×34－15）cmである。Ｐ７は壁溝の外側に位置し、本住居に伴うものかは不明である。またＰ11は、本住居に後出するピットである。住居の埋土はほとんど残っていないが、ローム土に類似する暗黄褐色土、暗褐色土を主体とする。埋土中からは土器片が十数点出土した。いずれも小片で図化に耐えず、時期を示す根拠に乏しい。したがって本遺構の時期も明確にしがたいが、隅丸方形を呈する平面形態から、古墳時代前期以降に位置づけられる可能性が高い。（君嶋）



第85図　SI38および出土遺物

SI38（第85図、PL.25、第15表）

調査区西端のH17グリッド、標高66.3mの平坦面に位置する。付近は南区が展開する尾根の北西端にあたり、周囲に他の遺構は確認されていない。

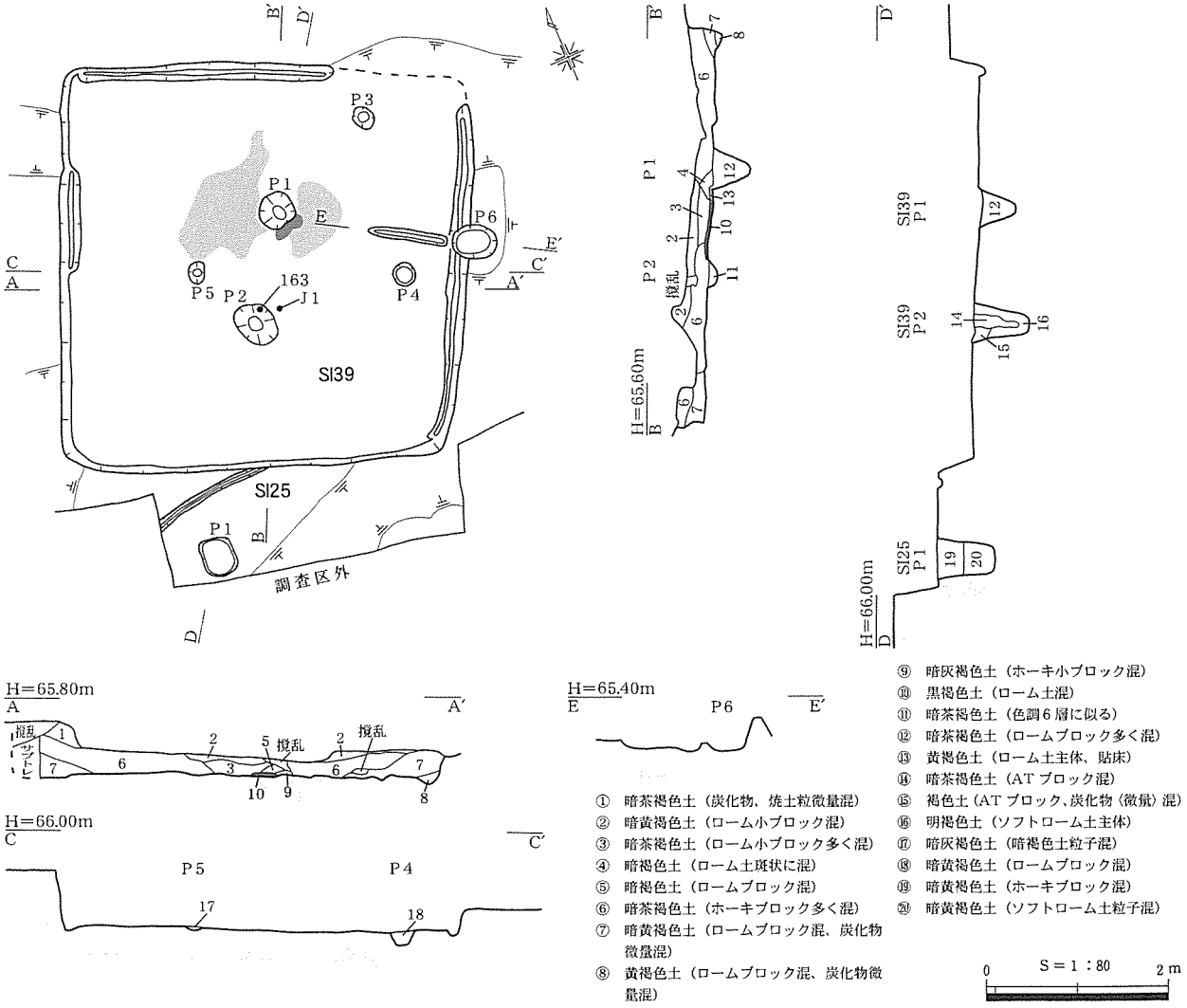
本住居跡は撹乱による壁や床面の破壊が著しい。また、調査区南側への広がりが予想されたため調査区壁を１mほど拡張したが、土層断面の検討から調査区外にも撹乱が及んでいることが判明したため、これ以上の追跡は行わなかった。結果として、東西2.8m、南北2.1mの方形プランを検出した。検出面からの深さは、最も残りのよい西壁際で約15cmである。床面は根撹乱などによる凹凸が著しく、貼床は認められない。また、壁溝も伴わない。床面の中央やや南寄りでピットを１基検出した。長径約60cm、短径約40cmの不整な楕円形で、深さは約25cmである。埋土中からは土器片数点が出土した。図示した162は天神川Ⅶ～Ⅷ期の特徴を示すことから、本遺構の埋没時期は古墳時代中期中葉と考えられる。（君嶋）

SI25・39（第86・87図、PL.26・32・44、第15～17表）

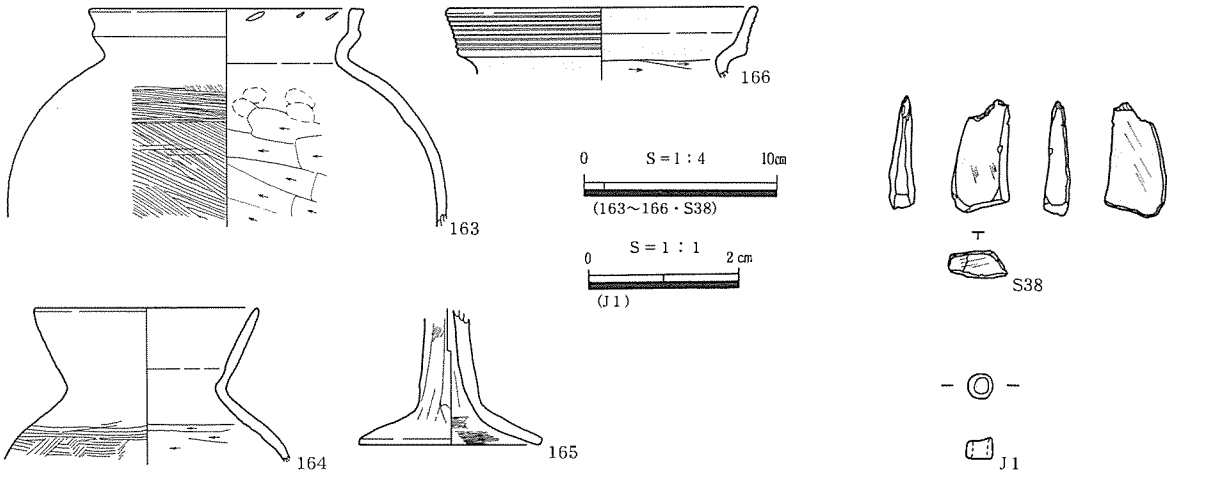
H14・H15・I14グリッド、標高65.2～65.6mの平坦面に位置する、重複する２軒の住居跡である。SI39がSI25の壁面・床面を破壊して構築されていることから、SI39がSI25に後出する。西側にはSI40が近接するが、北側、東側では遺構は確認されておらず、空閑地となっている。

SI25はSI39と撹乱とによって大きく破壊されており、検出したのは床面のごく一部である。壁面および埋土はほとんど遺存していなかった。また、床面は調査区の南側へ広がっていくことが予想されたが、土層断面の検討から調査区外にも撹乱が及んでいることが判明したため、これ以上の追跡は行わなかった。床面は基盤土をそのまま利用しており、幅約10cm、深さ約５cmの壁溝を伴う。この壁溝はわずかに弧を描くことから、本来の平面形態は円形ないし隅丸方形と考えられる。また、床面上でピットを１基検出した。規模は長径48cm、短径38cm、深さ約65cmである。規模及び壁溝との位置関係から主柱穴である可能性が高い。遺物は、床面上にわずかに残った埋土中から弥生土器166が出土した。Ｖ－３様式の特徴を持つことから、SI25は弥生時代後期後葉の住居跡と考えられる。

SI39は、一辺約4.5mの方形を呈する。撹乱によって北東隅角部分が破壊されているものの、遺存



第86図　SI25・39



第87図　SI25・39出土遺物

状態はおおむね良好である。検出面からの深さは、最も残りのよい西壁際で約65cmである。壁面はほぼ垂直に立ちあがる。床面はほぼ平坦で、SI25の床面より約40cm低い。大部分は基盤土をそのまま利用しているが、中央やや北寄りの一部では、黄褐色ローム土を用いて厚さ１～５cmの貼床を施している。東壁・北壁際、および西壁際の一部には壁溝を伴う。幅15～20cm、深さ５～10cmである。ピットは６基検出した。これらのうち規模と位置関係から主柱穴と考えられるのはＰ１、Ｐ２の２基であ

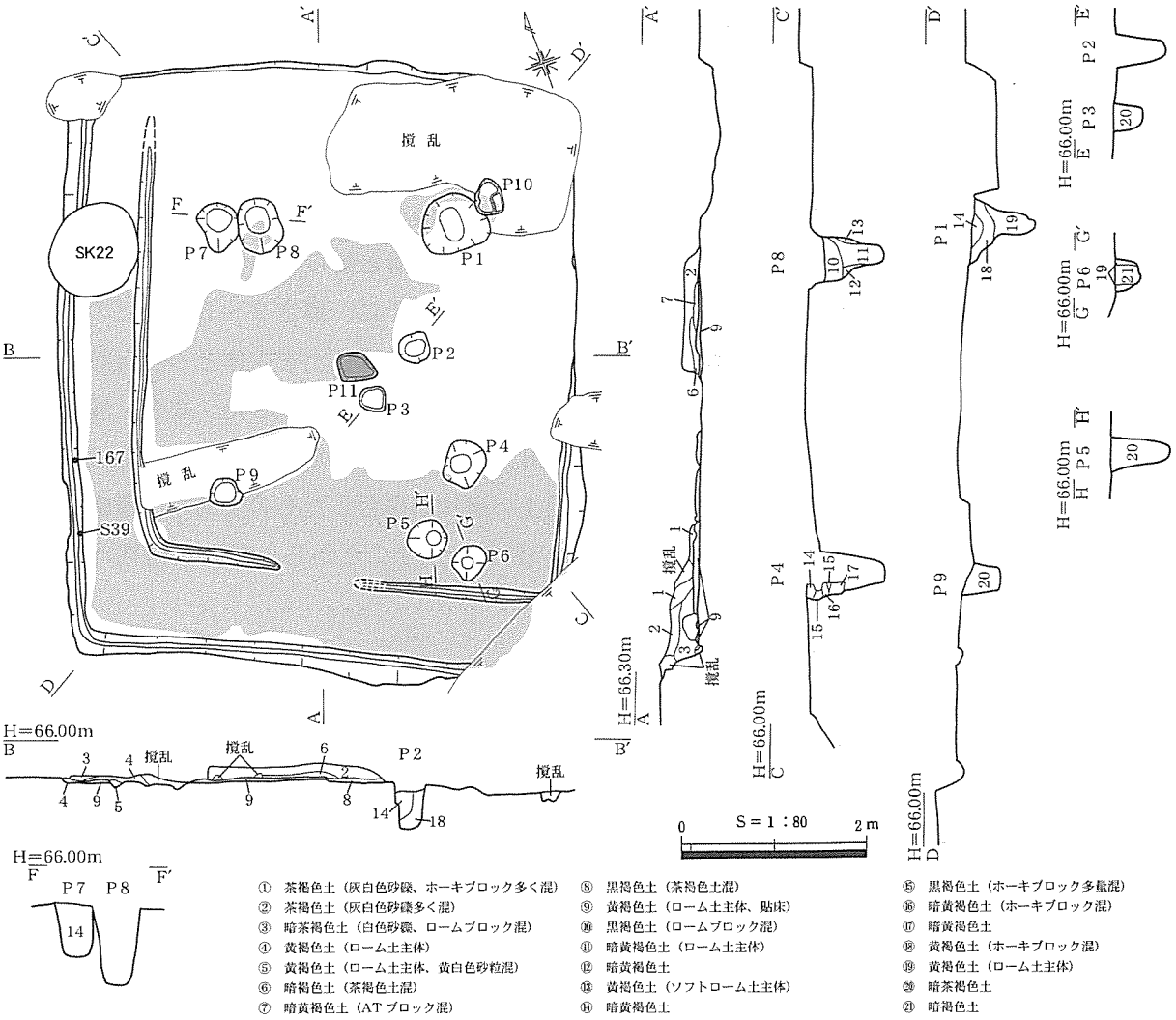
る。それぞれの規模はＰ１（42×42－40）cm、Ｐ２（53×40－64）cmで、Ｐ２には径約14cmの柱痕が認められる。これらは南北方向に直線的に並び、柱間距離は約1.3mである。Ｐ３～Ｐ５は小規模なピットで、これら３基は三角形の配置をとる。規模はＰ３（28×20－10）cm、Ｐ４（28×26－15）cm、Ｐ５（25×18－４）cmである。Ｐ６は（50×38－35）cmで、東壁面の中ほどに掘り込まれており、上屋を構成する柱穴であったか判然としない。ただし、Ｐ６の直下からＰ１へ向けて幅10cm、深さ６～10cm、長さ90cmの溝が直線的にのびており、この溝と何らかの機能的関係を持ったピットである可能性は考えられる。また、Ｐ１の東側に接した床面上に、厚さ２～５cmほどの炭混土の広がりが認められた（10層）。住居全体の埋土は暗黄褐色土、暗茶褐色土を主体とし、自然に埋没した状況を示している。遺物は、埋土中および床面上から土器片数十点が出土した。また、埋土中から砥石Ｓ38が、Ｐ２北東側の床面上から臼玉片Ｊ１が出土した。図示した土器のうち、163はＰ２の埋土上面出土、164はＰ１・Ｐ５埋土中および床面出土の破片が接合したものであり、遺構廃絶の時期を示すものと思われる。これらは天神川Ⅷ期前後の特徴を示すことから、SI39の時期は古墳時代中期後葉と考えられる。（君嶋）

SI40（第88・89図、PL.26・43・48・49、第16・17表）

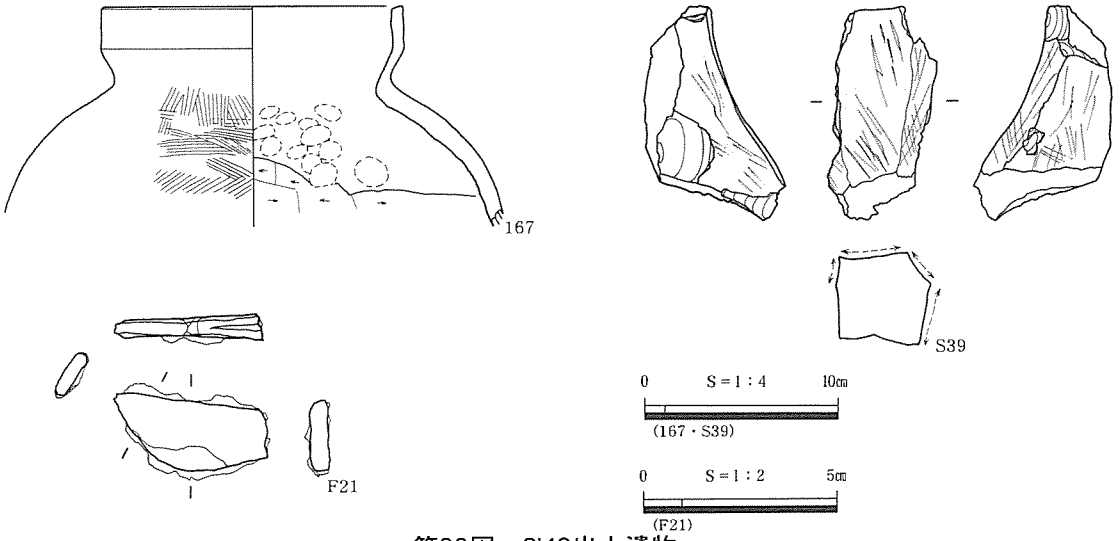
Ｈ15・Ｉ15グリッド、標高65.6～66.0mの平坦面に立地する。撹乱による壁や床面の破壊が著しく、遺存状況はよくない。東側にはSI25・39が近接する。また、西壁ではSK22と重複するが、本住居跡の方が新しい。

本住居跡は、建て替えにより新旧２軒が重複している。SI40（旧）は、西辺・南辺より70～80cm内側を巡る壁溝と、貼床下で検出されたピットにより認識される住居跡である。北辺および東辺はSI40（新）と共有していたものと考えられる。南北5.7m、東西4.8mの方形を呈する。主柱穴はＰ４、Ｐ８、Ｐ９、Ｐ10の４基と考えられる。これらのうちＰ４、Ｐ８、Ｐ10は貼床下のピットである。それぞれの規模はＰ４（54×46－86）cm、Ｐ８（62×44－83）cm、Ｐ９（33×30－42）cm、Ｐ10（40×30－31）cmである。これらの柱間距離は、Ｐ４－Ｐ９間が2.6m、Ｐ９－Ｐ８間が3.0m、Ｐ８－Ｐ10間が2.6m、Ｐ10－Ｐ４間が2.9mで、ややいびつな長方形の配置をとる。床面は、基盤土をそのまま利用している。ただし、Ｐ１とＰ２の中間付近では、上下２面の貼床が施された箇所がある。このうちの下層の貼床面がSI40（旧）に伴うものであれば、SI40（旧）の床面には部分的に貼床が施されていた可能性がある。

SI40（新）は、（旧）の西辺と南辺をそれぞれ拡張し、貼床を施すことによって構築された住居である。南北6.7m、東西5.7mの方形を呈する。壁はわずかに南辺の一部のみに遺存しており、ここでの検出面から床面までの深さは約30cmである。床面には黄褐色ローム土による厚さ２～５cmの貼床を施している（９層）。貼床は西辺・南辺に沿って部分的に検出されたのみであるが、貼床面と地山面とではわずかなレヴェル差が生じている。したがって、貼床が検出されなかった範囲には撹乱・削平が及んでいるものと考えられ、本来貼床は全面に施されていた可能性もある。南辺際及び西辺際には壁溝が巡る。幅約10cm、深さ約５cmである。北辺と東辺では確認されなかったが、本来無かったのか、削平により失われたのかは不明である。規模と位置関係から主柱穴と考えられるピットはＰ１、Ｐ５、Ｐ７である。これら３基に加えて、Ｐ９をSI40（旧）と共有する４本で主柱が構成されたものと推測されるが、その配置はややいびつである。また、いずれの主柱穴においても柱痕は明瞭ではない。それぞれの規模はＰ１（74×62－70）cm、Ｐ５（46×43－66）cm、Ｐ７（54×48－58）cmである。

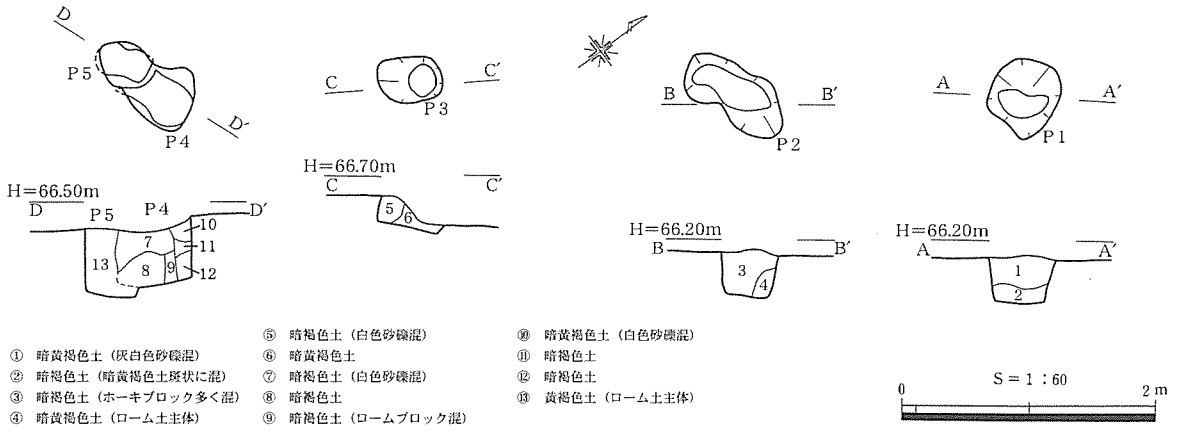


第88図　SI40

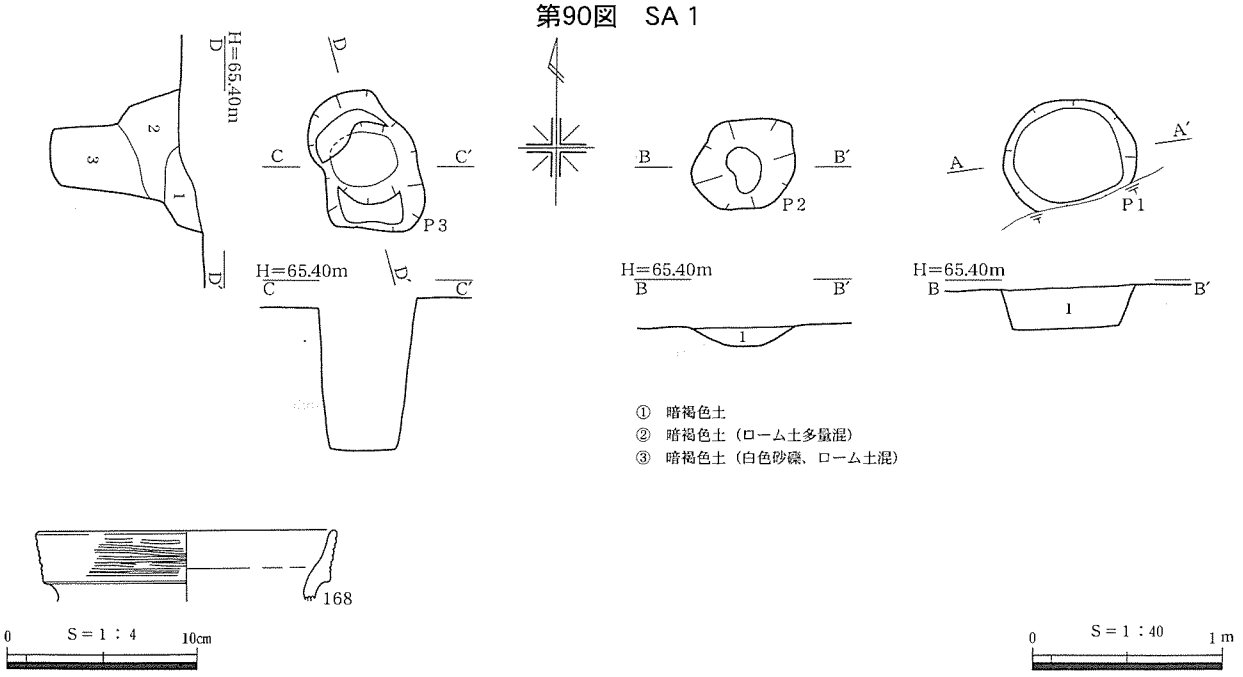


第89図　SI40出土遺物

これらの他にSI40（新）に伴うと考えられるピットはＰ６、Ｐ11である。Ｐ11は床面中央に位置する深さ５cmほどの浅いピットである。埋土は黒褐色土で、底面およびピットの東側に赤化した被熱痕跡が認められた。また、Ｐ２、Ｐ３は新旧いずれの住居に伴うものか不明である。住居全体の埋土はほとんど残っていないが、茶褐色土を主体とする。埋土中からは、土器片および石製品、鉄製品が十



第90図　SA１



第91図　SA３および出土遺物

数点出土したが、ほとんどが小片である。図示した167、砥石Ｓ39はいずれも西辺の壁溝埋土中から出土したもので、SI40（新）に伴う遺物である。167は天神川Ⅸ期の特徴を示すことから、SI40（新）の埋没時期は古墳時代中期後葉に位置づけられ、先行するSI40（旧）もこれに近い時期と考えられる。

（君嶋）

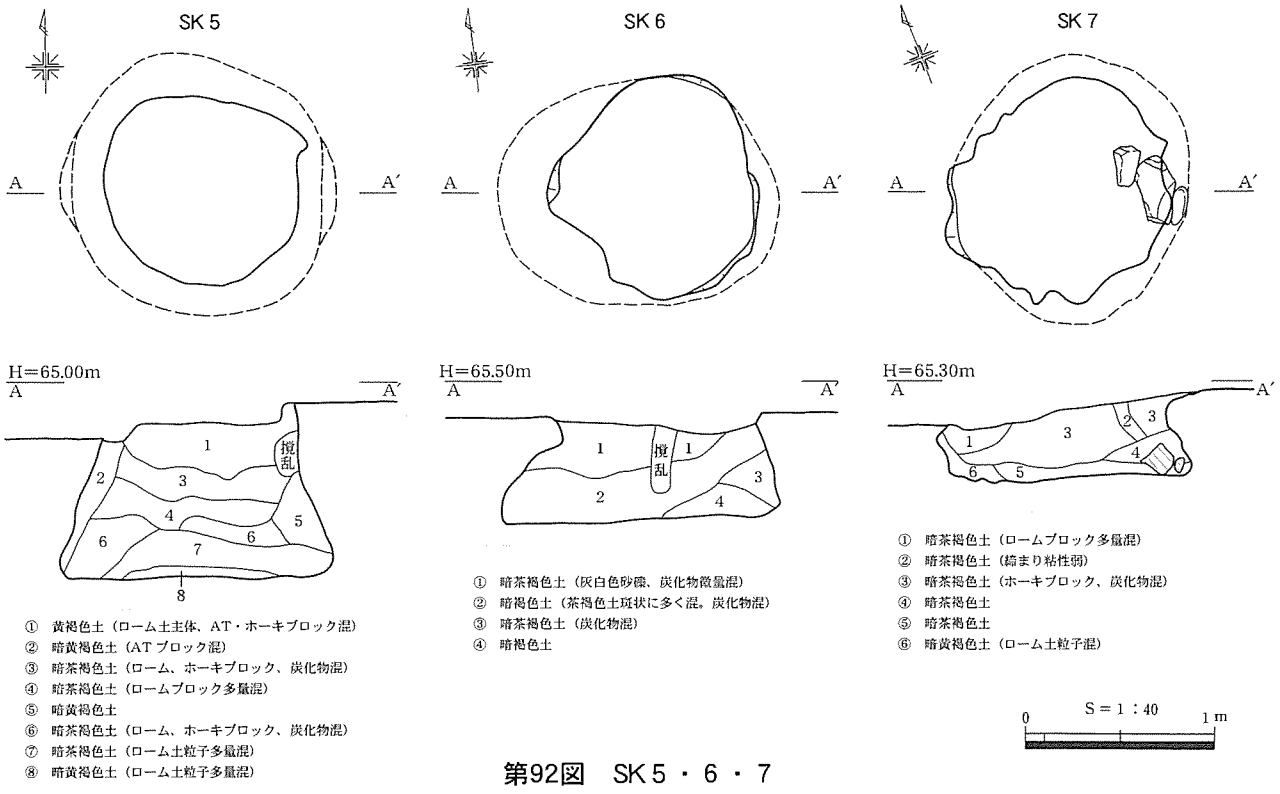
（３）柵

SA１（第90図、PL.27）

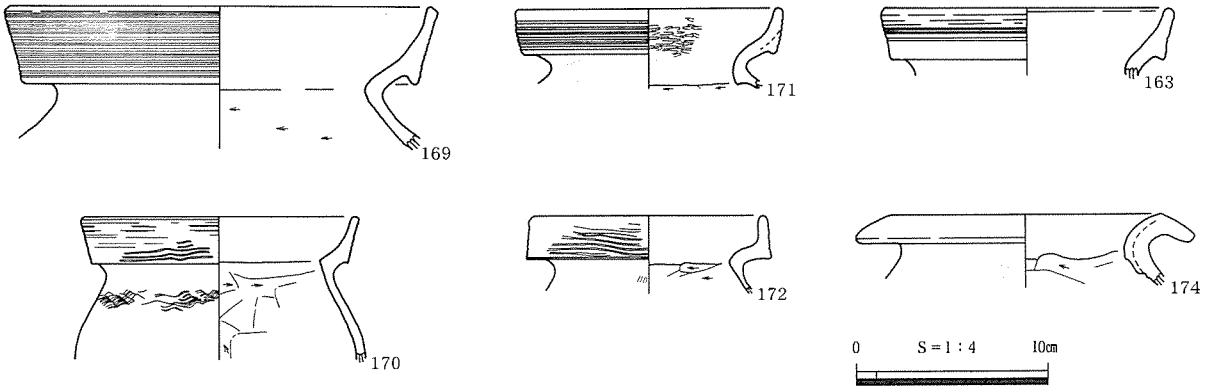
調査区東端近くのＪ９グリッド、標高66.1～66.6mの平坦面に位置する。４基のピットが北東－南西方向に直線状に並ぶ。ピット間の間隔は2.2～2.5mである。各ピットの規模は、Ｐ１（62×55－35）cm、Ｐ２（90×45－33）cm、Ｐ３（52×34－32）cmである。Ｐ４とＰ５は重複しており、切り合い関係よりＰ４がＰ５に後出する。Ｐ４の長径は58cm、深さ56cmである。Ｐ５の長径は推定で45cm、深さ55cmである。いずれのピットにおいても柱痕は明瞭ではない。また、底面のレヴェルはほぼ揃っているが、Ｐ３のみ高い位置にある。遺物は出土しておらず、時期は不明である。（君嶋）

SA３（第91図、PL.27、第16表）

Ｊ11グリッド、標高65.2～65.3mの平坦面に位置する。３基のピットがほぼ東西方向に直線状に並ぶ。ピット間の間隔は、Ｐ１・Ｐ２間が約1.7m、Ｐ２・Ｐ３間が約２mである。各ピットの規模は、



第92図　SK５・６・７



第93図　SK５・６・７出土遺物

Ｐ１（70×55－20）cm、Ｐ２（60×50－10）cm、Ｐ３（80×50－75）cmである。Ｐ３は長軸方向が２段に掘り込まれており、Ｐ１、Ｐ２よりもかなり深い。また、いずれのピットにおいても柱痕は明瞭ではない。遺物は、Ｐ３埋土中より甕口縁部168が出土した。Ｖ－２～３様式の特徴を持つことから、Ｐ３の埋没時期については弥生時代後期中葉～後葉と考えられる。（君嶋）

（４）土坑

SK５（第92・93図、PL.27・45、第16表）

Ｉ12グリッド、標高64.6～64.75mの平坦面に位置する。形態的特徴から貯蔵穴と考えられる遺構である。SI36と重複しているが、SI36の埋土に掘りこまれていることからこれに後出することが明らかである。東側には、同じくSI36に後出する貯蔵穴SK10が位置する。

検出面の平面形は、長径約107cm、短径約105cmの円形を呈する。断面は逆台形を呈し、検出面からの深さは最大で約90cmである。底面は径約145cmの円形を呈する。埋土は暗茶褐色土を主体とし、自然に埋没した状況を示している。２層は壁からの崩落土であろう。遺物は、埋土中から土器片が十数点出土した。図示した169、170はＶ－３様式の特徴を示すことから、遺構の埋没時期は弥生時代

後期後葉と考えられる。　（君嶋）

SK６（第92・93図、PL.28・45、第16表）

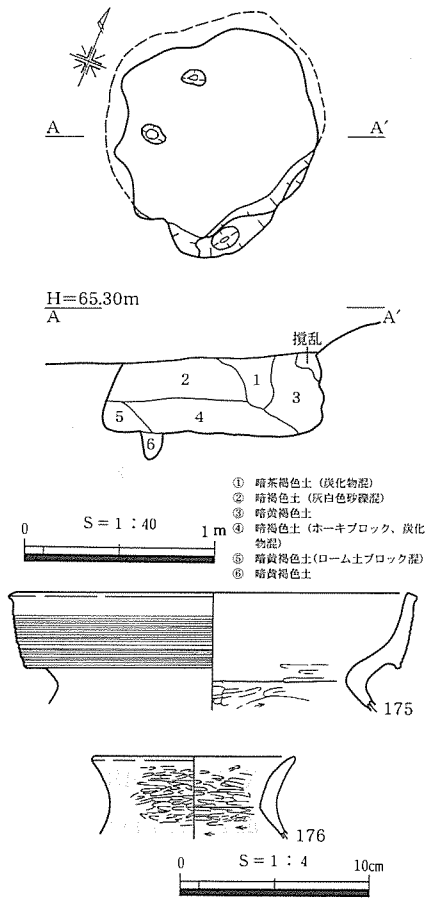
Ｊ11グリッド、標高65.1～65.4mの平坦面に位置する。形態的特徴から貯蔵穴と考えられる土坑である。南側にはSA３が、西側には貯蔵穴SK７が位置する。また、北側にはやや離れて貯蔵穴SK８が位置する。

検出面での平面形は、長径約117cm、短径約110cmの不整な円形を呈する。断面は袋状を呈し、検出面からの深さは最大で約55cmである。底面は長径約150cm、短径約120cmの楕円形を呈する。埋土は暗茶褐色土と暗褐色土が互層状に堆積し、炭化物がわずかに混じる。遺物は、埋土中から土器片が十数点出土した。図示した171はＶ－３様式の特徴を示すことから、遺構の埋没時期は弥生時代後期後葉と考えられる。　（君嶋）

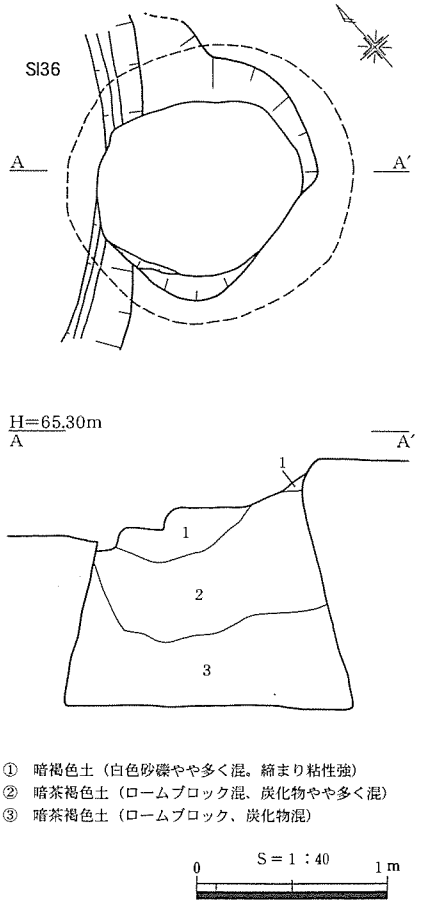
SK７（第92・93図、PL. 28・45、第16表）

Ｉ11・Ｊ11グリッド、標高65.0～65.3mの平坦面に位置する。形態的特徴から貯蔵穴と考えられる土坑である。東側に貯蔵穴SK６、SA３が、西側には貯蔵穴SK10、SI36が位置する。

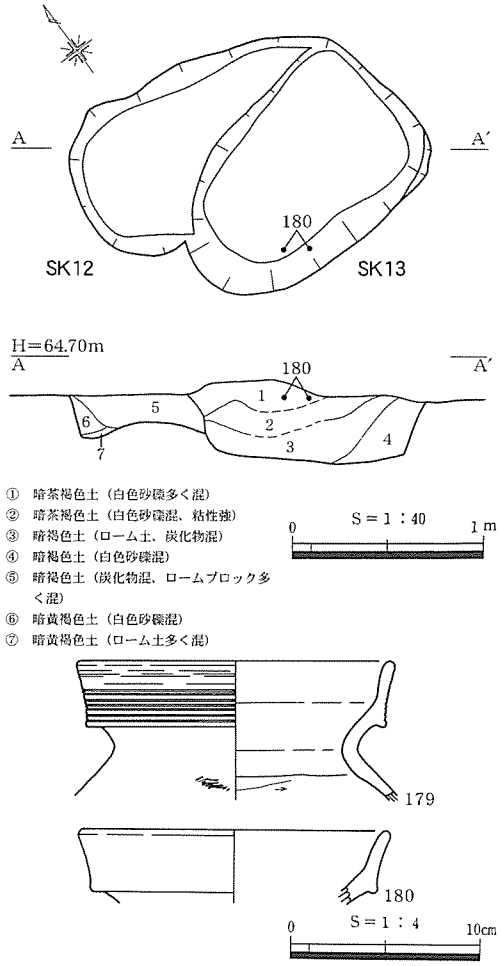
検出面での平面形は径約120cmの不整な円形を呈する。断面は袋状を呈し、検出面からの深さは最大で約45cmである。底面は長径約140cm、短径約125cmの楕円形を呈する。埋土は暗茶褐色土を主体とし、炭化物やロームブロックが混じる。遺物は、埋土中から土器片が数十点出土した。また、坑底の東縁では、底面に接して人頭大の角礫３個を検出した。使用や被熱の痕跡は認められず、その性格は不明である。図示した遺物のうち、172、173はＶ－３様式の特徴を示すことから、遺構の埋没時期は弥生時代後期後葉と考えられる。　（君嶋）



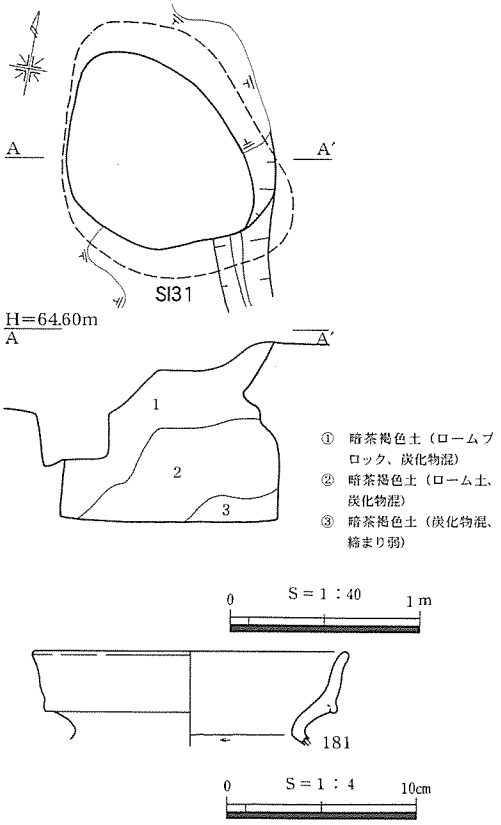
第94図　SK８および出土遺物



第95図　SK10および出土遺物



第96図　SK12・13および出土遺物



第97図　SK14および出土遺物

SK８（第94図、PL. 28・45、第16表）

Ｉ11グリッド、標高65.0～65.2mの平坦面に位置する。形態的特徴から貯蔵穴と考えられる土坑である。北側にはSI35・47が、南側にはやや離れて貯蔵穴SK６が位置する。

検出面での平面形は長径約120cm、短径約100cmの不整な円形を呈する。断面は袋状を呈し、検出面からの深さは最大で約45cmである。底面は長径約120cm、短径約105cmの不整な楕円形を呈する。底面では深さ15cm程の小穴を３基検出したが、その性格は不明である。埋土の堆積状況からは、自然に埋没した遺構とは考えにくい。遺物は、底面よりもやや高い埋土中から、土器片や礫が多量に出土した。図示した175はＶ－３様式の特徴を示すことから、遺構の埋没時期は弥生時代後期後葉と考えられる。　（君嶋）

SK10（第95図、PL. 28・45、第16・17表）

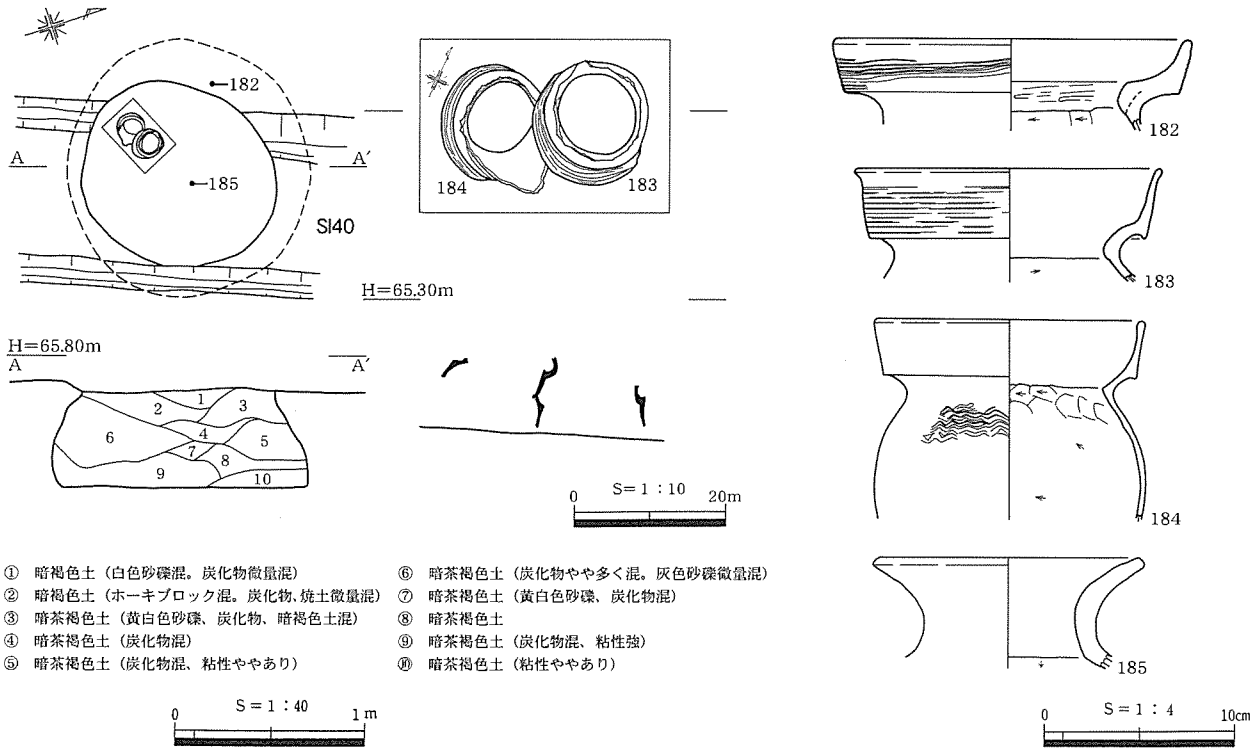
Ｉ12グリッド、標高65.2mの平坦面に位置する。形態的特徴から貯蔵穴と考えられる土坑である。SI36と重複しているが、SI36の壁面を破壊して掘り込まれていることからこれに後出することが明らかである。西側には同じくSI36に後出する貯蔵穴SK５が、東側には貯蔵穴SK７が位置する。貯蔵穴SK６、SK７、SK10は一定の間隔で直線状に並んでいるようにも見受けられる。

検出面での平面形は、長径約130cm、短径約100cmの不整な円形を呈する。断面は袋状を呈し、検出面からの深さは最大で約135cmである。底面は径約150cmの円形を呈する。埋土は暗茶褐色土を主体とし、ロームブロックや炭化物が混じる。遺物は、埋土中から土器片や石器が数十点出土した。図示した177、178はＶ－３様式の特徴を示すことから、遺構の埋没時期は弥生時代後期後葉と考えられる。　（君嶋）

SK12・13（第96図、PL. 29・45、第16表）

H13・Ｉ13グリッド、標高64.5mの平坦面に位置する。長軸を違えて重複する２基の土坑であり、土層断面の観察からSK13がSK12に後出する。また、SK13はSI31とも重複しているが、これも切り合い関係からSI31に後出する。

SK12は長軸約160cm、短軸約85cmの長方形を呈する。検出面からの深さは最大で23cmである。SK13は長軸約140cm、短軸約90cmの長方形を呈する。検出面からの深さは最大で40cmであり、底面はおおむね平坦である。埋



第98図　SK22および出土遺物

土は暗茶褐色土、暗褐色土を主体とし、白色砂礫が多く混じる。遺物は、SK13の埋土中から土器十数点が出土した。図示した179・180はＶ－３様式の特徴を示すことから、遺構の埋没時期は弥生時代後期後葉と考えられる。このことは先述したSI31との先後関係とも矛盾しない。SK12からは遺物は出土しておらず、時期は不明である。（君嶋）

SK14（第97図、PL. 29・45、第16表）

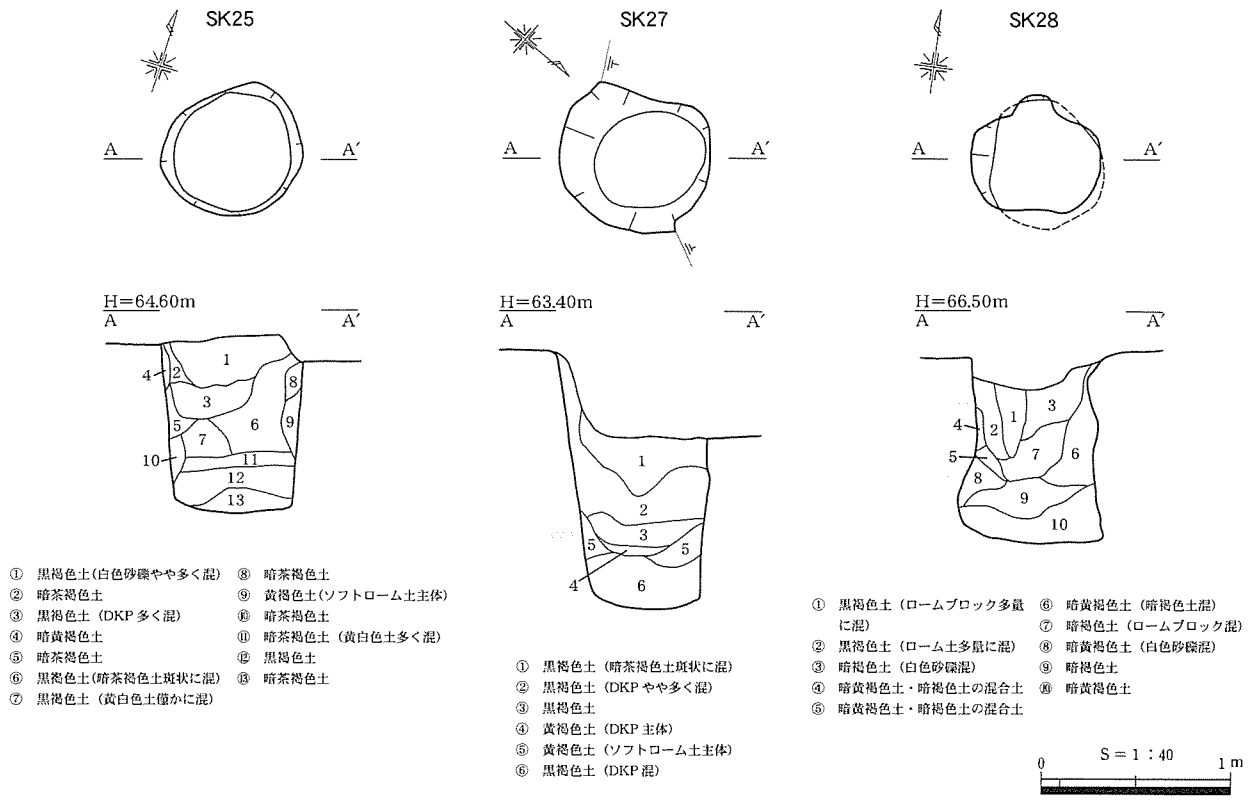
Ｉ12グリッド、標高64.5mの平坦面に位置する。形態的特徴から貯蔵穴と考えられる土坑である。SI31と重複しているが、SI31の壁および床面を破壊して掘り込まれていることから、これに後出することが明らかである。

検出面での平面形は長径約120cm、短径約85cmの不整な楕円形を呈する。ただし、撹乱により西側が大きく破壊されている。断面は袋状を呈し、検出面からの深さは最大で約95cmである。底面は長径約150cm、短径約110cmの楕円形を呈する。埋土は暗茶褐色土を主体とし、ロームブロックや炭化物が混じる。遺物は、埋土中から土器片十数点が出土した。図示した181の特徴から、遺構の埋没時期は弥生時代終末と考えられる。このことは、先述したSI31との先後関係とも矛盾しない。（君嶋）

SK22（第98図、PL.28・45、第16表）

Ｈ12グリッド、標高65.8mの平坦面に位置する。形態的特徴から貯蔵穴と考えられる土坑である。古墳時代の住居跡であるSI40と重複しているがこれに先行する。

検出面での平面形は長径約105cm、短径約95cmの円形を呈する。断面は袋状を呈し、検出面からの深さは最大で約50cmである。底面は長径約135cm、短径約130cmの楕円形を呈する。埋土は暗茶褐色土を主体とし、焼土や炭化物がわずかに混じる。埋土中からは土器片十数点が出土した。図示した183、184は、底面よりやや浮いた埋土中から重なり合った状態で出土した。これらがＶ－３様式の特徴を示すことから、遺構の埋没時期は弥生時代後期後葉と考えられる。（君嶋）



第99図　SK25・27・28

SK25（第99図、PL.29）

Ｉ10グリッド、標高64.4mの平坦面に位置する。長径75cm、短径65cmの円形を呈する。検出面からの深さは94cmである。埋土は黒褐色土と暗茶褐色土を中心とする。遺物は出土しておらず時期は不明である。その形態から、落とし穴としての機能を持った遺構と考えられる。（田村）

SK27（第99図、PL.29）

Ｈ10グリッド、標高63.7mの平坦面に位置する。長径80cm、短径73cmの円形を呈する。検出面からの深さは136cmである。埋土は黒褐色土を中心とする。遺物は出土しておらず時期は不明である。その形態から、落とし穴としての機能を持った遺構と考えられる。（田村）

SK28（第99図、PL.29）

Ｊ９グリッド、標高66.2～66.3mの平坦面に位置する。長径68cm、短径63cmの円形を呈する。検出面からの深さは102cmである。埋土は暗黄褐色土を中心とする。遺物は出土しておらず時期は不明である。その形態から、落とし穴としての機能を持った遺構と考えられる。（田村）

（５）ピット（第100図、写真２、PL.46、第16表）

南区では、８基のピットを検出した（Ｐ１、Ｐ117～122、Ｐ134）。これらは、調査区東端に近いSA１、SI37付近に６基がまとまり、残るＰ１、Ｐ122はそれぞれSI33、34付近に位置する。いずれのピットにも柱痕等は認められず性格は不明である。遺物は、Ｐ１、Ｐ117、Ｐ118の埋土中から土器が出土した。Ｐ１は長径43cm、短径27cmの楕円形を呈する。深さは約10cmで、底面は平坦である。埋土は暗褐色土の単層である。186は、口縁部を下に傾けた状態で、底面よりわずかに浮いて出土した。ほぼ完形の小型丸底壺で、胴部中位には焼成後に外面から穿孔されている。天神川Ⅵ期、古墳時代中期中葉頃に位置づけられる。Ｐ117、Ｐ118からは、外面刷毛調整の甕形土器胴部片が出土した。弥生時代もしくは古墳時代のものと考えられる。（君嶋）

第５節　遺構に伴わない遺物

（１）弥生時代・古墳時代の土器・石器（第101図、PL.46・48、第16・17表）

遺構に伴わない包含層、撹乱土からも多くの土器、石器が出土している。南区北縁の谷に面した斜面地形であるG13、G14、G15グリッド付近には、弥生時代後期～古墳時代中期の包含層が堆積していた。土質は暗茶褐色のローム土であり、上方から流失した地山土が自然堆積したものと考えられる。出土した土器には完形品は見られないものの、遺存度の高い大破片も含まれている。また、土器溜り状に出土が集中する箇所も複数認められた。包含層の上層には黒褐色の腐植土層が堆積しており、この層からも遺物が出土した。包含層、腐植土層出土土器の時期は弥生時代後期後葉を中心とするが、後期前葉（187）、後期中葉（189、195）に位置付けられるものも含まれる。南区では後期前葉の遺構は確認されていないが、187の出土は調査区外に当該期の遺構が存在する可能性を示唆するものである。192の高坏は古墳時代前期後葉～中期前葉と考えられる。須恵器瓶196は、東区Ｊ６グリッドの撹乱土から出土した。胴部に文様は無く自然釉がかかり、尖り気味の底部には叩き目が残る。TK47～MT15型式段階と考えられる。（君嶋）

（２）鉄製品（第102図、PL.49、第19表）

遺構検出作業中に出土した鉄製品について記載する。これらは撹乱土からの出土のため時期は不明である。F22は鉈で基部が折損している。作業部位表面に鎬があり、裏面にわずかに裏すきが見える。刃部横断面形は三日月形を呈する。F23は断面方形の棒状鉄製品である。両端が折損している。どちらも東区Ｈ６グリッドで出土した。F24は断面が扁平な方形の棒状鉄製品である。両端は丸みを帯びており、破損ではなく何らかの加工が施されていると考えられる。東区Ｅ５グリッドから出土した。F25は釘で頭部と尖端部が折損している。軸部断面は円形であり、側面に木質が付着している。（家塚）

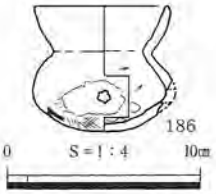
（３）縄文時代以前の遺物（第103、104図、PL.49、第17・18表）

先述したいくつかの竪穴住居跡の埋土中から、縄文時代以前の石器と考えられる黒曜石製の石器、ガラス質安山岩製の石器が出土している。これらは出土した遺構の時代および性格とは無関係なので、表土中、撹乱土中からの出土品とあわせて、ここで一括して記述することにする。

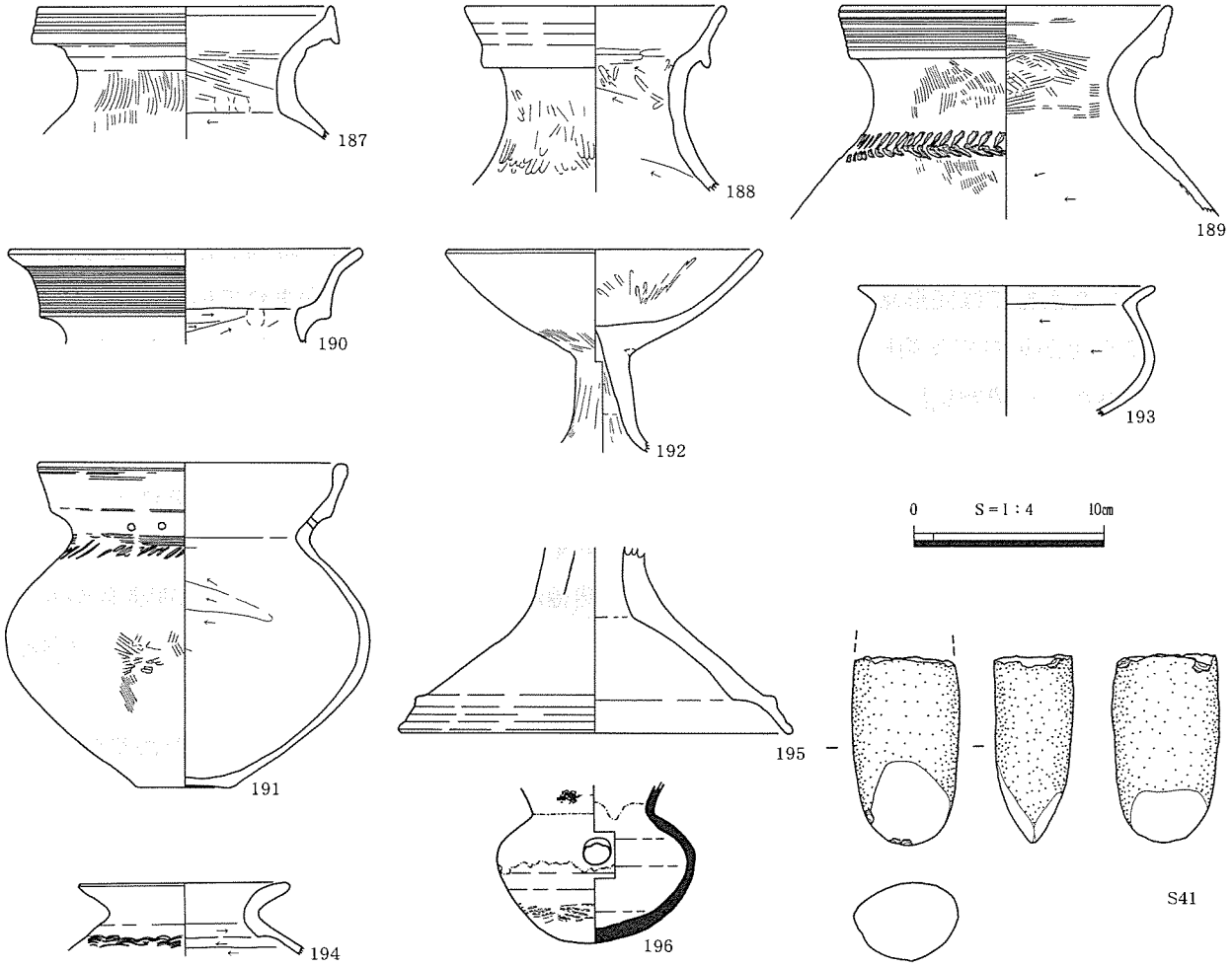
S42は、良質な黒曜石製の凹基無茎鏃である。基部の抉入が顕著で深く、直線的に仕上がっている。裏面中央部から右側縁にかけて、主要剥離面を残す。このため、背面側の調整に比べ裏面側の調整頻度は低いが、厚みを減じているのはむしろ裏面側である。東区SI12から出土した。

S43は、黒曜石製の凹基無茎鏃である。先端部は、正面上方左に見られる衝撃剥離痕と考えられる

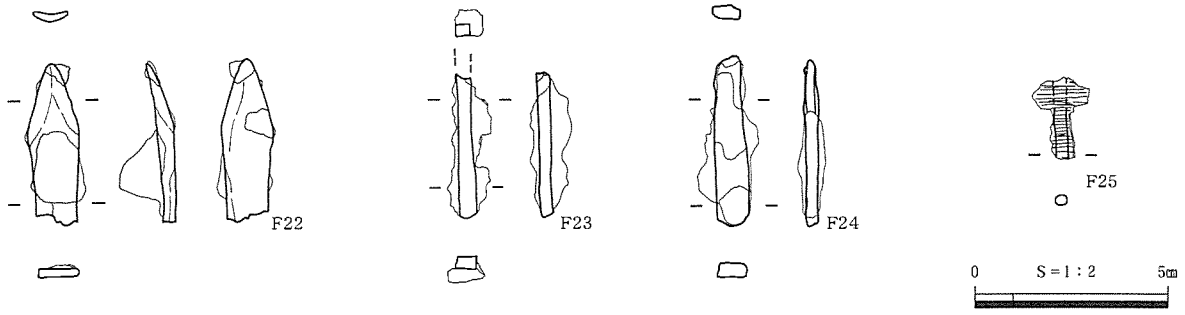
写真２　Ｐ１遺物出土状況



第100図　Ｐ１出土遺物



第101図　遺構外出土遺物（１）

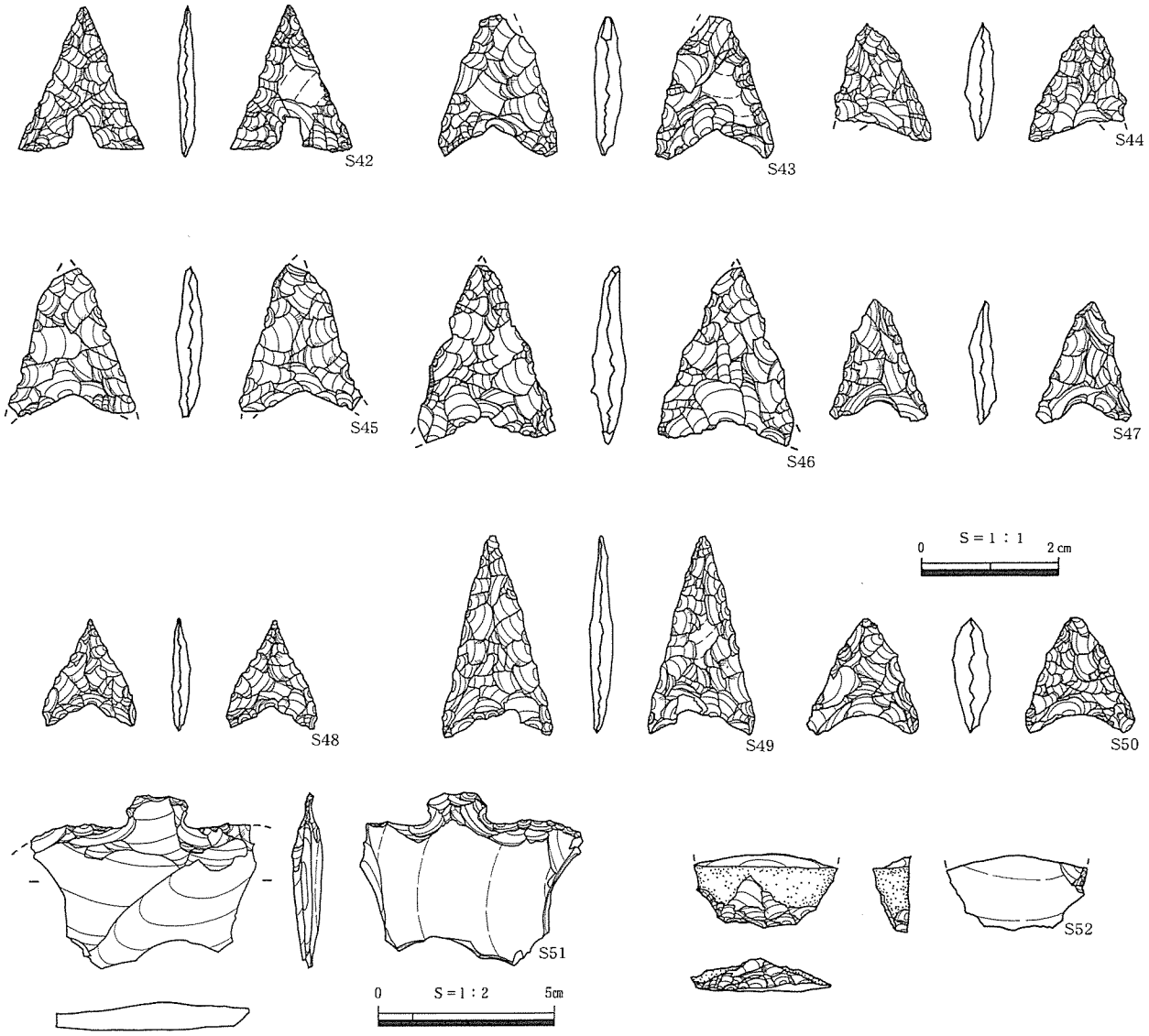


第102図　遺構外出土遺物（２）

剥離面により欠損している。正面右側縁に見られる、器体中央にまで入り込む二次加工に比べ、裏面右側縁に施された調整は微細であり縁辺部に限定され、結果として主要剥離面の一部を残している。東区撹乱土中から出土した。

S44は、黒曜石製の凹基無茎鏃であるが、正面基部左部分を正面方向からの衝撃により大部分欠損している。全体的に、調整は器体内部にまで進んでいるものの、厚みは十分に減じ切れておらず、特に器体中央部は肥厚している。東区 SI44から出土した。

S45は、黒曜石製の凹基無茎鏃である。先端部を欠損しているが、裏面図先端部に観察される上方向からの剥離は、この直接的な要因である衝撃剥離の可能性がある。両側縁および基部に施された調整は、比較的大きな剥離面で構成され、微細な剥離による成形はあまり見られない。器体中央部がや



第103図　縄文時代以前の遺物（１）

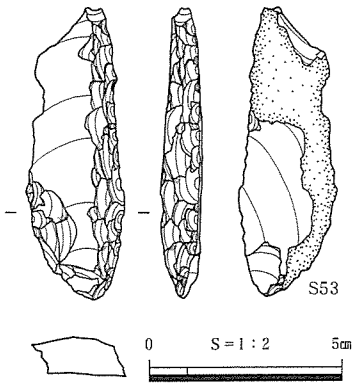
や肥厚している。東区 SI43から出土した。

S46は、良質な黒曜石を素材とする凹基無茎鏃である。先端部および基部左端部を欠損している。全体的に、剥離工程に統一感が見られず、比較的大きな剥離面による成形を行っている。このため平面輪郭が若干ジグザグ状を呈しており、完成度は低いと考えられる。正面図左側縁下半にのみ、連続した微細剥離が施されている。東区撹乱土から出土した。

S47は、風化の進んだガラス質安山岩製の凹基無茎鏃である。正面中央やや上部及び裏面下半では、厚みを取り切れず凸状に大きく突出しており、バランスの崩れた側面観となっている。調整は正面右側縁、同左側縁、同基部、裏面右側縁、同左側縁、同基部の順で、その後正面に戻り細かな調整で成形を行っている。東区 SI７から出土した。

S48は、光沢感の薄い黒曜石を素材とする凹基無茎鏃である。最大長と最大幅の比がほぼ等しい。調整は裏面右側縁、正面右側縁、同左側縁、裏面左側縁、基部の順で施されている。先端部は特に精微に仕上げられ、鋭い尖頭状を呈している。東区 SI２から出土した。

S49は、ガラス質安山岩製の凹基無茎鏃である。本遺跡出土石鏃の中で最も長幅比が大きく、鏃身部の長い資料である。調整は主に、裏面右側縁、同基部、同左側縁、正面基部、同右側縁、同左側縁



第104図
縄文時代以前の遺物（２）

の順に行われている。全体的に薄手でかつ厚みも一定であり、完成度の高い資料といえる。南区斜面流土から出土した。

S50は、黒曜石製の凹基無茎鏃である。二次的剥離の順序はおおむね、正面左側縁、同右側縁、同基部、裏面右側縁、同左側縁、同基部の順に施されているが、全体的に厚みを十分に減じ切れていないことが側面観から理解される。また表裏面図から、最大長に対する最大幅の割合が比較的大きな資料であると言える。東区 SI44撹乱土から出土した。

S51は、左右両側縁及び刃部部分を著しく欠くが、その平面形状及び二次的調整の部位などから、小板状のガラス質安山岩を素材とする横型石匙であると判断した。裏面側には主要剥離面を、また正面側にも大きな剥離面を残すが、両者の加撃方向はほぼ90度で直交する。頸部作出の調整は、裏面側に特に集中して観察されるが、その部位は縁辺部に限定され、器体中央部に至る剥離は皆無である。三方向の折断面を観察する限り、各面の風化の度合いや状態等は、二次調整の剥離面と区別可能であり、製作および使用時に伴う破損とは考えにくい。東区 SI19の P14埋土から出土した。

S52は、やや風化の進んだ良質な黒曜石製スクレイパーである。背面側には、大きく原礫面を残しており、素材生産初期段階の剥片を利用している可能性が高い。上端部を大きく欠損しているが、これは正面図上端中央部分に対する衝撃に起因すると考えられる。このため、本石器から全体形状の推測はやや難しいが、幅・厚さの現存値および主要剥離面のリング方向から、比較的小型のスクレイパー末端部断片と考えられる。裏面から背面側にかけて、やや急斜度の、スクレイピングエッジに類似する特徴的な調整が連続して施されているが、背面中央にまで収斂する剥離面は少ない。また、刃部形状に関しても、厳密な円弧状を呈さず、不規則な抉りが複数作られており、全体的に刃部作出技術は低いと観察される。東区 SI８埋土から出土した。

S53は、薄い縦長剥片素材のガラス質安山岩製サイドスクレイパーである。素材の打面形状は、二次加工により欠失しており不明だが、主要剥離面側に若干肥厚したバルブが残存している。石器表面は風化が進み、背面側には大きく原礫面を残す。側面には、鉱物の縞が重なり合っている流理構造が顕著で、断面階段状になっている。裏面右側縁の基部から先端にかけて、背面側よりナイフ形石器のブランティング加工に類似する、急斜度の連続した調整が施されている。対照的に、裏面左側縁基部付近には平坦剥離が認められ、この調整も背面側から行われている。本石器は、風化の度合い及び二次加工の特徴から、先土器時代にまでその帰属年代が遡る可能性があるが、住居（東区 SI９）内撹乱土内での検出であり、かつ単独資料であることから、積極的に出土時期を判断することは困難である。

（水村）

第４章　井図地頭遺跡の調査

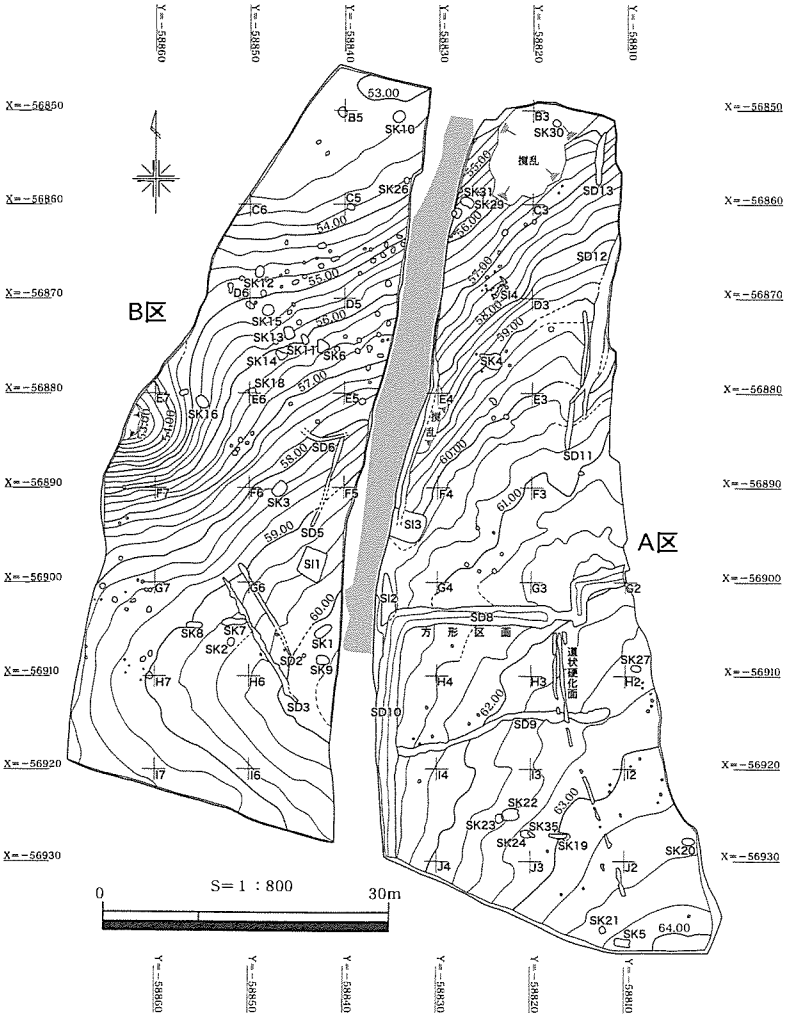
第１節　調査の概要

井図地頭遺跡は、東伯町のほぼ中央部を北流する洗川の左岸に位置し、南北にのびる丘陵上に立地している。東伯町から赤碕町にかけては、大山の裾野からのびた台地が海岸近くにまで達し、大山より放射状に流下する中小河川によって尾根状に分断されている。井図地頭遺跡はこの丘陵地の最東端に位置し、調査地からは東方の沖積平野を一望できる。遺跡の東辺は河川の浸食によって急崖となっており、崖下に洗川の支流である倉坂川が流れている。遺跡と水田面との比高は約20mである。

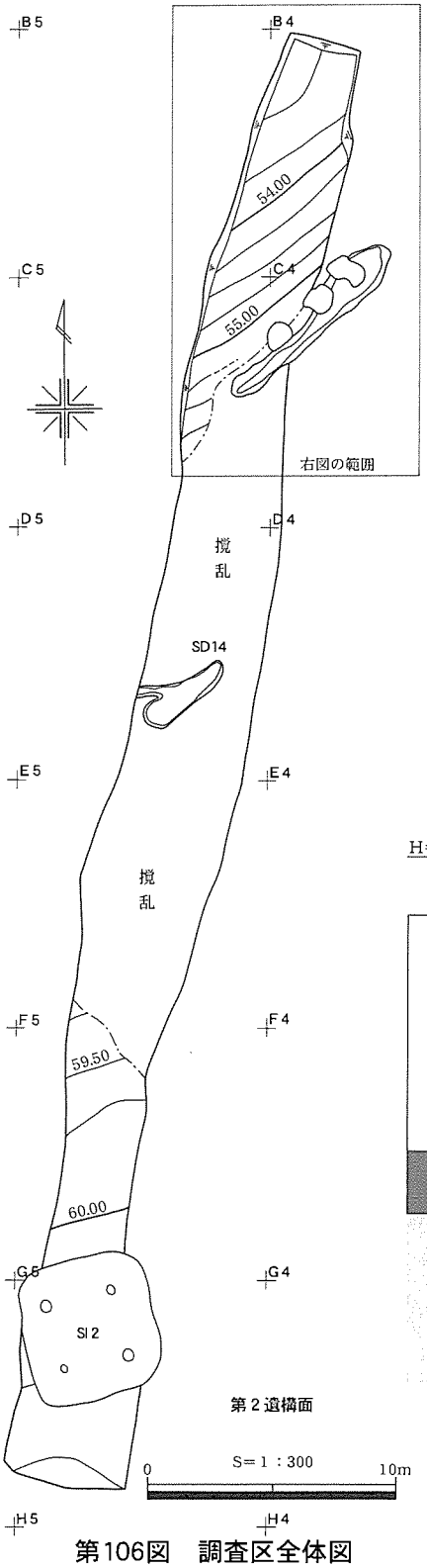
井図地頭遺跡は平成14年度に発掘調査が行われ、上下２面の遺構面から縄文時代～平安時代、近世にかけての遺構・遺物が確認された[註)]。今回の調査区は、前回調査区の中央を南北に通る農道部分にあたり、調査範囲は幅約４m、南北の長さ約60mである（第105図）。調査区の北端は前回調査区の北端とほぼ一致するが、南端は、迂回路設置の関係から前回調査区の南端より約20m北側に位置する。調査区南端の標高は約60.5m、北端は53.5mで、南から北へ向けて傾斜している。

調査に先立って農道のアスファルトおよびバラスを除去したところ、Ｃグリッド以北では、路面下に撹乱土・客土層を挟んで黒褐色土の堆積が確認され、この上面で土坑等の遺構を検出した（第１遺構面）。この黒褐色土は前回の調査で確認されたものと一連の堆積であり、その上面の遺構面も前回調査における第１遺構面と同一の面である。第１遺構面では土坑５基（SK36～40）、ピット４基（P178～181）を検出した。また、前回の調査時に第１遺構面で確認した溝 SD４の続きの部分を確認した。これら第１遺構面で検出した遺構のうち、溝および土坑からはおおむね７世紀代の土師器・須恵器が出土した。なお、黒褐色土は７世紀代の遺物を包含する。

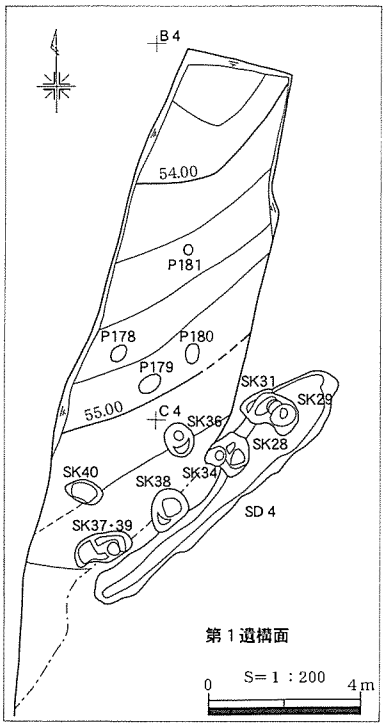
Ｃグリッド以南では、アスファルトは地山面に直接敷かれていたため、路面除去後ただちに遺構面となった（第２遺構面）。さらに、調査区中央部分のＣグリッドからＦグリッドラインにかけては、農道敷設の際の削平が地山面にまで及んでいた。そのため、前回調査区からの連続が予想された SI３、SD７については、その続きの部分を確認するこ

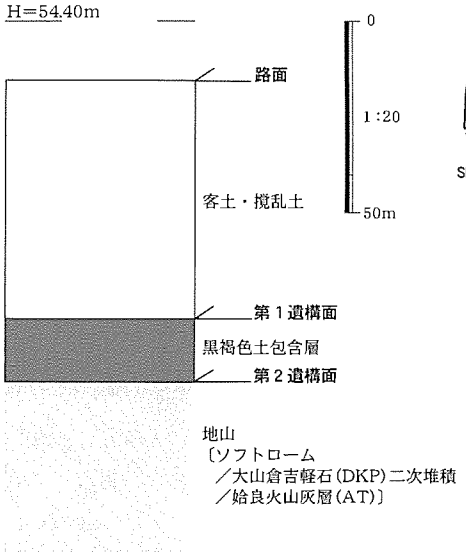


第105図　調査範囲図

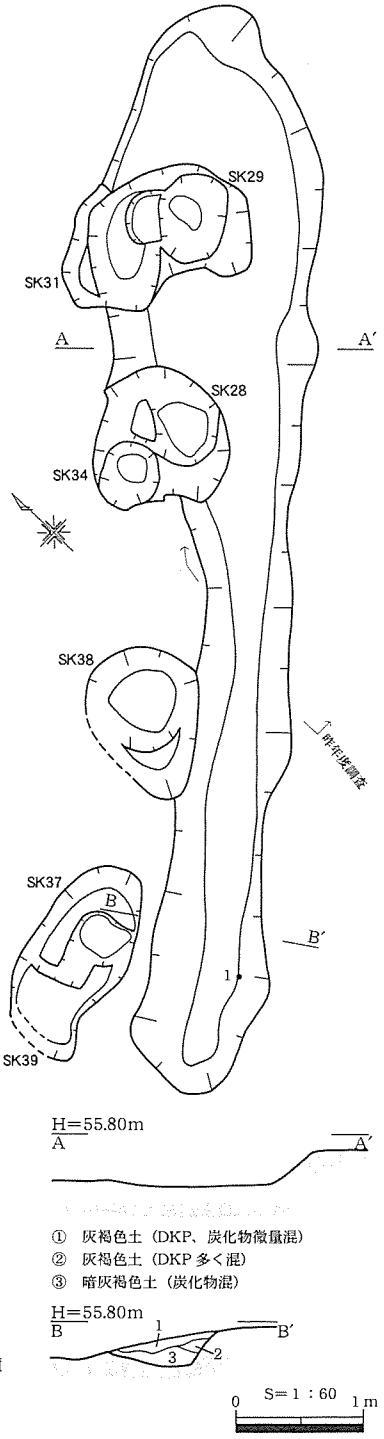


第106図　調査区全体図



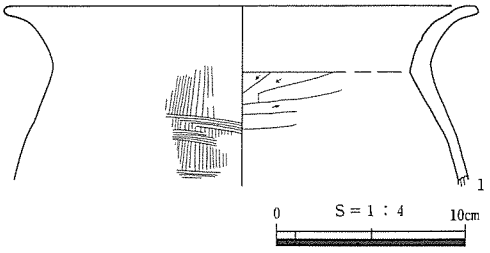


第107図　層序模式図



第108図　SD４

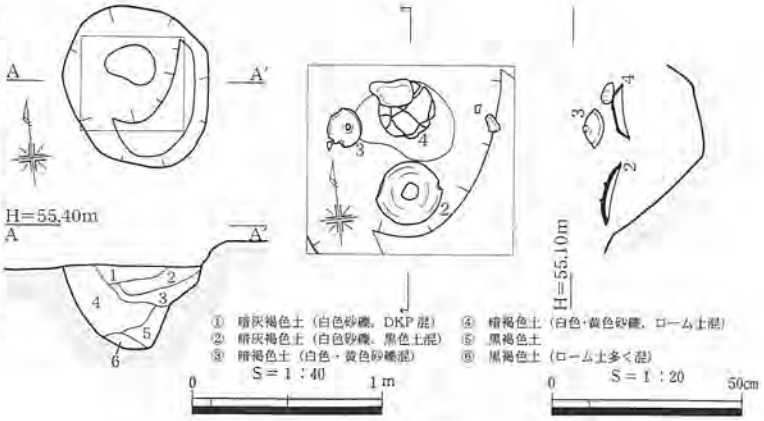
とができなかった。このように第２遺構面の遺存状況は良好ではなかったものの、竪穴住居跡１軒（SI２）、溝１条（SD14）を検出した。SI２は、前回の調査で南東隅の一部分のみを検出していたが、今回全掘し古墳時代前期の遺構であることを確認できた。SD14からは７世紀代の土師器・須恵器が出土した。



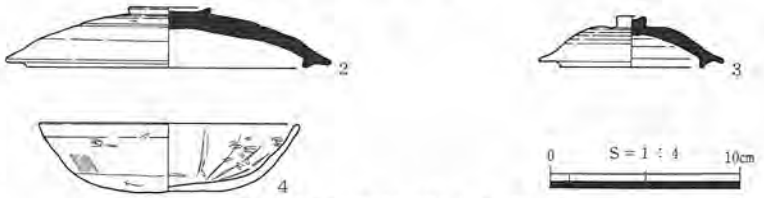
第109図　SD４出土遺物

註）君嶋俊行・大野哲二編　2003『井図地頭遺跡　井図地中ソネ遺跡』鳥取県教育文化財団

写真３　SK36土器（２）出土状況



第110図　SK36



第111図　SK36出土遺物

第２節　第１遺構面の調査

（１）溝

SD4（第108・109図、PL.50・53、第2表）

B3、B4、C4グリッド、標高55.3～55.8mの緩斜面に位置する。北縁側でSK28・29・31・34・38と重複しているが、これらのうちSK29・31はSD４に先行し、SK28・34・38は後出する。この溝は、前回の調査において東側の5.2mを既に調査しており、今回その続きの部分を検出した。前回調査部分を合わせた全体の長さは8.6mである。北東―南西方向に主軸をとり、その走向は直線的で、等高線にほぼ平行する。幅は北東端近くで約1.75m、南西端側で0.7～1.0mである。検出面からの深さは、残りのよい南縁側で約25～30cmである。溝底の標高は、北東端で約55.3m、南西端で約55.45mであり、北東側がわずかに低い。埋土は灰褐色土を主体とし、砂の混入など流水の痕跡は窺えない。遺物は、埋土中より７世紀代の土器が多量に出土した。図示した１は、南西端付近の埋土中から、溝底より15cmほど浮いて出土した。また、前回調査時においても、同時期の土器が北東端付近から集中して出土している。これらは高広編年のⅡB～ⅢA期に相当し、今回出土した土器もこの時期幅におさまるものである。したがって、本遺構の埋没時期はⅢA期（７世紀中葉～末葉）と考えられる。遺構の性格については、直線的な形状や埋土の状況などから、人為的に掘られた区画溝の可能性が考えられる。さらに、この溝に沿ってSK29などの土坑がほぼ等間隔で一列に並ぶことから、これらの土坑と有機的な関連をもって配置された遺構である可能性についても考慮すべきであろう。

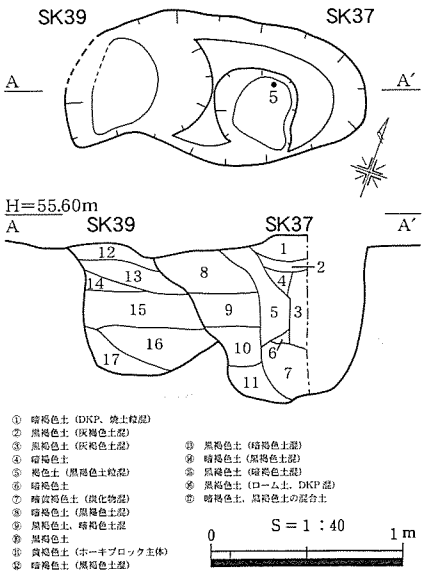
（２）土坑

SK36（第110・111図、PL.51・53、第２表）

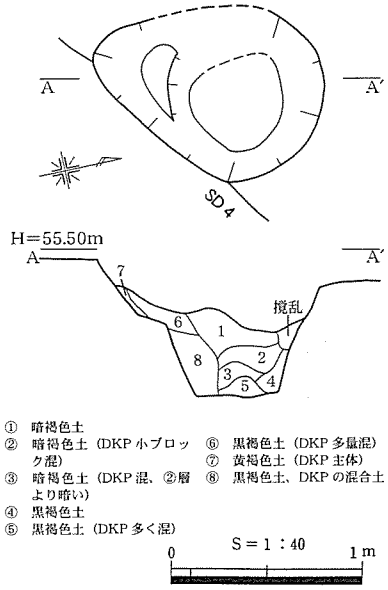
C３グリッド、標高55.3m付近の緩斜面に立地する。平面形は楕円形を呈し、長軸90cm、短軸75cm、検出面からの深さ55cmである。埋土は暗灰褐色土、暗褐色土を主体とし、最下層に黒褐色土が堆積する。出土遺物は、須恵器坏蓋２、３、土師器坏４、その他土師器・須恵器の小片数点である。２、３、

第２表　SD４・SK36出土遺物観察表

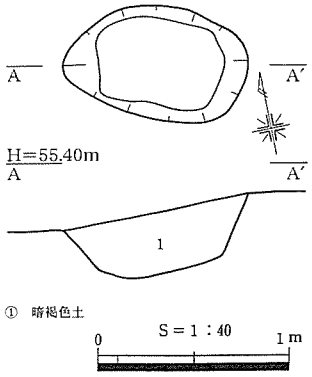
No.	遺構・地区・層位	挿図 PL	器種	法量（cm）	残存率	調整	色調	胎土	備考
1	SD４ 埋土中	第109図 PL.53	土師器 甕	口径※24.6 器高△9.5	口頸部ほぼ完存（一部欠損）	外面：口縁部ヨコナデ、胴部縦ハケメ→横ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、胴部ケズリ	にぶい黄橙色 橙色	微砂粒、雲母片を含む	
2	SK36 埋土中	第111図 PL.53	須恵器 坏蓋	口径14.5 器高3.3	ほぼ完形（口縁部一部欠損）	外面：回転ヨコナデ、天井部回転ヘラケズリ 内面：回転ヨコナデ	灰色	径２mmの砂礫をまばらに含む	
3	SK36 埋土中	第111図 PL.53	須恵器 坏蓋	口径7.5 器高2.7	ほぼ完形（口縁部一部欠損）	外面：回転ヨコナデ、天井部回転ヘラケズリ 内面：回転ヨコナデ	灰色灰白色	径１mm以下の砂粒を僅かに含む	
4	SK36 埋土中	第111図 PL.53	土師器 坏	口径13.8 器高3.7	ほぼ完形	外面：ミガキ、底面ケズリ→ナデ内面：ミガキ	橙色 明赤褐色	径２mmの砂粒、角閃石を含む	内外面赤彩、内面に暗文風の線刻



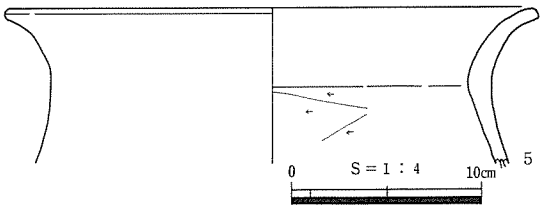
第112図　SK37・39



第114図　SK38



第115図　SK40



第113図　SK37出土遺物

４はいずれも完形で、底面から20～25cm浮いた２、３層中から出土した。２、３は正置、４は伏せた状態で検出され、４には川原石がのっていた。２、３は高広編年ⅡＢ～ⅢＡ期の特徴を備えている。したがって、本遺構はⅢＡ期（７世紀中葉～末葉）に埋没した土坑と考えられる。

SK37・39（第112・113図、PL.51・53、第３表）

C4グリッド、標高55.3～55.4mの緩斜面に立地する。東西に並んで重複する２基の土坑であり、その先後関係は土層断面の検討からSK39→SK37となる。全体の平面形は長軸1.58mの楕円形を呈する。このうちSK37の規模を復元すると、長軸1.1m、短軸0.8m、検出面からの深さは最大で0.9mである。またSK39の検出面からの深さは0.7mで、その底面はSK37よりもやや高い。埋土は、両土坑とも黒褐色土、暗褐色土を主体とし、DKP（大山倉吉軽石）や焼土粒、炭化物が混入する。SK37の１層～７層は、水平堆積した８層～11層を掘り返したような堆積であり、さらに３層は柱痕のようにもみえる。また、SK39の埋土である12層～17層も水平に近く堆積しており、自然に埋没したとは考えにくい。遺物は、SK37の埋土中より土器片数点が出土した。土師器甕口縁５の特徴から、SK37は周辺の遺構と同様に、７世紀代に埋没した遺構と考えられる。

SK38（第114図、PL.51）

C3グリッド、標高55.3～55.4mの緩斜面に立地する。SD４と重複しており、SK38がSD４に後出する。平面形は長軸1.25m、短軸0.95mの楕円形を呈する。ただし、西側の一部は木根の撹乱により破壊されている。検出面からの深さは最大で0.75mである。埋土は黒褐色土、暗褐色土を主体とし、DKPが多く混入する。１層～５層は、掘り返されたか、あるいは柱の抜き取りを示唆するような堆積状況である。遺物は、埋土中より土師器・須恵器片が数点出土した。いずれも小片で図化に耐えないが、高広ⅢＢ期の特徴をもつ須恵器坏蓋が含まれており、遺構の埋没時期を示すものと考えられる。

SK40（第115図、PL.51）

C4グリッド、標高55.0～55.2mの緩斜面に立地する。平面形は長軸約97cm、短軸約60cmの楕円形を呈する。検出面からの深さは

第３表　SK37出土遺物観察表

No.	遺構・地区・層位	挿図 PL	器種	法量〔cm〕	残存率	調整	色調	胎土	備考
5	SK37 埋土中	第113図 PL.53	土師器 甕	口径※27.6 器高△8.2	口頸部1/5周	外面：口縁部ヨコナデ、胴部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、胴部ケズリ	明赤褐色 明黄褐色	径１mm以下の砂粒を多く含む	

最大で約33cmである。埋土は暗褐色土の単層である。遺物は、埋土中から土師器片数点が出土した。いずれも小片で図化に耐えないが、７世紀代の特徴をもつものが含まれており、遺構の埋没時期を示すものと考えられる。

第４表　ピット計測表

No.	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	土色
P178	40	34	6	暗褐色土
P179	64	52	18	暗褐色土
P180	54	42	8	暗褐色土
P181	24	23	28	暗褐色土

（３）ピット群（第106図、第４表）

第１遺構面では、Ｐ178～Ｐ181の４基のピットを検出した。これらの配列は不規則で、建物や柵列の復元には至らない。埋土はいずれも暗褐色土の単層で、柱痕等は認められない。また、遺物も出土しておらず、時期や性格は不明である。

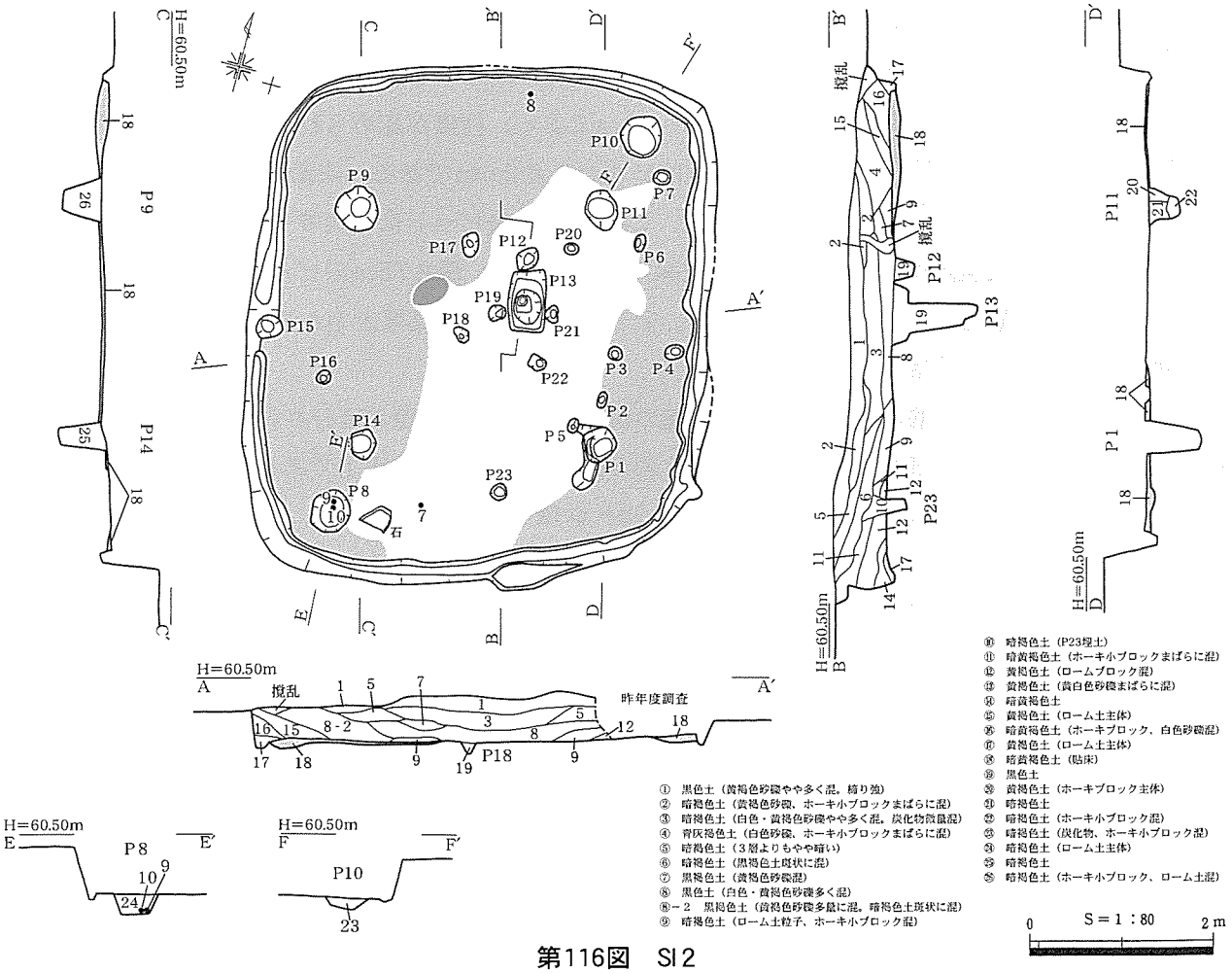
第３節　第２遺構面の調査

（１）竪穴住居跡

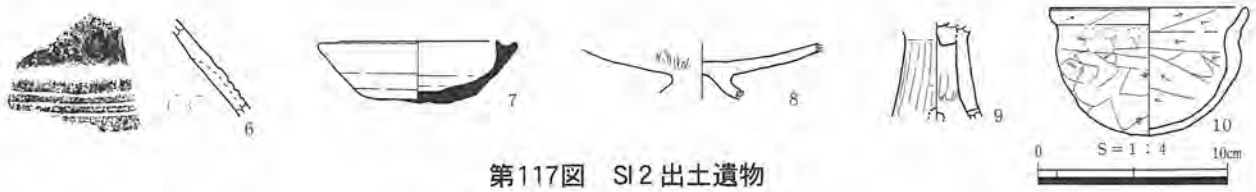
SI２（第116・117図、PL.52・53・54、第５・６表）

Ｆ４・Ｇ４グリッド、標高60.0～60.5mの平坦面に立地する。前回、東壁際および東南隅角の一部分を調査したが、今回その続きの部分を検出し、全体の形状を明らかにすることができた。遺存状況はおおむね良好である。以下、前回と今回の調査成果を合わせて記述する。

平面形は南北約5.6m、東西約5.0mの隅丸方形を呈する。主軸は北西方向へわずかに振れる。検出面からの深さは、最も残りのよい南壁付近で約50～55cmである。壁面は垂直ないしやや外傾して立ち上がる。住居の中央部分では地山であるソフトローム土をそのまま床面としているが、北・東・西



第116図　SI２



第117図　SI２出土遺物

第５表　SI２出土遺物観察表

No.	遺構・地区・層位	挿図 PL	器種	法量〔cm〕	残存率	調整	色調	胎土	備考
6	SI２ 埋土中	第117図 PL.53	弥生土器 壺	－	－	外面：ナデ　削り出しの段に沈線３条 内面：ナデ	黄橙色	径２mm以下の石英・砂粒を多く含む	弥生時代前期
7	SI２ 埋土中	第117図 PL.53	須恵器 坏身	口径8.4 器高3.3 底径4.9	完形	外面：回転ヨコナデ天井部ヘラ切り未調整 内面：回転ヨコナデ	灰色	微砂粒を含む	
8	SI２ 埋土中	第117図 PL.53	土師器 低脚坏	器高△2.9	脚基部完存	外面：ミガキ 内面：ハケメ→ナデ		径１mm以下の石英・砂粒・雲母片を含む	
9	SI２Ｐ８ 埋土中	第117図 PL.53	土師器 高坏	器高△5.1	脚部1/2周	外面：ミガキ 内面：ユビナデ	赤褐色 黄橙色	径２mm以下の石英、角閃石、砂粒を多く含む	
10	SI２Ｐ８ 埋土中	第117図 PL.53	土師器 小型鉢	口径※10.4 器高6.8	口縁部1/8 胴部完存	外面：板ナデ 内面：ケズリ	にぶい黄橙色	径１mm以下の砂粒、雲母片を多く含む	

第６表　SI２ピット計測表

No.	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	備考
P1	40	38	56	主柱穴
P2	18	10	6	
P3	16	14	6	
P4	18	14	8	
P5	16	12	12	
P6	16	10	48	
P7	18	16	37	
P8	48	42	22	土器出土
P9	49	47	42	主柱穴
P10	48	42	12	
P11	44	34	34	主柱穴
P12	28	23	21	
P13	68	40	90	中央ピット
P14	32	26	51	主柱穴
P15	28	24	30	
P16	16	14	10	
P17	26	18	20	
P18	18	14	14	
P19	19	16	12	
P20	14	12	12	
P21	19	12	9	
P22	20	18	20	
P23	18	18	14	

写真４　Ｐ８土器出土状況

壁に沿った「コ」字状の範囲では、ローム土質の暗黄褐色土を用いて厚さ２～14cmの貼床を施している（18層）。床の四周には壁溝が巡るが、西壁のほぼ中央付近で途切れている。壁溝は幅10～20cm、深さ５～10cm程度で、断面形はU字形ないし逆台形である。ピットは大小23基を検出した。規模および位置関係から主柱穴と考えられるのはＰ１・９・11・14の４基で、床面からの深さは35～60cmである。柱痕が認められたのはＰ１のみである。各主柱間距離はいずれも約2.6mである。床面の中央やや東寄りに位置するＰ13は、いわゆる中央ピットに相当するものである。長軸68cm、短軸40cm、深さ15cmの方形を呈し、底面にはさらに径35cm、深さ75cmのピットを掘り込んでいる。埋土は、直上の８層と類似した黒色土である。Ｐ６、Ｐ７、Ｐ23は埋土中から掘り込まれたもので、本遺構にともなうものではない。

住居全体の埋土は、上層の黒褐色土系と下層の黄褐色土系とに明瞭に区分される。埋土中からは多量の土器片が出土した。低脚坏８は、床面より約５cm浮いた状態での出土である。高坏脚部９、小型鉢10はＰ８の底面近くから出土した。６は弥生時代前期の壺肩部片である。須恵器坏身７は最上層の１層から出土したものである。ほぼ完形で、高広ⅡＡ期に位置づけられる。このことから１層の黒色土は、調査区北端に堆積していた黒褐色土包含層と同一のもので、７世紀代に堆積した可能性が高い。また、１層からは鉄滓Ｆ１・Ｆ２（PL.54）が出土したが、これも７世紀代の所産であろう。木炭が混入していることから精錬滓とみられる。その他に、Ｐ８の東側の床面直上から、人頭大の扁平な川原石が出土した。人為的に截断した痕跡が認められ、台石として使用されたものと考えられる。

以上の出土遺物のうち、出土状況から遺構の廃絶時期を示すと考えられるのは９、10であり、これらは天神川Ⅲ～Ⅳ期に位置づけられる。また、前回の調査においてもほぼ同時期の遺物が出土している。したがって、本遺構の廃絶時期は古墳時代前期後半と考えられる。

（２）溝

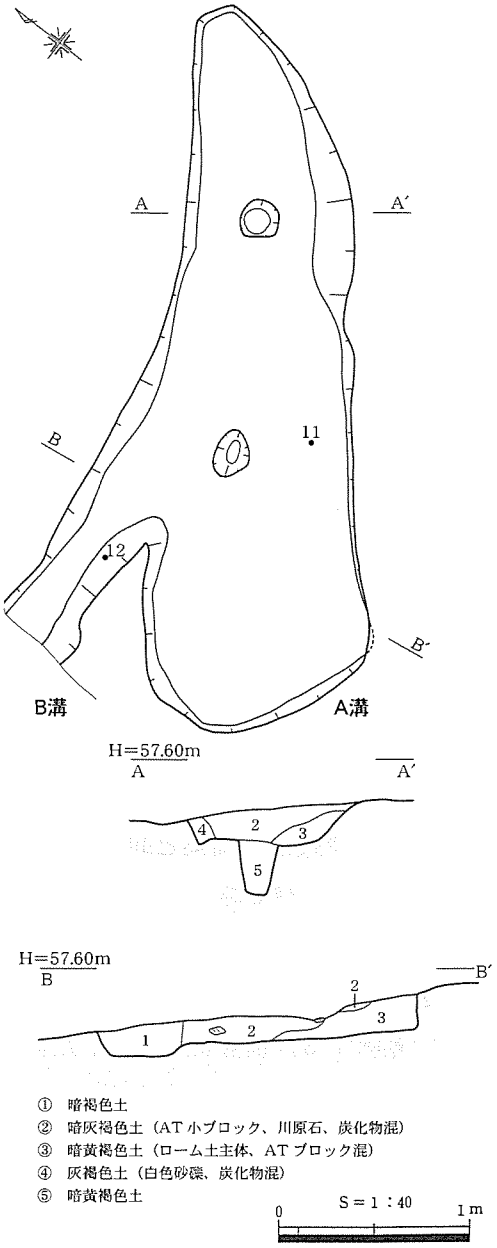
SD14（第118・119図、PL.52・53、第７表）

Ｄ４グリッド、標高57.2～57.5mの緩斜面に立地する。北東―南西方向に主軸をとる幅広の溝（Ａ溝）と、Ａ溝の北辺から分岐する細い溝（Ｂ溝）とが重複する。土層断面の検討から、Ｂ溝がＡ溝に後出する。Ａ溝は長さ約3.55m、幅は最大で約1.2m、検出面からの深さは15～20cmである。溝底の標高は、北東端、南西端とも57.2m前後であり、高低差は殆どない。溝底は平坦で、溝の断面は逆台形を呈する。埋土は灰褐色土を主体とし、拳大以下の川原石をまばらに含むものの、砂の混入など流水の痕跡は窺えない。溝底からは２基のピットが検出された。２基ともに溝の埋土によって覆われていたことから、Ａ溝と同時期ないしこれに先行するものである。東側のピットは径22cm、深さ28cmである。西側は長径26cm、短径18cm、深さ13cmである。

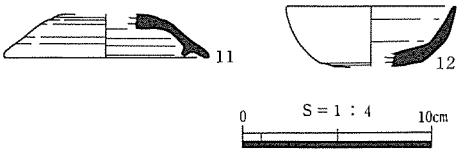
Ａ溝より分岐したＢ溝は、西方向へ直線的に１mほどのびるが、調査区際において、果樹園造成にともなう削平により破壊されている。幅は35～45cm、検出面からの深さは約15cmで、溝の断面は逆台形である。埋土は暗褐色土で、Ａ溝と同様に流水の痕跡は窺えない。遺物は、埋土中より土師器・須恵器片十数点が出土した。須恵器坏蓋11はＡ溝、須恵器坏身12はＢ溝からの出土であり、ともに高広ⅡＡ～ⅡＢ期に位置づけられる。したがって、Ａ・Ｂ両溝は比較的短期間のうちに埋没・形成を繰り返したものと考えられる。

第４節　包含層出土の遺物（第120図、PL.53、第７表）

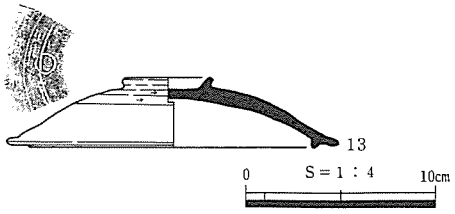
13は、Ｂ４グリッドの黒褐色土中から出土した。高広編年ⅢＡ～ⅢＢ期（７世紀中葉～８世紀前葉）に位置づけられる須恵器坏蓋である。口縁部の一部を欠くものの完形に近いことから、本来は遺構にともなっていた遺物である可能性が高い。黒褐色土掘り下げの過程で出土した遺物は13の一点のみである。この他に、小片のため図化できなかったが第１・第２遺構面の検出中に７世紀代の土師器・須恵器片が数十点出土した。



第118図　SD14



第119図　SD14出土遺物



第120図　包含層出土遺物

第７表　SD14・包含層出土遺物観察表

No.	遺構・地区・層位	挿図 PL	器種	法量〔cm〕	残存率	調整	色調	胎土	備考
11	SD14 埋土中	第118図 PL.53	須恵器 坏蓋	口径※8.2 器高△2.3	口縁部1/5	外面：回転ヨコナデ、天井部回転ヘラケズリ 内面：回転ヨコナデ	灰白色	微砂粒を僅かに含む	
12	SD14 埋土中	第118図 PL.53	須恵器 坏身	口径※8.9 器高△3.2 底径※5.3	口縁部1/4	外面：回転ヨコナデ、底部未調整 内面：回転ヨコナデ	灰色	径１mm以下の砂粒をまばらに含む	
13	Ｂ４ 黒褐色土	第119図 PL.53	須恵器 坏蓋	口径※15.0 器高3.8	天井部完存 口縁部1/4	外面：口縁部回転ヨコナデ、天井部回転ヘラケズリ 内面：ナデ	灰色	径1.5mm以下の砂粒をやや多く含む	外面に円形竹管文